

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第131集

藤 守 遺 跡

平成12年度 (主)焼津榛原線緊急地方道道路改築
(B)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

【正誤表】

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第131集
藤守遺跡

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正くださいますようお願い致します。

頁	誤	正
挿図目次 第2図	静岡人類史研究所	大井川町教育委員会
挿図目次 第67図	S E 1	S E 2
11頁 表1 33番	やすん沢	すやん沢
42頁 上から2行	F 4	F 4 区
43頁 上から5行	須恵器壺	須恵器壺蓋
59頁 上から10行	鉈	斧
90頁 下から6行	山茶碗	碗
90頁 下から3行	これらの溝群	S D 12・13
94頁 上から6行	供存	併存
100頁 第65図83の横に追加		S X 6周辺出土
103頁 キャブション	S E 1	S E 2
111頁 第75図11の横に追加		S F 7周辺出土
167頁 下から21行	平瓶	横瓶
173頁 上から1行	8・9cm	8~9cm
カラー図版4	1の写真裏焼き	
國版39 右下 底外面写真	58-2	SD 1 58-2
報告書協力者一覧	佐野由起男	佐藤由起男
報告書協力者一覧	久野雅博	久野正博
報告書協力者一覧	黄元洋	賛 元洋
整理作業参加者	瀧 桂子	瀧 看孔
報告書抄録 副書名	工事に伴う文化財	工事に伴う埋蔵文化財
報告書抄録 編著者名	柴田 聰	柴田 聰 大谷宏治 勝又直人
報告書抄録 主な遺物	鍔柄 1	鍔柄 1
奥付	静岡県	静岡市

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第131集

藤 守 遺 跡

平成12年度 (主)焼津榛原線緊急地方道道路改築
(B)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

藤守遺跡は、大井川により形成された沖積微高地に存在し、駿河湾に面した遺跡である。この大井川流域には、牧之原台地上に、東京国立博物館が所蔵している金銅装馬具や大刀が出土した高根森古墳群、「駅」と墨書きされた土器が出土した宮上遺跡（初倉駅関連施設か）、基壇を持った金堂・塔・講堂などが発見された奈良時代の竹林寺廃寺跡が存在し、志太平野の南東には、式内社の焼津神社が鎮座し、北部には、奈良時代の志太郡衙とされる御子ヶ谷遺跡や益津郡衙の可能性が指摘されている郡遺跡といった著名な遺跡が多数存在している。

当然、こうした郡衙や駅家・寺社は、大井川下流部の一般集落、とりわけ、稻作を主とする農耕集落と密接に結び付いていたと考えられる。しかし、低地の集落は大井川の浸食を受け流失しているものや厚く洪水層に覆われているものが多いと考えられ、存在の確認されている古代の遺跡は少ない。大井川町では、遺跡地図に掲載されている中世以前の遺跡は当遺跡のみである。

藤守遺跡の調査は、航空自衛隊静浜基地の建設などに先立って、確認調査などは何回か実施され、古墳時代から中世にかけて多くの遺物が発見されているが、その実体は不明であった。

今回の調査では、古墳時代末期の堅穴住居跡群、平安時代末期から鎌倉時代の掘立柱建物跡群や屋敷地を囲んだ溝など、当時の集落の様子が明らかにされた。また、古墳時代末期の祭祀に関連した遺物や発見例の少ない当該期の木製品などが多量に出土したことも、大きな成果であった。今後は、大井川流域の平野部における古代の人々の生き生きとした生活像の一端を復元できるものと期待される。

藤守地区は、考古学的に重要な位置を占めているのであるが、民俗学的にも興味深い地域である。無形民俗文化財として国の指定を受けている「藤守の田遊び」が行なわれているのが当地域である。こうした芸能が単なる豊作祈願により成立したと考えるのは早計であろう。古代からの農耕儀礼は、複雑なプロセスを経て発展してきているのであり、そうしたことを解明していくためにも、地道な考古学的調査が必要となるであろう。

現地調査および本書の作成にあたっては、静岡県島田土木事務所並びに静岡県教育委員会・大井川町教育委員会をはじめとする関係機関各位の御理解と御協力に厚くお礼を申し上げたい。また御多忙のなか、現地指導はもとより、御教示をいただいた静岡大学名誉教授 加藤芳朗氏と大井川町文化財審議員の皆様には深く感謝申し上げる。その他、御指導・御助言をいただいた方々や、雨の中でも辛抱強く作業にあたられた現地作業員の方々、短期間の内に要領よく報告書をまとめられた整理作業員の方々にこの場を借りて深く感謝する次第である。

平成14年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

- 1 本書は、静岡県志太郡大井川町に所在する^{みどり}藤守遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、(主)焼津株原線緊急地方道道路改築(B)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県鳥田土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 調査期間は、平成12年10月21日から平成13年3月31日まで現地調査を行い、平成13年7月1日から平成14年3月15日まで資料整理（実質的整理作業は、平成13年11月30日まで行い、以降は木製品の保存処理作業を主に実施）を行った。
- 4 調査体制は以下のとおりである。

平成12年度

所　　長：斎藤 忠　　副　　所　　長：山下 晃　　常　務　理　事：伊藤友雄
総　務　課　長：杉木敏夫　　総　務　会　計　係　係　長：大橋 煉
調　査　研　究　部　長：佐藤達雄　　調　査　研　究　部　次　長：及川 司　　調　査　研　究　二　課　長：篠原修二
調　査　研　究　員：柴田 陸　　大　谷　宏　治

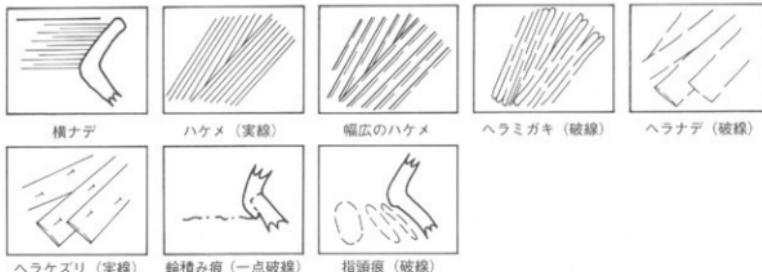
平成13年度

所　　長：斎藤 忠　　副　　所　　長：山下 晃　　常　務　理　事：糸田徳幸
総　務　課　長：本杉昭一　　総　務　会　計　係　係　長：大橋 煉
調　査　研　究　部　長：佐藤達雄　　調　査　研　究　部　次　長：栗野克己　　及　川　司
調　査　研　究　二　課　長：篠原修二　　調　査　研　究　員：柴田 陸

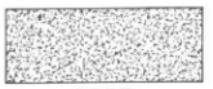
- 5 本書の執筆は、担当者名を目次に示したが、記名の無いものは柴田陸が担当した。遺物写真は、当研究所職員が撮影した。
- 6 古環境の復元については、加藤芳朗氏（静岡大学名誉教授）に御教示いただき、その御所見を付編に掲載した。
- 7 木製品の樹種同定は、㈱パレオラボに委託し、鈴木三男氏（東北大学教授）による同定結果を付編に掲載した。
- 8 珪藻・花粉分析を㈱パリノサーヴェイに委託し、その結果を付編に掲載した。
- 9 上器の胎土分析を㈱古環境研究所に委託し、その結果を付編に掲載した。
- 10 大井川町の歴史については、山下二郎氏（大井川町文化財審議員会長）と大場悦郎氏（元大井川町教育委員会教育長）より説明と資料の提供を受けた。
- 11 遺構および遺物出土状況図の作成は、トータルステーション測量と写真測量による図化を㈱フジヤマに委託した。
- 12 出土遺物の実測図の作成とトレースの一部を㈱フジヤマに委託した。
- 13 木製品の保存処理は、当研究所保存処理室（室長 西尾太加二）が行った。
- 14 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 15 本調査に関する資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡　例

- 1 調査区の座標軸は、国土座標WGS系を用いた。
- 2 本書で使用した方位は、上記の方位（座標北）である。
- 3 国土座標を利用して、一辺10mのグリッド（方眼）を調査区内に設定し、東西列をアルファベットで、南北列をアラビア数字で表記し、北西隅の交点をもってその区（グリッド）の名称とした。
- 4 現地調査段階の遺構名は、全て新しい名称に変更した。旧遺構名との対照は表2～6を参照していただきたい。
- 5 遺構の略号はSB（堅穴住居跡）、SH（掘立柱建物跡）、SR（旧流路）、SD（溝状遺構）、SF（土坑）、SE（井戸跡）、P（小穴）、SX（性格不明遺構）を用いた。掘立柱建物跡の柱穴番号は、個別遺構図に番号のみを付した。
- 6 本稿では、大アラコ窯（12世紀中葉）以降の灰釉陶器の系譜に連なる土器の器種の総称として、「山茶碗」という通称を用いている。
- 7 本稿では、古墳時代と平安時代について「末期」を設定している。この時期は次の時代への大きな転換期を示し、考古学的にも様々な変化が顕著な時期である。
- 8 挿図中の出土遺物の表記は、「●」の多くが土器を示すが、その他の場合は注記した。また、土器は「P」と略称している場合もある。「△」または「W」は木製品で、「S」は疎または石製品を示している。
- 9 土器実測図で、口径が不明瞭であるものは中心線を外し、ある程度根拠のあるものは中心線を一点破線とした。土師器の実測図は以下のように統一した。



- 10 木製品実測中のドットは欠損部もしくは剥落痕を示し、黒塗りは木釘、楔、樺紐を表現している。スクリーントーンによる表現は以下のとおりである。



炭化範囲



圧痕

目 次

序
例言
凡例

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	4
第3節 調査経過	4

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境	9
第2節 基本事層	12

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

第1節 古墳時代末期から奈良時代の遺構の概要	25
第2節 平安時代末期から鎌倉時代の遺構の概要	26
第3節 掘立柱建物跡と出土遺物	26
第4節 積穴住居跡と出土遺物（大谷宏治）	40
第5節 田流路と出土遺物	59
第6節 溝状遺構と出土遺物	90
第7節 井戸跡と出土遺物	101
第8節 土坑と出土遺物	101
第9節 その他の遺構と出土遺物	114

第Ⅳ章 まとめ

第1節 古墳時代末期から奈良時代の土器について	167
第2節 藤守遺跡出土の須恵器製の鉢について（当研究所調査研究員 勝又直人）	171
第3節 平安時代末期から鎌倉時代の土器について	172
第4節 平安時代末期から鎌倉時代の遺構について	175

付 編

1 藤守遺跡における自然科学分析（株式会社 バリノ・サーヴェイ）	182
2 静岡県、藤守遺跡から出土した土器（胎土）の蛍光X線分析（株式会社 古環境研究所）	192
3 静岡県志太郡大井川町藤守遺跡出土木製品の樹種（東北大学教授 鈴木一男）	196
4 藤守遺跡の自然的立地条件（静岡大学名誉教授 加藤芳朗）	215

挿図目次

第1図	藤守遺跡範囲図（番号は確認調査経過に対応）	2
第2図	調査範囲図（Noは静岡人類史研究所による確認調査地点）	2
第3図	試掘坑No 6 出土木製品	3
第4図	グリッド配置図	5
第5図	周辺遺跡分布図	10
第6図	基本土層図	13
第7図	第1調査面全体図（1）	19
第8図	第1調査面全体図（2）	21
第9図	第2調査面全体図	23
第10図	S H 1・4, SD 1～6 平・断面図	28
第11図	S H 1・4, SD 1・3 断面図	29
第12図	S H 2・3, SR 1, SF 1 平・断面図	30
第13図	S H 5 平・断面図	31
第14図	S H 6～10 平面図	32
第15図	S H 6～10 平・断面図	33
第16図	S H 11, 調査区南端部小穴群（P45～53・57・58, 60～85）平面図	34
第17図	S H 11, P 57・58・75 平・断面図	35
第18図	掘立柱建物跡, 小穴出土土器実測図	35
第19図	S B 1 平・断面図	43
第20図	S B 2・4 平・断面図	44
第21図	S B 3 平・断面図	45
第22図	S B 3 瓦跡平・断面図	46
第23図	S B 5 瓦跡平・断面図	47
第24図	S B 6 平・断面図	48
第25図	S B 6 瓦跡平・断面図	49
第26図	S B 7～9 平・断面図	50
第27図	S B 9 瓦跡平・断面図	51
第28図	堅穴住居跡群上層遺物出土状況図	52
第29図	S B 1・2・5 出土土器実測図	53
第30図	S B 3 出土土器実測図	54
第31図	S B 6 出土土器実測図	55
第32図	S B 7・8・9 出土土器実測図	56
第33図	堅穴住居跡群の上層出土土器実測図	57
第34図	堅穴住居跡群の上層, S R 2・3 出土土器実測図	58
第35図	S R 4 平面図	67
第36図	S R 5 平面図	68
第37図	S R 4～6・SF 12 断面図	69
第38図	S R 6 平面図	71

第39図	S R 5・6 遺物出土状況図（1）	72
第40図	S R 5・6 遺物出土状況図（2）	73
第41図	S R 5・6 遺物出土状況図（3）	74
第42図	S R 5・6 遺物出土状況図（4）	75
第43図	S R 6 出土木製品実測図（1）	76
第44図	S R 6 出土木製品実測図（2）	77
第45図	S R 6 出土木製品実測図（3）	78
第46図	S R 6 出土木製品実測図（4）	79
第47図	S R 5・6 出土土器実測図（1）	80
第48図	S R 5・6 出土土器実測図（2）	81
第49図	S R 5・6 出土土器実測図（3）	82
第50図	S R 5・6 出土土器実測図（4）	83
第51図	S R 5・6 出土土器実測図（5）	84
第52図	S R 5・6 出土土器実測図（6）	85
第53図	S R 5・6 出土土器実測図（7）	86
第54図	S R 5・6 出土土器実測図（8）	87
第55図	S R 5・6 出土土器実測図（9）	88
第56図	S R 5・6 出土土器実測図（10）	89
第57図	S D 2 平・断面図	91
第58図	S D 1～3 出土土器実測図	92
第59図	S D 15～19, S F 9・10, S X 6・7 平面図	93
第60図	S D 15・16・19, S F 10断面図	94
第61図	S D 15～17・S X 6 遺物出土状況図	95
第62図	S D 15出土土器実測図	97
第63図	S D 15～17・19, S F 10, S X 6 出土土器実測図	98
第64図	S X 6 出土土器実測図（1）	99
第65図	S X 6 出土土器実測図（2）	100
第66図	S D 1～4・7～13, S F 2・3・5・6, S E 1・2, P 10～26平面図	102
第67図	S D 1・9・10, S E 1 断面図	103
第68図	S E 1・S D 7 平・断面図	104
第69図	S F 11・14, S D 21～23, S R 7 遺物出土状況, 噴砂平・断面図	105
第70図	S F 7 遺物出土状況・平面図	106
第71図	S F 7 遺物出土状況・断面図	107
第72図	S F 7 出土土器実測図（1）	108
第73図	S F 7 出土土器実測図（2）	109
第74図	S F 7 出土土器実測図（3）	110
第75図	S F 7 出土土器実測図（4）	111
第76図	S F 7 出土土器実測図（5）	112
第77図	S X 3 平・断面図	113
第78図	S X 3 出土土器実測図	113
第79図	S X 1 平・断面図	118

第80図	S R 1, S X 1 出土土器実測図	119
第81図	S X 2・4 平・断面図	120
第82図	S X 8・9 平・断面図	121
第83図	S R 4, S D 7・8・10・11 出土土器実測図	122
第84図	S D21, S E 1・2, S F 11・12・14・15, S X 2 出土土器実測図	123
第85図	S X 4・7・9 出土土器実測図	124
第86図	S R 7 出土土器実測図（1）	125
第87図	S R 7 出土土器実測図（2）	126
第88図	包含層出土土器実測図（1）	127
第89図	包含層出土土器実測図（2）	128
第90図	包含層出土土器実測図（3）	129
第91図	土製・石製品実測図	130
第92図	S F 7 出土土器集成図（1）	168
第93図	S F 7 出土土器集成図（2），藤枝市白砂ヶ谷C 2号墳出土土器実測図（下段，報告書より転載）	169
第94図	藤守遺跡出土山茶碗変遷案	174
第95図	地割図に残る地割りと発掘区	174
第96図	藤守遺跡周辺小字集成図（静岡県教育委員会1981『静岡県の中世城館跡』より加筆転載）	176
第97図	藤守遺跡周辺の推定古代条里	177

挿表目次

表1	周辺関連遺跡一覧（番号は第5図に対応）	11
表2	新旧構造名対照表	17
表3	掘立柱建物跡一覧（1）	36
表4	掘立柱建物跡一覧（2）	37
表5	小穴一覧（1）	38
表6	小穴一覧（2）	39
表7	豎穴住居跡一覧	42
表8	木製品一覧	62
表9	出土木片樹種同定一覧	63
表10	溝・凹流路一覧	66
表11	土坑・井戸跡一覧	114
表12	上・右製品一覧	117
表13	桃果核一覧	117
表14	土器一覧	132

図版目次

カラー図版 1 1. 調査区周辺の景観（南より、奥は富士山） 2. 第1調査面全景（東より）

2	1. 第1調査面北縁部（南西より）	2. S D 2出土土器
3	1. S D 15・16（北東より）	2. S D 15出土土器
4	1. 第2調査面と周辺の景観（南西より、奥が駿河湾） 2. 第2調査面全景（北東より）	
5	1. 壑穴住居跡群と旧河道（北より）	2. S F 7遺物出土状況（北西より）
6	1. S F 7出土須恵器窓	2. S F 7・S X 3出土土器
7	S R 5・6出土土器	
8	1. S B 9出土土器 3. 調査区東壁Fライン南土層	2. 調査区北壁Cライン土層 4. 調査区東壁Lライン上層
図版1	1.第1調査面全景（垂直）	2.第1調査面北縁部（南西より）
図版2	1.S H 2・3（南西より）	2.S H 1,S D 2～6（南より）
図版3	1.S H 1（南西より） 3.S D 2中央遺物出土状況（北より）	2.S D 2東側遺物出土状況（北より） 4.S D 2遺物出土状況（北西より）
図版4	1.第1調査面南半部（北東より）	2.S H 5～8（南東より）
図版5	1.S H 5（北東より）	2.S H 6・7（北東より）
図版6	1.S H 7（南東より） 3.S H 6-2, S H 8-4, S H 9-7（南東より） 5.S H 8-4（東より） 7.S H 5-13（南西より）	2.S H 8～10（北東より） 4.S H 5-14（南東より） 6.S H 6-2（東より） 8.S H 8-2（東より）
図版7	1.第2調査面南半部（S R 7, 北西より）	2.第2調査面南端部（北東より）
図版8	1.第2調査面南西部小穴群（北東より）	2.S H 11（北東より）
図版9	1.P 79～84周辺（北東より） 3.S H 11-5（南西より） 5.S B 1（南西より） 7.S B 2上層断面（北西より）	2.S H 11-3（南より） 4.P 75（北東より） 6.S B 1竈跡（南より） 8.S B 2竈跡土層断面（南東より）
図版10	1.第2調査面全景（垂直）	2.S B 2～9（東より）
図版11	1.S B 2～9（西より）	2.S B 2（南東より）
図版12	1.S B 3（北西より）	2.S B 3掘り方（北西より）
図版13	1.S B 2竈跡（南東より） 3.S B 4（東より） 5.S B 5（南より）	2.S B 3竈跡（北西より） 4.S B 5竈跡（北より）
図版14	1.S B 6（南東より） 3.S B 6遺物出土状況（西より） 5.S B 9竈跡掘り方（南東より）	2.S B 6竈跡（北より） 4.S B 9竈跡（北東より）
図版15	1.S B 7（南東より）	2.S B 9遺物出土状況（南東より）
図版16	1.S B 8（南西より） 3.S R 5（南西より） 5.S R 4（南より）	2.S R 1（南西より） 4.S R 6（北東より）
図版17	1.S R 5・6（北東より）	2.S R 6斎串？出土状況（北西より）
図版18	1.S R 6 No110出土状況（南より） 3.S R 5土馬出土状況（西より）	2.S R 6 No 7出土状況（東より） 4.S R 6 No111など出土状況（南より）

- 5.S R 6 №143出土状況（南より）
7.S R 6 W 6 出土状況（南より）
図版19
1.S R 6 W 9 出土状況（北西より）
3.S R 6 W 5 出土状況（西より）
5.調査区北東部（南西より）
7.S E 1（南西より）
図版20
1.S D 15・16（北西より）
図版21
1.S D 15・17遺物出土状況（南東より）
3.S X 6 遺物出土状況（東より）
5.S X 6 下層遺物出土状況（東より）
7.S D 21・22（北東より）
図版22
1.S F 11（北西より）
3.S F 14（東より）
5.S X 2（北より）
7.S X 8（北より）
図版23
1.S X 3（北東より）
3.S X 3（北より）
5.調査区南東部噴砂（西より）
7.S R 4 西壁噴砂上層断面（東より）
図版24～28 S R 6 出土木製品
図版29～48 出土土器
図版49 出土土器・土馬
図版50 出土土製品・馬齒
図版51 S R 6 出土桃果核
- 6.S R 6 №10など出土状況（南西より）
8.S R 6 W 35出土状況（北より）
2.S R 6 W 1 出土状況（南東より）
4.S R 6 W 15出土状況（北西より）
6.S E 2,S D 10（西より）
8.S D 7 遺物出土状況（西より）
2.S D 15・16,S X 6 遺物出土状況（東より）
2.S D 15青白磁合子出土状況（南より）
4.S X 6（南東より）
6.S R 7 J 2区北西遺物出土状況（北東より）
8.S D 23（南西より）
2.S F 12（北西より）
4.S X 1（西より）
6.S X 4（南西より）
8.S X 9（北東より）
2.S X 3 瓢と炭化物（北東より）
4.S F 7（北西より）
6.S F 7 遺物出土状況（北西より）
8.J 1区西壁土層断面畦畔？（南東より）

第一章 調査概要

第1節 調査に至る経過

藤守遺跡は周知の遺跡であり、かなり広範囲におよぶ拠点的集落遺跡であろうと考えられていた。しかし、その内容は不明な点が多く、謎の多い遺跡でもあった。

想定される遺跡の範囲内には、航空自衛隊静浜基地などがあり、それらの建設工事に先立つ発掘調査も行なわれている。その調査の際に出土した多量の遺物が、大井川町教育委員会に保管されており、今回の調査で出土した土器に近い時期のものも多い。また、平成8年1月の藤守2881-2・2884-1番地の確認調査では、古墳時代前期の土器がまとまって出土しており、縄文・弥生土器の採集も伝えられているが、藤守集落の形成が古墳時代前期には始まっているものと思われる。

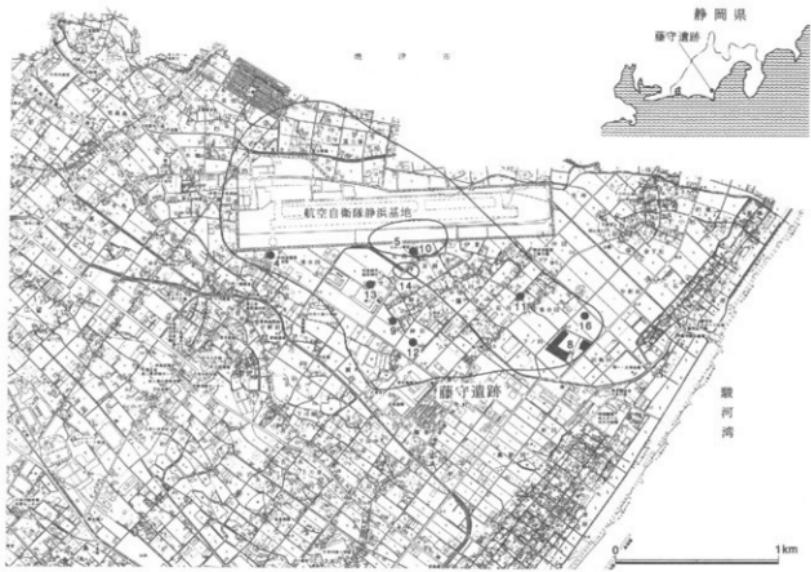
以下に藤守遺跡の調査歴をまとめて記す。これは、静岡県教育委員会文化課の佐藤正知氏によってまとめられていた資料に、一部、柴田が加筆したものである。掲載を快諾された佐藤氏には御礼申し上げる。

藤守遺跡調査歴

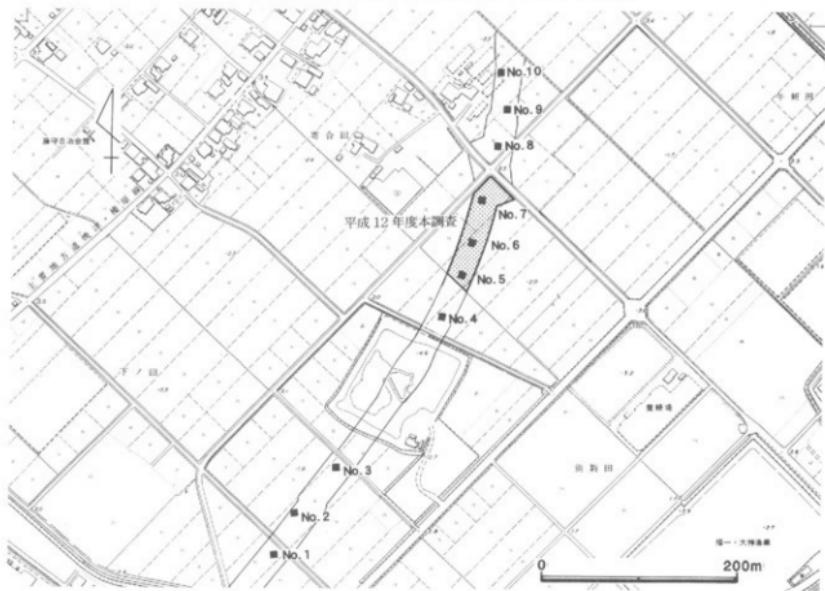
- 昭和40年以降実施の東部地区（旧静浜村）土地改良工事において、藤守字横町・地蔵坊の排水路上で須恵器片・土師器・柱痕とみられる木材が多数出土した。横町よりは、その他、縄文土器片・弥生土器片・シジミと思われる貝・石製紡錘車各1点が出土した（出土深度不明、町教委で保管）。その他、完形の壺・完形となり得る壺形の土器（壺瓶か横瓶）も出土している（町教委で保管）。
- 昭和50年、大井八幡宮移転工事のため、旧大井八幡宮隣接地、藤守字宮西で採土工事中、多数の須恵器片が出土した。
- 昭和52年航空自衛隊静浜基地保安用地整備に伴い発掘調査（第1次調査）され、多数の須恵器片、土師器片が出土した（平安時代末～鎌倉時代）。
- 昭和55年県警ヘリポート格納庫増設に伴い、県文化課栗野克己主事により発掘調査（第2次調査）され、須恵器片1点が出土した。
- 昭和55年航空自衛隊静浜基地整備に伴い、同課栗野克己主事により発掘調査（第3次調査）され、調査結果の概要は以下のとおりである。出土遺物は、町教委で保管されている。

調査の結果

- 藤守字宮西より弥生土器片（完形となり得る壺）が、1か所のみ深く掘り下げた際に出土した。
- 調査区のほぼ全域より須恵器片・土師器片・陶質土器片が多数出土した。
- 藤守字宮西より住居跡及び倉庫跡（柱痕跡）が発見されている。
- 藤守字宮西より、大きな柱痕跡が出土した。真言宗八幡山法雲寺跡と推定される（概報では大学寺とされている）。
- 古代条里跡及び河跡が発見されている。
- 竈跡（2つ並んでいた）が発見されている。藤守字九文給より、南禅寺領初倉庄公文関係か。
- 古墳石室の石材と考えられる玉石がまとまって出土した。
- 藤守字両正寺より黄色土化した木棺と頭骨のない人骨が発見された。

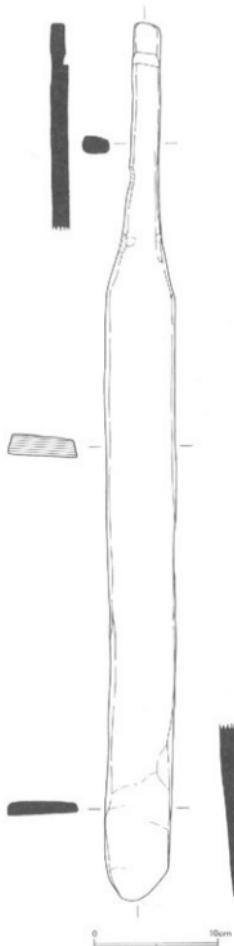


第1図 藤守遺跡範囲図（番号は確認調査経過に対応）



第2図 調査範囲図（No.は大井川町教育委員会による確認調査地点）

- 6 昭和60年、県警ヘリポート油槽埋設に伴う発掘調査（第4次調査）により、須恵器片1点が出土した。
- 7 平成4年、航空基地拡張工事に伴い、県文化課指導主事鈴木良孝が立会調査を担当し、燃料タンク埋設部分に試掘坑を掘削したところ、湿地を示す堆積物が確認された。
- 8 平成5年4月、志太広域事務組合の産業廃棄物処理場建設工事に伴ってAブロックの立会調査を実施し、10月に同じくBブロックの立会調査を実施した。いずれも、県文化課職員が担当した。河川堆積と水田化が繰り返されており、古墳時代初頭にさかのばる水田（V層水田）と平安時代の水田（Ⅲ層水田）が存在する。
- 9 平成5年12月、水路改修工事に伴って、県文化課職員が立会調査を担当した。地表（海拔4m）下1mで砂層に達する。
- 10 平成7年2月、藤守児童公園の建設に伴って、県文化課職員が確認調査を担当した。地表下30cmで砂礫層が出現した。
- 11 平成7年2月、藤守地区学習等供用施設駐車場等整備に伴い、県文化課職員が確認調査を担当した。地表（海拔2.6m）下30～70cmに時期不明の水田耕作土が存在する。
- 12 平成7年3月、シーラック株式会社による工場建設に伴って確認調査が実施された。微砂ないしシルト層の下に水田土壤が確認されたが、時期は不明である。
- 13 平成8年1月、日本エー・エム・ピー株式会社の駐車場建設に伴って、県文化課職員が確認調査を担当した。地表下70～160cmにわたって弥生時代末から古墳時代初頭の良好な遺物包含層を確認した。
- 14 平成8年12月、県農業畜産公社による精米施設建設に伴って、県文化課職員が確認調査を担当したが、遺物は確認されていない。
- 15 平成10年11月、焼津棟原線緊急地方道道路改築工事に伴い、大井川町教育委員会（静岡人類史研究所）が確認調査を実施した（第2図）。一部遺物包含層が確認され、古墳時代から平安時代にかけての遺跡であろうとされた。とくに、試掘坑No.7の土器集中地点（本調査のS F 7）と試掘坑No.6から出土した木製品（第3図）が注目された。この木製品は、本調査のS R 6から出土したもので、上端部に縫縛用の抉りがあることから、組合せて使われたもので、下端部は薄く削られていることなどから、鍬先もしくは鋤先状の用途も推定される。ただし、鍬先としては細長過ぎるので、鍬状の振り棒とする見解がある。
- この調査結果より今回の本調査が実施された。
- 16 平成12年10月から平成13年3月まで、焼津棟原線緊急地方道道路改築工事に伴い、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が本調査を実施した。並行して、南北の遺跡範囲確認のための確認調査も行った。



第3図 試掘坑No.6 出土木製品

その他、聞き取り調査など

- ① 終戦後、大井八幡宮裏の塚を地元の人達が発掘している（発掘の当事者より聞いたところ、刀子が出土したようである）。
- ② 日時不明、字井戸山より田下駄が出土した（タタラ音工KK専務、多々良三雄氏談）。
- ③ 昭和40年以降、東部地区（旧静浜村）上地改良工事の折、上小杉宇富土塚より土馬が多数が出土した（そのまま埋め戻したという）。
- ④ 昭和47年、西部（旧相川村）地区土地改良工事の折、須恵器・灰釉陶器片が出土（上泉寺西、宮南より・・・旧上泉八幡宮の下流部分）し、町教委により保管されている。

第2節 調査方法

表土および中間層上の除去作業は、基本土層の6層（第6図）上面まで、重機により掘削し、6層以下は人力により掘り下げた。そして、上層で発見された遺構群を第1調査面とし、下層の遺構群を第2調査面とした。第2調査面の北部は、下層の遺構が確認できなかったことにより、調査は実施していない。

調査区は国土座標に沿って10m単位でグリッドを組み、北西地点を基点とし東へ向かって1・2・3の順に、南へはA・B・C順に仮番号を付した（第4図）。グリッド名は北西杭の番号で呼称し、遺物の取り上げ時には、さらにグリッド内を5m単位で4分割し、方位を付した（例えばA 1区北西）。

付近には航空自衛隊の静浜基地が存在し、ラジコンヘリコプターの撮影日時が限定されたため、第1調査面はトータルステーションにより遺構の1／20縮小図を作成した。

第2調査面の面積は比較的狭く、遺構密度も低かったため、主要遺構は1／20縮小図をトータルステーションにより作成し、その他は、1／100縮小図をラジコンヘリコプターによる写真測量により作成した。

遺物出土状況はトータルステーションやデジタルカメラにより1／10縮小図を作成した。

これらの経過については、次節で詳しく触れているので参照していただきたい。

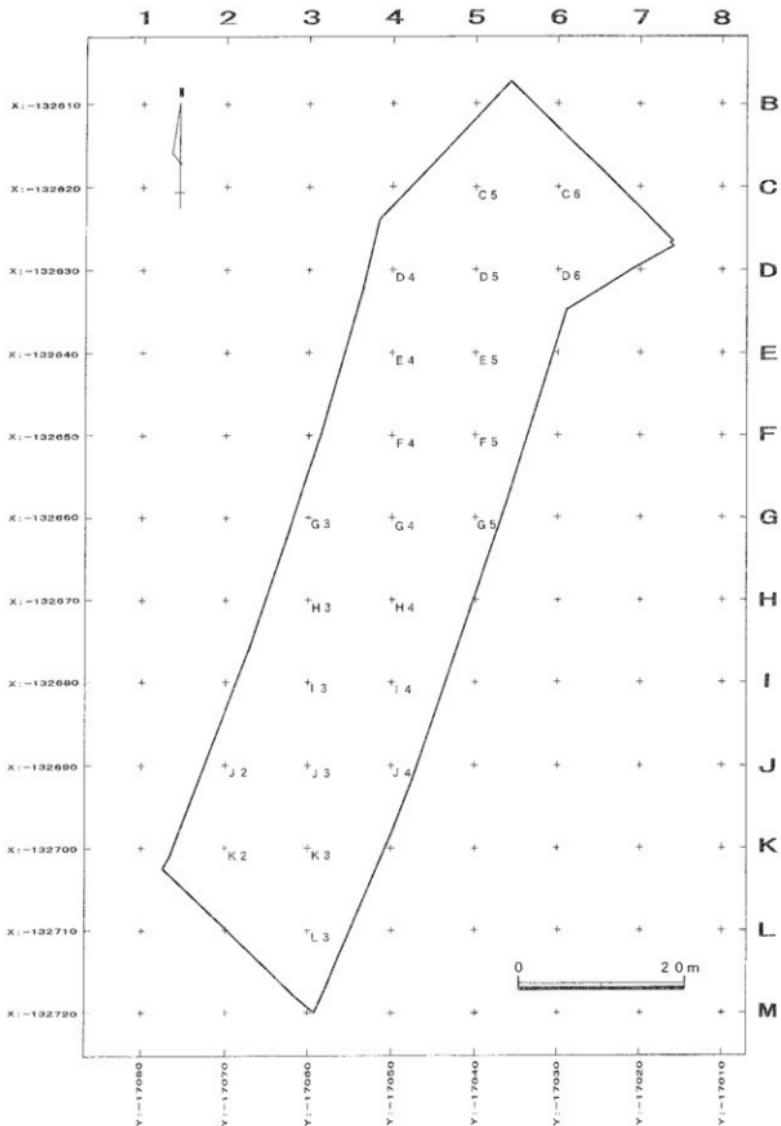
今回の本調査前には、平成10年に確認調査が実施されているが、より詳細な遺跡の範囲確定のための確認調査も、平成13年2月に本調査と並行して行なわれた（担当者：当研究所 篠原）。調査区外の南側の試掘坑からは、多数の土器が出土したが、遺構は発見されなかった。北側の試掘坑では、SD1の北端部コーナーなどが発見された。この北側地点については、来年度以降発掘調査が予定されている。

遺跡の略称はS FMとし、とくに、出土遺物への注記作業や図面上の遺跡名の記入欄などに使用している。

第3節 調査経過

10月は本格的な発掘調査のための準備作業を主に行なったが、11月の初めまで雨天の日が多く、予定の工程より大幅に遅れてしまった。

10月23日には、現地において調査範囲の確認と作業方法および工程の打ち合わせを行った。



第4図 グリッド配置図

10月24日から31日には、調査区の周囲に安全フェンスを設置し、水中ポンプとベルトコンベアー用の電気配電盤を設置した。これらの工事に並行して、小型のバックホーと人力により、調査区周囲に排水溝を掘削した。

11月は、前半に重機による表土除去と堆土搬出を行い、後半は人力による中間層除去作業を主に実施した。

11月1日から21日は、大型のバックホーによる表土除去とクローラーダンプによる堆土搬出、重機による堆土の整地作業を行った。表土除去では上層の水田耕作土から下層の黒色土（第6図6層）上面まで掘削したが、奈良時代から中世にかけての土器片が多く発見された。

11月9日から13日には、作業員と事務所棟となるプレハブを設営し、電気・ガス・水道・電話工事と備品の搬入を行った。

11月14日に仮設トイレとベルトコンベアーを搬入した。また、作業員の雇用を同日より開始し、雇用説明会を実施し、翌日より、人力による中間層除去作業を行った。人力掘削は調査区の北端より行き、中世の遺物包含層である黒色土6層を除去し、灰色土上層で遺構の確認作業を行った。当初の計画では、上層に奈良時代の遺構が存在し、下層に木製品を含む弥生・古墳時代の遺構が存在するものと考えられていたが、何本かの旧河道が調査区を東西方向に横切り、それらの埋没後に遺構が形成されており、非常に複雑な調査となった。

11月24日には、基準点・水準点測量（様フジヤマ）を実施した。

12月初旬は、調査区北部の人力による中間層除去と遺構の掘削を継続して行い、中旬以降は、調査区中央部の人力による中間層除去と遺構の掘削を中心に行った。

調査区北端部は、疊混じり土を侵食した東西方向の流路跡が存在し、その流路内の上層（6層）から、鎌倉時代の山茶碗や土師器などが多数発見された。その下層（7層）で遺構の確認作業を行い、掘立柱建物跡、井戸跡や溝状遺構などの平安時代末期から鎌倉時代の集落跡が発見された。

掘立柱建物跡は、西側で不明瞭なものを作りて4棟（SH1～4）確認され、それらの多くは総柱形態のものである。SH1～3は棟方位を同じくしており、かなり近い時期に存在していたものと考えられる。柱穴の平面形態は小型の方形となるものが多く、SH1は周囲に雨落ち溝のような掘り込みが存在する。

井戸跡は、東側で2基（SE1・2）確認された。深さは50cmほどで砂礫層となり、湧水が著しい。SE1からは馬の歯が出土し、水に関わる祭祀が行われていたようである。

溝状遺構には、北西方向のものと、北東方向のものがあり、北東方向の溝状遺構は地形の傾斜に直交しており、人工的なものが多いのであろう。東側には、L字形に曲がり、調査区外へと延びるものがある（SD1）。確認調査の結果、この溝は方形く画の一部であることが判明した。

調査区北端部のやや南寄りは、灰色土の下層の疊混じり土が馬の背中に盛り上がりつけており、かなり大規模な洪水により土砂が運ばれたようである。

その疊混じり土の窪地からは、古墳時代末期の土器が比較的多くまとまって出土した。上師器壺が2個掘え置かれ、隣接して炭化物が集中している箇所（SX3）や、須恵器大壺などがまとまって発見されている地点（SF7）もある。これらは何らかの祭祀の行為に関わるものであろう。

これら調査区北部の遺構は、先月より継続して調査しており、12月初旬でほぼ掘削が完了し、14日に完掘写真を撮影した。測量業務は、入札による委託契約を行い、25日から27日にかけて実施した（様フジヤマ）。出土遺物の詳細な出土状況図の作成に関しては、デジタルカメラなどを利用した測量も併せて実施した。

中旬以降は、調査区中央部の人力による掘削を中心に行った。

中央部は、砂礫層の上に砂層が堆積し、その上には灰色土があり、灰色土の上に黒色土がのっている。調査区中央やや南寄りの地点では、北西方向の旧流路（S R 4）が存在する。埋積土は暗褐色土で、平安時代末期から鎌倉時代のものである。その他にも、中央部では旧流路の痕跡が一部確認されたが、遺構が希薄であったため、砂層上面まで掘り下げ、遺構検出作業を行った。灰色土および砂礫土からは、古墳時代末期の土器が散在して出土したが、それらに関連した生活痕跡は、この段階では確認できていない。

12月までで、ほぼ第1面目の調査区北半部の調査が終了し、1月より南半部の調査を開始した。

1月5・9日は調査区中央部のS R 4などの遺構測量（委託）を行い、1月11日から13日にかけて調査区の排土と一部残っていた中間層を重機により調査区外へと搬出した。併行して、一部人力による中間層除去も実施した。

1月16日にはグリッド杭の打設（株フジヤマ）を行い、ベルトコンベアを設定して、調査区南半部の本格的な発掘調査を開始した。16日以降は、人力による中間層除去と遺構のプラン確認作業を行い、発見された遺構は順次完掘した。

1月18日に調査区中央部でトレント調査を実施したところ、旧河道S R 4の下層にも旧河道が連続していることが判明し、下面に木製品を包含した古墳時代の流路があり、その上層に奈良時代の土器を多量に含む流路の存在が確認された。

この旧河道（S R 5・6）からは、平安時代の遺物は上面でわずかに発見されただけなので、おそらく、平安時代には一旦埋没し、平安時代末期から鎌倉時代になって小河川が流れたものと考えられる。

下面の古墳時代の流路からは、木製品の大量出土と共にかなりの湧き水が予想され、調査が極めて難しいことから、第1面目段階の調査では奈良時代の流路までを掘削した。古墳時代の流路は第2面目の調査時に掘削することとし、S R 5の奈良時代の層までを1月18日から2月2日まで人力により掘削した。S R 5の出土遺物には、一部古墳時代のものも混在しているが、土器や土塙などがある。これらのなかには、律令期の祓いの儀式などに用いられた祭祀関連遺物も多いものと考えられる。

奈良時代の流路はS R 5の南側にも存在（S R 7）し、ベースとなる砂層を浅く侵食している。S R 7の埋没した面に平安時代末期から鎌倉時代の遺構が築かれている。

平安時代末期から鎌倉時代の遺構は、旧河道（S R 5・6）にはば並行して2条の東西方向の溝（S D15・16）があり、その溝の南西部に掘立柱建物跡が約6棟存在する。

S D15・16はほぼ並行する溝で、溝内の礫の出土状況から考えると同時に存在していた可能性は高く、道路状の遺構（条里制の境界）となるものと思われる。出土遺物には、拳大の礫と共に、山茶碗や青白磁の合子などがある。1月23日には、これらの遺物の出土状況図の作成のため、デジタルカメラを用いた測量を実施した（委託）。

掘立柱建物跡は複数しており、3回以上の建て替えが認められる。柱穴内からは、山茶碗が根石などと共に出土し、また、S H 5はSD16より新しいことが確認されている。

2月は、8日まで第1面目の調査区南半部の調査を終了し、2月10日にラジコンヘリコプターによる全景写真撮影（委託）を実施した。

第1面目の調査の主体は、平安時代末期から鎌倉時代の集落であったが、調査区中央部は第2面目に相当する古墳・奈良時代の遺物が多く出土し、一部当該期の旧河道の調査も行った。

2月5日から8日は、調査区南半部の遺構測量（委託）を実施し、併せて、遺構検出作業と全景写真撮影のための片付けと精査を行った。

2月13日から22日は、奈良時代の旧河道（S R 5）の下層の古墳時代の旧河道（S R 6）を掘り下げ、2月27日に完掘状況の測量（委託）を実施した。S R 6からは、7世紀後半の完形品を含む多量の

土器と共に祭祀具？、農具、紡織具、容器や建築材などの木製品も出土した。これらの木製品を含む土層内には、木製品を製作した際の加工木片が層をなして堆積しており、付近で木製品を製作していたことが理解される。

S R 6 の南側には、古墳・奈良時代の包含層と流路（S R 7）があり、これらの掘り下げを行い、第2面の調査を実施した。

2月15日から22日にかけて、古墳・奈良時代のS R 7 の掘削を行い、2月26日より包含層を除去し、細砂層上面での遺構検出作業を行った。S R 6 内の上器が南肩部より出土していることから、南側に当然集落が存在するはずなのであるが、古墳時代の確かな建物跡は検出できなかった。調査区南端部はやや低い地点で包含層も比較的厚く、小穴や溝などの奈良時代の遺構は発見されている。

調査区内の北端や南端部でも遺構や遺物が多数発見されており、調査区外の隣接する道路建設予定地の遺跡の取り扱いが問題となり、2月5日に鳥取土木事務所、文化課と当研究所の三者協議が行われた。その結果、遺跡の範囲確認のための試掘調査を行うことになり、2月14日に実施した。

3月は、先月の続きの調査区南部の第2面の遺構検出作業を継続し、並行して、調査区中央南部の第2面の調査を実施した。

3月7日には、加藤芳朗先生（地質）による遺跡内の堆積土壤に関する現地指導を受けた。

3月2日から7日は、調査区南部の第2面の調査を行った。旧河道（S R 6）以南は、砂質が強く、パイプ状に発達した管鉄も多い。この土層内より、古墳時代末期から奈良時代にかけての遺物が多量に出上るのであるが、当該期の遺構が希薄であった。砂質土壤のなかには、やや粘土質の地点があり、それらは、侵食痕（S R 7）と考えられ、そうした侵食作用を受けていたため、遺構が発見されにくいいのではないかと考えられる。ただし、調査区南端部は包含層が厚く、層位も明瞭で、遺構が残り易い条件下にあったものと思われる。そのため、奈良時代の堅穴住居跡（S B 1）、掘立柱建物跡（S H11）や小穴群などが検出されたのではないかと思われる。

3月5日から22日にかけては、調査区中央南部の当初砂堤と考えていた地点の第2面の調査を行った。この地点はベースの砂礫層まで比較的浅く、上面からは7・8世紀の土器が出上っていることから、短期間に埋積した河川堆積土壤である。細砂から粗砂により構成された土壤で、ラミナが発達し、湧水が著しい地点もある。現状の湧水量から考えて、遺構は希薄であろうと予想されていたが、それに反して、古墳時代末期の堅穴住居跡（S B 2～9）が約8軒確認された。

北西側に粘土によりつくられた竈を有する住居跡で、竈内には、土師器壺などが落ち込んだかのような状態で残存していた。しかし、壁面は砂地を掘り込んでいるため、洪水などによる侵食を受け、流出している住居跡も多い。残りの良いS B 3の構造は、中央部に深い掘り方をもち、壁際に周溝が巡り、4基の柱穴があったようである。平面形態は、コーナーが丸いものと直角に近いものの2者がある。これらの住居跡は、重複しているたり、棟方位が異なる例があるため、3時期に分けることが可能である。

住居跡の解体作業などを除く第2面の調査が終了後、3月20日にラジコンヘリコプターによる全景写真撮影と写真測量（㈱フジヤマ）を実施した。

その写真撮影終了後に、住居跡の解体作業や基本上層図の作成などの残りの作業を3月21日から26日まで行った。

3月26日から31日にかけては撤収作業を行った。

26日から資材、出土品、記録資料などの引っ越しの準備をしながら、現地は重機による埋め戻しを並行して進め、現地におけるすべての作業を30日に完了した。

平成13年7月1日からは、報告書作成のための整理作業を研究所本部で実施した。実質的な整理作業は、平成13年11月で終了したが、一部、編集作業と木製品の保存処理を平成14年3月まで行った。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境

当遺跡は大井川によって形成された扇状地の末端低地（付録4の加藤論文参照）上に立地している。標高は約2mで、直下の砂疊層からは、鉄分の多い水がかなり湧き出してくれる。

周辺は、南東側に駿河湾、西側に牧ノ原台地、北側に各山系より伸びた丘陵が位置し、四方が囲まれた閉鎖的な地形である。駿河湾まで約1kmの地点で、砂堤列の後背低地上に存在し、海を介した交易もしくは漁業、塩を含めた水産品の加工といった生業活動が当然予想される。

農耕集落としては、堤防や洪水の被害を受けやすいといった難点があると考えられるのであるが、花粉分析の結果（付録1 バリノ・サーヴェイ報告参照）では、イネ属花粉が確認され7世紀後半以降の稻作の可能性が指摘されている。また、興味深いことに稻作だけでなく、集落跡の周辺での畑作を示す花粉も検出されている。

稻作經營にとっては、安定的な水と養分の供給が必要不可欠であるが、裏腹に洪水の被害も受けやすいことを暗示している。藤守地区には、集落を大井川の氾濫から守るためにつくられた輪中（谷岡1973）が一部残っている。県内では、江戸時代以降の堤跡や土壠は数多く存在するのであるが、輪中集落は少ない。嘉吉3年（1443年）の古絵図には、上ノ堤・下ノ堤と記されていることから、藤守輪中の祖形が中世中頃には存在しているとされる。

この輪中の形成期は、今回の調査結果だけから推測すると、中世初頭前後につくられた遺構群と上墨の方向性とは一致しないことから、早くても中世の中頃以降であろう。

当遺跡の近隣には、大井川の氾濫により同時期の遺跡が確認されていないため、志太平野とその周辺の遺跡の在り方について、当遺跡の動態と運動させながら概観する。

『大井川町史』（山下1984）には、縄文土器が字横町より、弥生土器が字宮西より発見されたとされている。当遺跡には、予想以上に古い人々の活動の痕跡が確認される可能性がある。

今回は報告していないが、平成8年1月の確認調査時に、古墳時代前期の土器がまとまって出土している。二重口縁や單純口縁の壺、台付甕などが発見されている。二重口縁壺は墳墓や祭祀関連遺構からの発見例が多く、特殊な遺構の存在が予想される。

志太平野周辺の古墳時代前期の墳墓は、まだあまり多く発見されていない。もしくは、明治期以降の茶園の開拓と改植により丘陵先端部の前期古墳の多くが消滅している可能性もある。しかし、前・中期を通して、墳丘規模が30mを超えるような大型古墳が非常に少ないと周溝墓や台状墓といった盛土が少ない方形壠が多いといったことから、今後大型の前期古墳が数多く発見される確率は低いのである。

前期の墳墓には、樋原町倉見原3号墓（山村1968）、島田市城山古墳（大塚1980）、同市鳥羽美古墳（大塚1984）、藤枝市五鬼免1号墳（八木1978）、金谷町駿河山遺跡（河合2001）、焼津市小深田西遺跡（山口1982）などがある。

副葬品のなかには、鏡、装身具、武具といった威信財が少数含まれる例が多い。駿河山遺跡と小深田西遺跡には方形周溝墓群が存在し、規模に大小があり、副葬品にも格差がある。

これらの墳墓の在り方から、集落内での明確な階層差を読み取ることができ、一般的には在地の小首長層の勢力が強い地域と考えられている。しかし、逆説的に、大首長の傘下にあり、大型古墳を造るまでの努力に成長しえなかった地域と考えることもできる。

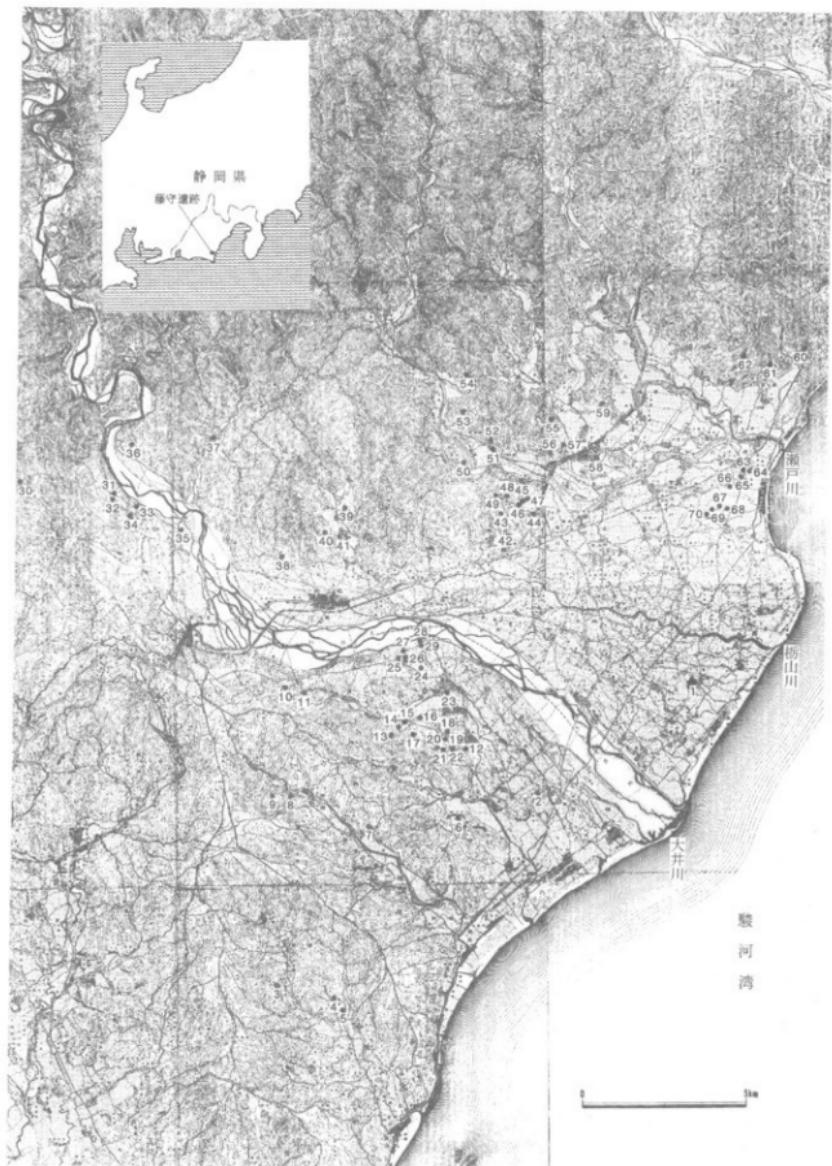


表1 周辺関連遺跡一覧（番号は第5図に対応）

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	藤守遺跡	26	宮上遺跡	51	莊原山古墳群
2	小山城跡	27	豊瀬神社経塚	52	白砂ヶ谷古墳群
3	窪谷古窓跡	28	谷口原古墳群	53	経塚山経塚
4	蛇ヶ谷古窓跡	29	愛宕坂古墳	54	助宗古窓跡群
5	西側古窓跡	30	白山神社経塚	55	時ヶ谷・五鬼兔古墳群
6	倉見原古墳群	31	きつね沢古窓跡群	56	若王子古墳群
7	大ヶ谷横穴群	32	はるん沢古窓跡群	57	鈴鹿古墳群
8	土器谷古窓跡	33	やしん沢古窓跡群	58	郡遺跡
9	勝間田城跡	34	蓋谷四古窓跡	59	女池ヶ谷古墳群
10	鶴小原古墳群	35	巖河山遺跡	60	鬼沢古墳群
11	丸山古窓跡群	36	海嘴古窓跡	61	高崎古墳群
12	向山古窓跡群	37	相賀古窓跡	62	笛吹校古墳群
13	水掛渡古墳群C群	38	應折古窓跡群	63	唐津古墳群
14	水掛渡古墳群B群	39	菅ヶ谷古窓跡群	64	道下遺跡
15	水掛渡古墳群A群	40	鳥羽美古墳	65	道邊遺跡
16	庚申塚古墳	41	居倉遺跡	66	宮之妻遺跡
17	9 TEE古墳	42	瀬戸古墳群	67	小澤田古墳
18	宮裏中原古窓跡	43	後ヶ谷古窓跡	68	小深田古墳
19	竹林寺廢寺跡	44	南新屋瓦窓跡	69	道場田遺跡
20	六千ヶ谷古窓跡群	45	秩合古墳群	70	小川城跡
21	湖原古窓跡	46	山麗遺跡		
22	南原瓦窓跡群	47	秋合遺跡		
23	高根森古墳群	48	御子ヶ谷遺跡		
24	中原遺跡	49	内瀬戸墓群		
25	青木原遺跡	50	谷橋葉・高草古墳群		

今回報告した遺構のなかで、古墳時代末期から奈良時代にかけての堅穴住居跡群の発見は大きな成果であった。この時期の志太地域の集落の様相は資料が比較的揃っており、集落論だけでなく、多方面からの検討が加えられている。

とくに、都衙や駅家の位置が特定されていることの意義は大きい。志太郡衙が藤枝市御子ヶ谷遺跡（八木他1981）周辺、益津郡衙が藤枝市郡遺跡（八木1986、鈴木1990）周辺、初倉駅が島山市初倉字田畠周辺、小川駅が焼津市小川城跡（大石1987）周辺である。

郡家間をつなぎた伝路は平時に、駅家間の駅路は非常時に利用された（原1980）幹線道路とされ、静岡市曲金北遺跡（及川1996）での古代条里に平行した駅路の発見以来、古代東海道の所在が注目されている。

地籍図に残る大井川町内の正方位型の条甲を延長すると、大字藤守と上小杉との境界ラインが、初倉駅周辺につながる。残念ながら小川駅からは外れてしまうため、一直線の東海道ではなかったことも指摘されている。

御子ヶ谷遺跡の掘立柱建物跡はN-10° - E前後、郡遺跡はN-16° - W前後、小川城跡はN-37° - W前後（平安時代）とかなり極方位の不一致が認められる。これらは、幹線道路の方向性を暗示する場合もある。

古代東海道および条里制の施行の背景には、中央集権国家体制の確立と律令制の浸透などが挙げられる。また、地方の抵抗勢力の弱体化をも示している。当遺跡の堅穴住居跡群が洪水により破壊されており、季節にもよるが、稻作への影響は決して小さくなかったものと考えられる。こうした、自然災害の頻繁化も律令制を進展させたひとつの要因ではなかっただけと考えている。

志太地域はあまり有名ではないが、古代以来の窯跡がかなり多く残されている。7～9世紀の須恵器生産が活発化して以来、江戸時代にいたるまで連綿と陶器生産が続けられている。

7世紀の窯跡には、島田市向山古窯跡（嶋野1997）と岡部町入野高岸古窯跡群があり、8・9世紀には島田市南原瓦窯跡群（平野1981）や藤枝市助宗古窯跡群（水房1989）などがある。

当遺跡出土須恵器の多くは、これらの窯跡の製品であろうと思われるが、胎土や色調から湖西産と考えられる須恵器も搬入されている。

平安時代にも、島田市旗指古窯跡群（瀧谷1983など）を中心へ灰釉陶器生産が展開する。それらは南関東地方へ輸出され、かなり大きな収益を上げていた可能性もある。「だ」と墨書きされた陶器が多量に出土した居倉遺跡（瀧谷1987）は、物資の流通に関連した場所の可能性が指摘されている。

12世紀中旬から14世紀にかけての山茶碗生産も小規模ながら各地で続けられている。山茶碗生産の経営には、在地有力武将が関与していた（塙本1993）とする説がある。ただし、灰釉陶器のように、大量に広域に流通はしていないようである。むしろ、湖西・源美窯の製品の流通量が多く、当道路でも初期の段階にはかなりの量が搬入されている。

志太・榛原地域の主な山茶碗の窯跡は、相良町の相良古窯跡群、榛原町の土器谷窯跡、金谷町の金谷古窯跡群、島田市の旗指古窯跡群などがある（松井1993）。当遺跡出土山茶碗は、立地などから判断しても金谷古窯跡の製品が多いのではないかと思われる。

この時期になると、当遺跡や福田町元鳥遺跡（加藤1999）といった沿岸部の集落が形成されている。これは、中世の寒冷化に伴う海退現象による低湿地の乾燥化が進行し、在地領主層による再開発がなされた結果と考えている。

当遺跡からは、14世紀以降の遺物や遺構は非常に少ないため、後の歴史については文献史料が必要となる。文献史については、『大井川町史』（山下前掲書）に詳しくまとめられているので、そちらを参照していただきたい。

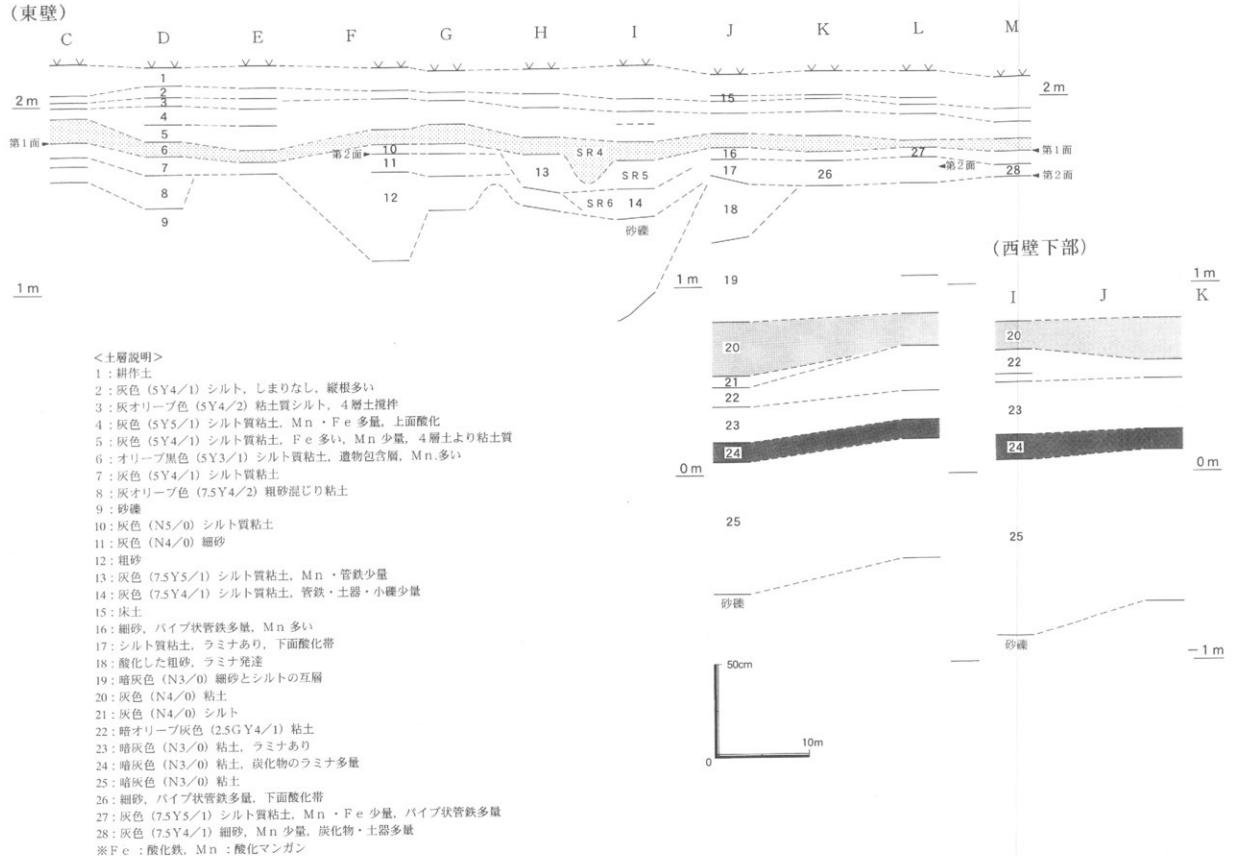
第2節 基本土層

当遺跡では、第1調査面より上層の土壤の堆積状況は、全域でほぼ同様な内容となっている。第1調査面より下層では、土壤の侵食と埋没が旧河道により繰り返されており、南北で堆積状況は異なる。この状況は第6図に示したので、基本土層の内容は、その上層番号を用いて説明する。

1層土は水田耕作土であり、現在も周辺では稲作が行なわれている。藤守集落は東西に伸びた自然堤防上に存在するのであるが、標高は低い所で約2mであり、一帯が水田地帯であるので、屋敷の周辺には溝や上塁が必要であっただろう。もしくは、現代のように盛土による水害対策が必要であろう。屋敷地の盛土が一般化するのがいつ頃かは不明であるが、当遺跡では、鎌倉時代の排水が主目的と考えられるV字溝が発見されており、屋敷地の盛土が行なわれるようになるのは、比較的新しい時代からではないだろうか。

2層土は緑まきに欠けるシルトである。Eライン以北では縱根も観察され、4層土をブロック状に含む3層土を床土と考えると2層土は水田耕作土の可能性がある。しかし、Fライン以南では3層土ではなく、耕作土であるかは不明であり、また、地点によっては酸化鉄が帶状に認められた。

4層土と5層土は、5層土の方が粒子が細かく、酸化マンガンの含有量も少なかったため分層したが、Fライン以南では、層界がはっきりしなかった。4層土と5層土は漸次的变化であり、ここでは、4・



第6図 基本土層図

5層上として一括して扱うこととする。4・5層土は、かなり締まりのある粘土で、上層の乾田から溶出したと考えられる鉄分やマンガンの集積が認められる。これは、鉄分とマンガンが上位に多く、下位に少ないとといった現象からも理解される。

加藤芳朗先生からは、4・5層土が水田耕作土である確率は低いとの御指摘をいただいている。

6層上は、黒色の強い遺物包含層である。現地調査の段階では、暗褐色土と呼んでいた鍵層で、12世紀後半～13世紀前半とされる土器が多く発見されている。この下面が第1調査面で、南側が10cmほど低いようであるが、ほぼ平坦に近い地形となっていたようである。

7層以下の上層は、Jライン付近で様相が異なっている。Jライン以南では、9層に相当する砂礫層は認められず（Jライン付近で、標高約-0.5mで砂礫が出現するが、9層とはかなりの年代差があるものと考えられる）、19～25層はマクロ的に水平堆積に近い状況であった。

Iライン以北の砂礫は、調査区外の北100mほどの地点でも確認されており（地表下60cm、厚さ60cm以上）、西側の藤守地区の微高地を囲んだ、北西から南東へと流れた流路に沿った大規模な洪水の影響によるものと思われる。ただし、砂礫は砂やシルトの間層としても存在する。これは、9層土の堆積後的小規模河川の活発な活動によるものと考えられる。E地点の砂礫は層厚が20cmほどで、その下位は砂層となっており、砂礫が初期の堆積層であるのか再堆積層であるのかの判別は難しいが、砂礫の確認レベルの高低差とIライン付近での疊層と砂層のインターフィンガーなどは、旧河道の在り方を端的に示しているものと考えられる。

7層土は、現地調査の段階では、鍵層となる6層土の直下の層と据え、灰白色土と呼んで、遺物の取り上げ時などの層位名として利用したが、地点によって7層相当の土壤の質的な差が著しく、とくにEライン以北は粘土質で、以南は砂質である。7世紀後半～8世紀の遺物包含層でもある。

8層土は、Dラインに沿って南側の肩部が確認されている。

10～14層土は、東西方向の旧河道で砂質土壤である。11層レベルでは、7世紀後半の堅穴住居跡が構築されており、7世紀後半には14層のS R 6以外は一旦埋没する。その後、堅穴住居跡は8世紀前後の侵食により、窓以外の形状がほとんどわからなくなつたものと考えられる。これらは、県内で報告されつつある7世紀後半段階の自然環境の変動を示しているのかもしれない。根拠は、未だ少数例であるが、洪水が頻繁に起っていることから考えると、寒冷な気候にあった可能性が高い。

Jライン以南の第2調査面は、26層上位と28層下面が遺構確認面で、上位の6層下までの間からは、7世紀後半～8世紀の土器が多く出土した。この包含層中には、パイプ状に発達した多量の管鉄が存在した。南端部のMラインは、7・8世紀段階では、低所に位置しているため、明瞭な包含層が確認できた。ただし、遺構確認面が砂層であったため、おそらく侵食作用などの影響で、明確に遺構の形状把握ができなかつたものと思われる。

20層以下は、坪掘りにより土壤の堆積状況を確認したが、基本的には粘土とシルトの互層で、遺構や遺物は発見されなかった。

24層中には、炭化物のラミナが存在する。これなどは、水田耕作などに由来した炭化物が再堆積したものであるかもしれない。

引用・参考文献

坂本太郎 1955『古代日本の交通』弘文堂

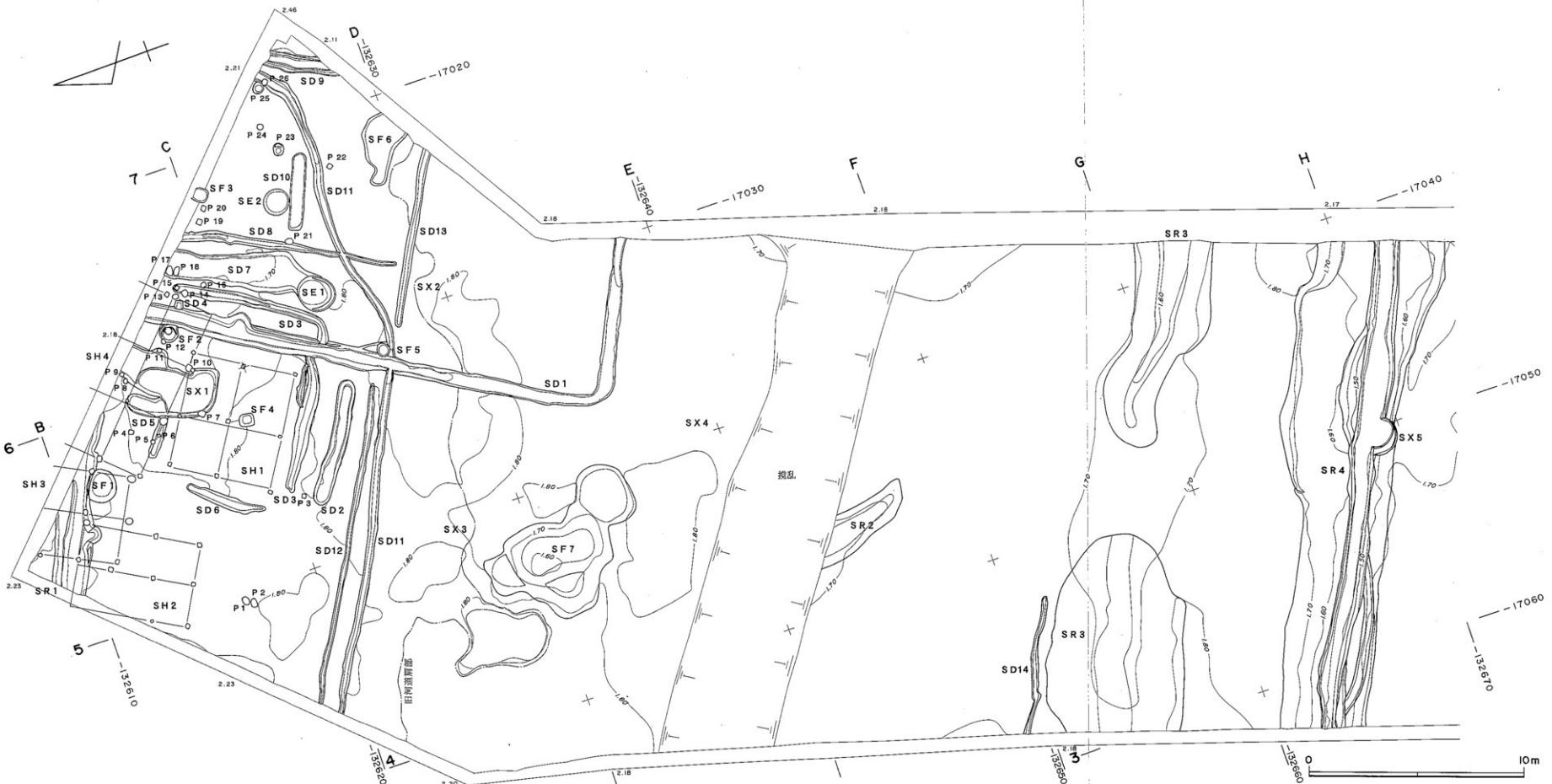
山村 宏 1968『榛原郡榛原町倉見原第3号墳発掘調査報告』『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県教育委員会

八木勝行 1978『藤枝市五鬼免1・2号墳』『静岡県考古学シンポジウムⅠ』静岡県考古学会

- 大塚淑夫 1980『城山古墳（第3次調査）概報』島田市教育委員会
- 栗野克己 1980『藤守遺跡第3次発掘調査概要』大井川町教育委員会
- 原秀三郎 他 1980『静岡県歴史の道調査報告書－東海道－』静岡県教育委員会
- 八木勝行 他 1981『日本住宅公園藤枝地区 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－奈良・平安時代編－』
藤枝市教育委員会
- 平野吾郎 1981『南原瓦窯跡』島田市教育委員会
- 山口和夫 1982『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』焼津市教育委員会
- 渡谷昌彦 1983『旗指古窯跡』島田市教育委員会
- 大塚淑夫 1984『鳥羽美古墳』『島田風土記大津編』島田市史料等編さん委員会
- 山下二郎 1984『大井川町史』上巻 大井川町
- 八木勝行 1986『郡遺跡発掘調査概報Ⅲ』藤枝市教育委員会
- 大石佳弘 1987『道場山・小川城遺跡Ⅱ』焼津市教育委員会
- 渡谷昌彦 1987『居倉遺跡』島田市教育委員会
- 永房 熙 1989『助宗古窯跡群』『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
- 鈴木隆夫 1990『郡遺跡発掘調査概報Ⅳ』藤枝市教育委員会
- 塚木和弘 1993『皿山古窯跡群の成立と終末について』『向坂銅二先生還暦記念論文集』
- 松井一明 1993『遠江における山茶碗生産について－遠江の山茶碗研究Ⅰ－』『静岡県考古学研究』
No.25 静岡県考古学会
- 及川 司 1996『曲金北遺跡（造構編）』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鷲野雄康 1997『向山遺跡』島田市教育委員会
- 加藤理文 1999『元島遺跡』I （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 河合 修 2001『弥生時代後期～古墳時代前期の大規模集落を発見－駿河山遺跡－』『静岡の原像を
さぐる』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 谷岡武雄 1973『大井川扇状地における散居集落－その起源と集落型の継承性に関する若干の考察』
『史林』56巻3号 京都大学史学研究会

表2 新旧遗構名对照表

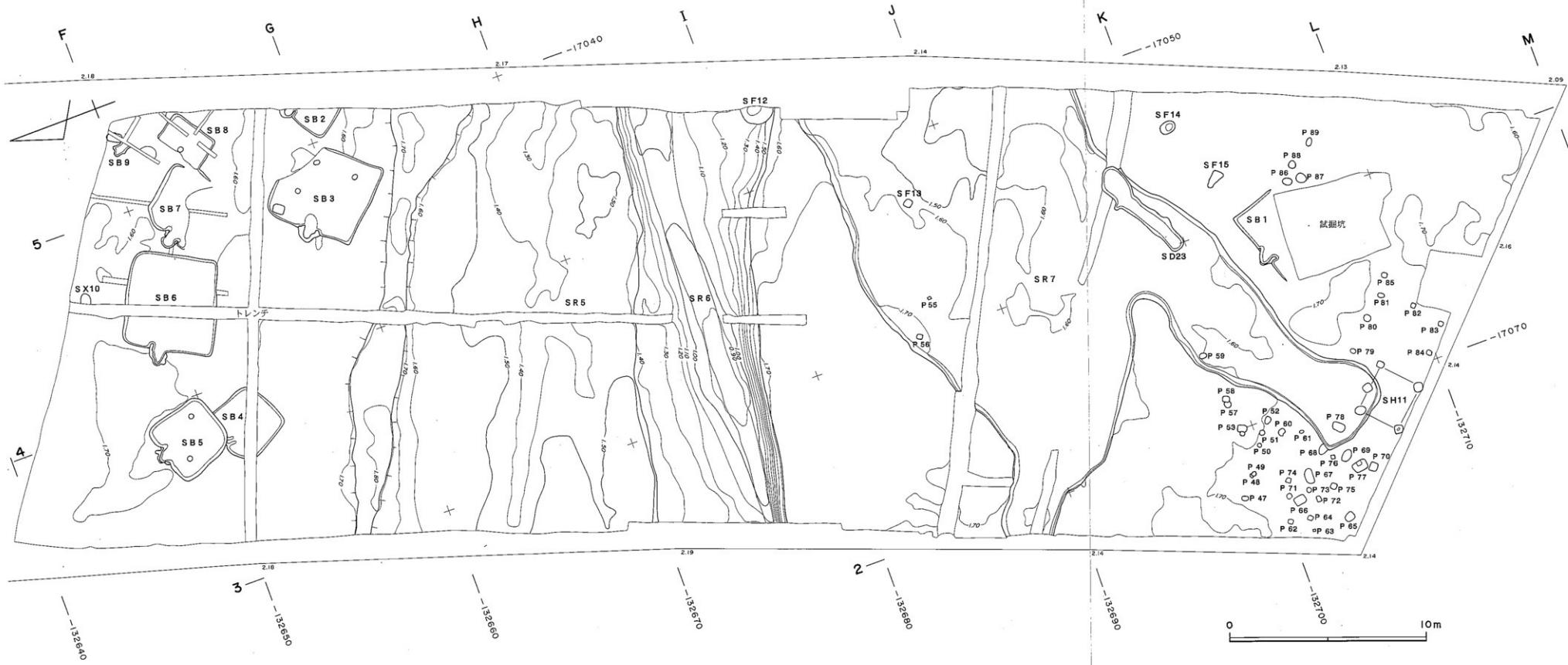
遺構名	旧遺構名	遺構名	旧遺構名	遺構名	旧遺構名
SB 1	SB147	SD 7	SD 4	SF 1	SF 3
SB 2	SB200	SD 8	SD11	SF 2	SP 9
SB 3	SB201	SD 9	—	SF 3	—
SB 4	SB208	SD10	SD 6	SF 4	SP14
SB 5	SB206	SD11	SD 8	SF 5	—
SB 6	SB202,SB203	SD12	—	SF 6	SX29
SB 7	SB207	SD13	—	SF 7	SX18,SX19,SX25
SB 8	SB204	SD14	—	SF 8	—
SB 9	SB205	SD15	SD35	SF 9	—
SH 1	表3 参照	SD16	SD36	SF10	SX38
SH 2	表3 参照	SD17	SD41	SF11	SX104
SH 3	表3 参照	SD18	SD39	SF12	SF107
SH 4	表3 参照	SD19	SD40	SF13	—
SH 5	表3 参照	SD20	SD90	SF14	SF100
SH 6	表4 参照	SD21	SD108	SF15	SX149
SH 7	表4 参照	SD22	SD109	SX 1	SX 2
SH 8	表4 参照	SD23	SD155	SX 2	SX15
SH 9	表4 参照	SR 1	SD 1	SX 3	SX16,SX17
SH10	表4 参照	SR 2	SR32	SX 4	SX27
SH11	表4 参照	SR 3	SR28	SX 5	SF34
SD 1	SD10	SR 4	SR30	SX 6	SX31
SD 2	SD 7	SR 5	SR33A	SX 7	SX87
SD 3	SD12,SD13	SR 6	SR33B	SX 8	SX37
SD 4	—	SR 7	SR101	SX 9	SX102
SD 5	—	SE 1	SF20	SX10	—
SD 6	SD21	SE 2	SF 5		



第7図 第1調査面全体図（1）



第8図 第1調査面全体図(2)



第9図 第2調査面全体図

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

第1節 古墳時代末期から奈良時代の遺構の概要

古墳時代末期から奈良時代にかけての遺構は、第2調査面として調査を実施することを基本としたが、第1調査面と第2調査面の中間層が無いもしくは薄い地点では、当該期の遺構を第1調査面での段階で先行調査したものがある。よって、第1調査面の全体図（第7・8図）には、古墳時代末期から奈良時代の遺構の一部が含まれている。第2調査面の全体図（第9図）に示したものは、一部の小穴を除いて当該期のものである。

古墳時代と奈良時代の遺物は混在して発見されているが、豊穴住居跡群（SB2～9）以北には、比較的奈良時代の遺物は少ないようである。古墳時代の遺物は多少の粗密はあるが、調査区北端部を除いてまんべんなく出土しているかのような状況であった。

発見された遺構には、掘立柱建物跡、豊穴住居跡、土坑、小穴、溝状遺構、旧流路などがある。遺物集中地点に関しては、性格不明遺構として扱っているものもある。

掘立柱建物跡は、調査区南端部に1棟発見されているが、本來は、かなり多数存在していたものと思われる。豊穴住居跡に関しては同様のことが言えるが、とくに、小穴は発見しにくい状況下にあったため、他遺跡例と比較した場合、掘立柱建物跡はかなりの棟数が存在していたものと予想される。

豊穴住居跡は、古墳時代の土器を伴う例が多く、奈良時代の土器は数点が出土しているのみである。平面形態が比較的確認しやすかった例は、SB3・5のみであり、他は竈跡と埋積土内の粘土の状況により豊穴住居跡と認定している。基本的には、侵食を受けにくかった粘土でつくられた竈下部のみが残存し、その他は流失しているものが多いと考えられる。このことは、豊穴住居跡の周辺から、竈の構築に利用されたと考えられる灰白色粘土や赤化した粘土が散在していることからも裏付けられる。当然のことであるが、豊穴住居跡の形状だけでなく、上器の出土状況を検討する場合にも、このことに十分留意する必要がある。

上坑や溝状遺構に関しては、規則性が乏しく、その機能や用途が特定できない遺構が多いため、個別的な説明が必要となるであろう。土坑のなかでは、大型の甕が出土したSF7が注目され、古墳時代末期の祭祀の一端が窺われる。SF7の北側のSX3も関連する遺構の可能性が高く、当時の集落内祭祀の在り方が復元できる可能性のある貴重な例となるであろう。

SX6からも大量の土器が出土しており、奈良時代の例ではあるが、祭祀に関連するものかもしれない。

旧流路に関しては、調査区全域で侵食と埋没の繰り返しが確認できるため、任意に平面的に確認でききた河道を含む旧流路のみに遺構名を付している。

調査区北端部のDラインに沿って確認できた旧河道局部（第7図）では、上面でSX3が発見されており、古墳時代末期以前の旧河道が北側に展開しているものと考えられる。

調査区中央部には、旧河道のSR5・6が位置している。SR6の下層からは、古墳時代末期の土器や木製品が多量に出土し、上層からは奈良時代の土器が出土している。この上層と北側のベースとなる砂礫層までの落ち込みをSR5（第9図）とし、遺物量は少ないが、奈良時代に相当するものと考えている。SR5・6からは、少數ではあるが土馬や斎串？といった祭祀具が出土しており、SF7のような祭祀との比較検討が必要になるものと思われる。

各遺構の計測値や遺物の出土状況については、できるだけ一覧表や挿図としてまとめたので、詳細に

については、そちらを参照していただくこととし、以下の個別遺構の説明に際しては、表や図面だけでは読みとりにくいことを中心に記述を進めていくこととする。

第2節 平安時代末期から鎌倉時代の遺構の概要

調査区内からは、遺構に伴うものではないが、三日月高台の灰釉陶器が数点発見されており、平安時代前期までは周辺での人為的活動があったものと考えられる。平安時代中期から末期までは、集落が別の地点に移動もしくは廃絶している可能性が高い。このような現象は、他の集落遺跡や官衙でも確認でき、律令体制の弛緩による集落の再編成がなされた結果と考えられている。

平安時代末期になると、Eライン～Iライン間ではやや少ないが、調査区全域から山茶碗が出土しており、鎌倉時代までの間に多くの遺構が構築されている。これらの遺構群は、基本土層の6層下面（第6図）の第1次調査面で発見されたものがほとんどである。

発見された遺構には、掘立柱建物跡、小穴、井戸跡、土坑、溝状遺構、旧流路などがある。基本的には、調査区の南北側で発見された掘立柱建物跡を中心とする集落遺跡である（第7・8図）。北側の建物跡群（SH1～4）の東側には、屋敷地を囲むと思われる区画溝（SD1）などが存在するが、建物跡は確認できなかった。

南側の建物跡群（SH5～10）の北側には、平行する溝状遺構（SD15・16）が位置している（第59図）。溝間には、特別な遺構は無く、おそらく道路状の遺構になるのではないかと思われる。古代の条里の方向とは一致しないが、明治と昭和に作成された地籍図に残る周辺の畔の方向とは一致しており、平安時代に再整備された条里の基準線となっていた可能性もある。溝内からは、青白磁の合子が出土している点は注目される。

調査区中央部には旧河道（SR4）が存在するが、水量が少なければ跨いで渡れる程度の規模であり、集落を分断するようなものではないであろう。

第3節 掘立柱建物跡と出土遺物

（1）古墳時代末期から奈良時代

掘立柱建物跡の柱穴埋積土は、平安時代末期から鎌倉時代にかけてのものは、暗褐色に近い色調で、プラン確認が容易であったが、時期が限定できないものや奈良時代以前と思われるものは、プランの確定が困難であった。第9図に掲載した小穴群と第8図のP27～29がそれらに該当する。これらの小穴群は、平安時代以降の掘立柱建物跡群とは、分布域を異にしており、出土土器も古墳時代末期から奈良時代までのものである。よって、これらの多くは、奈良時代以前のものと想定しておく。

1間×1間の掘立柱建物跡の認定に際しては、確実性の高いもの以外は除外しており、本米ならば、簡単な小屋風の施設の存在を考慮すべきかもしれない。それにしても、当該期の掘立柱建物跡はSH11（第16図）1株のみであり、出土した土器量からしても少な過ぎることに変わりはない。

SH11は南側の調査区外へと伸びている可能性もあるが、柱穴1・2が隅柱穴にあるような掘り方（柱穴コーナーが桁や梁方向を向く）となっており、変則的な2間×1間とすることも可能である。柱

穴掘り方は大型で、平面形態は方形である。棟方位は平安時代以降の掘立柱建物跡の多くとは異なっており、出土遺物に奈良時代の环身など（第18図）があることからも、当該期に属するものと理解される。西側に隣接するP79～84も方形に配置しているが、かなり歪になるため、柵などの別の施設が想定される。

（2）平安時代末期から鎌倉時代

平安時代末期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡については、第Ⅲ章第1節でも少し触れているので、そちらも併せて参照していただきたい。ここでは、確認できた10棟（SH1～10）の建物跡について、個別の構造的特徴、単位群の抽出とその時期的変遷について、主に述べることとする。記述にあたっては、分布にまとまりのある北群（SH1～3）と南群（SH5～10）に分けて進める。SH4は、来年度の調査予定地にかなりの部分がかかるため、ここでは除外しておく。

北群の柱穴プランは通常よりかなり小さく、方形に確認できたものが多い。これらは当初、柱痕と考えたが、掘り方部分が確認できなかつたため、柱の太さに合わせた掘り方によるものと判断した。地盤の状況にもよるが、一般的には強度が増すものと考えられている。ただし、南群には柱穴掘り方の大きいものがあり、各群で建築技術が異なるものと思われる。

SH1（第10図）は総柱形態のもので、柱間間隔が226～304cmとかなり広く、高床構造であった場合、この細い柱では上屋や床を支えきれないのではないかとも思われる。壁上による基礎や間柱などの施設の存在を考慮すべきかもしれない。この建物跡の周囲には、雨落ち溝状の細溝（SD3～6）が巡っている。単独の建物跡を囲む溝は他には無く、この建物跡の特殊性を物語っている。また、これらが雨落ち溝であるならば、寄せ棟風の屋根も想定され、SD3が東側に張り出していることから庇が付く可能性が高い。SD3の南側には、平行するSD2が位置している。このSD2は、配置状況からするとSH1に関連するものと推定され、今回出土した最古段階（平安時代末期）の山茶碗（第58図右）は、SH1の存続期間の一端を示すものと考えられる。SH1と北側で重複しているSX1からは、鎌倉時代下る山茶碗が出土しており（第80図）、SH1はSX1よりも古いと考えられる。東側では、SD3と区画溝（SD1）も重複しているが、これも出土遺物から区画溝の方が新しい確率が高い。

SH2（第12図）は西側に広がる可能性もあるが、とりあえず3間×2間としておく。SH3との新旧関係は不明であるが、SH1に棟方位が規制されている可能性があり、両者はある時期SH1と併存していたものと思われる。柱通りからすると、SH2の南梁側がSH1の中央東西軸に沿っており、SH1・2は計画的に同時につくられた可能性が高い。よって、SH3はSH2より新しいと考えられる。

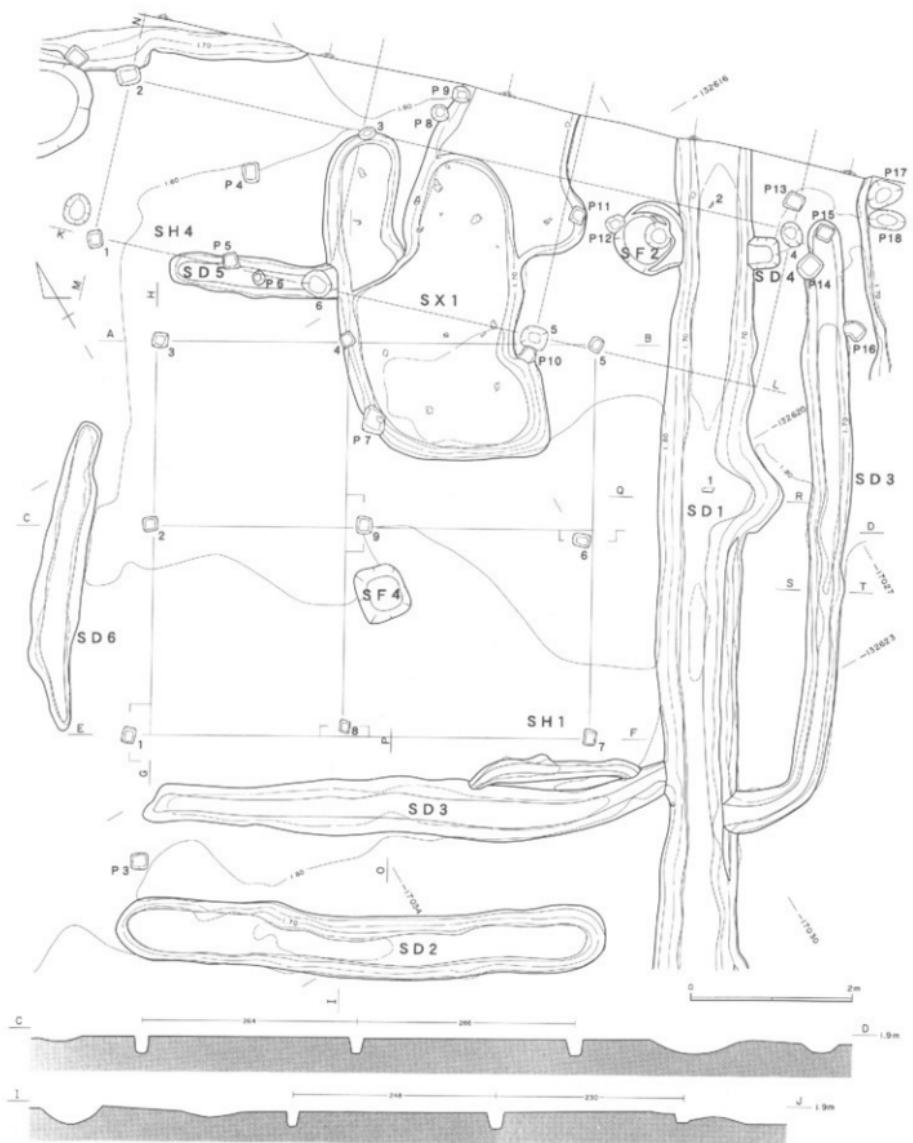
ここで造構の変遷を概念的にまとめておくと、SH1・2、SD2→SH3、SD1→SX1となる。

南群の掘立柱建物跡（第13・14図）は、重複が著しいことと西側の造構の大半が調査区外へと連続していることにより、その変遷は把握しにくい状況にある。ここでは、棟方位による群別を考え、隣接する多くの土器が出土したSD15・16との関係から時期的な問題に触れてみたい。

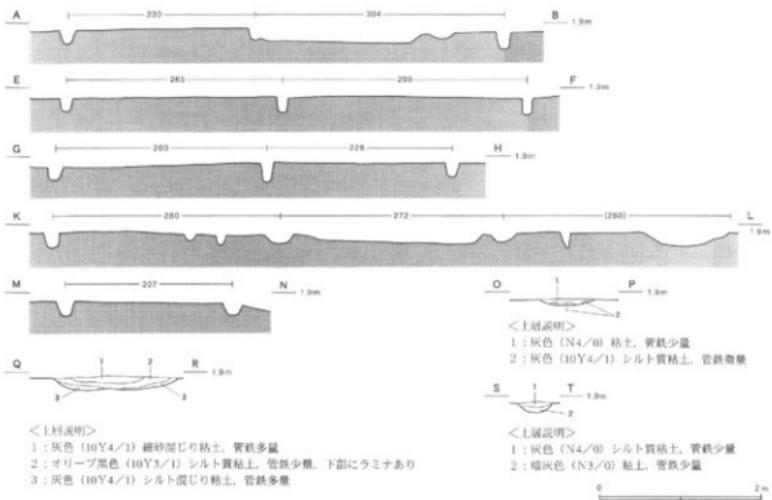
棟方位は、SH5・6、SH7・8とSH9・10の3群に分かれ（表3）、各群の建物跡は近い時期に建てられたものと想定され得る。また、棟方位が中間のSH7・8は移行段階に位置付けることが可能であろう。

-一般的に建物跡の重複が多い地点に初期の建物跡が存在する場合は多く、周辺部ほど新しい傾向にある。

SD15・16とSH5・6・8の柱穴出土土器（第18・62・63上図）には同時期のものが含まれていることから、SD15・16と掘立柱建物跡は、両者の方向性も加味すると、ある時期には右機的な関係を保しながら両者が併存していたのであろう。SH5はSD16よりも新しいため、SD15・16が機能しなく



第10図 SH1・4, SD1~6 平・断面図



第11図 SH1・4, SD1・3 断面図

なった後にも集落は維持されている。また、SD16の中央部は建物跡を意識したかのように北側に少し曲っている。

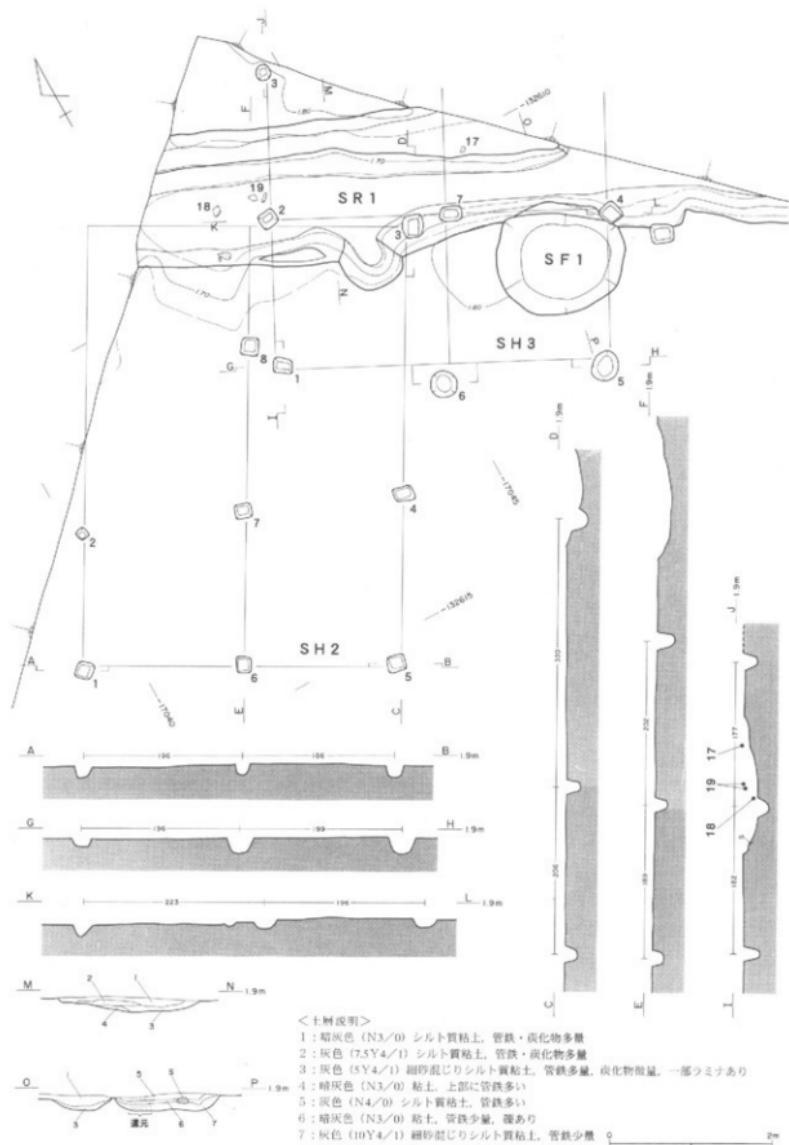
以上の点を勘案して、遺構の変遷を概念的にまとめると SD15・16、SH9→SH7・10→SH5・8→SH6となる。

次に個別の建物跡の特徴について、簡単にまとめておく。

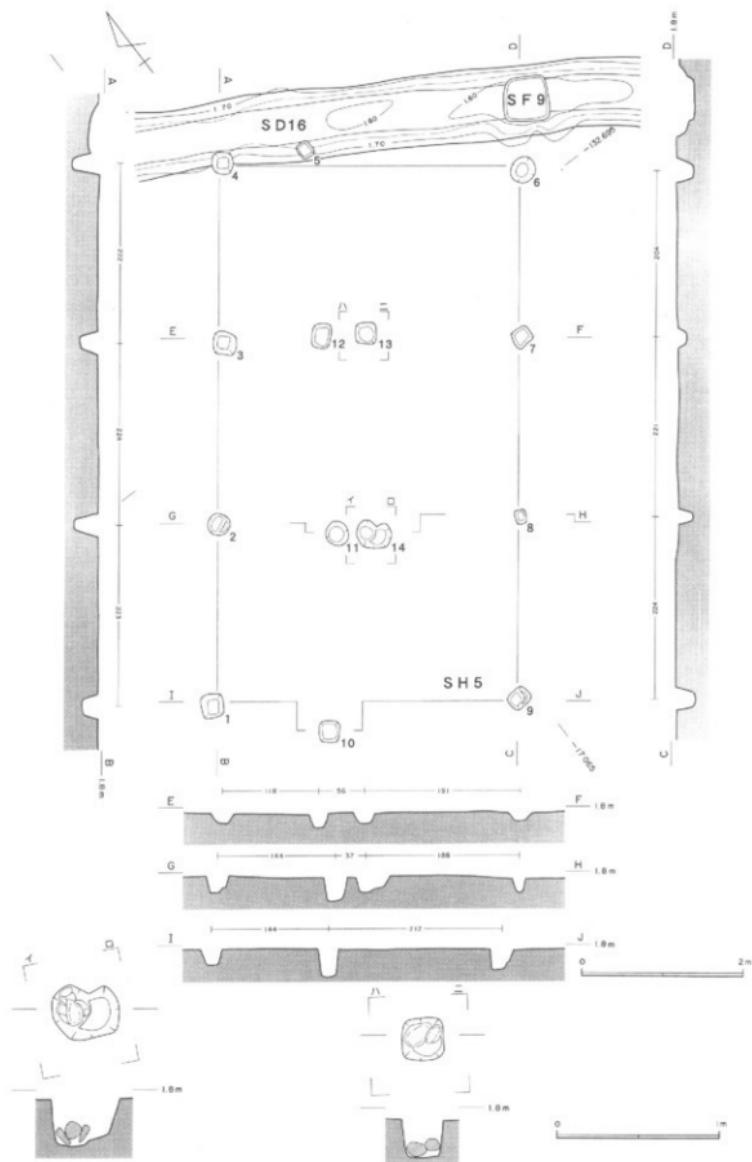
SH5（第13図）は、柱穴間隔が223cm前後にまとまっていることと屋内柱穴の特殊な配置が注目される。柱穴11・12は床東穴になるのではないかと思われるが、柱穴5・10が柱筋の外側に位置している点が気にかかる。柱穴内に基礎石が置かれていた柱穴13・14は、棟持ち柱用であろう。

SH6（第14図）は、SH5と併存する可能性もあるが、その配置が南側に1間分ずれていることから、SH5とは時期差があるものと考えている。南側には、P47~52の柱穴列が並行しているが、日陰し塀のような施設も考えられる。ただし、それらの埋積土は柱穴の埋積土とは異なっているため確定できない。棟通りの柱穴5・10~12は、柱穴列より多少外れており、床東用ではなく、天井もしくは棟を支える柱用と思われる。

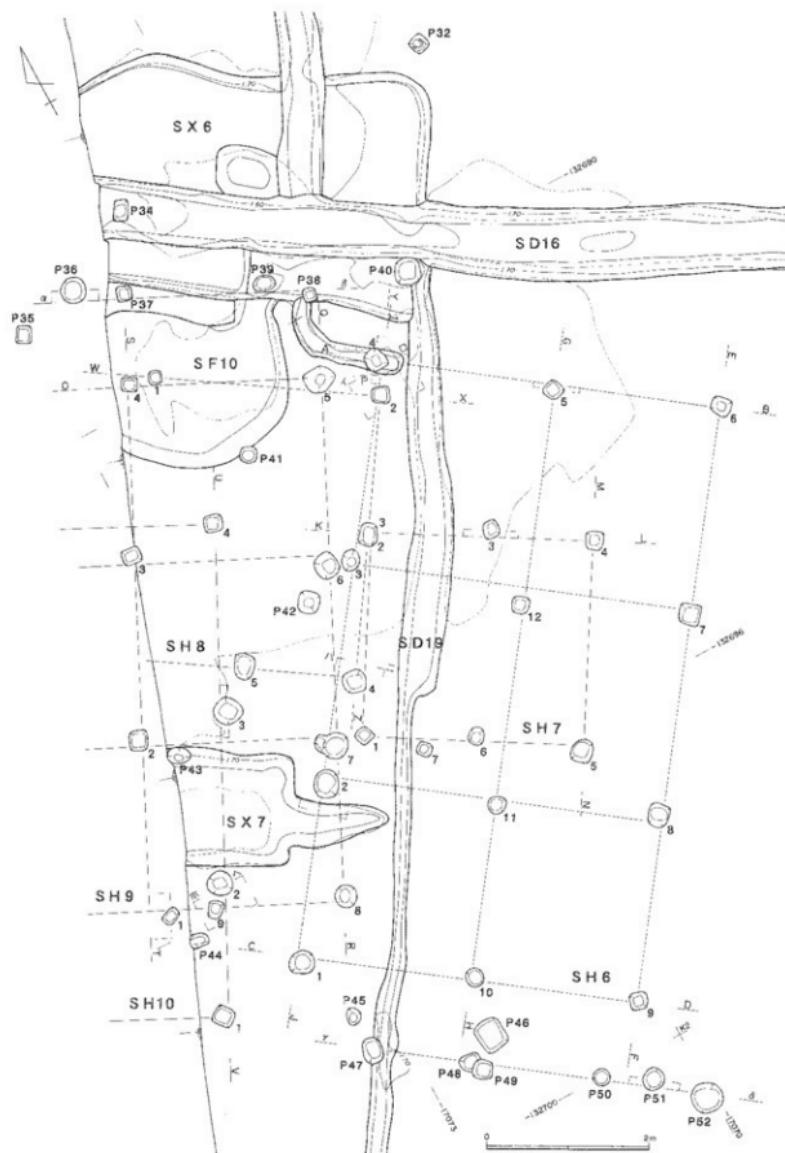
SH7・8は比較的小型の建物跡で、棟が東西方向を向いている。これらは、付属屋的な施設と考えられ、L字形の配置構造を有する例が多いものと思われる。
(柴田)



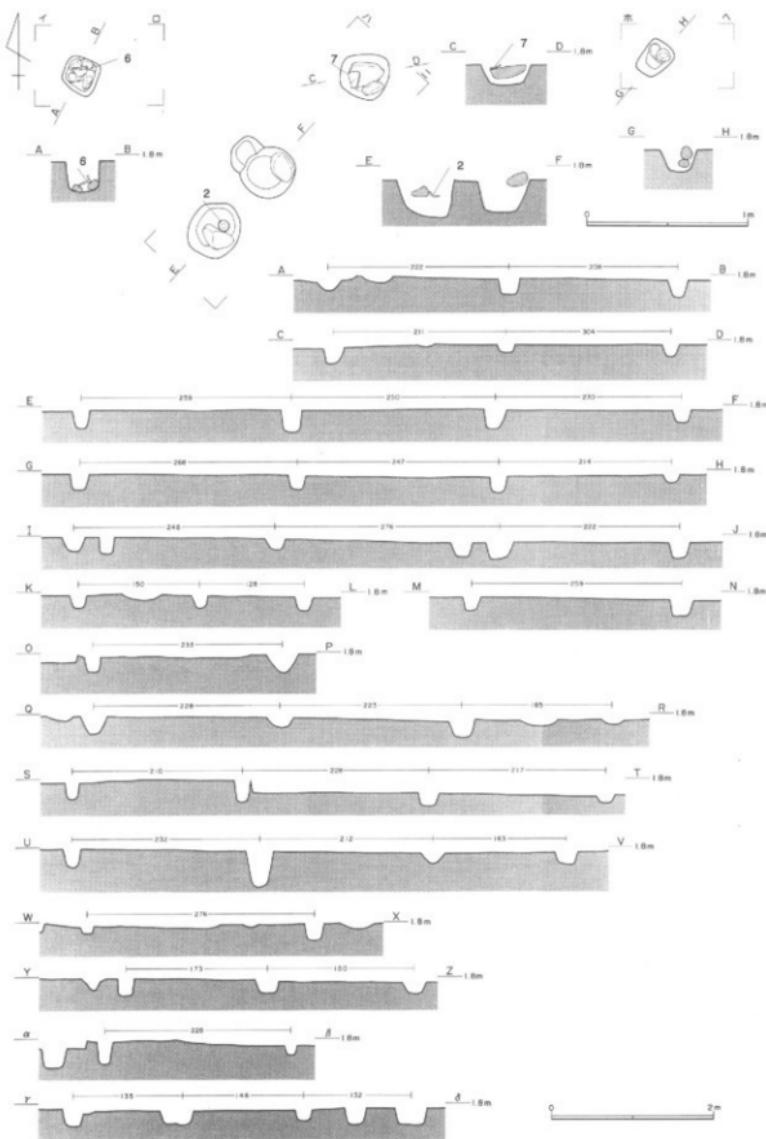
第12図 SH 2・3, SR 1, SF 1 平・断面図



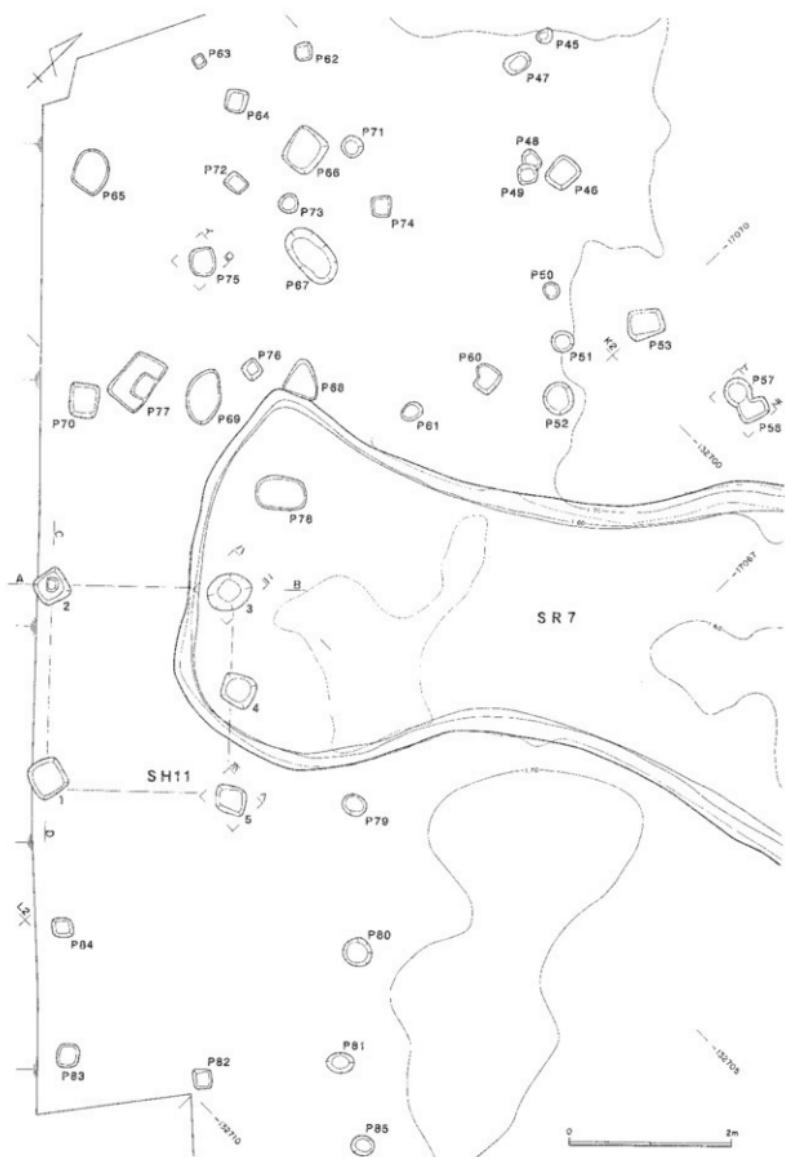
第13図 SH5 平・断面図



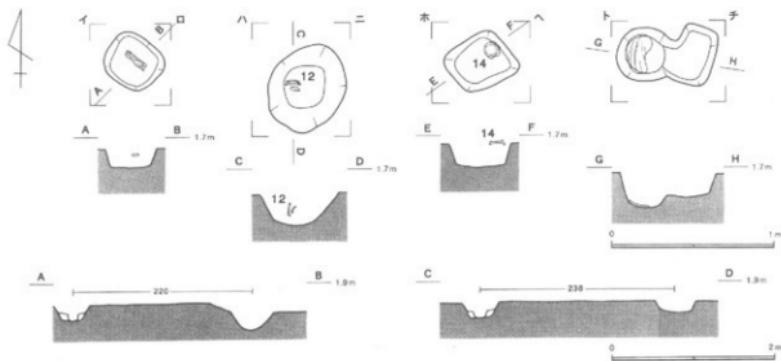
第14図 SH 6~10 平面図



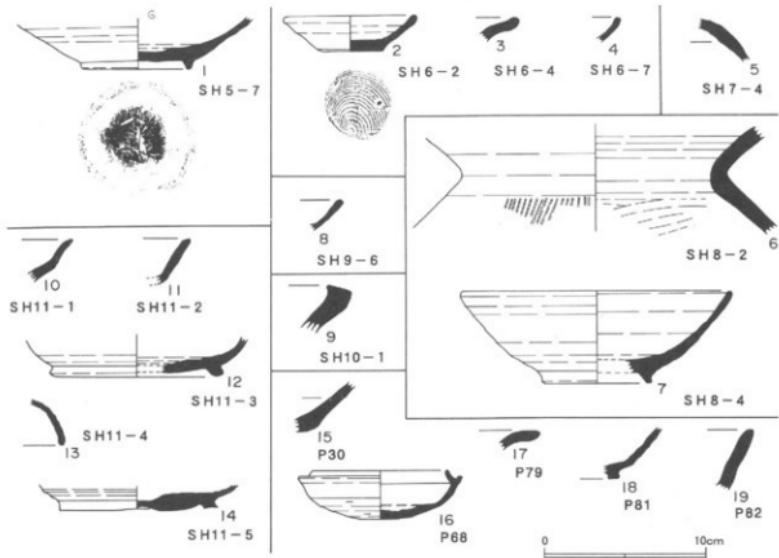
第15図 SH 6~10 平・断面図



第16図 SH11, 調査区南端部小穴群 (P 45~53・57・58, 60~85) 平面図



第17図 SH11, P57・58・75 平・断面図



第18図 掘立柱建物跡、小穴出土土器実測図

表3 捕立柱建物跡一覧(1)

探査番号	遺構名	旧遺構名	主軸方位	平面形態	大きさ(cm)		底面高(cm)	備考
					長径	短径		
10・11	SH1	-	N・31°・E	純柱	538	486	-	周囲に溝あり
10・11	1	-	-	長方形	20	15	160	
10・11	2	-	-	方形	18	17	158	
10・11	3	-	-	方形	20	18	161	
10・11	4	-	-	方形	17	17	169	
10・11	5	-	-	方形	18	16	158	
10・11	6	-	-	長方形	21	16	159	
10・11	7	-	-	長方形	19	14	157	
10・11	8	-	-	方形	14	14	158	
10・11	9	-	-	長方形	20	19	160	
12	SH2	-	N・29°・E	純柱	536	382	--	
12	1	-	-	方形	21	21	163	
12	2	-	-	方形	14	13	170	
12	3	-	-	方形	27	26	154	
12	4	-	-	長方形	25	19	160	
12	5	-	-	方形	22	21	161	
12	6	-	-	長方形	21	18	166	
12	7	-	-	長方形	21	18	162	
12	8	-	-	方形	22	21	156	
12	SH3	-	N・27°・E	純柱	395	359	-	
12	1	-	-	長方形	24	19	157	
12	2	-	-	長方形	22	20	147	
12	3	-	-	円形	20	19	163	
12	4	-	-	方形	24	23	158	
12	5	SP22	-	楕円形	39	32	159	
12	6	-	-	円形	33	33	159	
12	7	-	-	長方形	27	19	157	
10・11	SH4	-	N・46°・E	純柱	-	-	-	不明な点多い
10・11	1	-	-	長方形	20	18	161	
10・11	2	SP23	-	長方形	29	23	162	
10・11	3	SP24	-	楕円形	22	15	167	
10・11	4	-	-	楕円形	32	25	155	
10・11	5	-	-	長方形	33	27	168	
10・11	6	-	-	不整形	35	31	166	
13	SH5	-	N・37°・E	純柱	669	369	--	変則的柱穴配置
13	1	SP69	-	長方形	30	27	155	
13	2	SP56	-	円形	27	27	145	段あり
13	3	SP44	-	方形	29	28	150	
13	4	SP80	-	方形	26	26	157	
13	5	-	-	長方形	19	17	-	
13	6	SP99	-	円形	33	30	155	
13	7	SP63	-	長方形	25	22	162	
13	8	SP16	-	長方形	17	14	154	
13	9	SP71	-	長方形	27	23	149	段あり
13	10	SP70	-	方形	27	25	139	
13	11	SP57	-	円形	30	28	145	
13	12	SP53	-	長方形	31	23	145	
13	13	SP54	-	方形	26	25	150	基礎石あり
13	14	SP58	-	不整形	41	31	145	基礎石あり、抜き取り

表4 堀立柱建物跡一覧(2)

探査番号	遺構名	旧遺構名	主軸方位	平面形態	大きさ(cm)		底面高(cm)	備考
					長径	短径		
14・15	S II 6	—	N・37°・E	楕柱	746	515	—	
14・15	1	SP74	—	円形	30	29	151	
14・15	2	SP61	—	楕円形	35	30	149	根石あり、小皿出土
14・15	3	SP48	—	楕円形	28	22	162	
14・15	4	SP78	—	方形	17	16	150	
14・15	5	SP62	—	方形	22	21	156	
14・15	6	SP43	—	長方形	25	23	152	
14・15	7	SP45	—	方形	26	26	146	
14・15	8	SP68	—	長方形	29	26	150	
14・15	9	SP76	—	方形	22	22	158	
14・15	10	SP55	—	円形	23	22	164	
14・15	11	SP51	—	楕円形	24	21	152	
14・15	12	SP83	—	方形	22	22	156	
14・15	S II 7	—	N・31°・E	側柱	278	259	—	
14・15	1	SP91	—	方形	19	19	152	
14・15	2	SP82	—	長方形	29	22	160	SH8-3と同じ
14・15	3	SP64	—	長方形	22	20	160	
14・15	4	SP65	—	方形	22	22	157	
14・15	5	SP67	—	不整形	29	27	150	
14・15	6	SP66	—	楕円形	23	20	152	
14・15	7	SP92	—	方形	18	17	153	
14・15	S H 8	—	N・30°・E	側柱	353	233	—	
14・15	1	—	—	方形	17	16	166	
14・15	2	SP112	—	方形	23	21	—	基礎石あり、甌出土
14・15	3	SP48	—	長方形	29	22	160	SH17-2と同じ
14・15	4	SP59	—	方形	29	28	159	基礎石あり、甌出土
14・15	5	SP85	—	不整形	32	25	162	
14・15	S H 9	—	N・26°・E	楕柱	636	—	—	
14・15	1	SP115	—	長方形	22	16	150	
14・15	2	—	—	方形	25	23	146	
14・15	3	SP116	—	長方形	23	20	151	
14・15	4	SP119	—	長方形	20	18	156	
14・15	5	SP79	—	不整形	47	32	155	
14・15	6	SP47	—	楕円形	32	29	163	
14・15	7	SP60・SP86	—	—	41	32	151	段あり、根石あり
14・15	8	—	—	円形	27	27	166	
14・15	9	SP103	—	長方形	28	22	158	根石あり
14・15	S II 10	—	N・27°・E	—	607	—	—	
14・15	1	SP75	—	方形	26	21	159	
14・15	2	SP73	—	円形	32	30	160	
14・15	3	SP49	—	方形	38	35	130	
14・15	4	SP81	—	方形	23	22	155	
16・17	S H 11	—	N・45°・E	側柱	238	220	—	
16・17	1	SP143	—	方形	45	44	150	
16・17	2	SP137	—	方形	40	39	145	柱痕長方形 17×14cm
16・17	3	SP141	—	楕円形	56	46	131	甌出土
16・17	4	SP138	—	長方形	49	43	144	
16・17	5	SP142	—	長方形	37	33	149	甌出土

表5 小穴一覧(1)

※掘立柱建物跡の柱穴は別表参照

遺構名	旧遺構名	平面形態	大きさ(cm)		底面高(cm)	備考
			長辺	短辺		
P1	—	椭円形	43	29	170	
P2	—	椭円形	42	28	164	
P3	—	方形	21	19	165	
P4	—	長方形	21	21	161	
P5	—	方形	20	19	167	SD5と重複
P6	—	方形	16	15	161	SD5と重複
P7	—	長方形	33	27	167	SX1と重複
P8	—	隅丸方形	20	19	163	SX1と重複
P9	—	方形	21	19	162	SX1と重複
P10	—	長方形	33	28	168	
P11	—	長方形	20	17	156	SX1と重複
P12	—	隅丸長方形	24	20	169	SF2と重複
P13	—	方形	22	21	164	
P14	—	方形	29	27	166	SD3と重複
P15	—	方形	20	19	158	SD3と重複
P16	—	不整形	25	20	174	SD3と重複
P17	—	不整形	45	35	147	SD7と重複
P18	—	椭円形	46	24	147	SD7と重複
P19	—	方形	26	26	154	
P20	SP26	方形	27	26	152	
P21	—	椭円形	43	32	168	SD8と重複
P22	—	方形	24	22	156	
P23	—	椭円形	59	45	142	段あり
P24	—	円形	28	28	142	
P25	—	椭円形	55	47	155	SD11と重複
P26	—	椭円形	32	26	165	SD11と重複
P27	SP52	長方形	30	25	153	
P28	SP114	椭円形	50	35	160	
P29	SP113	椭円形	36	28	163	
P30	SP88	—	—	—	166	SD15・SD17と重複
P31	SP89	—	32	—	169	SD17と重複
P32	SP42	方形	21	21	157	柱痕方形 12×12cm
P33	SP98	長方形	29	26	165	
P34	SP110	長方形	26	17	132	SD16と重複
P35	—	長方形	22	19	137	
P36	—	円形	33	31	143	
P37	SP118	方形	19	19	149	
P38	SP111	方形	17	16	159	SD18・SX6と重複
P39	—	椭円形	28	19	164	SX6と重複
P40	SP50	方形	34	31	153	SD19・SX6と重複
P41	—	方形	21	21	157	
P42	SP84	方形	28	26	168	
P43	—	椭円形	30	20	165	SX7と重複
P44	SP94	—	—	18	162	
P45	—	椭円形	21	18	167	
P46	SP93	長方形	40	34	159	
P47	—	椭円形	33	24	152	SD19と重複
P48	—	不整形	26	26	155	P49と重複
P49	—	方形	25	25	154	P48と重複
P50	—	円形	11	11	159	

表6 小穴一覧(2)

※据立柱建物跡の柱穴は別表参照

遺構名	旧遺構名	平面形態	大きさ(cm)		底面高(cm)	備考
			長径	短径		
P 51	SP123	円形	27	27	153	
P 52	SP122	円形	40	38	154	
P 53	SP126	長方形	47	35	160	SH 6と重複
P 54	SP72	円形	32	31	161	
P 55	SP120	長方形	16	14	141	
P 56	SP117	方形	25	24	147	
P 57	SP135	円形	36	35	145	底面から木片出土、P58と重複
P 58	SP134	長方形	37	25	151	P57と重複
P 59	SP121	椭円形	55	42	145	SR 7と重複
P 60	SP127	不整形	34	33	156	
P 61	SP124	椭円形	27	21	154	
P 62	SP95	方形	22	20	164	
P 63	—	方形	16	15	163	
P 64	—	方形	28	27	148	
P 65	SP140	不整形	51	44	159	
P 66	SP133	長方形	51	45	147	
P 67	SP132	椭円形	77	43	152	
P 68	SP129	不整形	46	44	155	SR 7と重複
P 69	SP131	不整形	70	43	158	
P 70	SP136	長方形	42	36	136	
P 71	—	円形	26	25	151	
P 72	SP77	長方形	26	22	161	
P 73	—	円形	25	25	151	
P 74	SP128	方形	25	24	155	
P 75	SP125	隅丸長方形	36	32	152	木片出土
P 76	SP96	方形	23	22	151	
P 77	SP97	長方形	70	45	155	柱頭長方形 32×23cm
P 78	SP130	隅丸長方形	62	40	147	SR 7と重複
P 79	SP139	椭円形	30	25	153	
P 80	—	円形	37	35	152	
P 81	SP145	椭円形	35	25	153	
P 82	SP153	方形	25	23	143	
P 83	SP144	方形	29	28	154	
P 84	SP154	方形	26	24	144	
P 85	SP146	椭円形	29	25	153	
P 86	SP106	椭円形	50	34	163	
P 87	SP150	円形	50	46	122	
P 88	SP105	椭円形	40	34	158	
P 89	SP151	椭円形	45	32	150	

第4節 穫穴住居跡と出土遺物

竪穴住居は9軒出土した。ここで報告する竪穴住居は主に竈とそれに伴う灰層を確認することにより検出した。しかし、上述したように調査区内には複数の自然流路およびそれに伴う洪水堆積層、噴砂による複雑な遺構の破壊の痕跡があり、竪穴住居の掘り方、貼り床などの検出は非常に困難を極めた。したがって、以下に記述する所見は調査担当者が発掘調査時に最も蓋然性が高いと判断した所見であり、竪穴住居の規模等は100%確実な数値ではないことを予め断っておく。

今回調査した竪穴住居のうち竈が確認できたものは、竈を北～北西方向に向けており、住居の平面形は隅丸方形を呈する。また、後述のように各竪穴住居から出土した土器から判断すると、今回検出した竪穴住居9軒は7世紀中葉～後葉の比較的短期間に営まれていた可能性が高い。

なお、各竪穴住居の主軸方位、規模、床面の標高、残存状況などは表7に示した。また、各住居跡から出土した遺物の詳細に関しては表14(第29～32図)に記載している。

S B 1 (第19・29図)はK 2区に位置する、竈を有する竪穴住居である。3／4以上が既に破壊され、竈および北東隅部のみ残存していた。平面形は北西隅角部から判断して隅丸方形である可能性が高い。住居の規模は東西約4.1m以上、南北2.5m以上、深さ約5cm以上を測る。周溝および主柱穴等は確認できない。

竈は北西辺のほぼ中央に位置すると推測でき、その主軸は北西方向(N-25°—W)をとる。残存する部分は逆U字形を呈し、各壁は粘土で構築されており、袖の一部は竪穴住居内まで張り出している。竈内側は被熱・赤化し、規模は長さ0.7m、最大幅0.7m、粘土の範囲は長さ0.8m、幅1.1mである。

遺物は竈の焚き口床面よりやや浮いた状態で土師器平底甕(3)と塊(6)が出土した。その他の須恵器(1)、土師器(2・4・5)は覆土中より出土した。

S B 2 (第20・29図)はG 5区に位置する、竈を有する竪穴住居である。北西隅部と竈以外は調査区外に位置する。平面形は隅丸方形と推測でき、東西約2.7m以上、南北約1.9m以上、深さ約15cmをはかる。住居の覆土上は床面直上には炭化物と粘土および砂屑が互層に堆積しており、数度の土砂の流入が想定できる。このほか、主柱穴、周溝等は確認できない。

竈は北西辺のほぼ中央に位置すると想定でき、主軸を北西方向(N-41°—W)に向ける。竈は煙道下部と焚き口部分のみ残存していた。袖部は粘土と細砂により構築され、内面は被熱・赤化している。竈内側の規模は長さ約0.5m、最大幅0.5m、粘土の範囲は長さ0.6m、最大幅0.8m以上をはかる。焚き口は住居の床面より若干掘り下げられていた可能性が高い。内部には約5cm程度炭化物・灰が堆積(13層)し、その上位に天井(11層)が崩落している。

遺物は竈内灰層直上より土師器甕片、竈よりやや西側で須恵器無台坏(1・2)、土師器甕(3)が床面よりやや浮いた状態で、また土師器坏(4)は覆土中より出土した。

S B 3 (第21・22・30図)はF 4区に位置する、竈を有する竪穴住居である。平面形は方形であり、東西約4.7m、南北4.3m、深さ5～20cmをはかる。竈の南西側から壁に沿って周溝が巡らされるが、南東辺の中央より東側は確認できない。周溝の幅は約0.2m、深さ0.1mをはかる。シルト質の粘土(2層)および細砂(3層)で貼り床を施している。この炭化物は貼り床上に竈を中心に広く分布する。

竈の床面は周溝よりすり鉢状に約0.1m下がる。竈壁は粘土で構築されており、内面は被熱・赤化している。竈内側の規模は長さ0.6m、幅0.6m、粘土の範囲は長さ0.8m、幅1.2mである。床面直上には炭化物層(8層)が堆積し、この上位には天井の崩落(8・5層)が確認できる。

また、北東隅角部に南北約0.6m、東西約0.5mをはかる横長長方形の掘り込みが確認でき、深度が約5cmと浅いことから断言はできないが、その位置から判断すると貯蔵穴である蓋然性が高い。

堅穴住居の掘り方は南西側が北東側より0.1m程度掘り下げられ段差をつけられている。この部分の地山直上には薄い炭化物層が確認でき、湿気の除去などの役割をもたせたと想定する。この炭化物層の上位の貼り床（2・3層）はこの段を埋めるように施工されている。また、主柱穴の可能性のある土坑を1箇所（土坑5）確認した。一辺約0.5mをはかる隅丸方形であり、床面からの深さ0.2mをはかる。

遺物は石製支脚2点および須恵器（壺蓋、坏身、高坏）、土師器（塊、壺、壺）が出土しており、このうち石製支脚が竈内に倒れた状態で、また土師器壺が破片となって出土した。石製支脚はすり石状の河原石を用いており、北西側の一点が15cm程度、もう一点が30cm前後の長さを有する。出土した土器のうち土師器壺（10）はSB6出土の個体と接合したことから、後世の流入と考える。したがって、この土師器壺を含む層位（1層）は後世の流入土であることから、住居内から出土したほぼすべての遺物がこの住居に伴わない洪水等により流入した遺物である可能性が高い。

SB4（第20図）はF3区に位置する、竈を有する堅穴住居である。平面形はやや不整形な隅丸方形であり、東西約3.1m、南北約3.2m、深さ約5cmをはかる。北東隅角部をSB5により破壊されている。主柱穴、周溝などの施設は確認できない。

竈は洪水堆積により袖部が変形し歪んでいる。この上位に竈を形成していたと考える粘土が押し流されたような状況で堆積している。竈の正確な方向は不明であるが、住居の主軸が北西方向（N-34°-W）をとることから北西方向を向いていた可能性が高い。

遺物は土器の小片が出土したのみである。

SB5（第23・29図）はE3区に位置しており、竈を有する堅穴住居である。平面形はやや不整形な隅丸方形であり、東西約3.4m、南北約3.3m、深さ0.1mをはかる。

竈は北西辺のはば中央に取り付けられており、主軸はほぼ北方向（N-17°-W）に向ける。竈は粘土で構築され、一部被焼・赤化している。竈の床面は周囲より5cm程度掘り窪められており、この部分に厚さ10cm程度灰層（9層）が堆積し、その周囲でこの上位に天井の崩落（7層）が確認できる。

住居内の2箇所に主柱穴と想定する円形の小穴（1・2）があり、直径約0.3m、深さ0.1mをはかる。このほか周溝・貼り床は確認できない。

遺物は竈内灰層（9層）直上に口縁部を南側に向け倒れた状態で土師器壺（4）が、またこの壺に沿うように石製支脚とそれに被さるように土師器壺（8）が出土した。これ以外の須恵器坏身・壺蓋・土師器壺などは覆土中より出土した。

SB6（第24・25・31図）はE4区に位置する、竈を有する堅穴住居である。平面形は隅丸方形であり、東西約4.7m、南北約4.9m、深さ約0.2mをはかる。床面の湧水が激しく、主柱穴、貯蔵穴、周溝などは確認できない。

竈は住居の北西辺の中央やや東よりに取り付けられており、主軸はほぼ北西方向（N-61°-W）をとる。竈の各壁は粘土で構築され、内面は被焼・赤化している。右側（北東）の袖部周辺には河原石と土師器壺が倒置された状態で出土しており、竈袖の補強材と考える。竈内部には炭化物が薄く堆積し、その上位には洪水堆積層と推測する粗砂（7層）が堆積し、その上部に天井部分（23・25層）が崩落していた。住居の床面は湧水が激しく、確認することができなかつたため、焚き口の床面と住居の床面の関係は判然としない。

遺物は竈内より右袖部分から支脚に使用されたと考える長楕円形の石材が、竈周辺より床面からやや浮いた状態で土師器壺が出土している。また、住居中央付近で土師器壺・壺・塊など（7・13・15ほか）が出土しているが、ほぼ同一の標高から出土したこのうち1点がSB3出土の10と接合したため、これ

表7 壁穴住居跡一覧

※()は推定値

番号	構名	旧遺構名	主軸方位	平面形態	規模	床面高 (cm)	残存状況	備考
19	SB 1	SB147	N-25°-W	...	-	154	竈と壁部残存 周溝と柱穴の有無不明	竈のコーナー形状不明
20	SB 2	SB200	N-41°-W	-	-	152	竈と北西部のみ残存 周溝と柱穴の有無不明	壁の範囲は推定
21	SB 3	SB201	N-45°-W	方形	470 × 428	153	虫歯侵食、柱穴不明顯、西側で掘り方確認、掘り方の 底面に炭化物層あり、竈内より壁と土器出土	小穴1規模 60×46, 底面高126 小穴2 規模 28×24, 底面高150 小穴3 規模 33×30, 底面高147 小穴4 横幅 30×25, 底面高145 小穴5 規模 52×52, 底面高131
22	SB 4	SB208	N-34°-W	- (322) × (318)	143	竈、周溝と柱穴の有無不明 北側上層より粘土	竈の範囲は推定 SB 5に切られている	
23	SB 5	SB206	N-17°-W	隅丸 方形	340 × 326	148	周溝の有無不明、柱穴不明 竈、竈内より壁と土器出土	SB 4を切る 小穴1 規模 30×28, 底面高139 小穴2 規模 30×28, 底面高141
24	SB 6	SB202 SB203	N-61°-W	- (488) × (466)	139	周溝と柱穴の有無不明 竈袖内より壁と土器出土	竈の範囲は推定、竈の南側に別の窓状のプランを 確認したがSB 6の竈上部が復元したものと判断	
25	SB 7	SB207	N-27°-W	-	南北 (368)	142	竈と東側の一部が残存 周溝と柱穴の有無不明	竈の範囲は推定
26	SB 8	SB204	N-37°-W	-	東西 (262)	146	竈、周溝と柱穴有無不明 周溝上に粘土多量	竈の範囲は推定 小穴1 規模 34×28, 底面高140
27	SB 9	SB205	N-31°-W	-	-	-	竈と東側の土坑残存 土坑内よりまとまって土器出土	土坑は別遺構の可能性あり

らは後世の洪水に伴いSB 6に流入した可能性が高い。

SB 7 (第26・32図)はF 4に位置する、竈を有する壁穴住居である。後世の自然の猛威を受け、2/3以上が破壊されている。特に西側は噴砂により大きく破壊されていた。平面形は不整形な方形と推測する。残存する住居規模は東西3.0m以上、南北3.5m以上、深さ0.15m以上をはかる。住居の主軸は北西方向 (N-27°-W)を向く。貯蔵穴、主柱穴、周溝などは確認できない。

竈はほぼ北側を向いているが、住居の主軸とはややずらして取り付けられている。竈は袖部分のみ粘土で構築されており、焚き口の床面は住居の床面よりもやや掘り深められていた可能性が高い。竈内には炭化物層が5cm程度確認でき、この上に赤化した竈天井が崩落している。

遺物は覆土中より須恵器壺身(1)、土師器壺(2・3)が出土した。

SB 8 (第26・32図)はF 5区に位置する、壁穴住居である。竈を含む北側部分が既に破壊されている。平面形は隅丸方形と推測する。残存する規模は、東西約2.6m、南北1.7m以上、深さ10cmをはかる。主柱穴、周溝などの施設は確認できない。

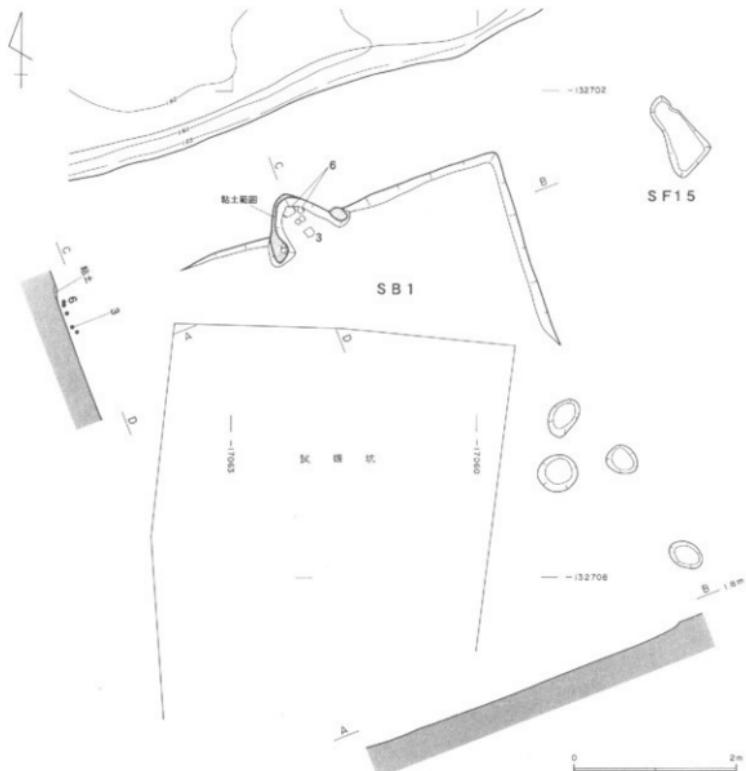
竈が確認できなかったことから主軸方位は断言できないが、他の住居が竈は北西辺に取り付けられていることから、SB 8もその可能性が高い。主軸は北西方向 (N-37°-W)を向く。

SB 7との前後関係はSB 8の北西隅を破壊している掘り込みがSB 7に伴う蓋然性が高いことからSB 8が先行する可能性が高い。

SB 9 (第26・27・32図)はF 5区に位置しており、SB 7・8の北東方向に近接する壁穴住居である。残存状況は劣悪であり、竈の掘り方を確認したのに留まる。したがって、規模、平面形などは不明である。

竈は北西方向 (N-31°-W)を向く。住居の床面と竈の床面との関係は判然としない。上層では赤化した粘土を確認しており、竈が押し流されたものと推測している。

遺物は竈内から石製の支脚と、この支脚に押しつぶされたような状態で土師器壺(9)が出土した。また、須恵器壺身(11)が竈の西側より出土しているが、その出土位置からSB 9に伴う遺物である可能性は低い。さらに、須恵器壺蓋(3)・須恵器壺身(6)・土師器壺(10)が竈より南側で出土した。



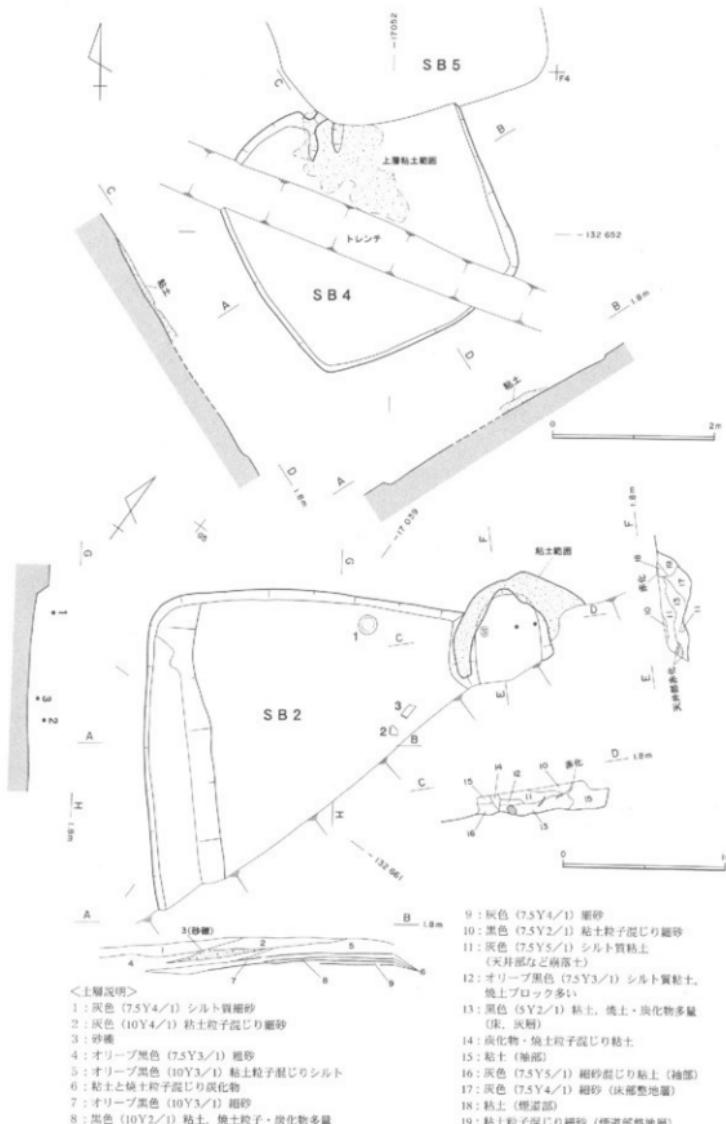
第19図 SB 1 平・断面図

このうち土師器壺（10）は以下に記述する土坑から出土した破片と接合したことから、本来3・6・10はこの住居の覆土中に含まれていた可能性が高い。

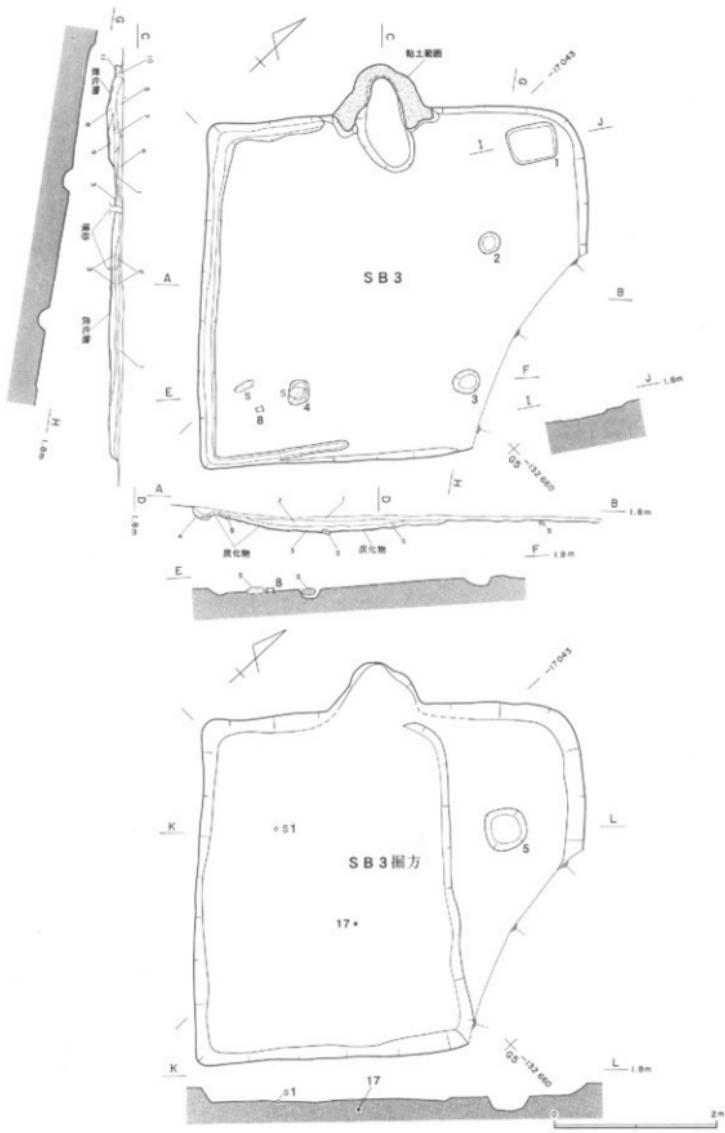
竈の東側では貯蔵穴の可能性のある土坑を確認した。その形態は楕円形に近い隔丸長方形であり、長辺約0.8m、短辺0.4m、深さ約15cmをはかる。この土坑内からは床面よりやや浮いた状況で土器が出土した。これらはほぼ同一の標高に口縁部を上に向かた状態で並置された、須恵器壺（1・2）・壺身（5）・鉄鉢形土器（7）・壺胴部を転用した鉢？（8）が出土した。このうち1・2・7は重ねられた状態で出土している。この土坑とSB 9との関係は、竈の袖の位置を復元すると土坑の上部にくることからSB 9の竈に伴って使用されていた可能性は非常に低い。また、この竈使用時に以前の住居で使用・廃棄された土器をこのような状態で並置したまま放置するとは考え難く、SB 9が廃棄された後に営まれた住居に伴う土坑（貯蔵穴？）である可能性が高い。

SB 7・8との前後関係は、本来は切りあい関係があったと想定できるが現状では不明である。SB 8・9から出土した須恵器壺身の形状から、両住居はほぼ同時期と推測する。SB 7との先後関係は出土した遺物からも判然としない。

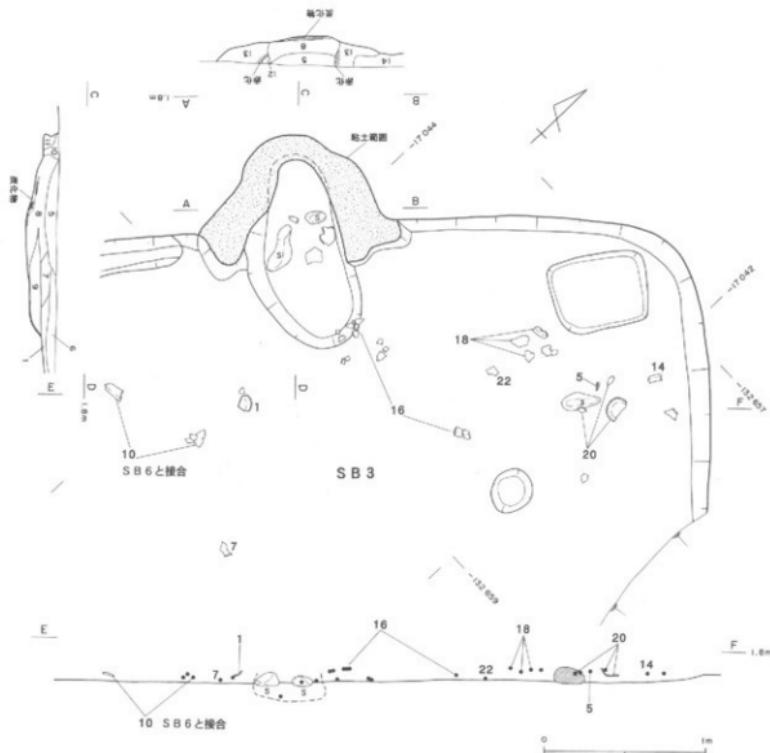
（大谷）



第20図 SB2・4 平・断面図



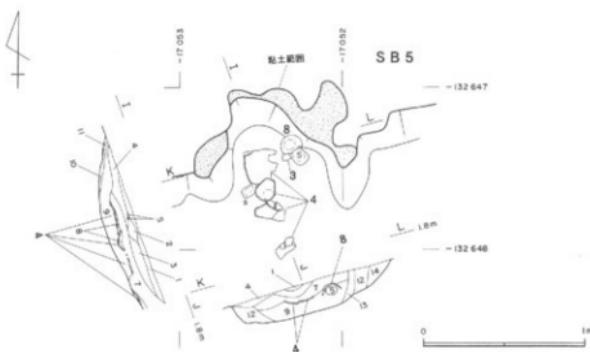
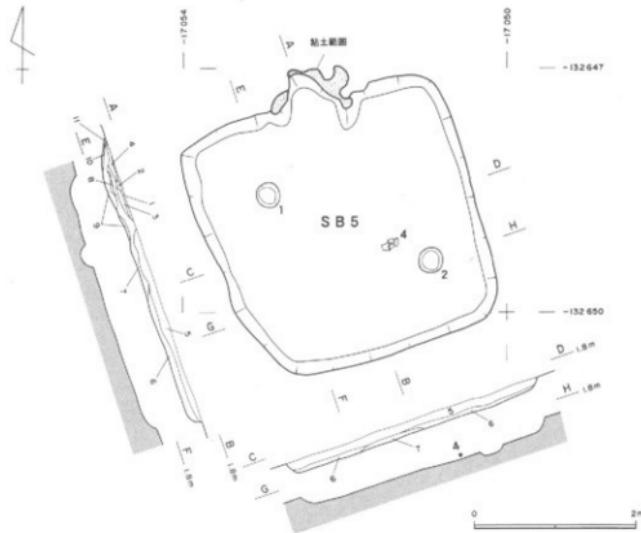
第21図 SB3 平・断面図



<土層説明>

- 1: 灰色 (7.5Y4/1) シルト質粘土
- 2: 灰色 (10Y4/1) シルト質粘土 (底床)
- 3: オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト質細砂, 硬化物多い, 下面に炭化物層 (底床)
- 4: 灰白色粘土ブロック混じり細砂 (埋溝地層)
- 5: 灰白色粘土 (天井部など崩落土)
- 6: 灰色 (7.5Y5/1) シルト質粘土, 硬化物多い
- 7: 灰色 (7.5Y4/1) 粗粒混じり粘土 (天井部など崩落土)
- 8: 塗土粒子混じり粘土, 上部に塗土ブロック多い,
- 9: オリーブ黒色 (10Y3/1) 細砂
- 10: 灰色 (5Y5/1) 塗土粒子混じり粘土 (埋道部)
- 11: 灰色 (10Y4/1) 塗土粒子混じり細砂 (埋道部整地層)
- 12: 塗土粒子混じり粘土
- 13: 灰色 (7.5Y4/1) 粘土 (袖部)
- 14: 細砂混じり粘土 (袖部流出土)

第22図 SB 3 窟跡平・断面図

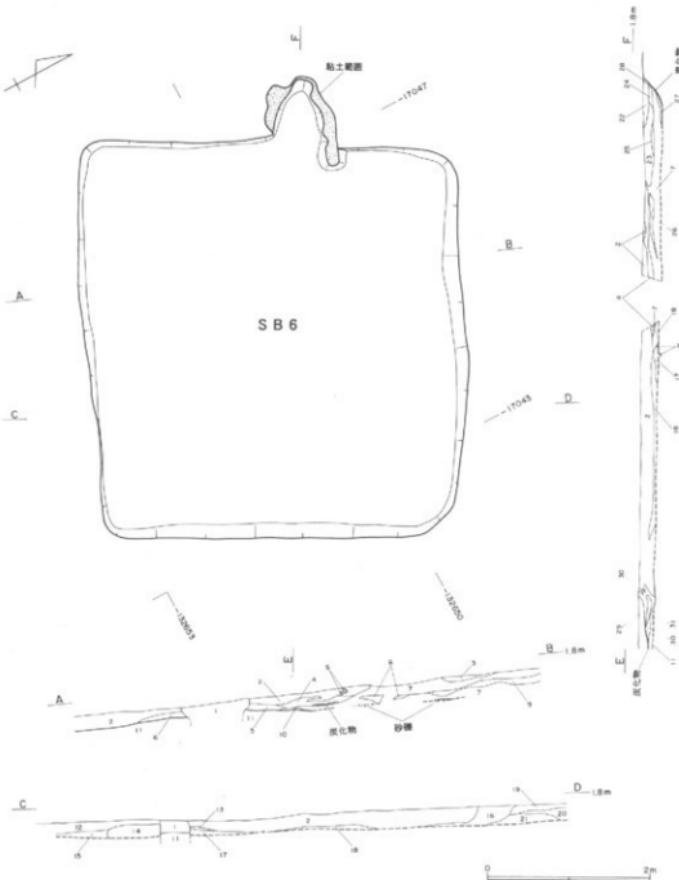


<上解説>

- 1 : 灰色 (7.5Y4/1) シルト質細砂
- 2 : 炭化物
- 3 : オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト質細砂、炭化物多量
- 4 : 灰色 (7.5Y4/1) シルト質細砂、小礫少量
- 5 : 灰色 (7.5Y4/1) 粘土ブロック混じり粗砂、φ5~50mm の小礫多い
- 6 : オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 粘土粒子混じりシルト質細砂
- 7 : 灰色 (10Y5/1) 粘土 (天井部など崩落土)

- 8 : 炭化物
- 9 : 灰色 (10Y4/1) 粘土混じりシルト、焼土・炭化物多量 (灰層)
- 10 : 黑褐色 (10YR3/2) 粘土、赤化していない (埋没部)
- 11 : 暗白色 (7.5Y6/1) 細砂混じり粘土 (煙道部)
- 12 : 暗白色 (7.5Y6/1) 粗砂混じり粘土 (袖部)
- 13 : 暗褐色 (10YR3/2) 粘土、赤化していない (袖部)
- 14 : 灰色 (N4/0) 粘土ブロック混じり細砂 (袖部整地層)

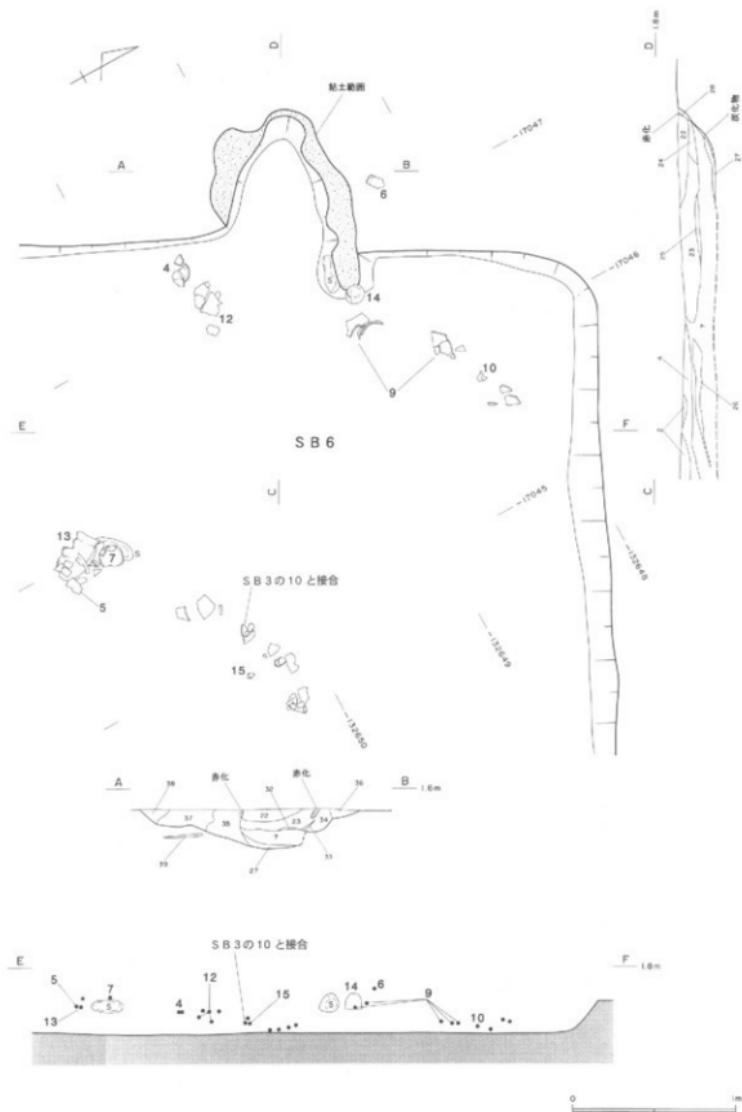
第23図 SB 5 窟跡平・断面図



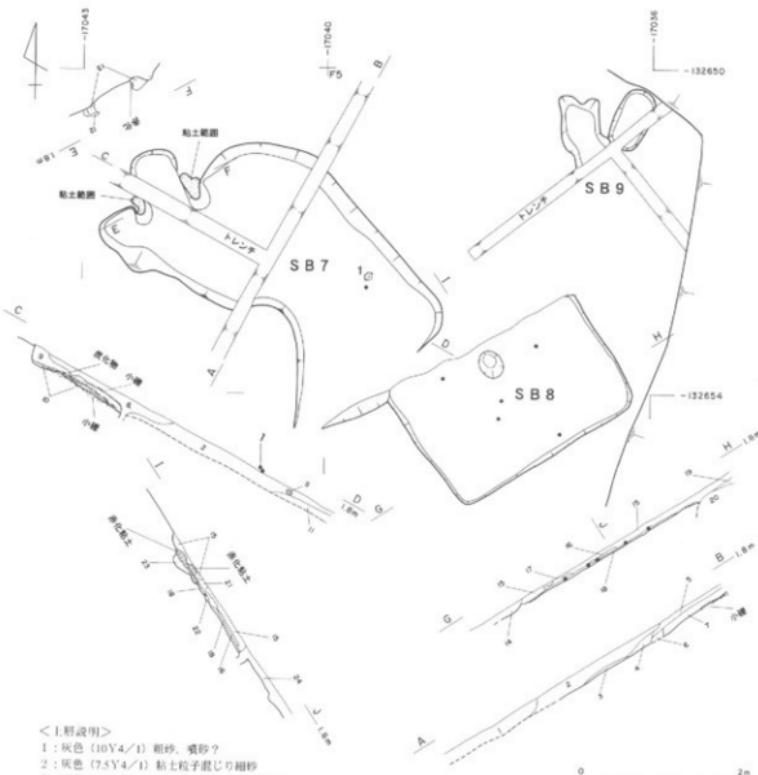
<土層説明>

- 1: オリーブ色 (10Y3/1) 細砂 (噴砂?)
- 2: 灰色 (7.5Y4/1) 廃化物・焼土粒子
混じり細砂
- 3: オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト、
廃化物・焼土粒子少量
- 4: 灰色 (N4/0) 焼土ブロック混じり粘土。
下層に廃化物のラミナ（廃焼土）
- 5: オリーブ黒色 (10Y3/1) 細砂
- 6: 灰色 (N4/0) 小礫混じり細砂
- 7: 粗砂
- 8: 焼土混じり粘土。ラミナあり（廃流水土）
- 9: オリーブ黒色 (5Y3/2) 廃化物、
焼土粒子混じりシルト
- 10: 焼土粒子混じり粘土（廃流水土）
- 11: 砂礫
- 12: 灰色 (7.5Y4/1) 細砂
- 13: 烧土
- 14: オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 細砂。
- 15: オリーブ黒色 (10Y3/1) 細砂
- 16: 灰色 (7.5Y5/1) 細砂
- 17: 灰色 (7.5Y5/1) 廃化物・焼土粒子
混じり細砂
- 18: 灰色 (10Y4/1) 細砂
- 19: 灰色 (10Y4/1) 細砂
- 20: 灰色 (7.5Y4/1) 細砂、ラミナあり
- 21: 灰色 (10Y4/1) 細砂、ラミナあり
- 22: 黄白色帶の混じり粘土。焼土粒子少量
(廃焼土)
- 23: 黄白色 (N4/0) 粘土混じり粘土
(天然など崩壊土)
- 24: 廃化物と焼土ブロック（標準部前層土）
- 25: 焼土ブロック多量（天井など崩壊土）
- 26: 廃化物と焼土ブロック（廃成土）
- 27: 烧土、廃化物・焼土多量（R.E. 廃層）
- 28: 烧土、内側削面（標準部）
- 29: 灰色 (7.5Y4/1) 細砂 (S B 7)
- 30: 灰色 (7.5Y6/1) 烧土 (S B 7)
- 31: 灰色 (N4/0) 粘土、焼土・廃化物多量
(S B 7)
- 32: 廃化物と焼土粒子多量（標準部崩壊土）
- 33: 粗砂
- 34: 灰色 (7.5Y6/1) シルト混じり粘土
(標準部)
- 35: 灰色 (7.5Y6/1) 烧土 (標準部)
- 36: 灰色 (10Y4/1) 烧土ブロック混じり細砂
(標準部崩壊土)
- 37: 灰色 (7.5Y6/1) 細砂混じり粘土
(標準部崩壊土)
- 38: 灰色 (7.5Y4/1) 烧土粒子混じり細砂
- 39: 灰白色粘土

第24図 S B 6 平・断面図



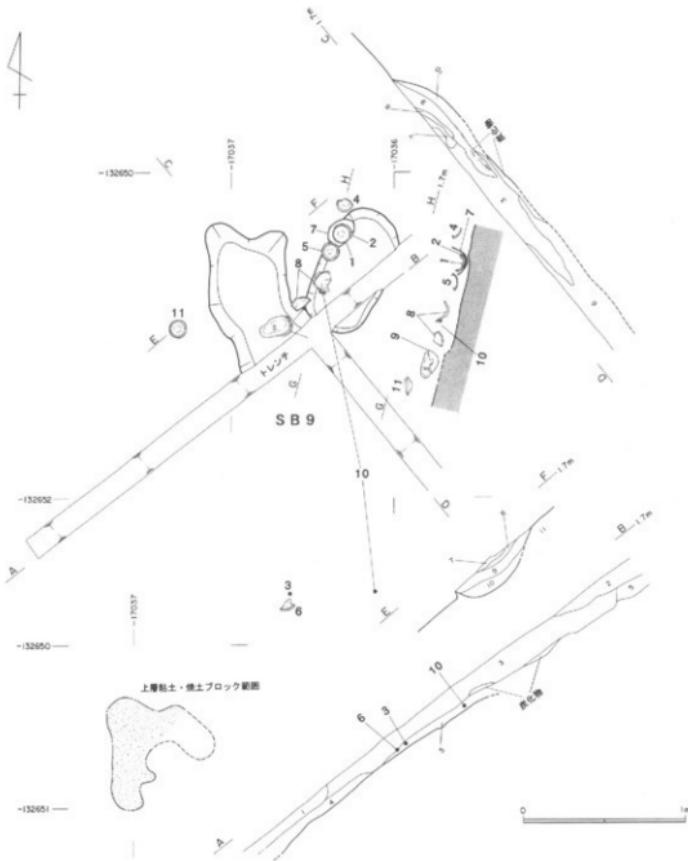
第25図 S B 6 窓跡平・断面図



<上部説明>

- 1: 灰色 (10Y4/1) 粗砂、粗砂？
- 2: 暗色 (7.5Y4/1) 粘土粒子混じり細砂
- 3: 灰色 (7.5Y4/1) 粘土ブロック混じり細砂
- 4: 暗色 (7.5Y7/1) 粘土
- 5: 灰色 (7.5Y5/1) 細砂
- 6: 灰色 (7.5Y4/1) 粘土粒子混じりシルト
- 7: 粘土とシルトの互層
- 8: オリーブ黒色 (10Y3/1) 細砂、下面に小礫が並ぶ、噴砂？
- 9: オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘土ブロック混じり細砂 (灰層、塊崩落土)
- 10: 灰色 (7.5Y4/1) シルト
- 11: 灰色 (7.5Y4/1) 細砂質シルト
- 12: オリーブ黒色 (10Y3/1) 粘土ブロック混じり細砂 (ストライプ状)
- 13: 灰色 (7.5Y6/1) 粘土 (抽離)
- 14: 灰色 (10Y4/1) 粗砂
- 15: 灰色 (7.5Y4/1) 粘土ブロック (φ5mm) 混じり細砂、東側は粘土量減少
- 16: 暗色 (7.5Y5/1) 細砂
- 17: 灰色 (10Y5/1) 粘土
- 18: ラミナ状の炭化物と灰色粘土の互層、燒土少量、下面より土器出土
- 19: 灰色 (10Y4/1) 細砂
- 20: 灰褐色粘土ブロックと細砂が混在。炭化物と焼土を含む
- 21: 灰色 (7.5Y5/1) 炭化物・焼土混じり粘土
- 22: 灰色 (10Y4/1) シルト
- 23: 灰色 (7.5Y4/1) 粘土
- 24: 灰色 (10Y4/1) 粘土粒子混じり細砂 (北側は生土?)

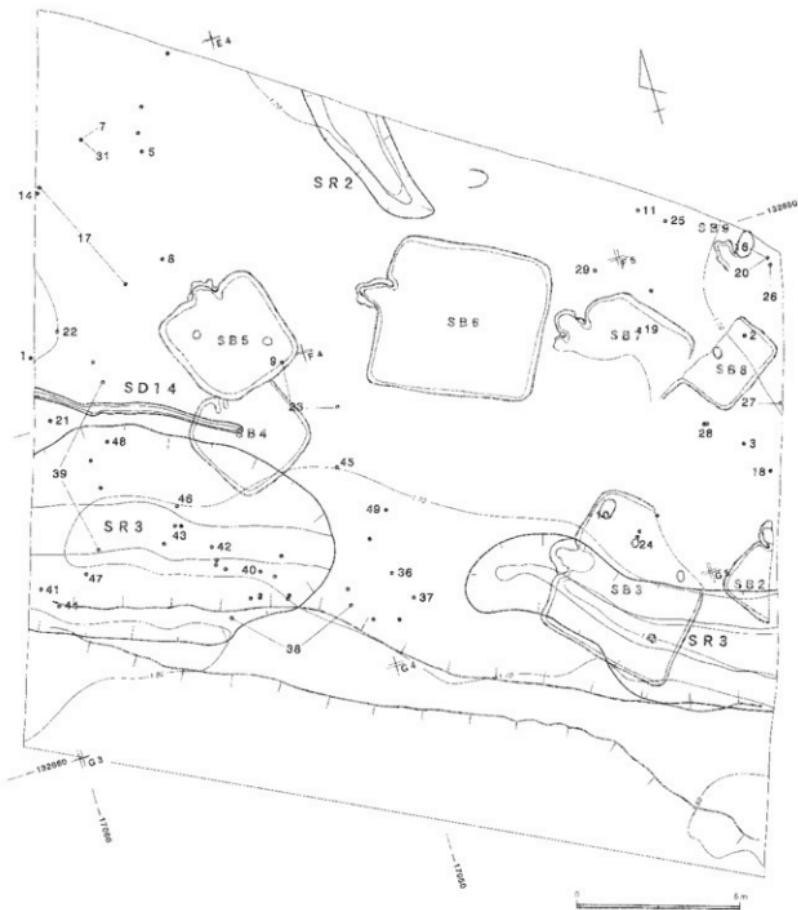
第26図 S B 7 ~ 9 平・断面図



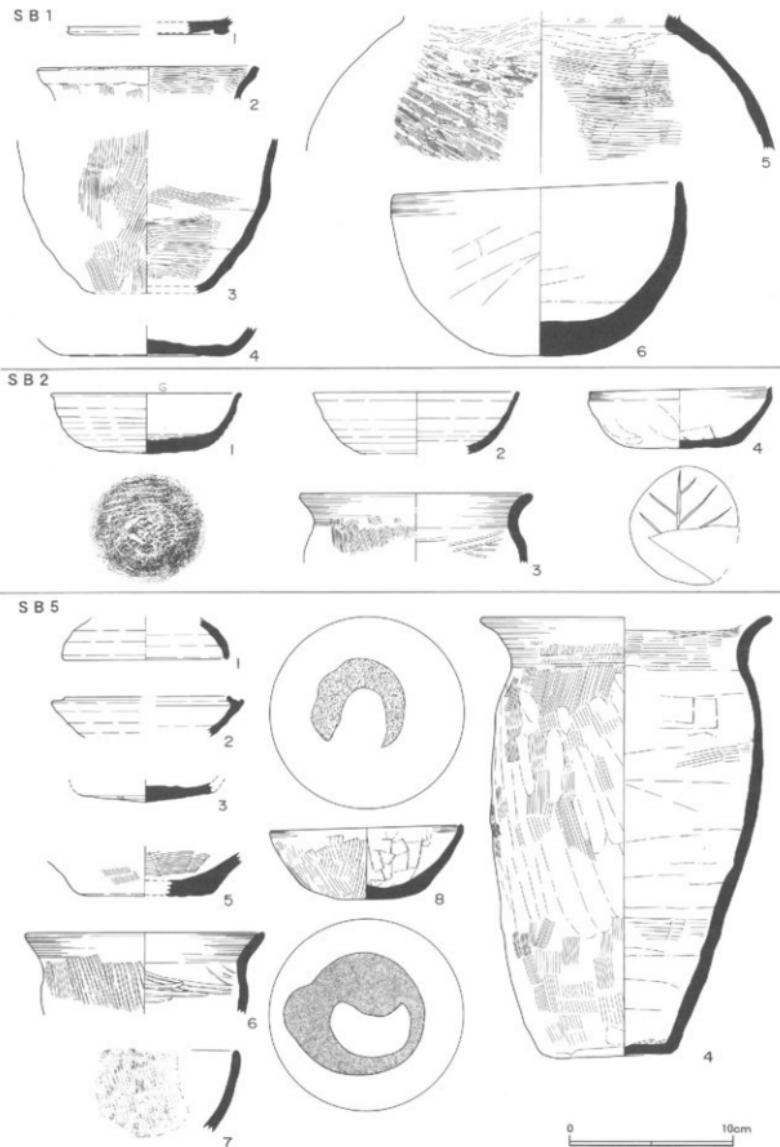
<上層説明>

- 1 : 灰色 (N5/0) シルト
- 2 : オリーブ黒色 (10Y3/1) 粗砂
- 3 : 灰色 (7.5Y3/1) 粘土粒子混じり細砂
- 4 : 灰色 (10Y4/1) シルト
- 5 : 灰色 (7.5Y4/1) 細砂
- 6 : オリーブ黒色 (10Y3/1) 粗砂
- 7 : 粘土・埴土ブロック多量、管状多量 (発酵落土、床)
- 8 : 灰色 (7.5Y5/1) 粗砂
- 9 : 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土、上部に埴土、下部に炭化物が多い (発酵落土、床)
- 10 : 灰色 (7.5Y5/1) 粘土質シルト、埴土ブロック・粘土粒子・炭化物少量 (整地層)
- 11 : 灰色 (10Y5/1) 粘土粒子混じり細砂、管状微量

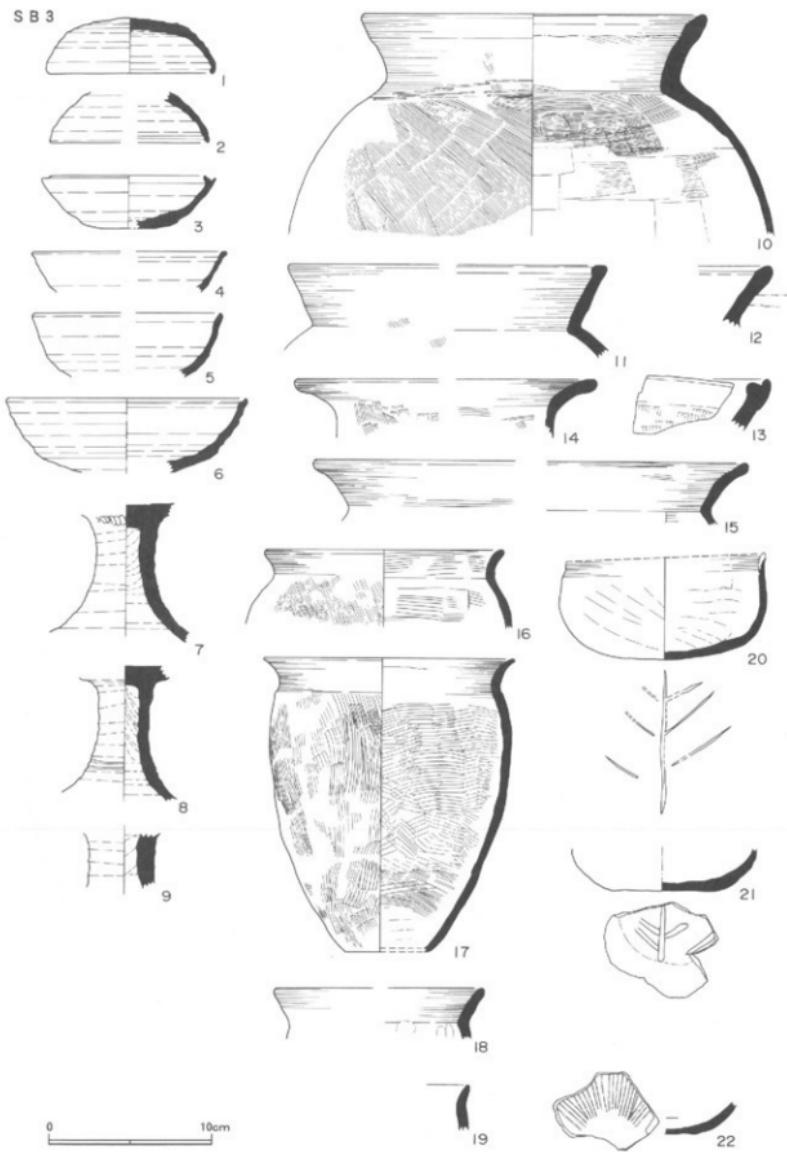
第27図 SB 9 蹤跡平・断面図



第28図 積穴住居跡群上層遺物出土状況図



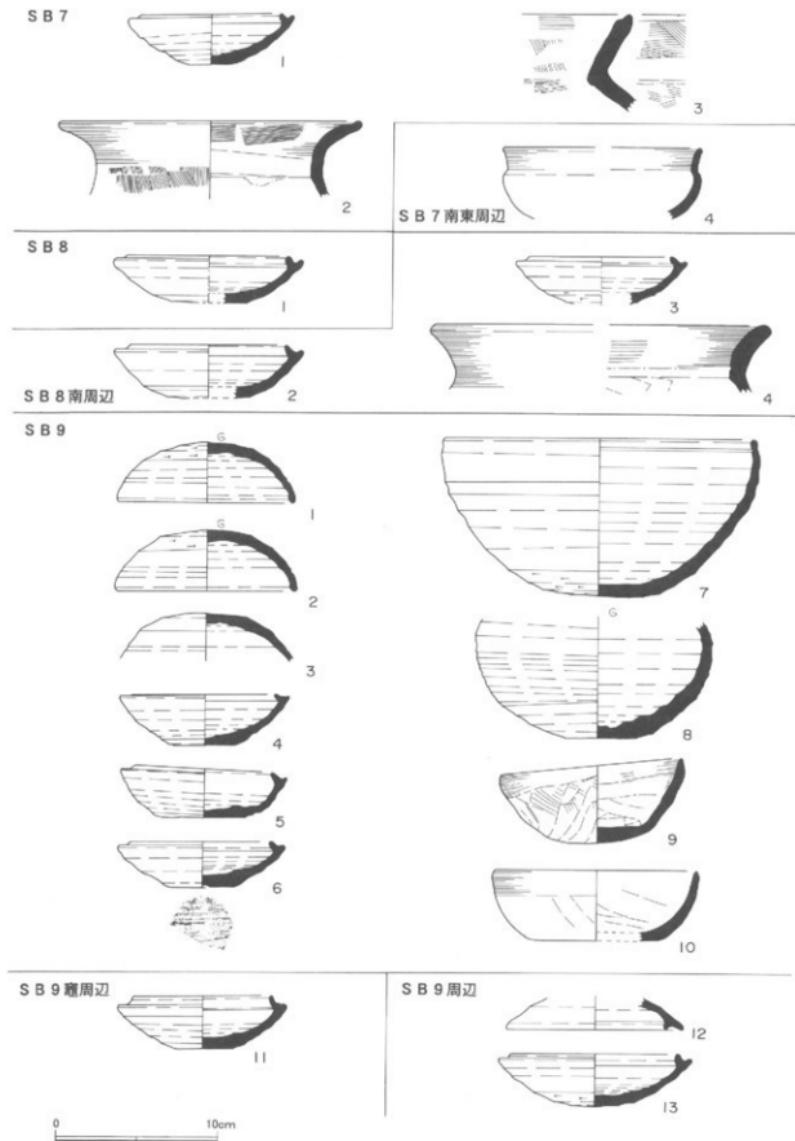
第29図 SB 1・2・5 出土土器実測図



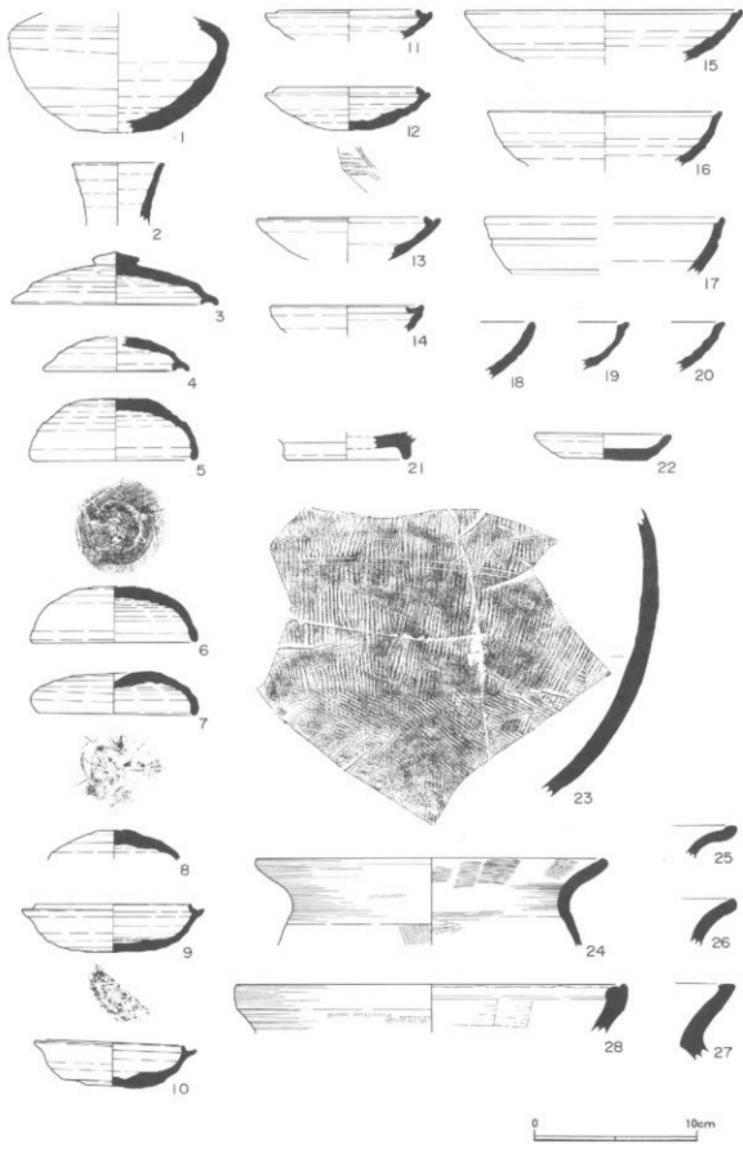
第30図 S B 3 出土土器実測図



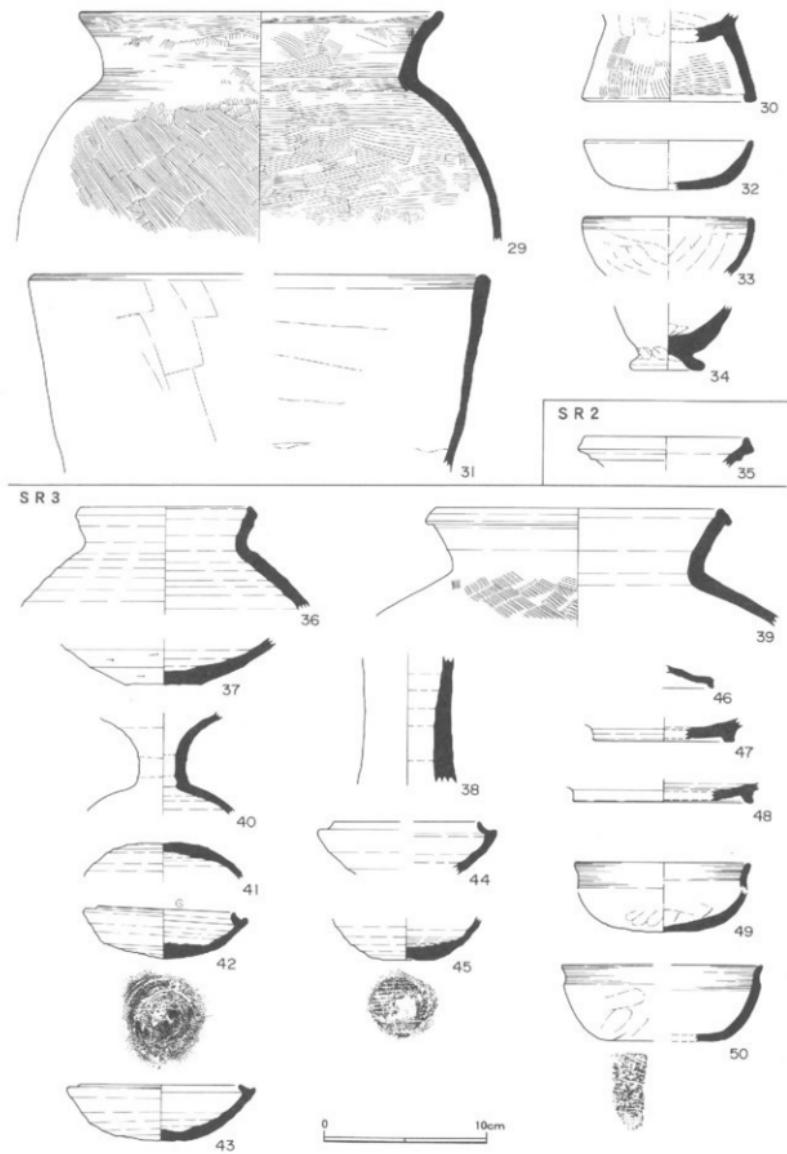
第31図 SB 6 出土土器実測図



第32図 SB 7・8・9 出土土器実測図



第33図 積穴住居跡群の上層 出土土器実測図



第34図 積穴住居跡群の上層, SR 2・3 出土土器実測図

第5節 旧流路と出土遺物

(1) 古墳時代末期から奈良時代

調査区中央部にSR5・6が東西方向に位置している。水流は西から東に向い(付編4 加藤論文参照)、駿河湾へと注いでいたようである。SR5・6のベースは北側にひろがる砂礫層であり、SR5・6は大規模な洪水後に流れた小河川の比較的新しいものと理解される。

SR6(第38図)は、中央西寄りの地点の深さが約90cmと深く、標高は70cmである。最下層を掘り抜くと疊層からは、かなりの湧水があった。この深みの下層からは、木製品と植物遺体が多量に出土しており、流れが淀んでいたものと考えられる。このことは、付編1の珪藻分析による「沼沢湿地付着生種群の珪藻化石が検出された状況は、河道の流れが非常に緩やかであった」という報告と一致する。

この最下層では、植物遺体が折り重なっているかのようにラミナを形成しており、流木に混じって、手斧もしくは鉈によって加工した時の削り滓や木製品が大量に発見された。この削り滓はかなりの量が存在し、付近で、一時的に多くの木製品を製作したか、建物などを建築したのではないかと思われる。

これらの削り滓や伴出した加工木片の樹種は様々で、専門工人による単一の道具の製作や建物の建築がなされていたとは思われない。むしろ、集落内で使う多種類の道具を製作していたと考えたい。

出土木材の樹種数(付編3 鉛木報告)と花粉分析による花粉数(付編1 パリノ報告)をここで比較してみたい。ただし樹種同定を実施したSR6出土木片は、現地で任意にサンプリングした資料の一部であり、数量はあくまでも目安にしかならないであろう。

樹種のなかで、比較的多く確認されたのはスギ・イヌマキ属・ヒノキ・ヤナギ属・ツガ属・アカガシ・アメノキ・イヌガヤ・モミ属である。逆に少ないものとして、カラマツ・トウヒ属・カバノキ属・シナノキ属などがある。

SR6の花粉分析の結果では、ツガ属・モミ属・コナラ属・アカガシ・アメノキ属・マキ属・マツ属複雑管束型属・ニレ属・ケヤキ属・スギ属の順に多い。少ないものの中には、木材と同じくトウヒ属・シナノキ属がある。カバノキ属はやや多い部類にはいるが、それほど多くはない。

木材と花粉の組成比が、かなり類似している点は、両者の分析結果を評価できるものと考えられるが、付編3の鉛木論文で問題とされた那高山～冷温帶性の樹種とされるカラマツ・トウヒ属・カバノキ属・シナノキ属の存在が注目される。

当初、これらは大井川によって高地から流されてきた流木を集落内で加工したものであろうと考えられていたが、廃棄地点の土壤からもそれらの花粉が検出されたことで、理解できなくなってしまった。特殊な花粉が混在することは一般的によくあることであるが、出土木材との組成比が類似していることは、それらが、周辺の植生環境を示している可能性が高い。筆者自身は7世紀以降一時的に寒冷化に向かうものと考えており、そうした現象の一端を示すもので、近隣の山間部との木材もしくは木製品の流通により、加工木片が遺跡内に残り、花粉も飛来しやすい環境下にあったのではないかと想像しているが、類例の増加を持って再検討したい。

SR6はこれらの木材と植物遺体を多く含む埋積土であり、その上層をSR5として区別した。SR5とSR6の埋積土質は異なるので、おそらくSR6が埋没もしくは規模を縮小させた段階(奈良時代)に、SR5が上層を侵食したのではないかと想定している。出土土器は、下層に古墳時代末期のものが集中し、上層に向かって奈良時代の上器が多くなる傾向にあり、また、東側の方が奈良時代の土器が比較的多く出土し、相対的に出土標高も高い(第41・42図)。SR5の外側の南東部上層からも、奈良時

代の土器が集中して多く出土している（第56図224～231）。

木製品は古墳時代末期の土器と共に作っているが、上器集中域より下部に位置している。上器は細片の状態のものが多く、肩部より継続的に廃棄されたものと考えると、木製品はそれより古いと考えられる（第42図）。

S R 5・6出土上器と木製品の詳細については、一覧表と次項の記載を参照していただきたいが、ここでは、少数出土した祭祀具についてまとめておく。

土馬（第91図1・3）はS R 5より2点出土した（第41・42図の十1・3）。1は東壁内より2の土器と共に作られた小型品で、鞍の表現がある。3は大型品で、S R 5の下層中央部より出土したもので、伴出した土器はないが、出土地点から奈良時代に属するものと考えられる。鞍が付けられていた可能性は高く、顔や尻が表現されている。この形態の土馬は県内でよく認められるもので、陶馬を模したものではないかと思われる。また、大型品と小型品は、比較的古くから同時に存在している場合が多いようである。

舟単状の木製品は、不明瞭なものを含めて4点（第45図10～13）が、S R 6の南西部からまとまって出土した。7世紀段階の律令的祭祀具は、当研究所が静岡市で発掘調査した神明原・元宮川遺跡（佐藤1996）が著名である。そこも旧河道内からの出土で、祭祀具の種類は多いが時期的問題点が残されていた。今回の出土例が確実に舟中であるとするには、もう少し検討の余地はあるが、もしそうであるならば、神明原・元宮川遺跡例と共に、地方への律令的祭祀の波及の時期や在り方を検討する材料となるであろう。

豊穴住居跡群の上層から、古墳時代末期から奈良時代にかけての土器が出土したS R 2・3が位置している。これらからも古墳時代末期から奈良時代の土器が少量出土しているが、これは下層内に埋没していたものを侵食により洗い出した結果と考えられる。よって、S R 2・3は奈良時代以降の侵食痕跡であろうと思われる（第28・34図）。

S R 5の南側には、幅が広く深いS R 7（第9図）が位置している。S R 7は略「Y」字状の平面形態で、南西部が二股で、北東部はS R 5の近くまで確認されている。おそらく、S R 7はある時期S R 5とつながっていたのではないかと思われる。

S R 7の埋積土は粘土質でパイプ状に発達した多量の管鉄を含み、灰白色粘土や炭化物の集中域も部分的に確認されている。灰白色粘土は散在的で、炭化物はラミナ状に堆積している部分もあるため、かなりの数の遺物を侵食しているものと思われる。また、管鉄の発達状況から、S R 7の埋没後は非常に湿地化したものと考えられる。

出土遺物（第86・87図）には、古墳時代末期から奈良時代の遺物があり、散在して比較的多くの上器が出土している。J 2区北西とK 1区北東に土器の集中が認められ、J 2区北西上層からは、土馬の脚も1点（第91図4）検出された（第69図右下）。

S R 7は、出土土器と遺構との関係から、奈良時代に形成され、短期間で埋没したのではないかと考えられる。S X 6との関係は、第9節でまとめて述べることとする。

（S R 6出土木製品について）

木製品については、県文化課 中川律子氏と当研究所調査研究員 望月由佳子氏より御教示いただいた内容を下敷にして、以下に柴山がまとめ直したものである。両氏の卓見を生かしきれていないが、御寛恕いただきたい。

木製品が廃棄された時期は、伴出した土器から7世紀後半に限定される。この時期の県内の木製品の出土例は少ないことから、非常に貴重な資料であるため、個別に説明を加えておきたい。なお、詳細に

については表8・9を参照していただきたい。実測図は第3・43~46図に掲載しており、文章中の番号はその挿図内の番号と対応している。

馬鍬（1）は台木と齒が残存した状態で出土した。台木はほぼ完全な形で、長さが93cmの角材である。左右両端に引棒を差し込むための方形孔が貫通している。方形孔は齒に対し直角方向である。しかし本製品には通常使用者が握る把手を差し込む孔が見られない。もともと8本歯の馬鍬であったろうが、このうち4本の歯が残存している。歯は台木に対し垂直方向に差し込まれている。歯の差し込まれた孔は一辺が約1.7cmの方形孔で上面までは貫通していない。残存する4本の歯のうち、1本には楔が打ち込まれていた。また、歯は12・13cmほどと比較的短い。材質は台木・歯とともにイヌマキ属材である。

一般に木製馬鍬は、東海地方はもとより東日本各地で、古墳時代後期から平安時代まで存続する。県内でも木製馬鍬の出土した遺跡は、細江町祝田遺跡（古墳時代末？の馬鍬台木・歯9点・軸状木製品1点）・浜松市梶子遺跡（馬鍬の歯）・同市伊場遺跡（馬鍬3点）・藤枝市御子ヶ谷遺跡（馬鍬1点）・静岡市池ヶ谷遺跡（馬鍬1点）・同市岳美遺跡（馬鍬1点）・同市曲金北遺跡（馬鍬1点）・同市神明原・元宮川遺跡（馬鍬1点）などがある（静岡県埋蔵文化財調査研究所1994）。

これらのはほとんどは、歯が台木を貫通しており、本例とは異なった技術系譜上にあり、時期差でもあると考えられる。貫通例の歯は次第に鉄歯が利用されるようになり、曲金北遺跡側溝出土土鉄歯が示しているように、遅くとも平安時代前期には鉄歯が出現するものと考えられる。

鋤先（2）は、又鋤の身の一部と思われる。樹種がアカガシ亜属で柾目材であることからも農耕具の一部と考えてよいであろう。右側面上部は斜めに削られ肩を作り出したものと思われる。欠損部分が多く全体の形状は不明である。

鋤納（3）はアカガシ亜属の柾目材を利用して、上端部を把手状に加工している。把手の中央に逆三角形の孔があいた形状をしている。把手幅は約10cmほどあったものと思われる。本体が一本鋤であったか組み合わせ鋤であったかは不明である。

彎台（4）は、上下両端部などが欠損し残存状態が悪い。図で言う左右側面側に合計3カ所ほど浅い切り込みが入っているが間隔は一定していない。裏面側は剥離している。

槽（5）はスギ材で作られ、長軸は約1m、短軸は30cmほどあったと思われる。残存状態が極めて悪く、表面も著しく風化している。裏面は比較的残り具合が良いものの槽の内面部分は腐食が激しい。欠損部分が多いため形状は不明瞭ではあるが、長方形であろう。

曲物（6~8）は円形または楕円形の蓋もしくは底板である。いずれもスギの板目材で作られた製品である。周縁の断面形状は、丸みを持ち、側板を結合する部分は外側から斜めに切り込まれ垂直に立ち上がる。この結合部の加工は、大型の楕円形曲物にもよく認められる特徴である。6は側縁の一部に釘孔が2ヶ所残っている。7も2ヶ所の釘孔痕があり、本釘が一部残存していた。表面は一部火を受けて炭化している。8は再加工品で、表面の角を面取りしてあるが用途は不明である。

容器？（9）は不明な点が多い。イヌマキ属材で残存状態は良好である。筒状の容器とすると、復元径は10cmほどであろうかと思われる。表面の加工は非常に丁寧に施されており、縱位方向の削痕が見られる。内面側の上下端部はわずかに面取りされて丸みを帯びている。しかしその他に目立った加工は無く、結合方法や用途の特定に至らなかった。

齋巾？（10~13）は、スギまたはヒノキの板目材で作られた祭礼具と思われる木製品である。いずれも幅1.5~2.0cm、厚さが0.2~0.3cmの薄板である。10・13は端部を三角形に加工してある。墨書きなど文字の痕跡は見られない。

カセカケ（15）の支え木で、回転軸を持つ組み合わせ式の糸巻具である。全体のほぼ二分の一が残存している。下端部の孔が中心となり相欠仕口の軸孔となる。支え木を十文字に組み、支え木端にあけら

表 8 木製品一覧

※計測値は残存部

区番号	写真 図版	遺構	凹道溝	出土標高 (cm)	取上日	取上 番号	種別	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	樹種	プレラート 番号	備考
1	24	SR 6	SR33B	99	01.02.19	W208	凸歯	930	79	64	イヌマキ属	7502, 7503	把手孔無し
1a	24	SR 6	SR33B	99	01.02.19	W208	馬歯	136	23	14	イヌマキ属	7502, 7503	短齒
1b	24	SR 6	SR33B	99	01.02.19	W208	馬歯	156	22	15	イヌマキ属	7502, 7503	短齒, 組合不明
2	24	SR 6	SR33B	85	01.02.20	W226	歯先	217	51	19	アカガシ属	7521	又歯?
3	24	SR 6	SR33B	105	01.02.19	W209/212	歯羽	176	105	35	アカガシ属	7526	
4	26	SR 6	SR33B	84	01.02.20	W233	端台	461	29	9	スギ	7530	上下に抉り
5	25	SR 6	SR33B	125	01.02.15	W152	檻	869	347	33	スギ	7337	
6	25	SR 6	SR33B	105	01.02.19	W206	曲物底底	316	30	14	スギ	7521	丸円形, カバ縁
7	25	SR 6	SR33B	105	01.02.20	W231	曲物底底	224	53	12	スギ	7519	楕円形, 段差有 カバ縁
8	25	SR 6	SR33B	91	01.02.20	W234	曲物底底	117	22	12	スギ	7512	段結合
9	25	SR 6	SR33B	111	01.02.21	W249	零器?	172	91	12	イヌマキ属	7527	
10	26	SR 6	SR33B	96	01.02.21	W257	盒?	291	17	2	スギ	7506	
11	26	SR 6	SR33B	105	01.02.21	W255	箱串?	255	21	3	スギ	7507	
12	—	SR 6	SR33B	最下層	01.02.21	—	盒?	62	15	2	ヒノキ	7533	
13	26	SR 6	SR33B	97	01.02.21	W256	箱串?	244	15	3	スギ	7505	
14	26	SR 6	SR33B	—	01.02.20	馬銀闇刃	板状	264	17	5.5	スギ	7504	
15	26	SR 6	SR33B	70	01.02.21	W263	カセカケ	595	35	17	モミ属	7535	丁字組合せ 斜め空孔
16	26	SR 6	SR33B	103	01.02.20	W232	馬	267	23	24	イスガヤ	7522	
17	26	SR 6	SR33B	105	01.02.19	W204	町?	107	24	19	ヒ岬カキ	7511	
18	27	SR 6	SR33B	86	01.02.20	W224	棒状	57	13	14	スギ	7508	
19	27	SR 6	SR33B	118	01.02.20	W241	棒状	89	13	12	カハノキ属	7509	
20	27	SR 6	SR33B	95	01.02.13	W141	棒状	171	9	8	スギ	7516	
21	27	SR 6	SR33B	92	01.02.20	W225	棒状	291	29	26	ケヤキ	7529	34と類似
22	27	SR 6	SR33B	106	01.02.20	W239	板状	217	22	11	モミ属	7517	
23	27	SR 6	SR33B	86	01.02.21	W258	板状	193	29	16	スギ	7518	
24	27	SR 6	SR33B	114	01.02.20	W242	板状	298	28	19	スギ	7523	
25	27	SR 6	SR33B	92	01.02.20	W227	板状	184	37	4	スギ	7515	
26	27	SR 6	SR33B	93	01.02.21	W267	有孔板状	171	29	6	モミ属	7514	2孔
27	27	SR 6	SR33B	92	01.02.19	W207	嵌入棒状	93	43	47	スギ	7513	
28	—	SR 6	SR33B	鼓下層	01.02.21	—	削片?	154	41	16	モミ属	7534	
29	27	SR 6	SR33B	—	01.02.20	—	板状	104	28	17	スギ	7510	
30	28	SR 6	SR33B	122	01.02.20	W220	棒状	602	70	66	イヌマキ属	7332	景化光脚七角形
31	28	SR 6	SR33B	107	01.02.14	W169	板	484	65	42	ツブライ	7501	
32	28	SR 6	SR33B	117	01.02.14	W151	杭	227	51	45	イヌマキ属	7520	丸状
33	28	SR 6	SR33B	109	01.02.20	W243	町?	1211	32	29	ムクノキ	7525	浅い抜けあり9
34	28	SR 6	SR33B	95	01.02.20	W244	棒状	1017	37	36	イスガヤ	7536	弯曲, 21と類似
35	28	SR 6	SR33B	87	01.02.20	W228	建築材	1291	252	47	スギ	7538	円孔あり
36	27	SR 6	SR33B	88	01.02.21	W269	柱?	294	198	150	ブナ属	7539	炭化
—	—	SR 6	試掘坑6	—	—	—	削り棒?	724	57	17	針葉樹	—	第3回

車軸桿は鈴木三男先生(東北大学教授)による同定

表9 出土木片樹種同定一覧

試料番号	遺構	K	出土地	種別	プレバラート番号	樹種	同一樹種点数	備考
37	SR 6	H 3 南西	SR33B	自然木	7540	タブノキ	1	-
38	SR 6	H 2	SR33B	自然木	7541	モクセイ	1	馬糞周辺
39	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	加工木片	7542	カラマツ属	1	馬糞周辺
40	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	加工木片	7543	ソガ属	4	馬糞周辺
41	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	加工木片	7544	カラマツ属	1	馬糞周辺
42	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	自然木	7545	シナノキ属	1	馬糞周辺
43	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	加工木片	7546	アカマツ	1	馬糞周辺
44	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	加工木片	7547	ヒノキ	3	馬糞周辺
45	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	加工木片	7548	イヌマキ属	2	馬糞周辺
46	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	自然木	7549	アカガシ属	2	馬糞周辺
47	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	自然木	7550	イヌシグ	1	馬糞周辺
48	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	自然木	7551	サカキ	1	馬糞周辺
49	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	自然木	7552	ヒサカキ	1	馬糞周辺
50	SR 6	H 2	SR33B 西端下層	自然木	7553	ヤナギ属	1	馬糞周辺
51	SR 6	-	SR33B	加工木片	7554	ソガ属	3	馬糞周辺
52	SR 6	-	SR33B	自然木	7555	ソブリジイ	1	馬糞周辺
53	SR 6	-	SR33B	自然木	7556	アカガシ属	1	馬糞周辺
54	SR 6	-	SR33B	自然木	7557	ヤナギ属	3	馬糞周辺
55	SR 6	H 3 西	SR33B 最下層	加工木片	7558	ヒノキ	2	削り津
56	SR 6	H 3 西	SR33B 壁下層	加工木片	7559	イヌガヤ	1	-
57	SR 6	H 3 西	SR33B 最下層	自然木	7560	ヤナギ属	9	-
58	SR 6	H 3 中央西	SR33B 壁下層	加工木片	7561	ヒノキ	1	トレンチの表(直り津)
59	SR 6	H 3 中央西	SR33B 壁下層	加工木片	7562	イヌマキ属	2	トレンチの西
60	SR 6	H 3 中央西	SR33B 壁下層	加工木片	7563	ヒノキ	3	トレンチの西
61	SR 6	H 3 中央西	SR33B 壁下層	加工木片	7564	イヌガヤ	2	トレンチの西
62	SR 6	H 3 中央西	SR33B 壁下層	加工木片	7565	ソガ属	3	トレンチの西
63	SR 6	H 3 中央西	SR33B 最下層	自然木	7566	ヤシャブシ属	1	トレンチの西
64	SR 6	H 3 中央西	SR33B 壁下層	加工木片	7567	トウヒ属	1	トレンチの西
65	SR 6	H 3 中央西	SR33B 壁下層	自然木	7568	ヤナギ属	1	トレンチの西
66	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	加工木片	7569	ソガ属	3	建築材周辺(削り津)
67	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	加工木片	7570	ヒノキ	2	建築材周辺(削り津)
68	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	加工木片	7571	スギ	2	建築材周辺
69	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	加工木片	7572	ソガ属	5	建築材周辺
70	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	加工木片	7573	ヒノキ	15	建築材周辺
71	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	自然木	7574	サカキ	1	建築材周辺
72	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	自然木	7575	カバノキ属	1	建築材周辺
73	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	自然木	7576	ヤナギ属	3	建築材周辺
74	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	加工木片	7577	イヌマキ属	2	建築材周辺
75	SR 6	H 3 西	SR33B 下層	自然木	7578	アカガシ属	1	建築材周辺
76	SR 6	H 2	SR33B 壁下層	加工木片	7579	ヒノキ	2	削り津
77	SR 6	H 2	SR33B 壁下層	加工木片	7580	スギ	13	-
78	SR 6	H 2	SR33B 壁下層	加工木片	7581	トウヒ属	4	-
79	SR 6	H 2	SR33B 壁下層	加工木片	7582	ソガ属	12	-
80	SR 6	H 2	SR33B 壁下層	加工木片	7583	ヒノキ	6	-
81	SR 6	H 2	SR33B 壁下層	加工木片	7584	イヌマキ属	7	-
82	SR 6	H 2	SR33B 壁下層	自然木	7585	ヒサカキ	1	-
83	SR 6	H 2	SR33B 壁下層	加工木片	7586	カヤ	1	-
84	SR 6	H 2	SR33B 壁下層	自然木	7587	ヤナギ属	3	-
85	SR 6	H 2	SR33B 最下層	自然木	7588	サカキ	3	-
86	SR 4	G 2	SR30 南扇部	根	7589	ハンノキ属 ハンノキ類(根)	1	-

参考種は鈴木三男先生(東北大大学教授)による同定

れた孔に腕木を差し込む構造である。本品にはこの腕木を差し込む孔が4ヶ所あり、いずれも孔は斜めにあけられている。復元長は約120cmほどであったものと思われる。

弓（16）は先端部に末羽がつくり出されている。イヌガヤの芯持ち材で、表面全体に削痕が残っている。県内から出土する木製弓はイヌマキ材が多いが、他県の例でイヌガヤ材が多いことからみれば、全国的な傾向と一致している。

弓（17）ヒサカキの芯持ち材で、形状から本羽側になる可能性が高い。全体にうっすらと黒化している。端部から4cmほどのところに幅1cmほどの切り込みが一周している。

18~36は用途不明木製品である。

18~21は棒状木製品。18はスギ材。断面は円形を呈する。上端部は欠損している。19は一部欠損しているがほぼ完形品である。表面は縦位の加工痕が全体に見られる。20は著状の木製品である。全面に粗い加工痕が残る。21は上端部が刃物によって斜めに切り落とされている。やはり表面全体加工されている。

22~25は板状木製品。表面に加工の痕跡はあるが、欠損部分が多いことから完成品の形状は想定できない。樹種はモミ属・スギなどの針葉樹である。

26は有孔の板状木製品。上半部は軸状に加工され、下方は板状を呈する。板状の部分に径0.5cmほどの円形孔が2ヶ所あいている。板部分の断面形は中央に膨らみを持ち左右両端に向かって薄くなる。

27は断面が円形を呈する円柱状の木製品。上端部は丸みを帯び、幅1.2cmほどの溝が切り込まれている。

28は全面に加工痕があるものの製品ではなく、加工の際に生じる削片と思われる。

29は下端部に段が切り込まれている。

30は上端部に顕著な刃物の加工痕が残っているが、全体に腐食・風化がひどく、下端部は火を受けて炭化している。

31・32は杭状に加工された棒状の製品である。31は分割材であることから転用・再利用されている可能性がある。

33は細い棒状に加工された木製品であるが、上下両端部が折損していることから用途は特定できない。全体に丸みを帯びた棒状に加工し、下方に向かい細くなる。表面は縦位の加工痕が部分的に観察できる。

34はイヌガヤの芯持ち材。表面全体に丁寧な削りを施してある。上端部は斜めに切り落とされている。樹種や加工の状況から見て弓である可能性もあるが筒状の加工は見られない。

35は約15cmの円形孔がある大型の板状木製品である。孔から上部は比較的残存状態が良いのに対し、下方は著しく腐食しており原形を止めない。上端部は角を落とし弧状に加工されている。また、表面には平坦な板状に加工したときの調整痕も見られる。建築部材の一部と考えられる。

36はブナ属の芯持ち材。とくに目立った加工は見られない。上端部に火を受けた痕跡がある。

当遺跡から出土した木製品を概観したところ、全般的に生活用具として使われていた木製品が多いということが言えよう。出土した木製品の用途は、農耕具、容器、紡織具、武具、祭祀具？、建築・土木材などである。全ての木製品が旧河道（S R 6）から出土しており、欠損品が多いことや北側に集落跡が発見されることから見ても、この集落で日常的に使われていた生活道具や部材と考えて良いであろう。

(S R 5・6出土土器について)

S R 5・6からは比較的多くの土器が出土している（第47～56図）ため、その内容について、ここで簡単にまとめておきたい。出土遺物の多くは S R 6 から発見されているため、遺物出土状況図（第39～42図）では、上層の S R 5 出土例も含めてまとめて報告している。

東端部の排水溝内上層からは、黒窯90号窯式併行の灰釉陶器（第47図2）が出土している。これは、S R 5 が平安時代前期には埋没していたことを示している。その他の上器の大部分は、須恵器と土師器である。回転実測をした土器で、器種を特定できたものの個数（同一器形の複数の部位が図化されている場合は、口縁部数で代表させ、明らかに異なる個体は計測部位を特定していない）は、須恵器が87点（60%）で、土師器が58点（40%）であった。

須恵器の器種組成は、壺8点、壺蓋3点、甕1点、高坏3点、坏蓋39点、坏身30点、甕3点である。

土師器の器種組成は、壺2点、甕・大型鉢27点、甕4点、高坏3点、坏19点、鉢3点である。

須恵器と土師器では、強度や接合のしやすさが異なり、各器種の大きさなども異なる。当然のことではあるが、これらの出土点数はあくまでも概数であり参考程度のものであるが、比較の目安にはなるので、もう少し分類項目を粗くして総点数の内の出土比率を検討する。須恵器は貯蔵具（壺・甕・壺蓋）12点（8%）、飲食具（坏・高坏・甕）75点（52%）で、土師器は貯蔵具（壺）2点（1%）、煮炊具（甕・大鉢・瓶）31点（21%）、飲食具（坏・高坏・鉢）25点（17%）である。

古墳時代末期から奈良時代の一般的土器組成から判断すると須恵器の占める割合が多く、なかでも飲食具の比率が高く、逆に土師器の飲食具の比率が低い点が特徴であろう。このことは、この集落が須恵器を入手しやすい地位にあり、また、付近に想像以上に多くの登り窯が存在していたことを示しているものと思われる。

土器の出土状況については前記したが、その出土状況から3群の土器が抽出可能である。仮にA・B・C群とし、以下に列記しておく。

A群は第42図の垂直ドット図のA-BとC-Dの下層に位置するもので、B群はその上層のものである。C群は同図のE-F垂直ドット図に示された一群である。

< A群 >

62・63・64・88・90・101・107・115・138・151・157・172・175・176・178・181・189・202・204・205・212・213・221

< B群 >

8・10・12・13・17・22・23・24・27・30・33・36・38・41・43・45・53・56・66・68・69・72・73・74・75・76・80・82・86・87・89・95・96・97・99・100・108・109・110・111・114・118・119・120・122・124・125・128・131・132・133・135・136・137・143・146・147・149・152・155・156・162・163・164・166・170・171・173・174・177・182・183・186・190・193・194・195・208・209・210・215・217・218・220・222

< C群 >

3・4・7・11・14・18・26・28・29・32・34・35・39・40・42・44・46・47・48・50・52・54・58・59・60・61・67・85・92・94・98・102・103・104・117・123・130・142・158・159・179・180・185・186・187・192・197・200・206・228・231

C群のなかで、4・35・67はかなり標高が低く、出土地点は S F 12 に近接しているため、S F 12 内に混入したものと考えている。第84図13・14も S R 5 に伴っていた可能性が高い。

これらの3群は、C群のなかに奈良時代の土器が多く存在するという点から、かなりの重複はあるが、A→B→C の順に推移したものと考えられる。

(2) 平安時代末期から鎌倉時代

この時期の旧流路には、調査区北西部に S R 1 があり、中央部に S R 4 が位置している。おそらく、水は西から東（山側から海側）へと流れられたものと考えられる。

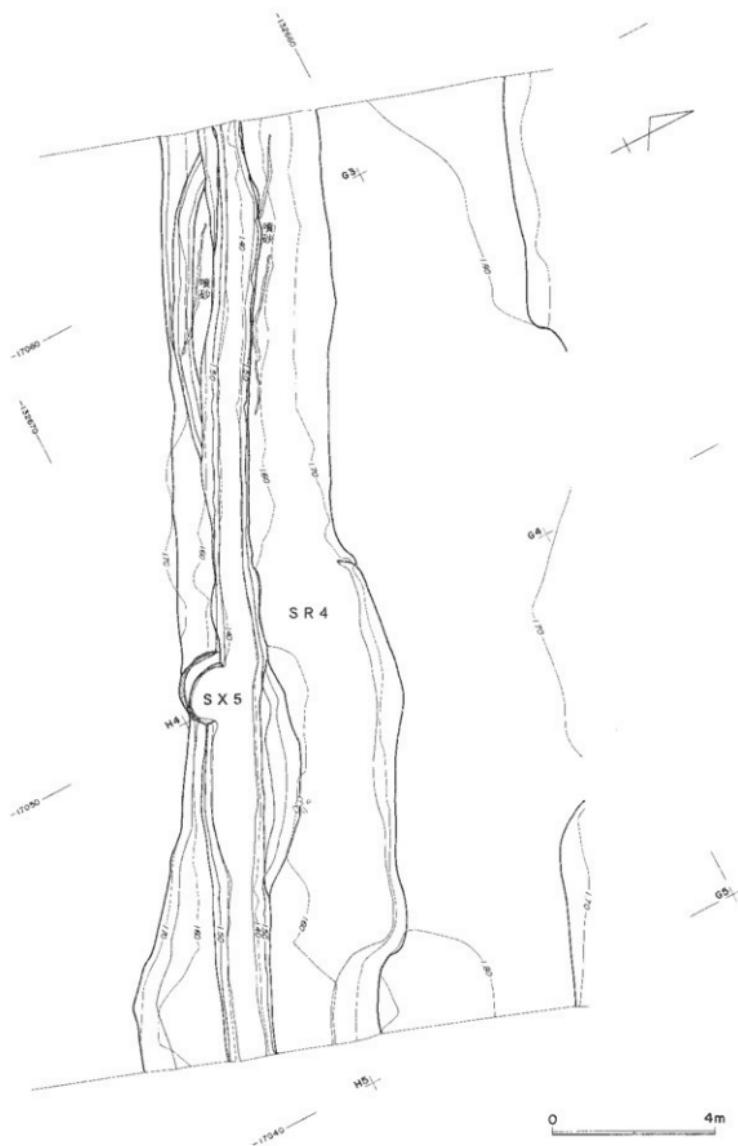
S R 1（第12図）は、北側に浅いテラス部分があり、南側が深い。上層から炭化物と共に少量の土器が出土している（第80図右下）。土器には、特殊な須恵器質の壺（18）や S X 1 出土土器と接合した山茶碗（16）などがあり、鎌倉時代後半には埋没したようである。

S R 4（第35・37図）は、両岸に浅いテラスがあり、中央部が抉れている。埋積土は暗褐色粘土が主体で、急な水の流れは想定できない。むしろ、漏水していたような状況ではなかったかと思われる。西端付近のテラス部には、並行した脈状の噴砂も確認された。この噴砂は S R 4 より新しい。

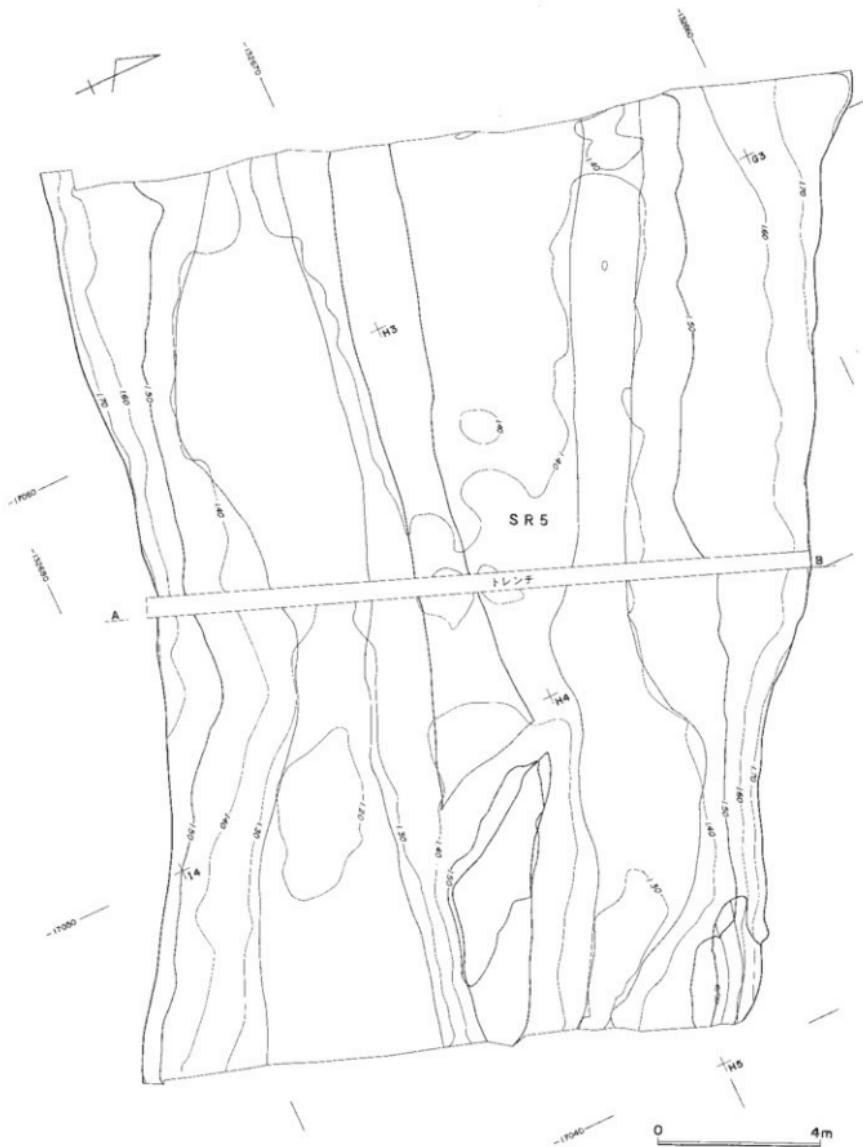
出土遺物には少量の山茶碗などがあり（第83図下）、おそらく鎌倉時代には埋没したものと思われる。

表10 溝・旧流路一覧

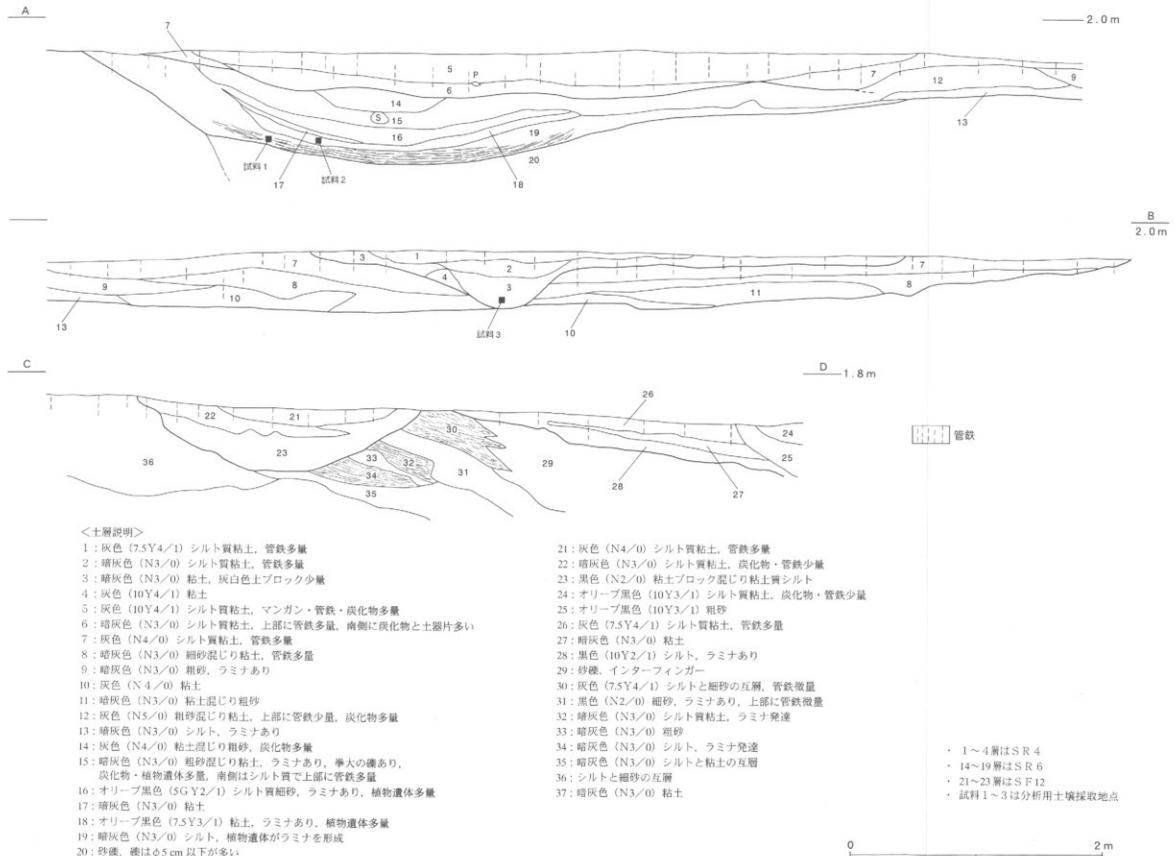
押岡番号	遺構名	旧遺構名	方 向	断面形態	幅 (cm)	底面高 (cm)	備 考
66・67	SD 1	SD10	N-30°-E	U字形	102	163	方向は北西辺、方形区画
57	SD 2	SD 7	N-50°-W	U字形	80	162	窯・土器・焼土多量出土
10・11	SD 3	SD12 SD13	N-65°-W	U字形	72	166	方向は北西辺、L字形、雨落ち溝
10	SD 4	—	N-58°-W	U字形	40	167	SF 2 と重複、雨落ち溝
10	SD 5	—	N-54°-W	U字形	46	175	SX 1 と重複、雨落ち溝
10	SD 6	SD21	N-41°-E	U字形	62	172	雨落ち溝
66・68	SD 7	SD 4	N-25°-E	U字形	204	166	SF 1 と重複
66	SD 8	SD11	N-27°-E	U字形	52	169	
66・67	SD 9	—	N-27°-E	U字形	86	139	
66・67	SD10	SD 6	N-68°-W	逆台形	66	167	長さ362
7	SD11	SD 8	N-59°-W N-87°-E	U字形	42	169	
7	SD12	—	N-60°-W	U字形	38	172	
66	SD13	—	N-60°-W	U字形	40	168	
28	SD14	—	N-65°-W	U字形	30	170	
59・60	SD15	SD35	N-63°-W	U字形	114	148	西側より磚・土器多量出土、SD17と重複
59・60	SD16	SD36	N-59°-W	U字形	114	153	西側でSD17・SX 6 と重複、SH 5 より古い
59	SD17	SD41	N-25°-E	U字形	62	161	SD15・SD16と重複
59	SD18	SD39	—	U字形	26	172	L字形、SX 6 と重複
59・60	SD19	SD40	N-30°-E	U字形	52	168	SD16・SX 6・SH 6・SH 7 と重複
59	SD20	SD90	N-18°-E	U字形	35	153	SD15と重複
69	SD21	SD108	N-46°-E	U字形	120	155	上層にSX 9
69	SD22	SD109	N-90°-E	U字形	110	159	上層にSX 9
69	SD23	SD155	N-60°-E	U字形	130	139	長さ552、粘土・焼土・炭化物多量 SR 7 より古い
12	SR 1	SD 1	N-63°-W	略U字形	174	160	北側に浅い段あり
28	SR 2	SR32	N-20°-W	U字形	180	166	北側は擾乱されている
28	SR 3	SR28	N-62°-W	U字形	662	157	中央部は浅いため未確認
35・37	SR 4	SR30	N-61°-E	略U字形	600	128	南・北側に段あり、西側に噴砂N-55°-W SX 5 と重複、下層にSR 5
36・37	SR 5	SR33A	N-71°-W	底面凸凹あり	1884	122	上層にSR 4、下層にSR 6、広く 浅い流路で、範囲不明瞭
37・38	SR 6	SR33B	N-87°-W	U字形	648	67	北側に段あり、中央や西寄りが 深く本製品の集積あり
9	SR 7	SR101	N-78°-E	—	1500	150	南西部で二段に分かれている



第35図 SR4 平面図



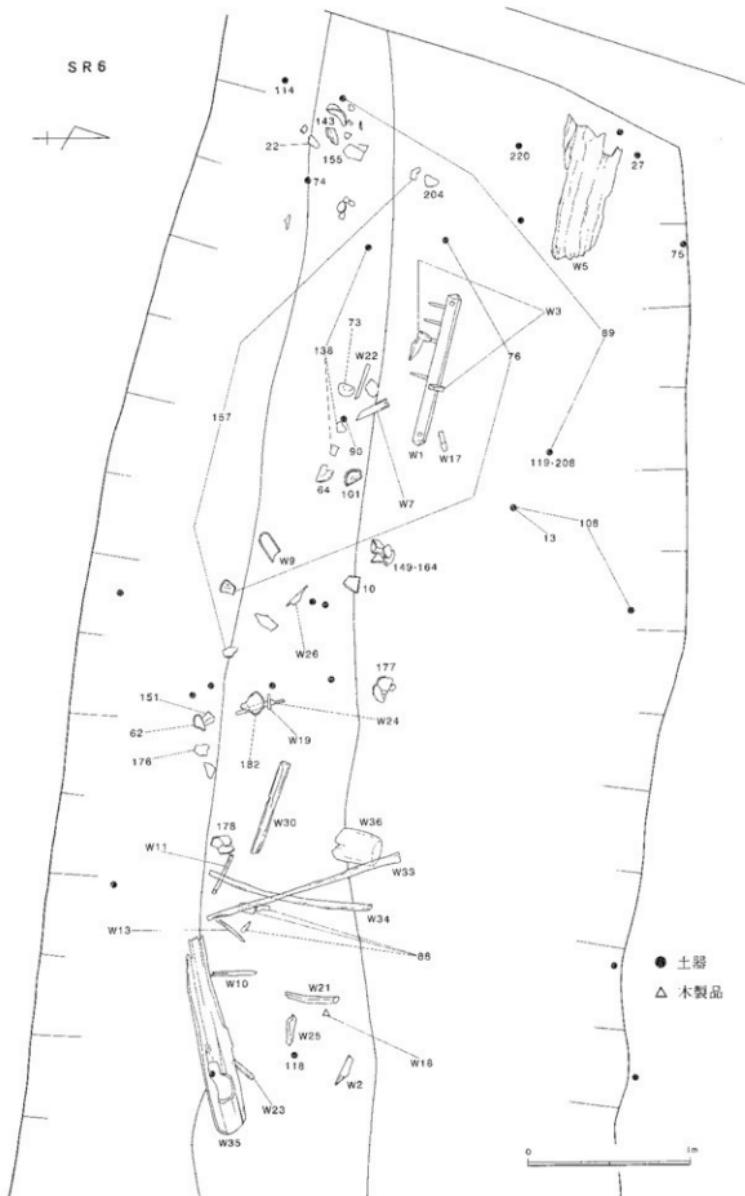
第36図 SR 5 平面図



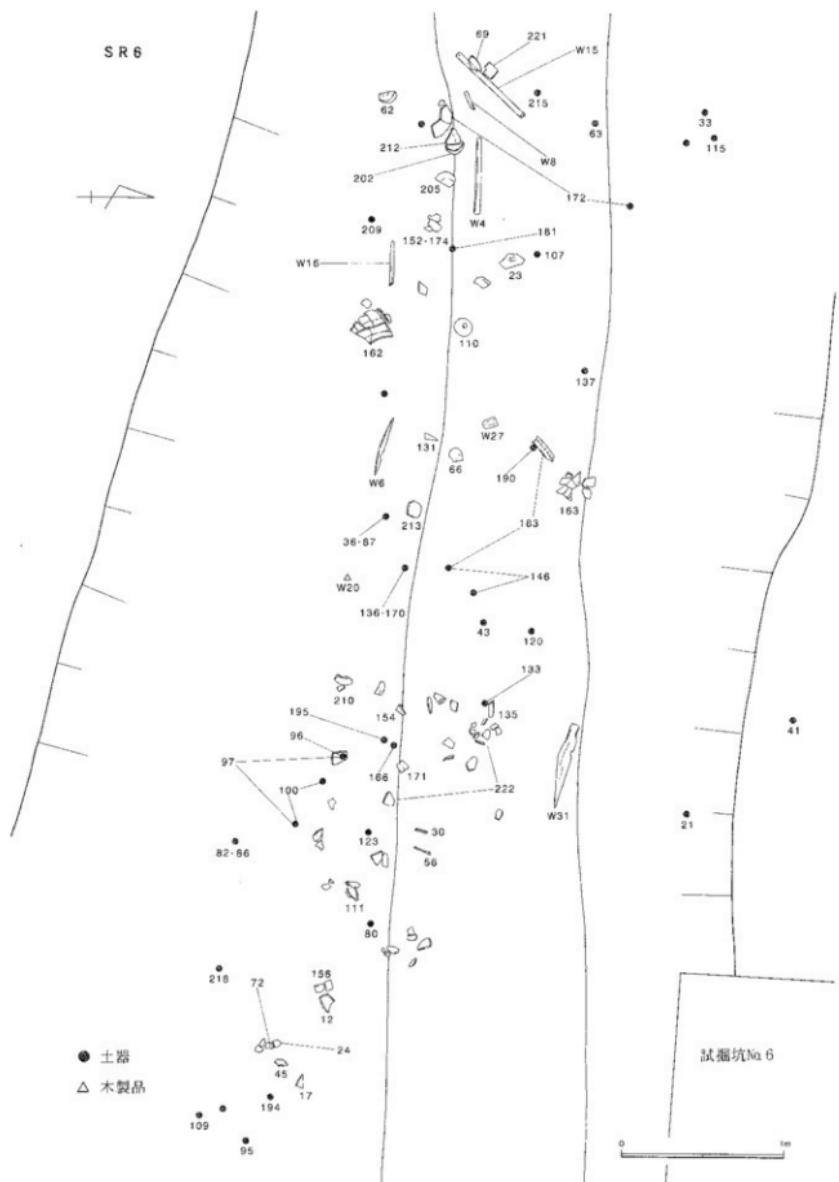
第37図 S R 4～6・S F 12 断面図



第38図 SR 6 平面図

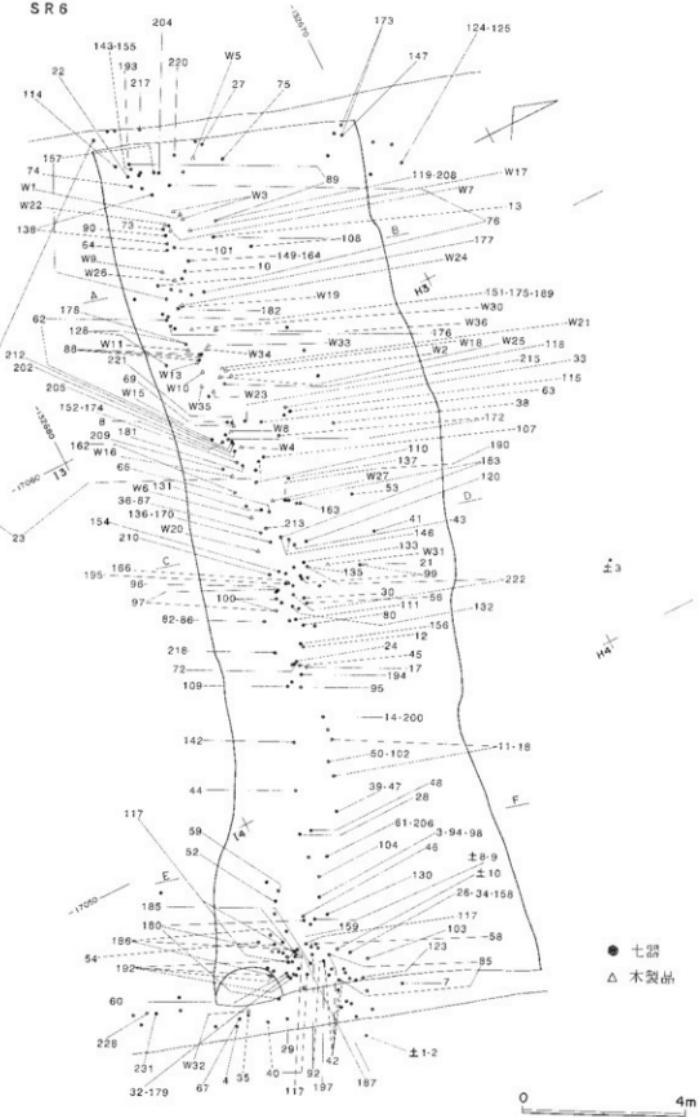


第39図 SR 5・6 遺物出土状況図(1)



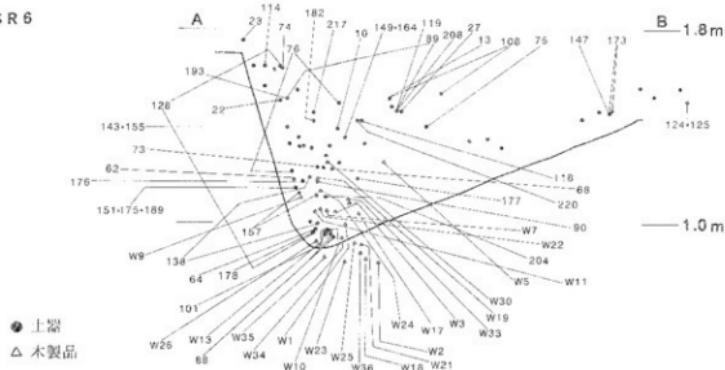
第40図 SR 5・6 遺物出土状況図 (2)

SR 6



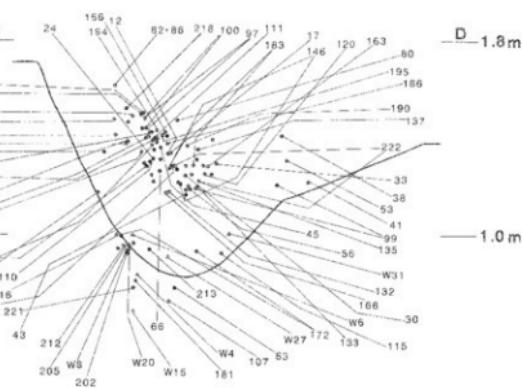
第41図 SR 5・6 遺物出土状況図（3）

S R 6



1m
0
2m

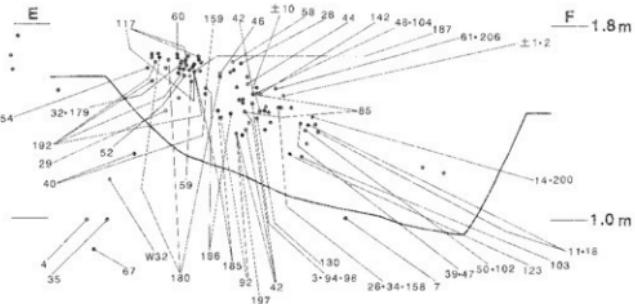
C



B - 1.8 m

1.0 m

E

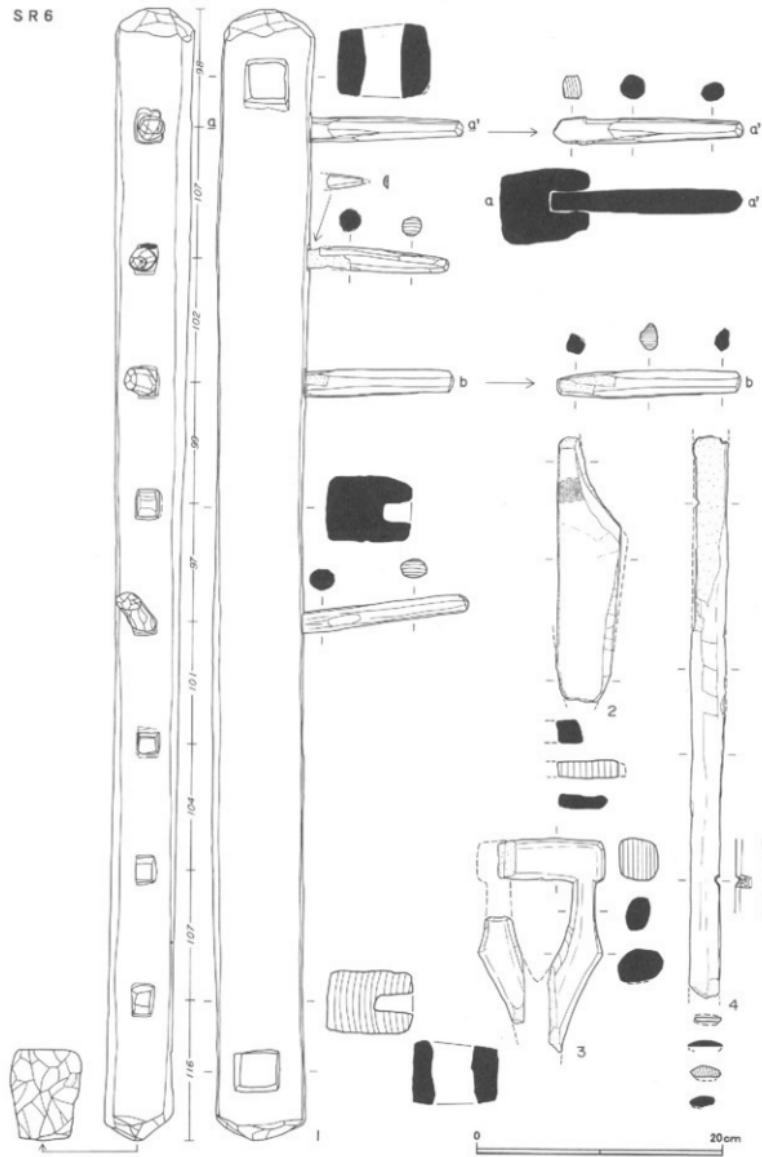


F - 1.8 m

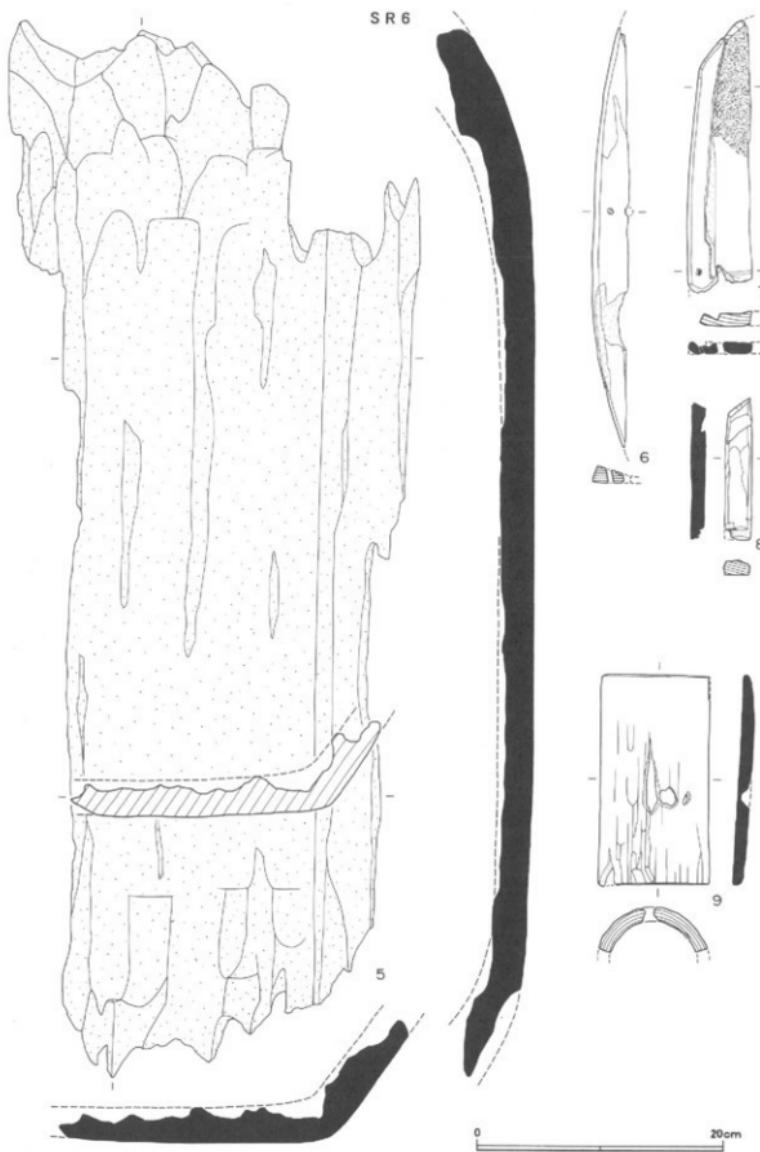
1.0 m

第42図 S R 5・6 遺物出土状況図(4)

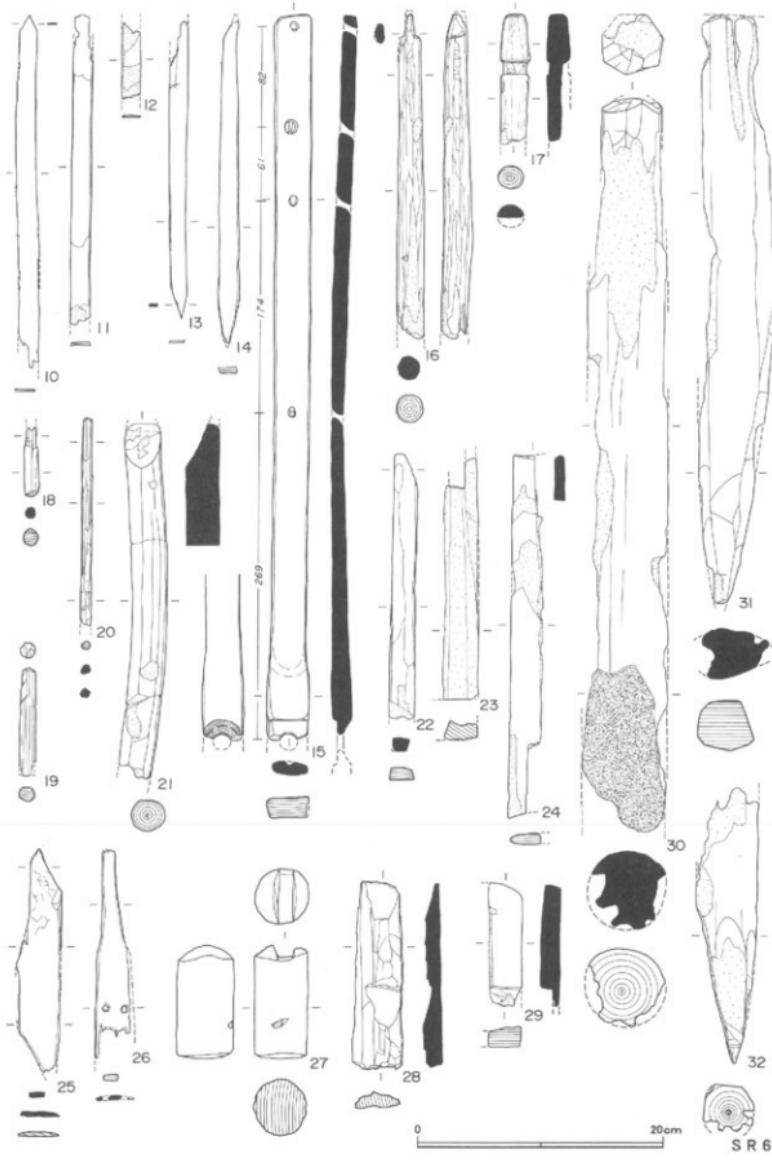
SR 6



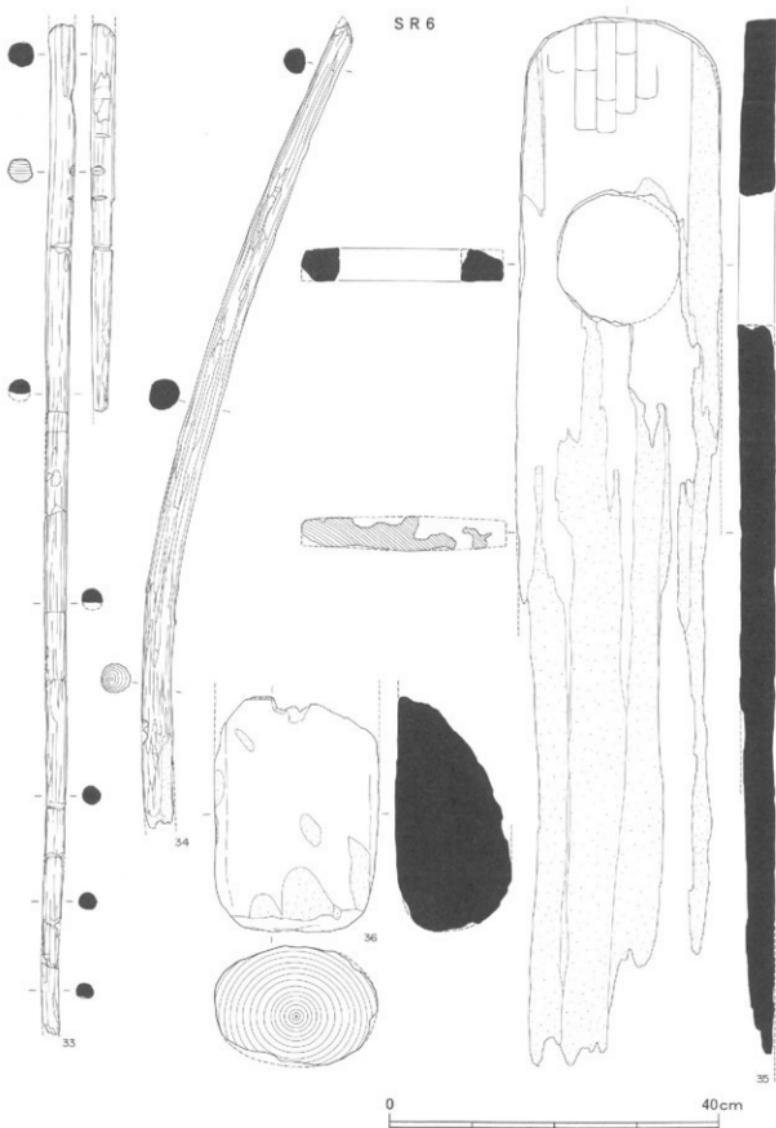
第43図 SR 6 出土木製品実測図（1）



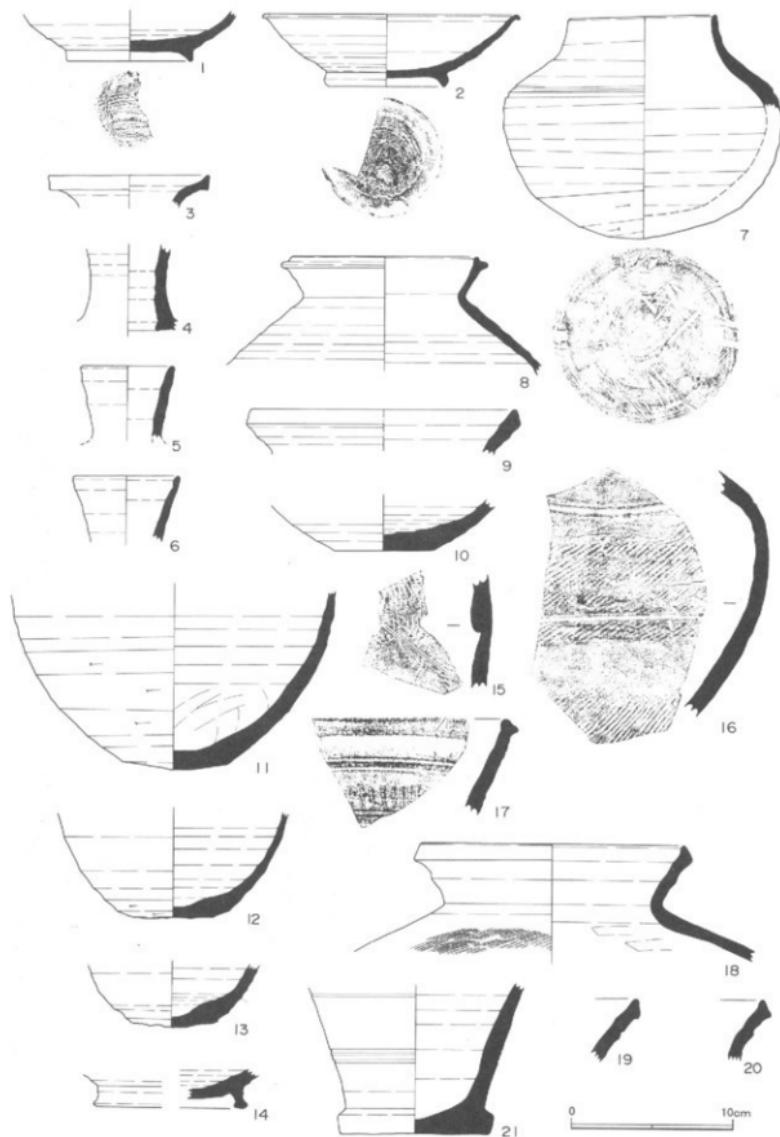
第44図 SR 6 出土木製品実測図(2)



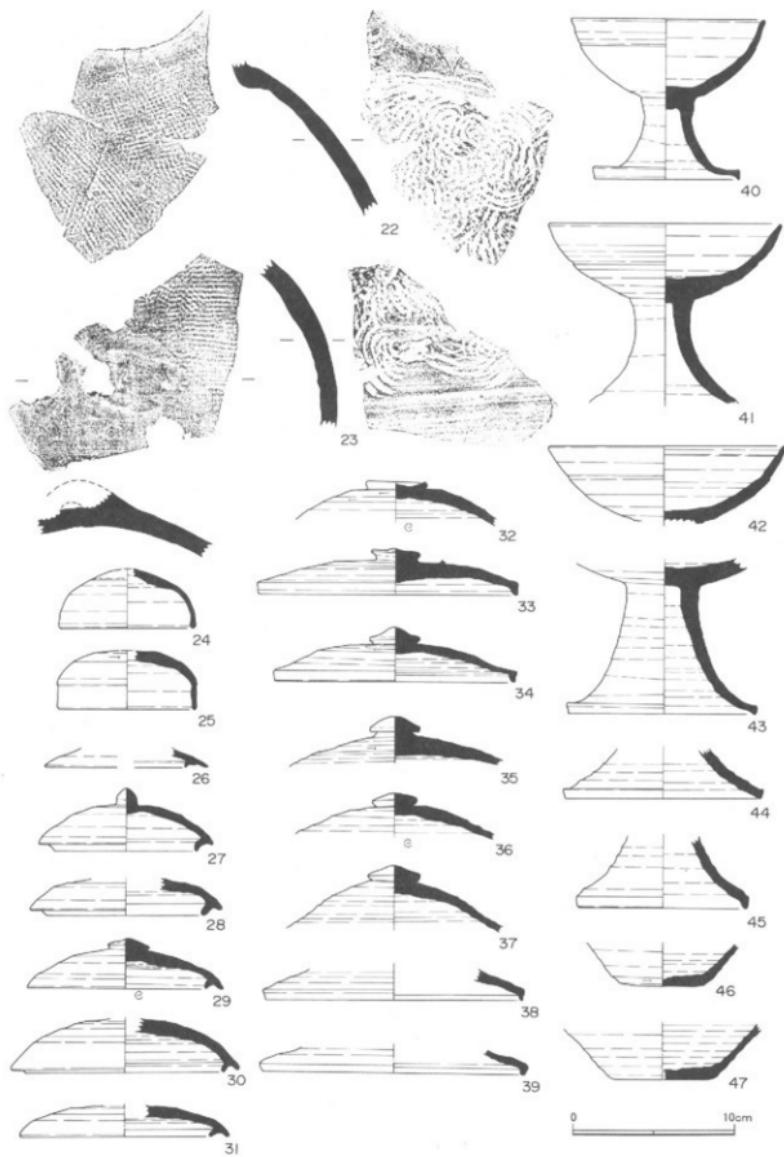
第45図 SR 6 出土木製品実測図 (3)



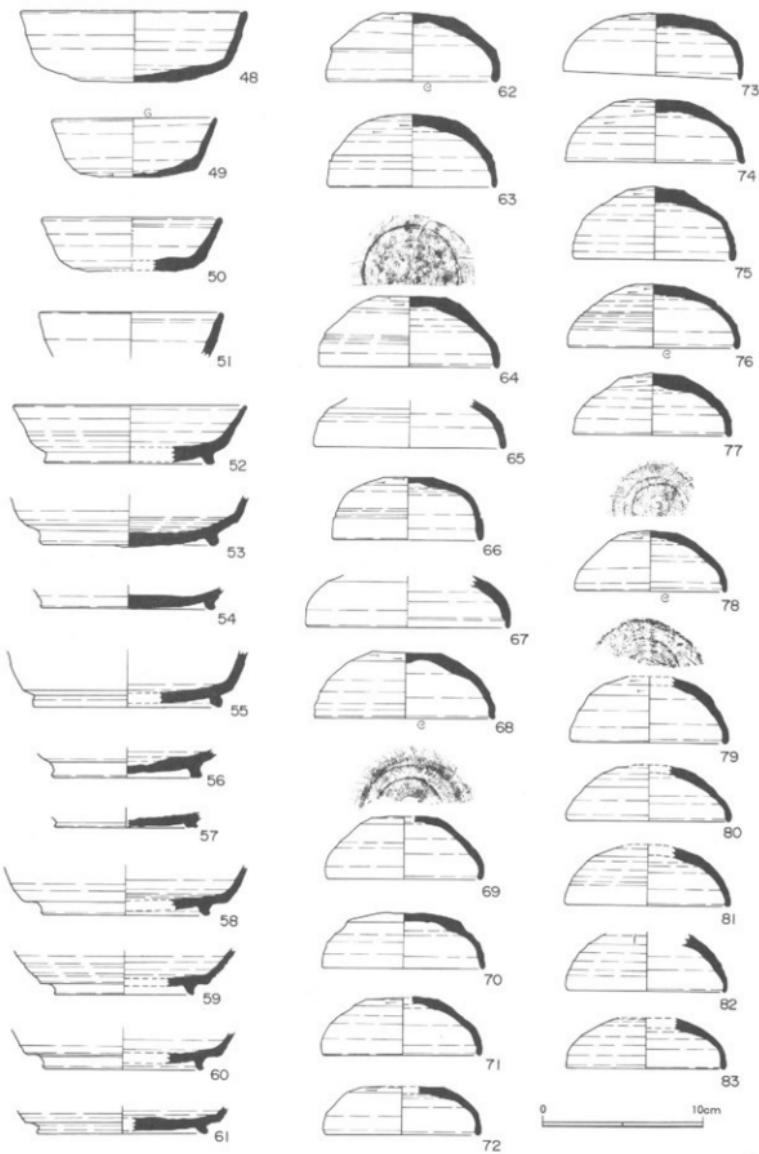
第46図 SR 6 出土木製品実測図(4)



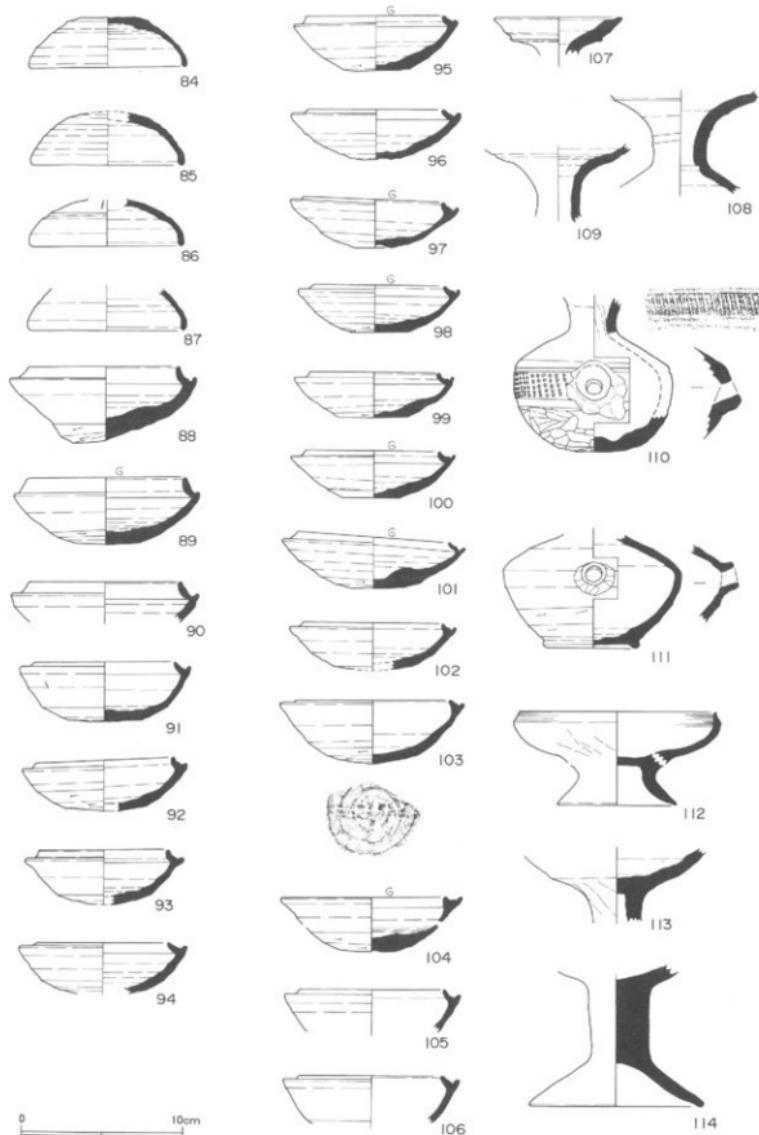
第47図 SR 5・6 出土土器実測図 (1)



第48図 SR 5+6 出土土器実測図 (2)



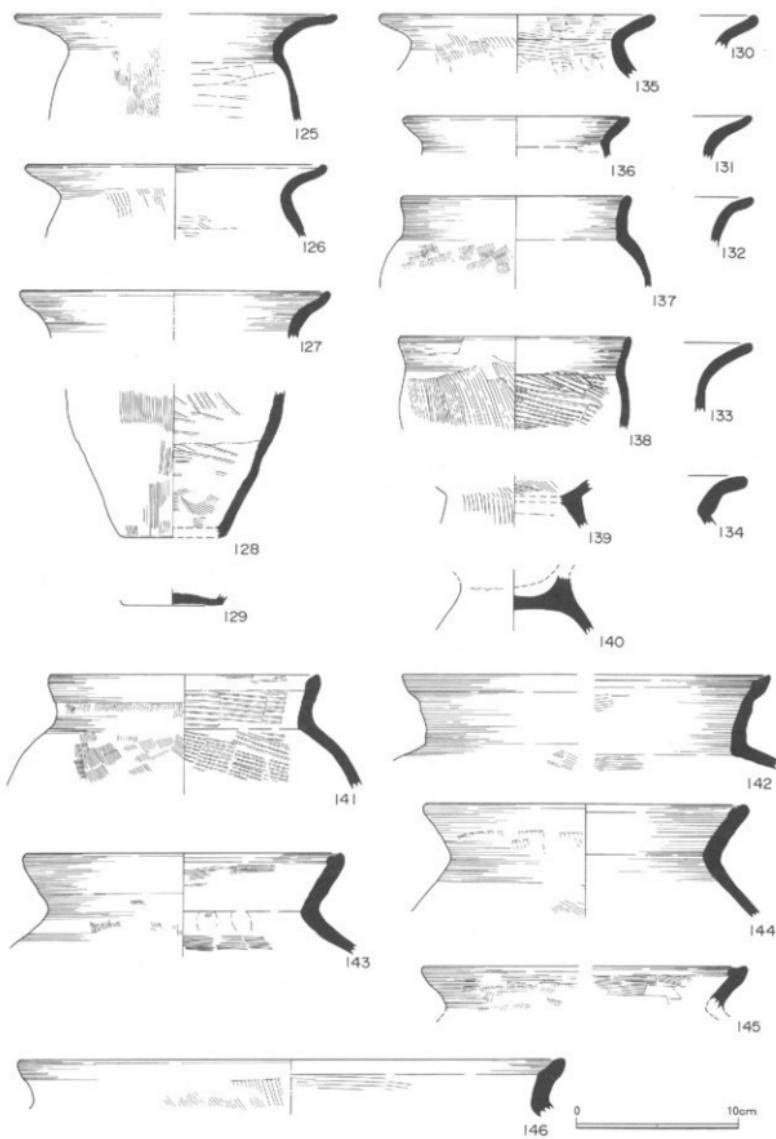
第49図 S R 5・6 出土土器実測図（3）



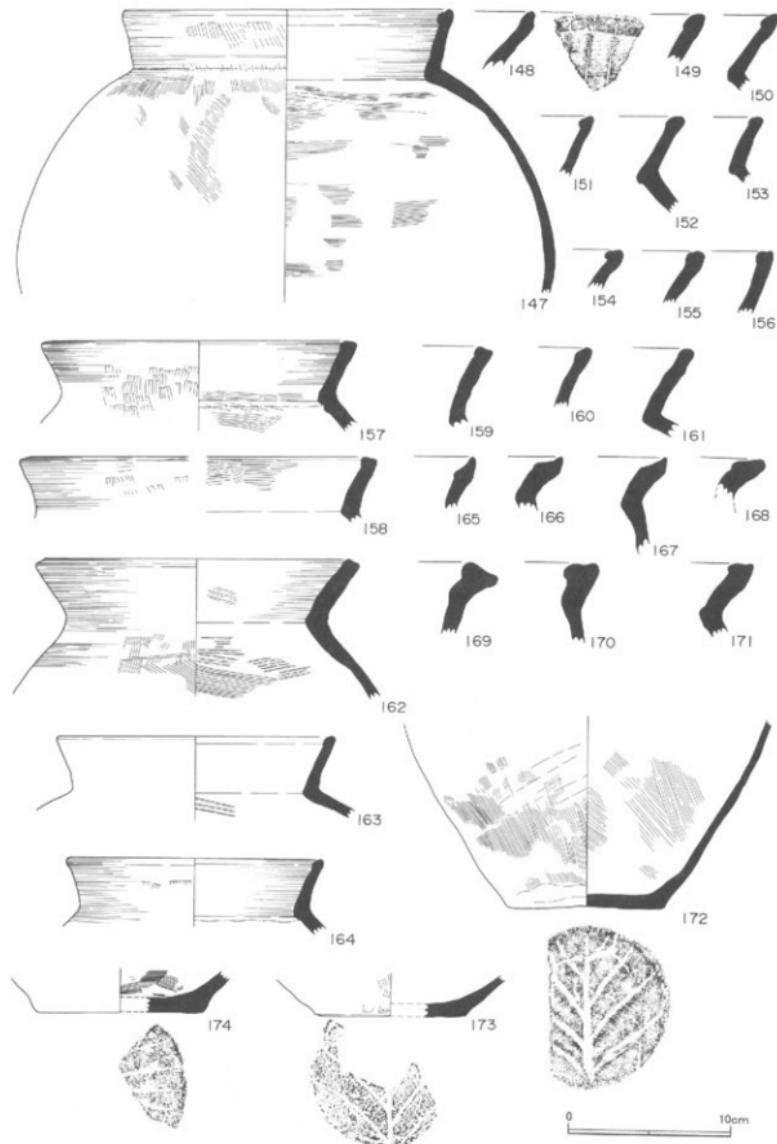
第50図 S R 5 + 6 出土土器実測図 (4)



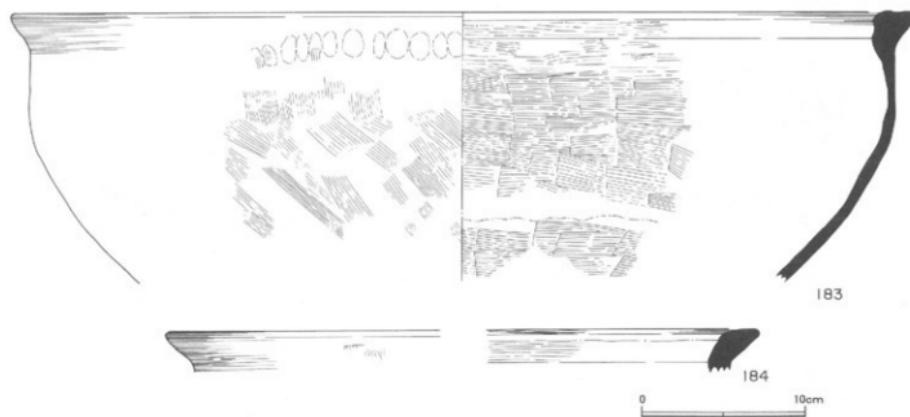
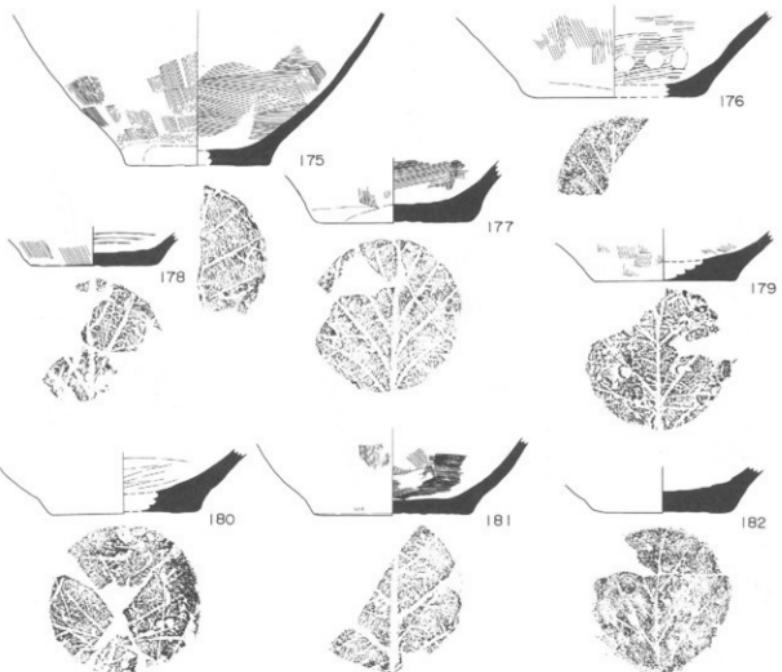
第51図 SR 5・6 出土土器実測図（5）



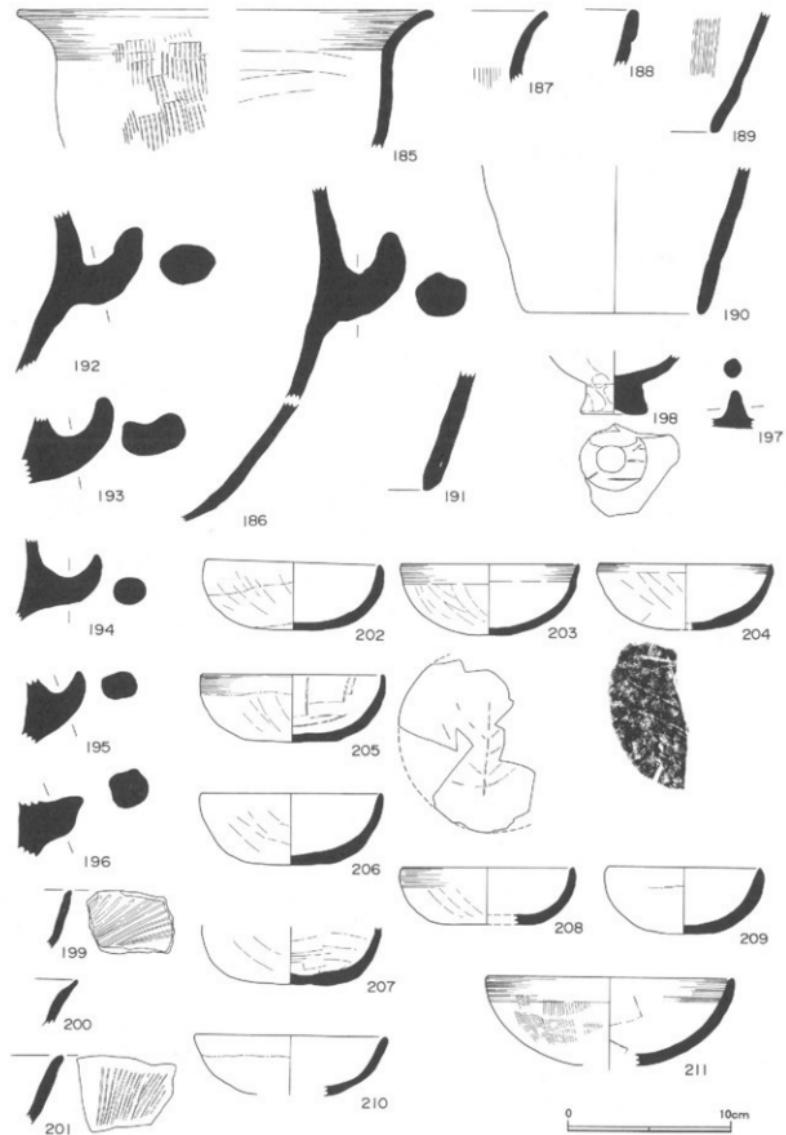
第52図 S R 5・6 出土土器実測図 (6)



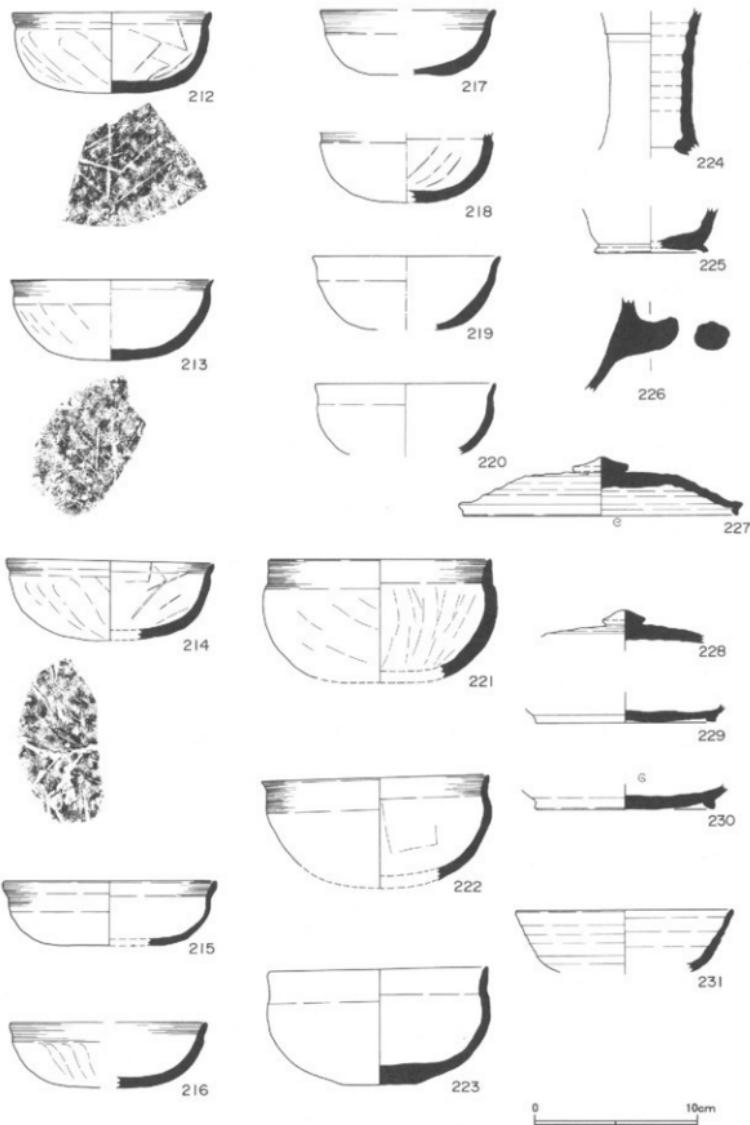
第53図 SR 5+6 出土土器実測図(7)



第54図 SR 5・6 出土土器実測図 (8)



第55図 S R 5 + 6 出土土器実測図 (9)



第56図 SR 5・6 出土土器実測図 (10)

第6節 溝状遺構と出土遺物

(1) 古墳時代末期から奈良時代

F 3 区に S D14 が、調査区南東部に S D21・22・23 が位置している。

S D14（第7図）は S R 3 と同様の侵食痕、もしくは耕作痕の可能性があり、時期は奈良時代以降で、平安時代に下るかもしれない。

S D21・22・23（第69図）は隣接し、その在り方も類似している。確認面の上層では S X 8・9（第82図）が存在し、S D21・22 はこれらに関連するか、もしくはより古いものと推察される。

S D23（第69図）は S R 7 の下面に位置し、炭化物や焼土が厚く堆積している。堆積土に部分的にラミナが認められることから、何らかの遺構を侵食している可能性がある。南西部からは土師器の壺片がわずかに発見されている。

(2) 平安時代末期から鎌倉時代

調査区北部に S D 1～13 が位置し、南部に S D15～20 が存在する。溝状遺構群がまとまっている調査区北部からは、流れ込みを除いて当該期の土器以外の出土例は無く、また、遺構内の堆積土はかなり類似している。南部の群は山茶碗が出土している例が多く、堆積土は共通している。

S D 1（第66図）は調査区北東部にあり、北側の確認調査の結果、方形区画になる確率が高くなった。規模は大きい所で幅が約 1m、深さが約 0.2m と区画溝としては小さい。南側は固い砂疊層を掘り込み、やや丸味のあるコーナーをつくっている。

出土土器（第58図左上）には微量の山茶碗などがある。文字は判然とはしないが、墨書き（3）が 1 点出土している。

区画内の同時存在の遺構は不明であり、また、S D13 以南はベースの砂疊層の標高が高く、遺構のプラン確認が困難であった。

S D 2（第57図）は S D 1 の西側に位置し、その配置から S H 1 に関連するものと思われる。南北端の下層からは拳大の礫がまとまって出土している。

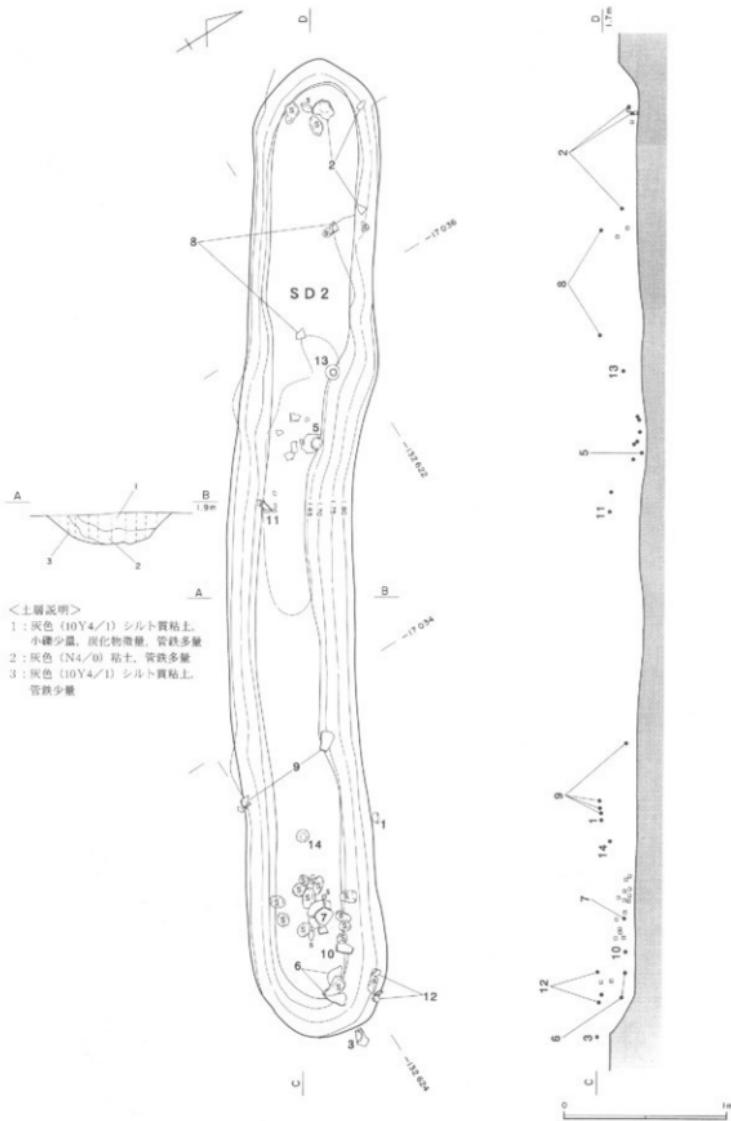
出土遺物（第58図右）には、比較的多くの山茶碗があり、輪花碗、小碗などがある。小碗は少数であるが、上層から 13 のような完形品が発見されている。南北端の下層からは、拳人の礫もまとめて発見されており、祭祀的様相も認められる。3 は比較的新しいが、確認面からの出土であり除外して考えると、多くの土器は 12 世紀後半に属するものと考えられる。

S D 3～6 は、第Ⅲ章第3節の S H 1 の項を参照していただきたい。

S D 7（第68図）は S E 1 に付属しており、単純に推測すると、北側に緩く傾斜しており、S E 1 で汲み上げた水の排水路として利用されてのではないかと考えられる。ただし、排水路にしては幅が広過ぎる点が難点である。

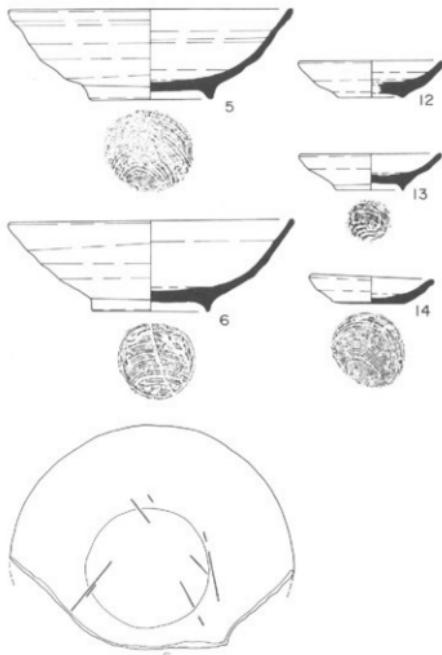
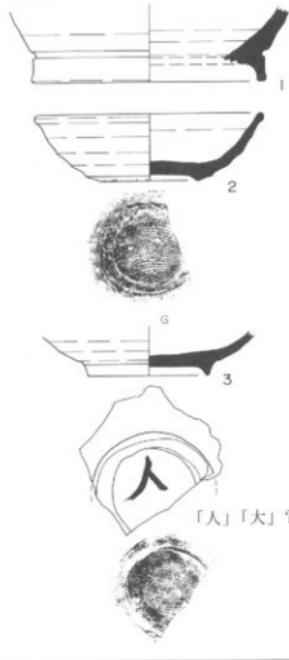
出土遺物（第83図上）には、壺、山茶碗や小皿がわずかにある。9・10 の小皿は完形品である。

S D 8・11～13（第7図）は、幅が約 0.5m と狭いもので、時期を特定できるような遺物は出土していない。S D11 は、第 7 図の 1 点破線の旧河道肩部に並行しており、おそらく侵食痕であろう。S D 8・12・13 は、S D 1 にかなり規制されているように見えるのであるが、これらの溝群と S D 1 の重複部分は深めに掘り下げたために、重複していないような図となっている点は注意していただきたい。これらの溝群については、とりあえず S D11 と同様の侵食痕と考えている。

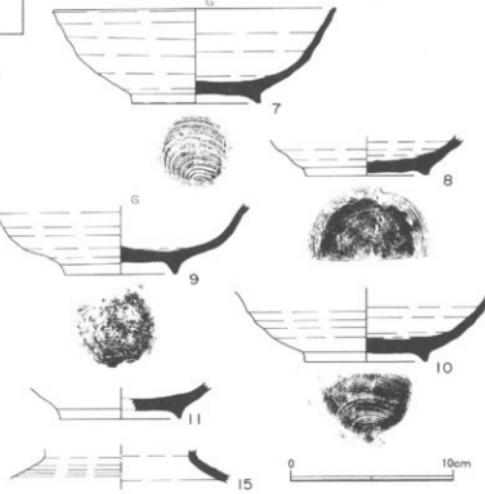
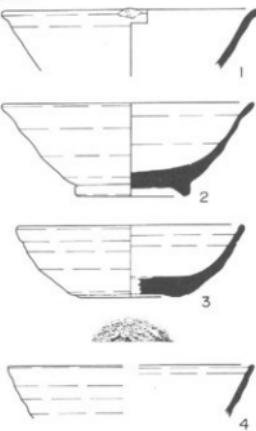


第57図 SD 2 平・断面図

SD 1

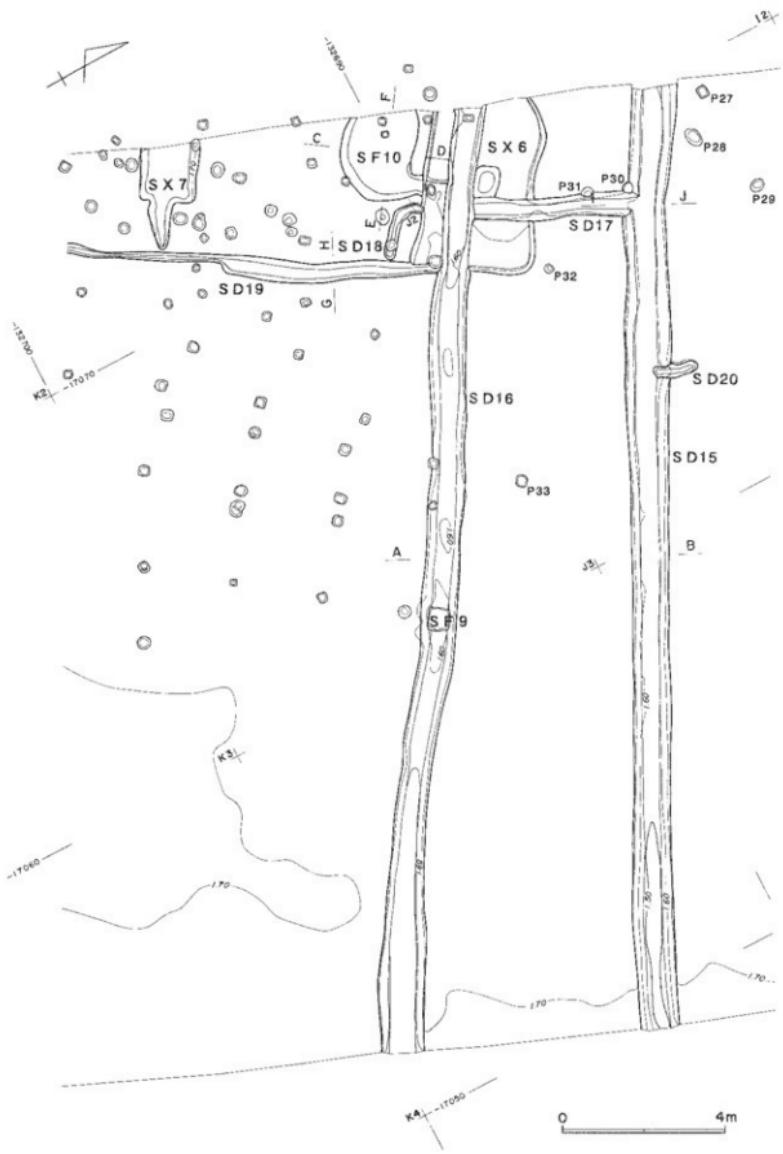


SD 2

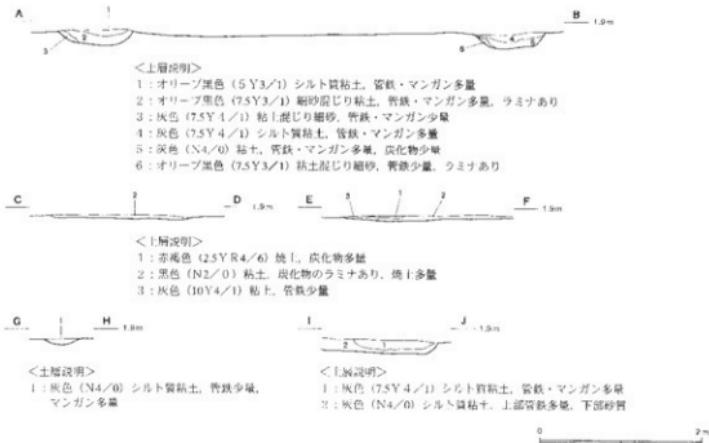


0 10cm

第58図 SD 1~3 出土土器実測図



第59図 SD15~19, SF9・10, SX6・7 平面図



第60図 S D15・16・19, S F10 断面図

S D 9（第66図）は深さ約0.3mと比較的深いが、出土遺物も無く、詳細は不明である。

S D 10（第66・67図）は長方形の浅い土坑状を呈している。山茶碗や小皿の破片がわずかに出土しているが、性格は不明である。

S D 18・20（第59図）は性格不明であり、生痕の可能性もある。

S D 19（第59図）からは山茶碗が微量出土した。この溝状遺構はS D 16以北には伸びていないことから、両者は併存していた可能性がある。S D 19の方向はN-30°-Eで、南側にも長く伸びていることから、S H 10に付属した施設の一部となるかもしれない。

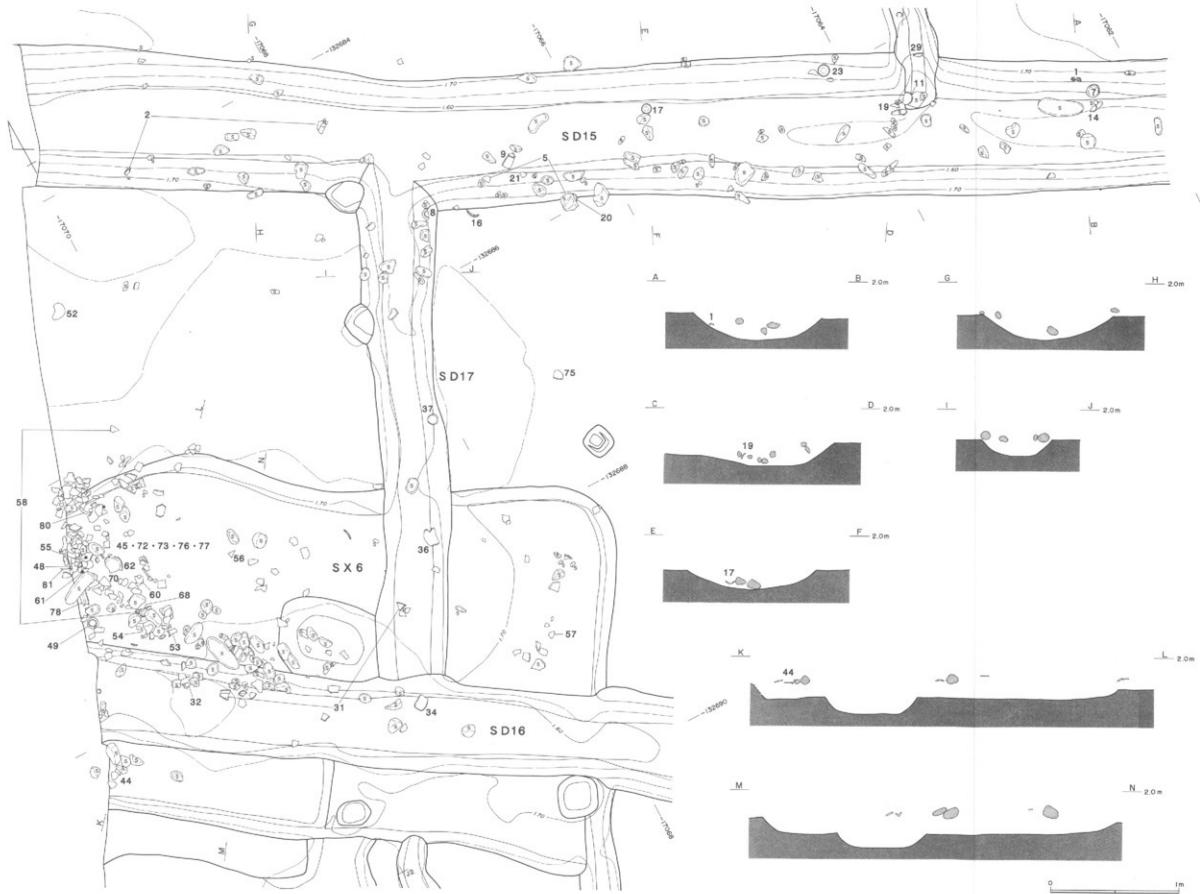
S D 15~17（第59~61図）は、堆積土の状態、遺物の出土状況、出土遺物などから同時期に存在し、埋没したものと考えられる。S D 15・16と掘立柱建物跡の関係については、第Ⅲ章第3節を参照していただきたい。

並行するS D 15・16は、芯々間で4.5m~6.3mである。方向はN-略60°-Wで、昭和41年の東部地区上地改良事業以前の水田畦畔の方向と一致する（第95図）。ただし、南側の現道までは約80mで、1町よりかなり短い。

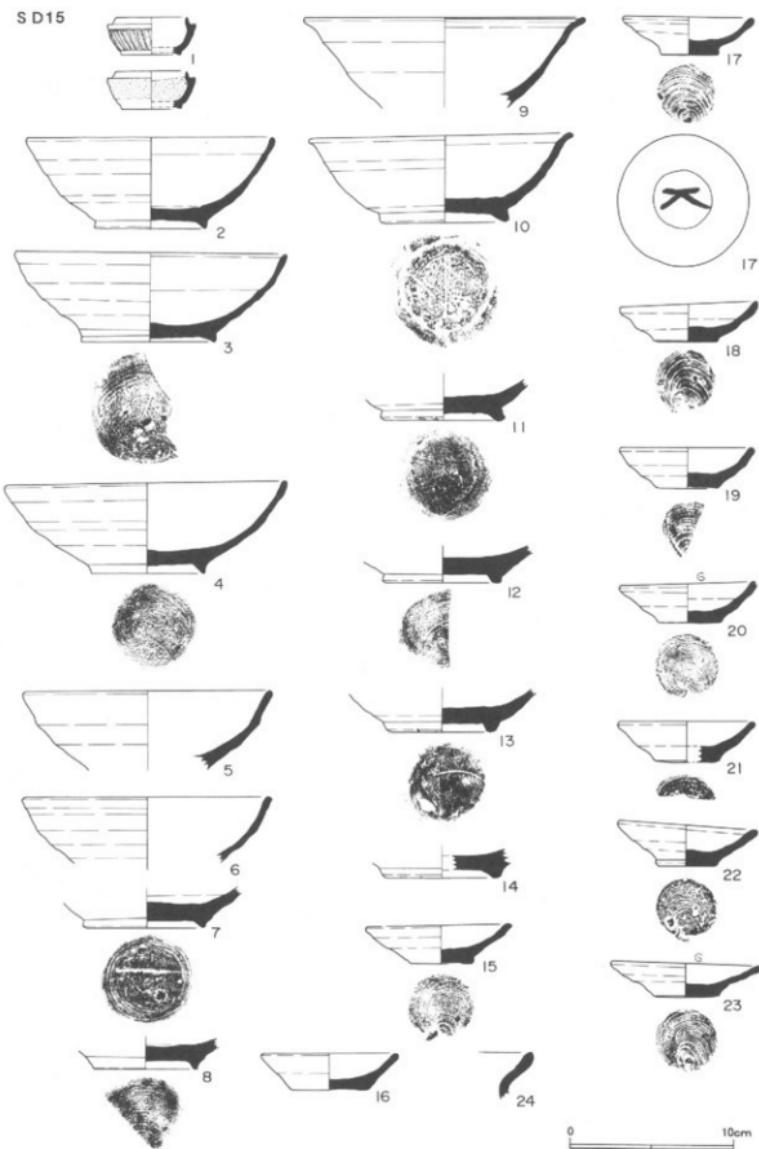
S D 15・16はその配置より、道路状の遺構の可能性を想定している。この仮定が正しければ、明治期の地籍図のN-略30°-E畦畔は、12世紀後半の莊園制の進展に伴う条里制の影響が残存しているが、その区画の大きさはかなり改変を受けている可能性を指摘できる。

S D 15~17からは、拳大の碟と山茶碗が多数出土している。碟は当初S X 6に伴っていたものが、S D 15・16間の整地や片付けなどに伴い移動し、溝内に自然に落石埋没したものと土器と共に廃棄されたものがあると思われる。碟と土器の出土地点には相關関係が認められ、遺物は人為的に投棄されたものが多いと考えられる。

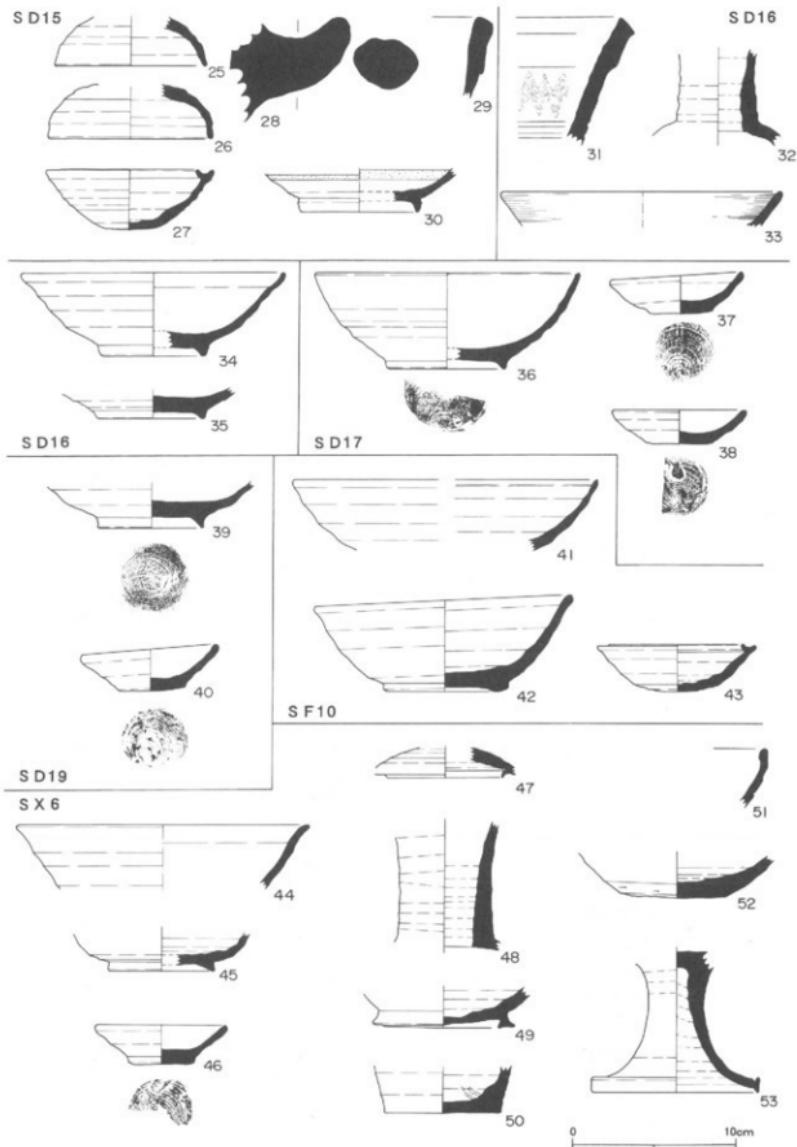
S D 15出土土器の大半は山茶碗で、碗と小皿が16点（底部破片が1個体分の割合になったものを1点として計算）で、碗8点（50%）、小皿8点（50%）である。碗には湖西・渥美産（10~14）と尾張



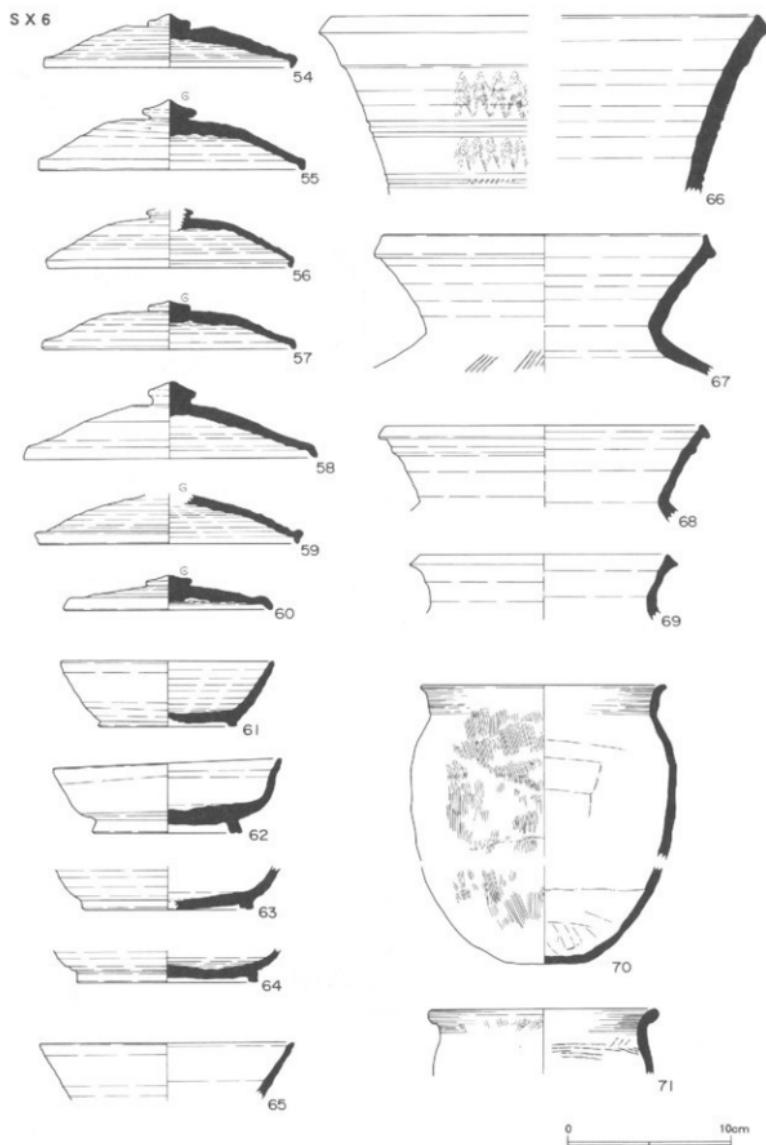
第61図 SD 15~17・SX 6 遺物出土状況図



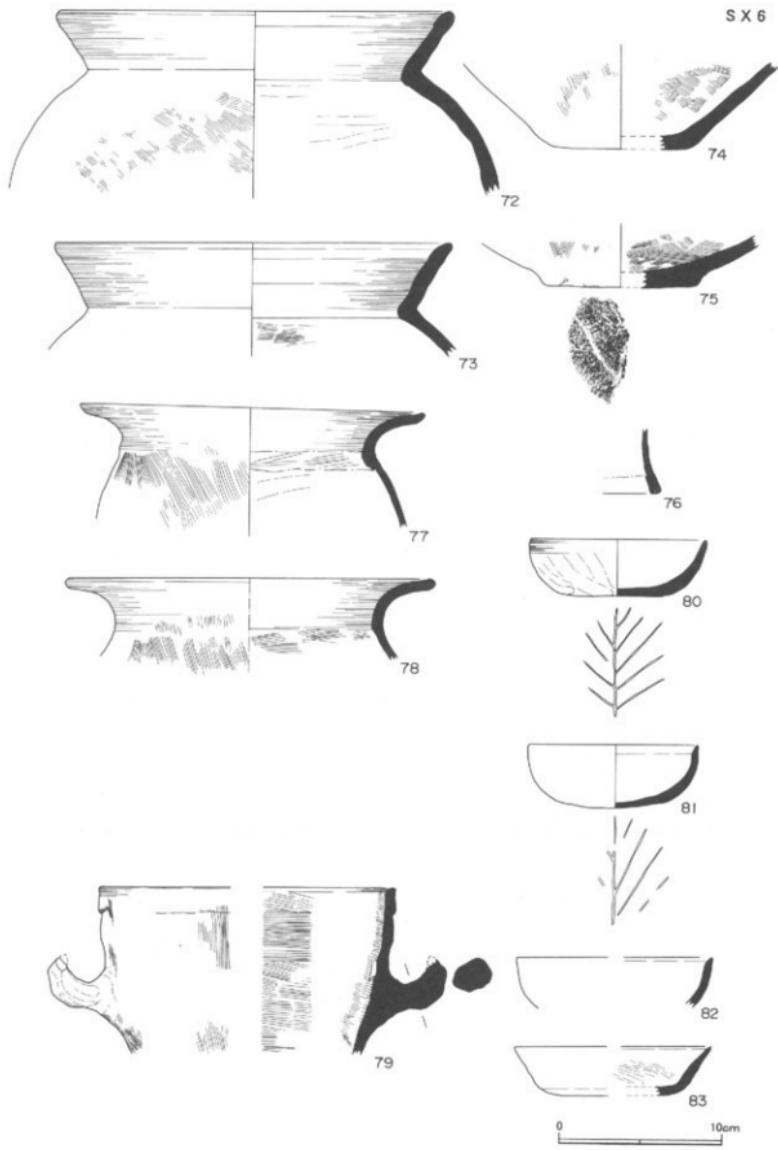
第62図 SD 15 出土土器実測図



第63図 SD 15~17・19, S F 10, S X 6 出土土器実測図



第64図 S X 6 出土土器実測図 (1)



第65図 S X 6 出土土器実測図 (2)

産？（9）の製品も含まれている。湖西・渥美産は後藤編年Ⅱ期（後藤1987）である。これらは、およそ12世紀後半から13世紀前半に位置付けられている。小皿の出土比率は比較的高く、なかには完形品（17・18・23）や底部外面におそらく「大」と墨書きされた土器（17）も出土している。

S D 15の中央やや西寄りの下層より、人頭大の礫と共に青白磁の合子身の破片（1）が出土している。発掘時にすでに割れており、廃棄時には破片の状態であった可能性が高い。この時期の合子は、墳墓や経塚などから、威信財や香入れとして発見される場合が多い。今回の例は、破片が溝状遺構内から出土しているため、その用途を特定できないが、古代の道路側溝内からは祭祀に関連する遺物が出土するの一般的であり、墨書き土器や完形土器の存在からも何らかの祭祀的行為を行っていた可能性もある。

第7節 井戸跡と出土遺物

調査区北東部から2基の井戸跡（S E 1・2）が発見された（第66図）。両者は砂礫層を掘り込んでおり、湧水が着いたため砂礫層より下部は確認していないが、現状では素掘りの井戸となる。時期を限定できるような遺物は出土していないが、周辺の遺構の在り方から、平安時代末期から鎌倉時代にかけてのものと推測できる。

S E 1（第68図）からは、拳から人頭大の礫が、埋没過程で廃棄された状態で出土している。この礫の間からは、馬齒（写真図版50下）が1点発見されており、井戸の廃絶に伴う水に関連した祭祀が行なわれたものと考えられる。馬齒の長さは約60mmで、おそらく壯齢であろう。

S E 1に接続するS D 7が、排水溝などの施設として機能していたならば、出土土器から13世紀の前半ぐらいまでは埋没したものと仮定できる。

馬や牛の頭蓋骨が南乞いの儀礼などに利用される例は、多くの民俗例によって確認されている。県内では、律令制の進展に伴い、8世紀代の旧河道や溝内から多くの頭蓋骨が出土しており、8世紀以降も水に関連した遺構などから発見されている。

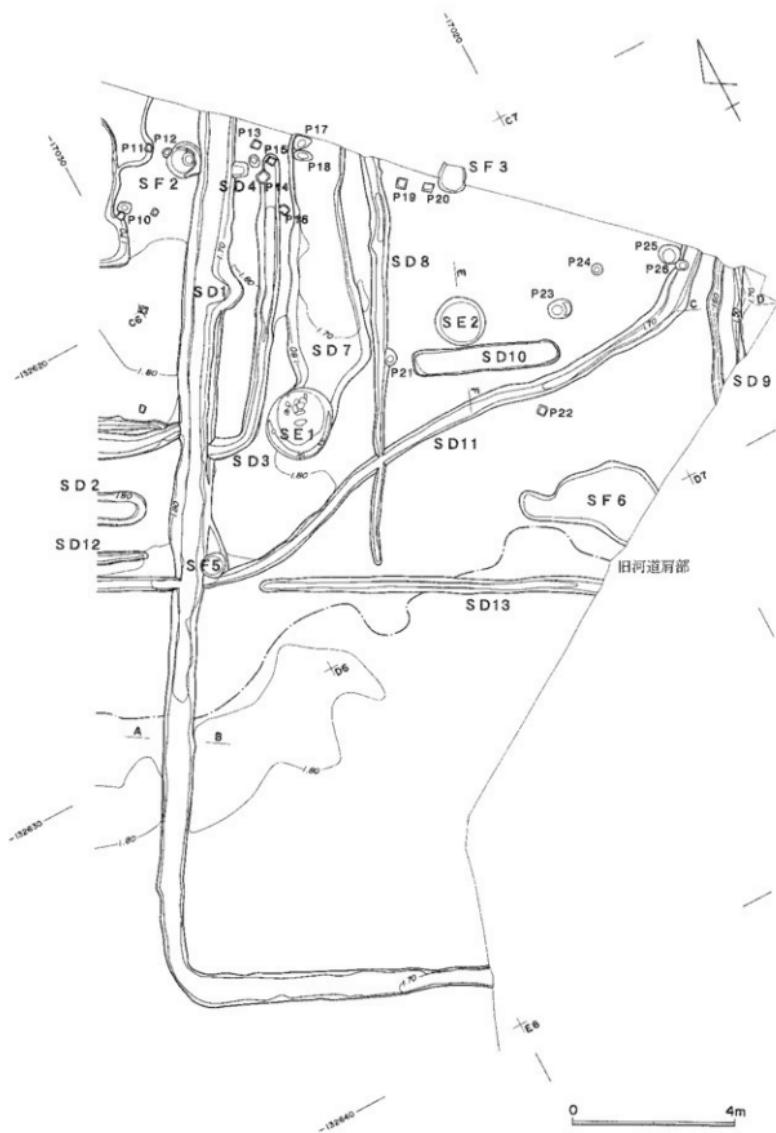
第8節 土坑と出土遺物

当遺跡で一般的な大きさの小穴（径約30cm）よりもやや大きい落ち込みで、掘立柱建物跡群の集中域から外れたものを土坑として報告している。土坑は15基存在するが、その形態は様々で、類形化するまではいたらなかった。そのため、以下の記述は主な七坑を中心にまとめる。

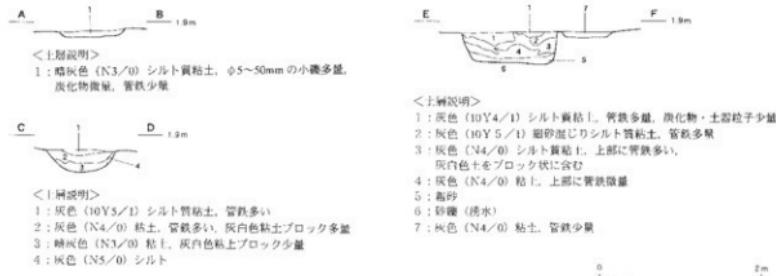
古墳時代末期から奈良時代にかけての土坑は、S F 7・11～15で、平安時代末期から鎌倉時代にかけてのものは、S F 1～6・8～10である。出土遺物が無いため、時期の曖昧な土坑もいくつか存在するが、遺構確認面の層位や周辺遺構との関係から、おおよそこれらの時期に属するのではないかと思われる。

（1）古墳時代末期から奈良時代

S F 7の上層からは須恵器の甕が3点出土している。各個体は破片が折り重なるように出土しており（第70・71図）、その面が遺物の集中域であるが、その下層からも礫に混じって微量の土器が出土してい



第66図 SD 1~4・7~13, SF 2・3・5・6, SE 1・2, P 10~26 平面図



第67図 SD1・9・10, SE1 断面図

る。下面の固くしまった砂礫層は掘削しにくいためか、部分的な掘り下げがなされているようである。下層の埋積土はベースの砂礫層と変わりではなく、埋め戻し、もしくは掘削後間もなく埋没した状況を示していた。この下層土の上面には、多量の土器が廃棄され、その後は灰色のシルト質粘土が堆積している。

上器の出土状況を考える前に、北隣のSX3（第77図）について簡単に触れておきたい。このSX3とSF7が密接に関係するかは検討の余地は残るが、その特殊性から関連があるものと予想している。

SX3の東側では、土師器の壺の底部が2点据え置かれていた。上半部は流出していたが、その上器間に炭化物が集中していた。これは、この場で煮炊きが行われていたことを示している。

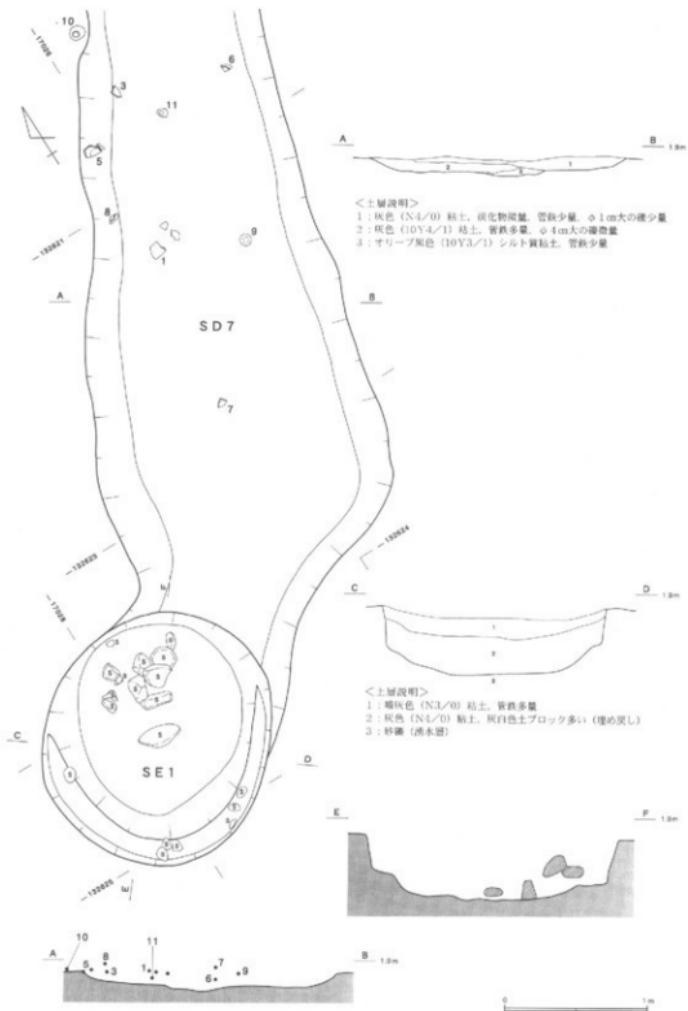
このSX3とSF7出土土器が同時に使用・廃棄されたことの証明はできないが、SX3西側出土の壺が、SF7出土例と接合していることからも、近い時期に遺棄されていることは確実であろう。

SF7出土土器の中で、完形に復元できた土器は無いが、須恵器の壺はかなりの破片が接合できた。3点の壺は容量で大中小に分類でき、各個体の内容物の違いが容量差に反映されている可能性がある。各個体の破片は、比較的まとまり良く見つかっているが、一部の破片は別個体の破片群に混じって出土している。この出土状況から、この位置に据え置かれていたものか否かについての判断はできない。しかし、他の器種がほとんど復元できていない状況とは異なることから、大型品のみが土坑内で使用された可能性も残る。

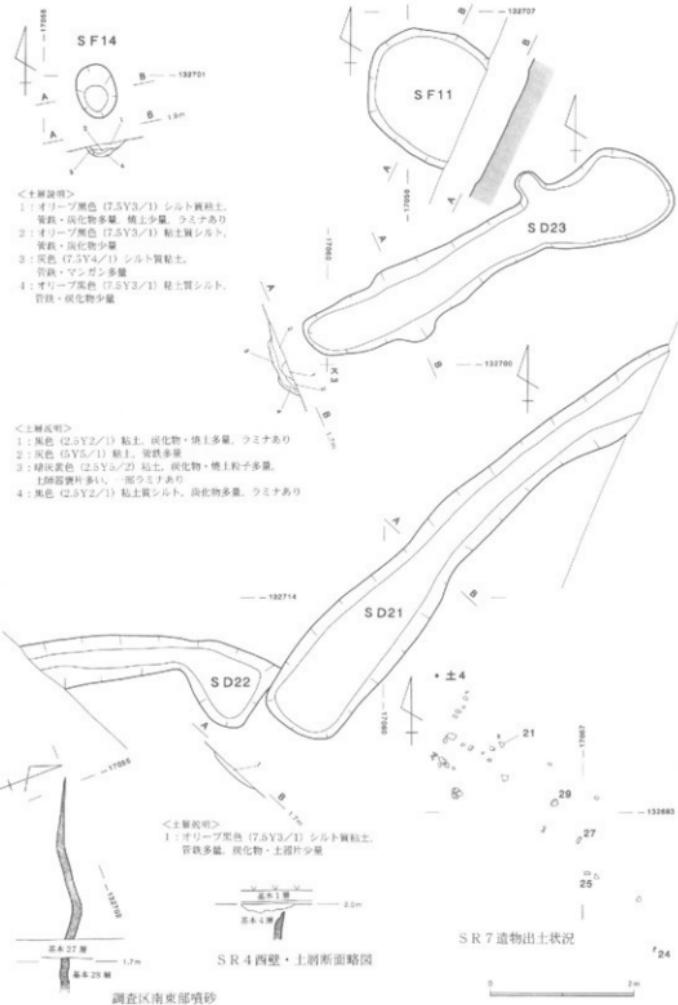
出土土器（第72~76図）は須恵器が多く、土師器は比較的少なく、器種も限定される。須恵器には壺、長頸壺、短頸壺、平瓶、横瓶、甕、壺蓋、环身、高杯があり、土師器は壺、甕、ミニチュアがある。これらの上器群の多くは破片であり、正確な出土比率を数量化していないが、様々な器形のものが少しづつ存在する点が特徴であろう。

これらの土器群の時期は、須恵器の型式的諸属性より7世紀後半に位置付けられる（鈴木敏2000）。類例は藤枝市白砂ヶ谷C2号墳（八木・鈴木1980）にある。ただし、白砂ヶ谷C2号墳からは半球形の須恵器环身・蓋が出土していないが、SF7からは少数出土している。おそらく、この時期まで残存するのであろう。

土師器には遠江型と駿東型の壺があり、横瓶のミニチュアも存在する。川合遺跡志保田地区のSC01からは、9世紀段階の上器群に混じって須恵器の小型横瓶が1点出土している（鈴木良1998）。その他、多数のミニチュア土器や土製品に混じって、横瓶のミニチュアが発見される例は散見されるが、今回のような単独例は類例に乏しく、今後の検討課題であるが、特定の祭祀行為における横瓶の位置付けは問題となるであろう。



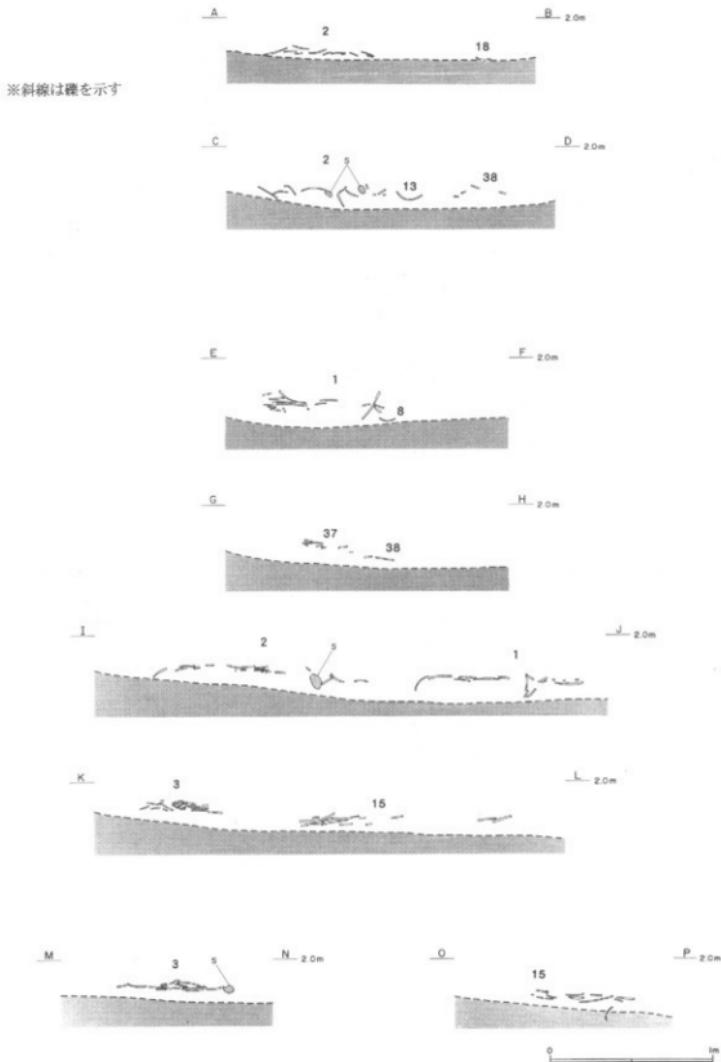
第68図 SE1・SD7 平・断面図



第69図 SF 11・14, SD 21~23, SR 7 遺物出土状況, 噴砂 平・断面図

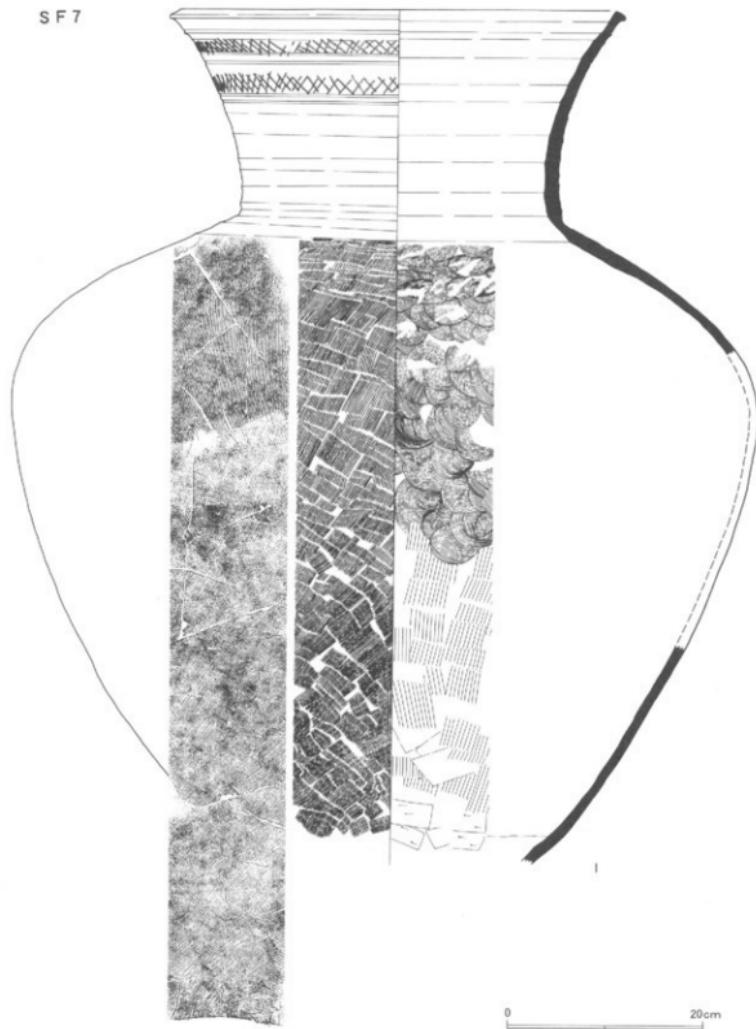


第70図 SF 7 遺物出土状況・平面図



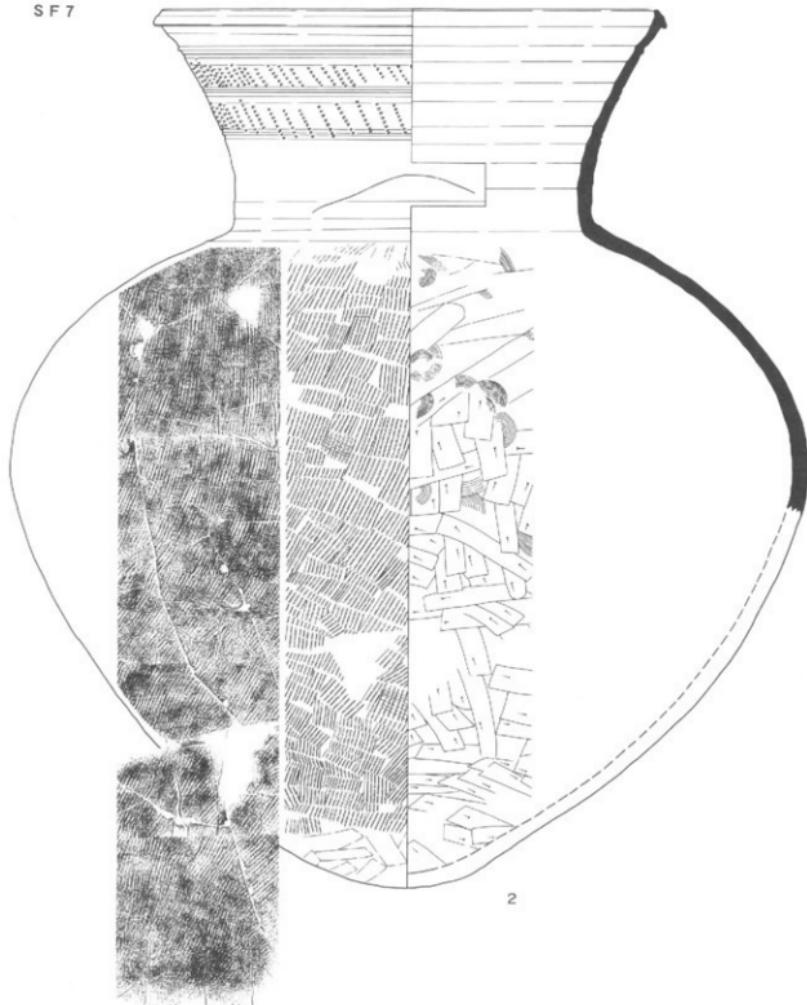
第71図 S F 7 遺物出土状況・断面図

S F 7



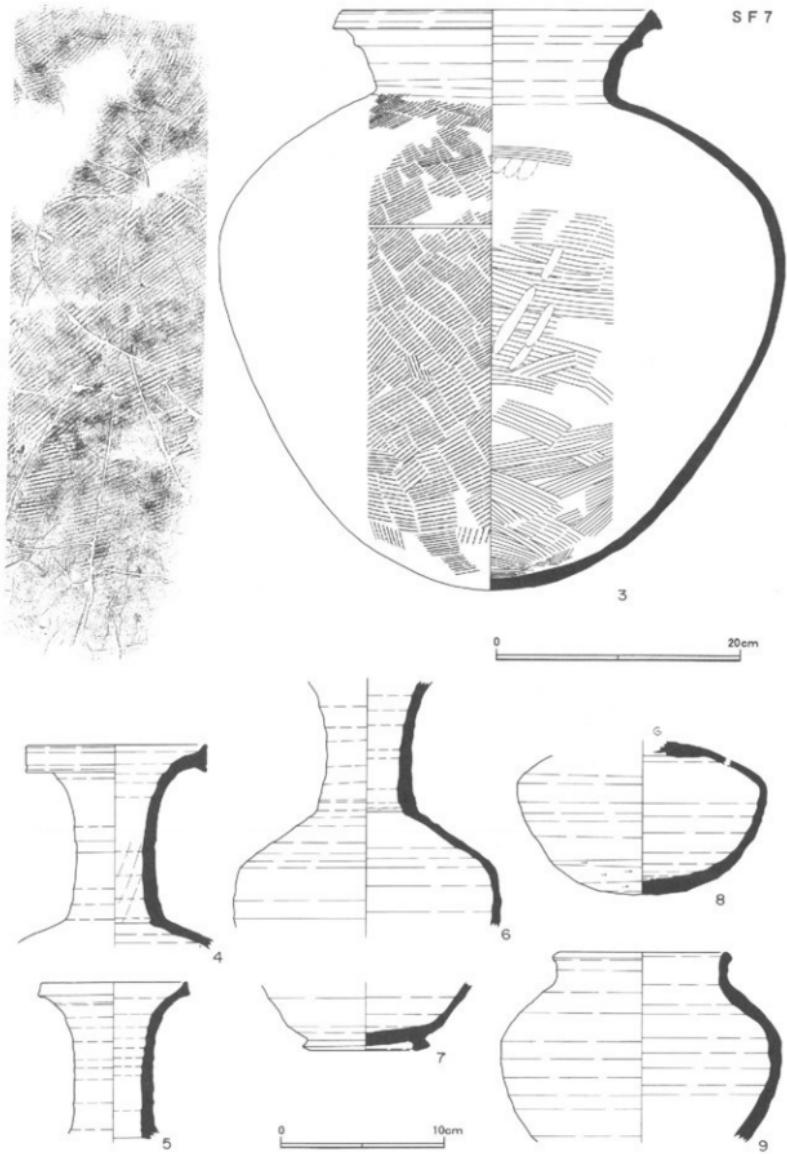
第72図 S F 7 出土土器実測図 (1)

S F 7

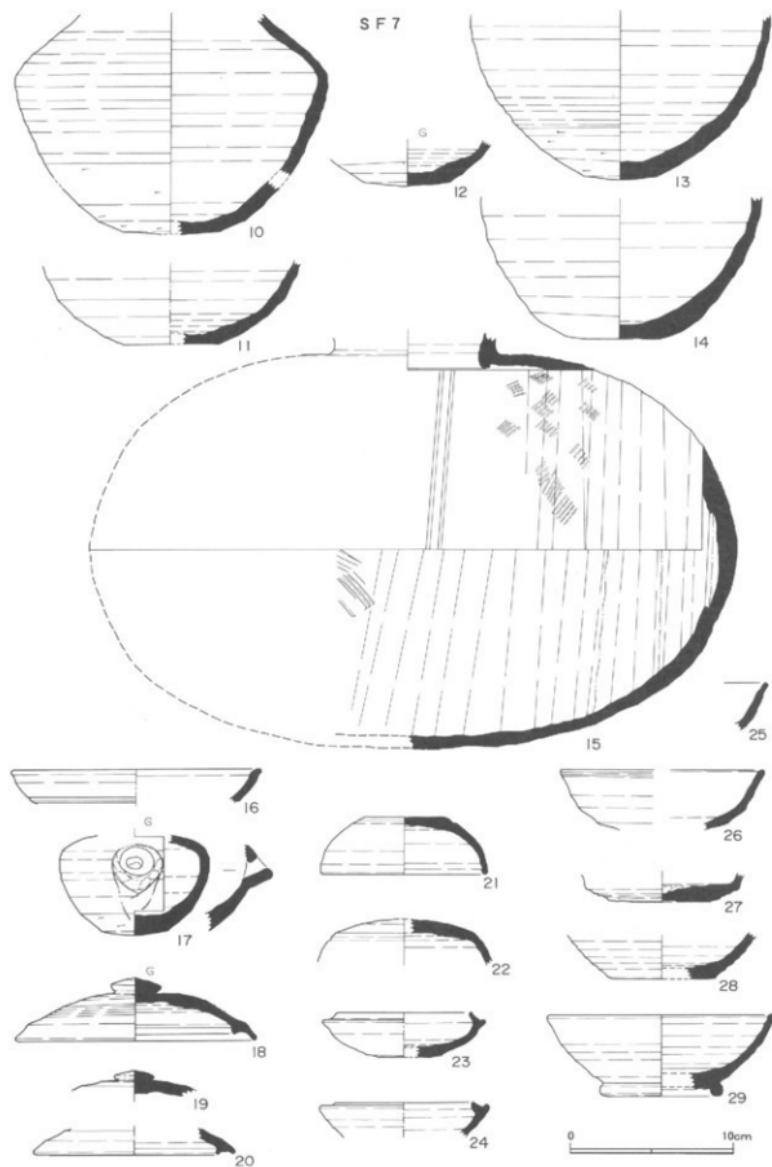


0 20cm

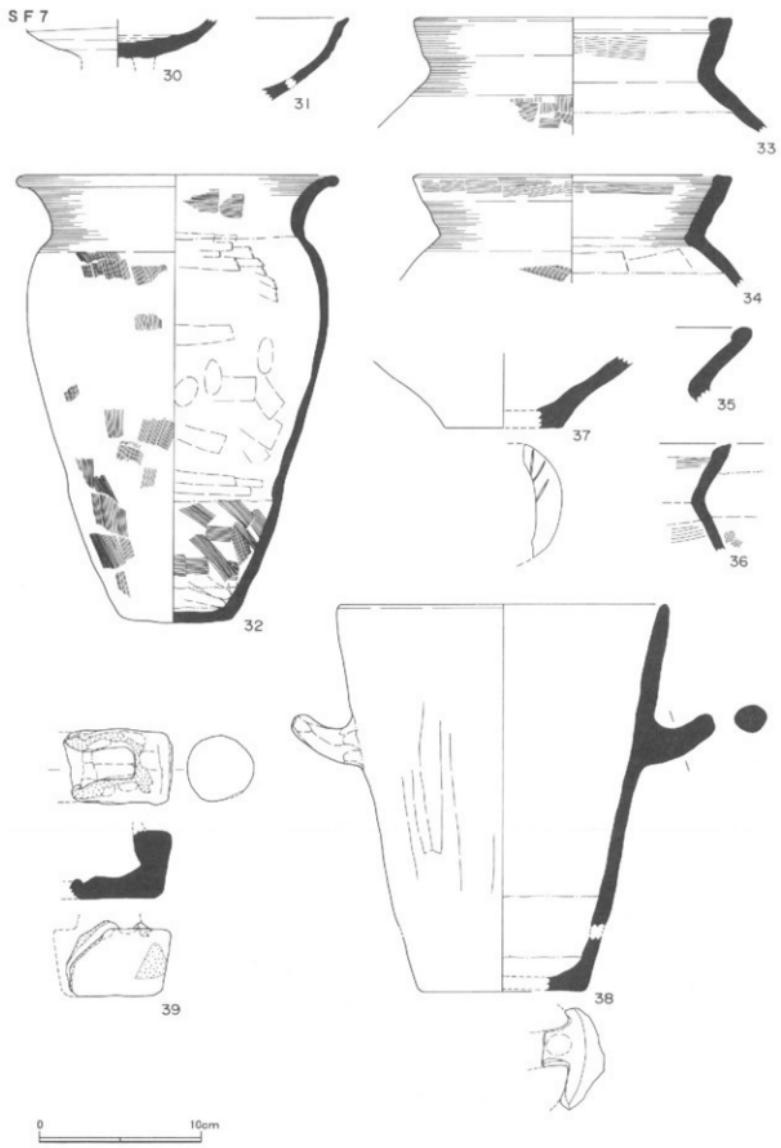
第73図 S F 7 出土土器実測図 (2)



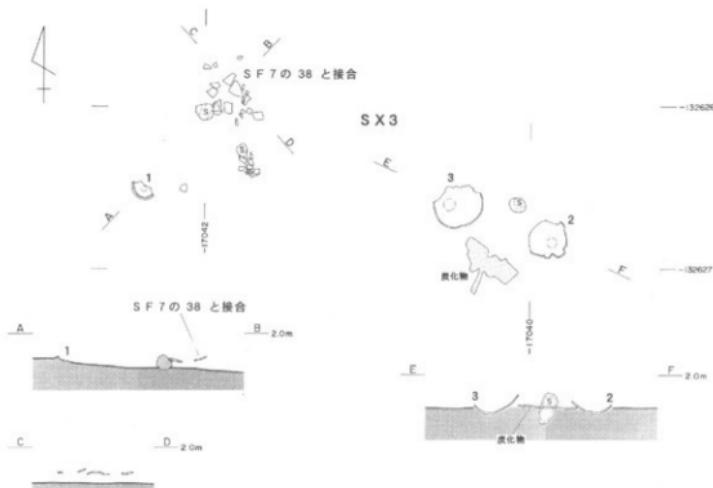
第74図 S F 7 出土土器実測図 (3)



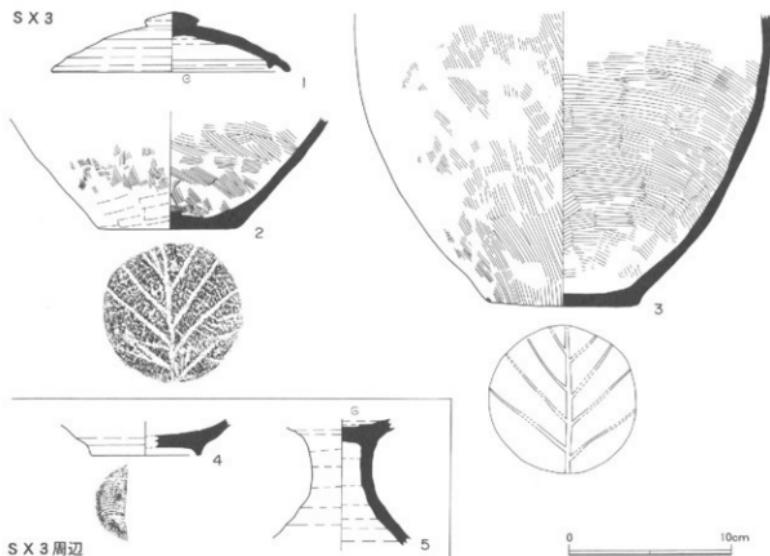
第75図 SF 7 出土土器実測図(4)



第76図 SF 7 出土土器実測図 (5)



第77図 S X 3 平・断面図



第78図 S X 3 出土土器実測図

表11 土坑・井戸跡--観

検出番号	遺構名	旧遺構名	大きさ(cm)		底面高(cm)	平面形態	備考
			長径	短径			
12	SF 1	SF 3	156	140	160	楕円形	
10	SF 2	SP 9	87	86	160	円形	段あり 中央部小穴は径30、底面高141、SD 4と重複
66	SF 3	—	—	68	134	—	
10	SF 4	SP14	68	60	165	長方形	
66	SF 5	—	64	60	160	楕円形	
66	SF 6	SX29	—	170	172	不整形	浅い
70・71	SF 7	SX18 SX19 SX25	606	468	164	不整形	段あり。南東部凹地304×254 楕円形 底面高170
8	SF 8	—	—	—	155	—	
59	SF 9	—	56	54	155	方形	SD16と重複
59・60	SF10	SX38	—	180	173	—	埋積土に炭化物層あり、浅い
69	SF11	SX104	—	176	164	—	
37・38	SF12	SF107	—	166	104	—	SR 6より新しい
9	SF13	—	45	44	142	方形	SR 7と重複
69	SF14	SF100	80	60	156	楕円形	下部に炭化物層
19	SF15	SX149	92	54	—	不整形	埋積土に灰白色粘土あり
68	SE 1	SF20	178	156	133	楕円形	段あり。標と馬糞出土
66・67	SE 2	SF 5	124	116	135	円形	

S F 11（第69図）はK 3区にある浅い土坑で、やや粘土質の埋積土であったが、プラン確認は非常に困難であった。8世紀前半の須恵器壺蓋・身など（第84図）がわずかに出土している。

S F 12（第37・38図）はI 4区にあり、S R 6より新しい。東側が調査区外にあたるため、不明な点が多い。8世紀代の上器片（第84図）なども出土しているが、混入品の可能性もある。

S F 13（第9図）はI 3区にあり、S R 7より新しい。

S F 14（第69図）はK 3区にあり、上層では炭化物がレンズ状に堆積していた。8世紀代の土器（第84図）が出土している。

S F 15（第19図）はK 3区にあり、灰白色粘土が多く堆積していた。竈跡などに関連する遺構の可能性もある。

（2）平安時代末期から鎌倉時代

S F 1～6（第12・66・67図）は調査区北部に位置している。出土遺物は細片のみで、遺構の性格が推測できるような資料は無い。平面形態はS F 6が不整形で、他は（楕）円形である。深さは比較的浅いが、S F 3は汎水層に達しており、井戸跡になる可能性もある。S F 2は小穴やSD 4と重複しているものと思われる。

S F 8（第8図）はI 4区に位置しているが、トレンチにより詳細は不明である。

S F 9（第59図）はJ 2区でSD 16と重複している。SD 16の掘削痕の一部になる可能性もある。

S F 10（第59・60図）はJ 1区にある浅い楕円形状の土坑で、多量の焼土や炭化物のラミナが確認されている。重複している小穴より新しく、13世紀前半の山茶碗など（第63図）が出土している。

第9節 その他の遺構と出土遺物

その他の遺構には、噴砂とS Xと略称した性格不明遺構などがある。

噴砂は豎穴住居跡群の堆積土内でも確認されているが、確実な例にはK3区に位置する奈良時代以前のもの（第69図）と鎌倉時代以降のもの（第35・69図）がある。

古墳時代末期から奈良時代にかけての性格不明遺構は、SX2～4・6～10で、平安時代末期から鎌倉時代のものは、SX1・5である。

（1）古墳時代末期から奈良時代

SX3については、第8節のSF7の項を参照していただきたい。

SX2・4（第81図）は、D6とE5杭周辺の上器集中を示す。出土土器には、山茶碗なども混在しているが、主体は土師器駿東型壺である（第84・85図）。SX2には掘り込みは確認されず、出土土器は散在している。かなり原位置から移動していると思われる。SX4の上器集中部の下部には、浅い凹みが存在する。

SX6（第61図）はSR7と重複しており、平面プランなど不明瞭な点も多い。出土遺物は、中央部ないし西側に集中し、その下層からも多量の土器が出土した。遺物集中域の周辺からの出土遺物は、上層から発見されているものが多い。このことから、SR7の埋没過程における遺物の廃棄を想定することも可能であるが、SX6の埋積土がSR7より暗く粘土質で、掘り込みもSR7より深いことから別遺構と考えている。

出土遺物（第64・65図）には、拳～人頭大の碟や多量の8世紀前半の上器がある。遺構の確認面では、山茶碗なども出土している。大型の碟の集中、バラエティーのない単純な器種構成、小型の上師器壺や完形に近い状態に復元できた上器の存在から、祭祀的行為に関連する遺物群と考えられる。

これらの内容に近い遺物が、川合遺跡志保田地区（鈴木良 前掲書）でも発見されている。この遺跡からは、祭祀関連遺物の遺棄・廃棄地点が6箇所確認され、石組み遺構も存在する。これらの上器集中地点は、人・馬形土製品が伴っており、奈良時代の祭祀的行為が復元できる可能性のある貴重な例であろう。

SX6出土土器の器種構成は、須恵器が壺蓋・身と壺で、土師器が壺と壺である。壺（79）と赤彩された遠江系の壺（83）は遺構外周辺出土のため除外しておく。土師器には、静清平野などでも多く出土する木葉痕の付く壺、駿東型壺と遠江型壺がある。2系統の壺は、周辺の遺跡でも共伴しているが、IH遠江国の大井川右岸の牧之原台地上の集落跡では、駿東型壺の比率は低いようである。駿東型壺の主要分布範囲が駿河国にあったことを示しているものと思われる。

SX6の器種構成は、前記した川合遺跡の上器集積（SC4）の内容に近い。上師器は不明な点が多いが、おそらく壺も存在するのではないかと思われる。ただし、少數ではあるが、須恵器の壺類の在り方は異なっている。大型の碟については、石組み遺構との関連性を指摘しておく。

SX7（第59図）は、浅い幅広の溝状の遺構である。出土土器（第85図）には、土師器の壺や壺の破片がある。

SX8（第82図）は、調査区南端部で発見された拳大の碟と土器片の集中箇所である。西側は試掘坑（No.5）により不明である。出土碟は大小様々であるが、比較的大型の碟が人為的に並べられたような状況が窺われる。ただし、その性格を確定するまでにはいたらなかった。

出土土器（第85図中段）には、古墳時代末期から奈良時代にかけてのものが破片の状態で多く出土している。祭祀具などの特殊な遺物は残念ながら発見されていない。

SX9（第82図）はSX8の南側に位置している。SX8と同様に碟や土器片（第85図下段）が多く出土しているが、碟は散漫な状態である。

SX8・9は、SH11やSB1に隣接しており、おそらく、これらの建物跡群などと有機的な関係が

あるのであろう。

S X 10（第9図）は、第2調査面の堅穴住居跡群の北側に位置している。灰白色粘土が薄く堆積したもので、窓跡が流出したものと考えられる。堅穴住居を侵食した洪水が、北西から南東へと流れものと考えると、S X 10の北西部に堅穴住居が存在していた確率は高いのであろう。

（2）平安時代末期から鎌倉時代

S X 1（第79図）は調査区北端部に位置している。平面プランや底面の状態は、埋積土に特徴が無く、かなりわかりにくい状況であった。

出土土器（第80図）は山茶碗と伊勢型壺で、伊勢型壺は細辺が微量出土している。当遺跡では、県内の他遺跡と同様に土壺が非常に少なく、鉄鍋などがかなり普及していたものと予想される。

山茶碗は小皿が比較的少なく、碗が破片の状態で多く出土している。碗には直線的に体部が開くものと内湾気味のものがあり、高台は断面三角形のものが多い。口径は14cm前後、底径は6～7cm、器高は4cm前後である。型式学的属性はかなりまとまりのある資料であるが、制作時の乾燥方法は異なるようで、高台にスノコ痕が認められるもの5点、モミ殻・ワラ痕は3点が存在する。似たような比率は金谷町のはるん沢古窯跡群でも認められ（河合2001）、産地が限定されるかもしれない。これらの土器群の年代は、当遺跡出土土器群との相対的関係より13世紀中葉頃を想定している。

S R 1からは、S X 1出土土器と接合した碗（第80図16）が出土しており、両遺構はかなり近い時期に存在していた可能性もある。

S X 5（第35図）の埋積土はS R 4のものと類似しており、同一の遺構の可能性もあるが、ここでは人為的にS R 4を改変した地点と捉えておきたい。

（3）その他の特殊遺物と包含層出土土器

土製品のなかでは、輪の羽口（第91図5）が注目される。S D 1周辺の上層からの発見であり、所謂包含層出土品であるが、同一地点からは12世紀後半から13世紀代の土器以外は、ほとんど出土していないことから当該期に属するものと考えている。

この他に土鍤（第91図）が8点検出された。内5点はS R 5出土で、8世紀代のものと考えられる。形態的には一般的なもので珍しくないが、当遺跡の立地上、海洋漁業用の大型品が出土していない点は不思議である。

木製品と共に、S R 6内より7世紀後半の桃の果核が20点検出された（表13、写真図版51）。桃の果核は、先端形状、小孔の有無やしづの状態により3類に分けられる（金原他1990）。それらは、伝来の時期が異なる可能性が指摘されている。筆者自身もその分類に基づいて類型化に努めたが、残存状態が悪く類型化できていないのが現状である。ただし、7世紀後半段階でも、かなり形態差がありそうなことは認められる。

次に包含層出土土器（第88～90図）についても簡単に触れておく。図化した土器は、比較的残りの良いもので時期が判別しやすいものと特殊な器形のものが中心である。

Eライン以南には、7世紀後半から8世紀にかけての土器が散在し、Dライン以北とJライン付近からは山茶碗が多く出土している。

山茶碗には、島田市丸山古窯跡（丸杉1997）出土例のような12世紀前半代のものと小型の無高台の碗が多く出現する14世紀代とされるような資料はあまり顕著ではない。小碗の比率はかなり低いが、小皿のなかには新しい偏平な形態のものが調査区北部より出土しており、北部域は比較的長く居住していた可能性が高い。

表12 土・石製品一覧

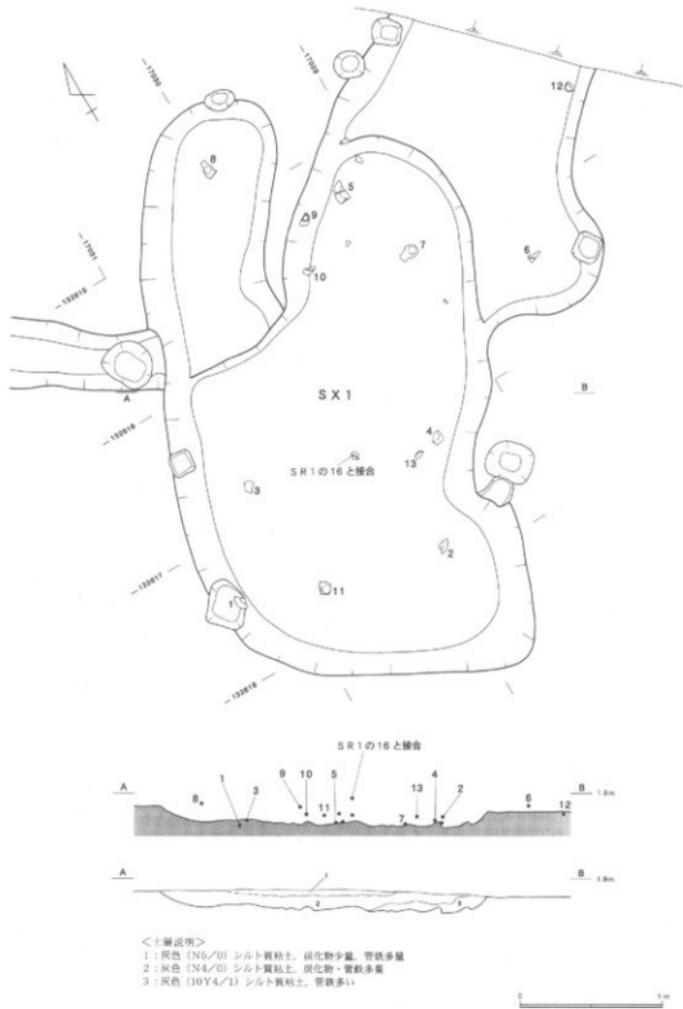
図番号	写真 図版	遺 情	旧遺構	出土標高 (cm)	取上日	取上 番号	種 别	備 考
91-1	49	S R 5	SR33A	151	00.12.28	-	土馬	No.2と共に、鞍付
91-2	-	S R 5	SR33A	151	00.12.28	-	須恵器	No.1と共に、环身
91-3	49	S R 5	SR33A	138	01.01.31	110	土馬	鞍不明
91-4	-	S R 7 上層	-	178	01.02.05	-	土馬の脚	J 2区北西出土。第69図参照
91-5	50	B 6区	-	-	00.11.30	-	輪羽口	S D 1周辺上層出土
91-6	50	S F 6	S X29	-	00.12.13	-	土鍤	上層出土
91-7	50	S R 5・6	SR33	-	01.01.31	-	土鍤	
91-8	50	S R 5	SR33A	154	01.01.30	61	土鍤	
91-9	50	S R 5	SR33A	154	01.01.30	61	土鍤	
91-10	50	S R 5	SR33A	146	01.01.30	54	土鍤	
91-11	50	S R 5	SR33A	-	01.01.25	備考欄	土鍤	取上番号1~33周辺
91-12	50	J 3区南東	-	-	01.01.05	-	土鍤	
91-13	50	L 2区南東	-	-	01.03.19	-	土鍤	
91-1	-	S B 3	S B201	145	01.03.22	-	磨石?	花崗岩、擦り方内出土
91-2	-	S F 7	S X19	-	00.12.26	-	支脚?	砂岩、被熱により赤変
91-3	-	E 4区北東	-	-	00.12.25	-	砥石	砂岩

表13 桃果核一覧

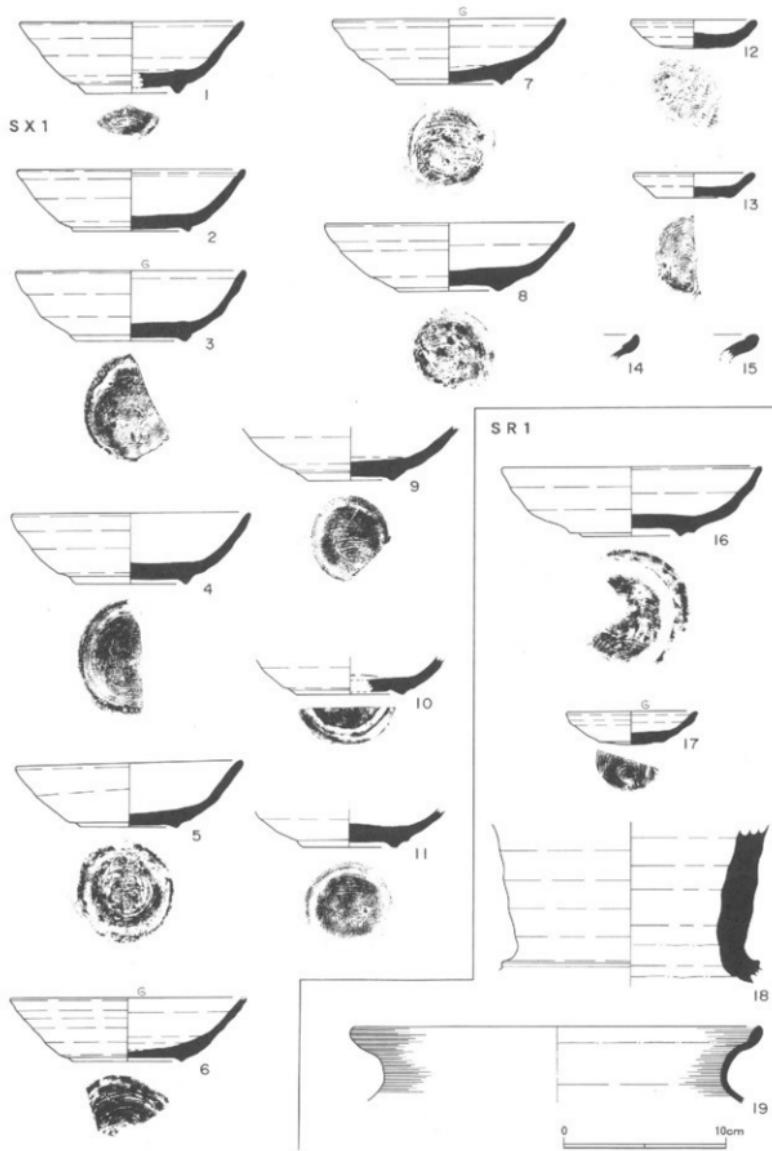
※()は推定値

番号	遺構名	グリッド	層位	取上日	取上 番号	長さ×幅×厚さ (mm)	先端形	小孔 有無	しわの状態	備 考 (金原分類)
1	S R 6	H2区	-	01.02.16	196	25×21×-	尖	有	細	B
2	S R 6	H2区	-	01.02.16	196	21×21×17	尖	有	中	B
3	S R 6	H2区	-	01.02.16	196	27×20×16	尖	有	中	B
4	S R 6	H2区南東	-	01.02.19	-	(29)×24×-	-	無	太	-
5	S R 6	H2区南東	南肩下層	01.02.20	-	(23)×22×16	-	無	中	A?
6	S R 6	H2区南東	南肩下層	01.02.20	-	25×22×18	尖	無	中	-
7	S R 6	H2区南東	南肩下層	01.02.20	-	27×22×-	尖	?	太	C
8	S R 6	H2区南東	南肩下層	01.02.20	-	(21)×19×-	-	無	中	-
9	S R 6	H2区南東	南肩下層	01.02.20	-	(23)×22×-	-	無	太	-
10	S R 6	H2区南東	-	01.02.20	215	34×24×-	尖	有	中	B
11	S R 6	H2区南東	-	01.02.20	215	24×21×-	尖	無	中	B?
12	S R 6	H2区東	城下層	01.02.21	-	24×21×16	尖	無	太	B?
13	S R 6	H2区東	最下層	01.02.21	-	(21)×20×16	-	有	中	-
14	S R 6	H2区東	最下層	01.02.21	-	(20)×20×	-	有	中	-
15	S R 6	H2区東	最下層	01.02.21	-	23×21×-	尖	有	太	B
16	S R 6	H2区東	最下層	01.02.21	-	21×21×-	-	?	中	-
17	S R 6	H3区南西	南肩下層	01.02.19	-	(21)×20×16	-	有	中	-
18	S R 6	H3区南西	南肩下層	01.02.20	-	23×21×17	尖	有	中	B
19	S R 6	H3区南西	南肩下層	01.02.20	-	23×21×-	尖	有	細	B
20	S R 6	H3区南西	南肩下層	01.02.20	-	28×--×-	尖	有	太	C

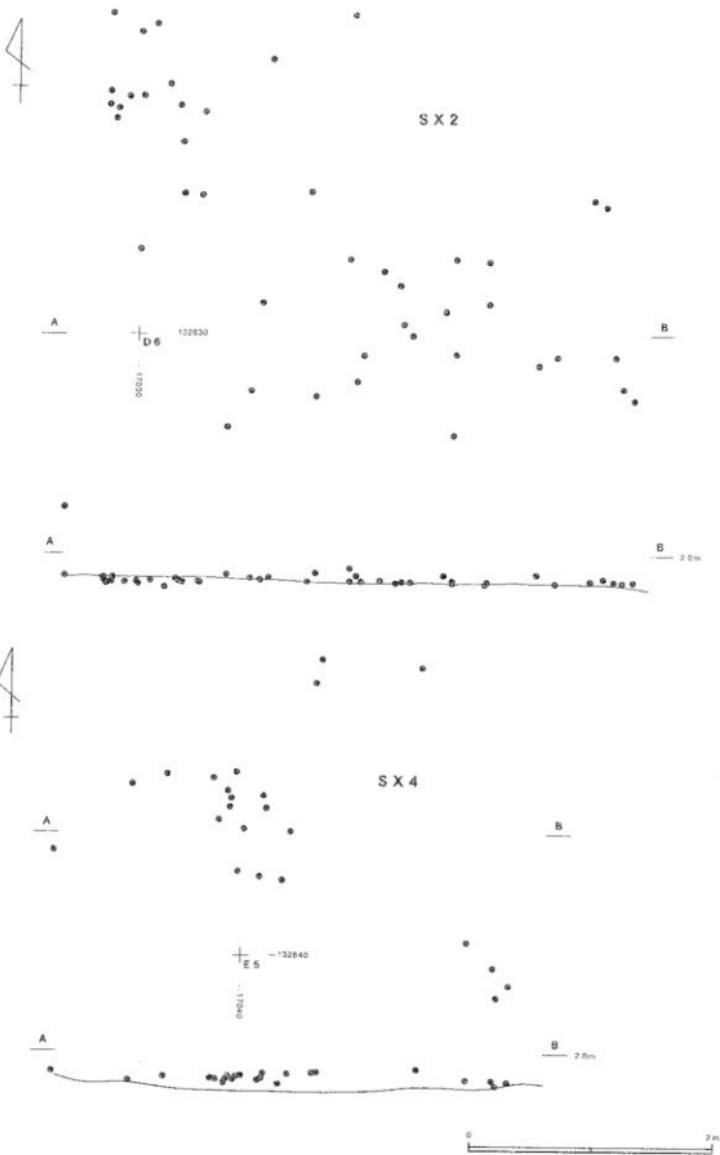
*備考欄の分類は、金原正明・金原正子・粉川昭平1990「和闌遺跡出土土器と花粉分析」『奈良県遺跡調査概報 1989年度』奈良県立橿原考古学研究所を参考にして筆者自身が分類した。



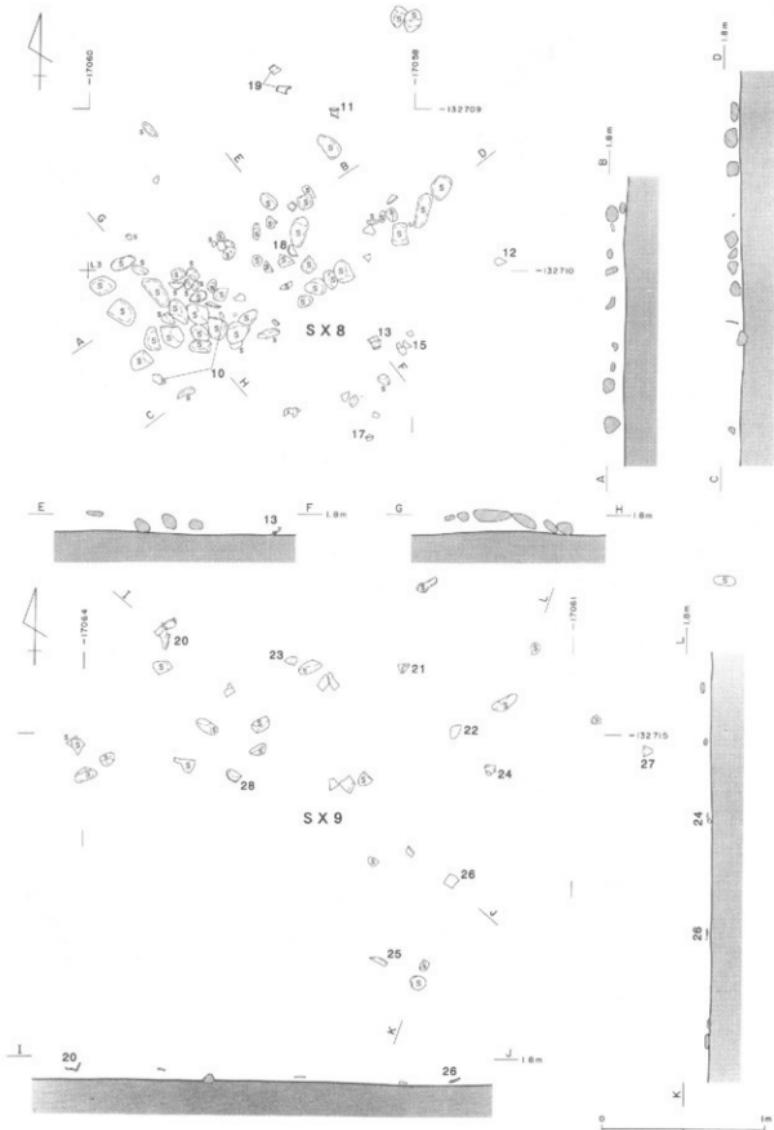
第79図 SX1 平・断面図



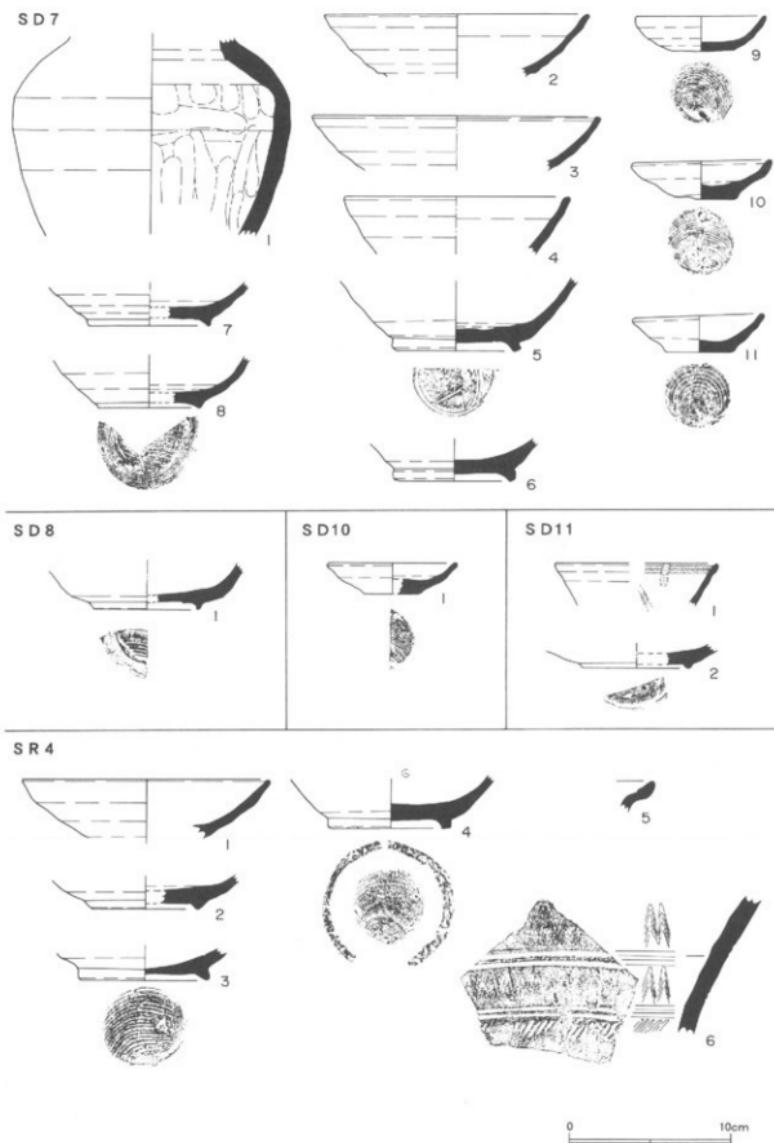
第80図 SR 1, SX 1 出土土器実測図



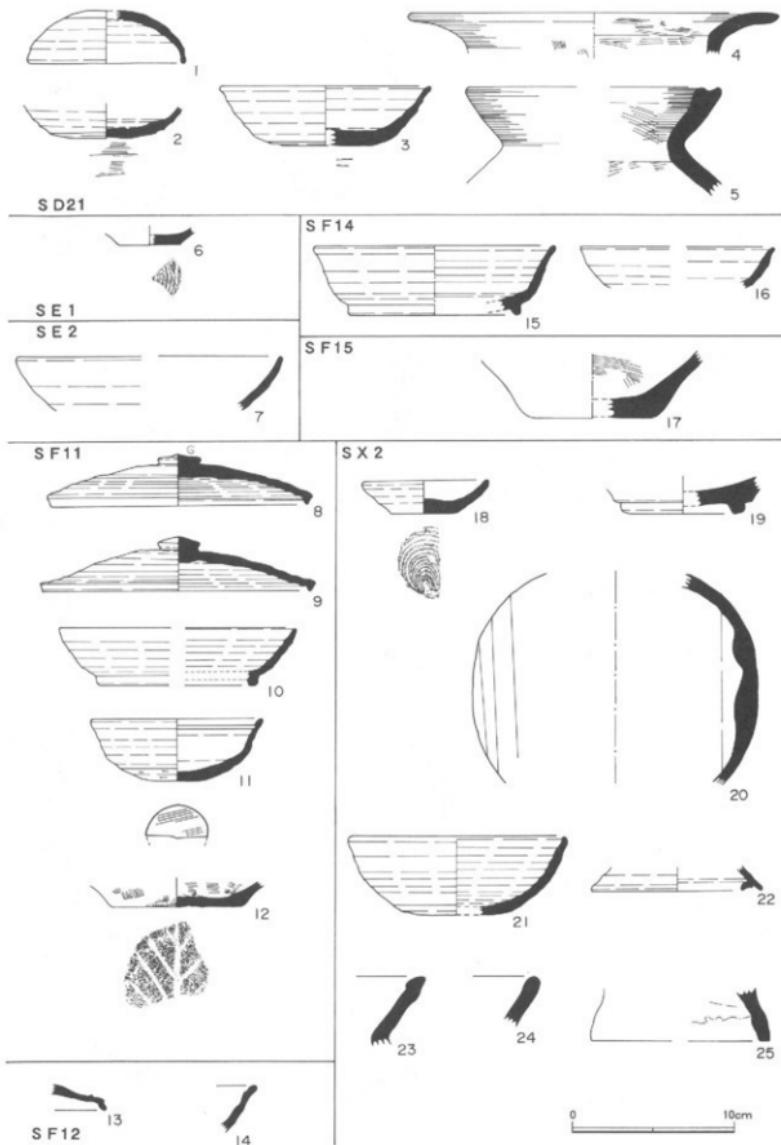
第81図 S X 2・4 平・断面図



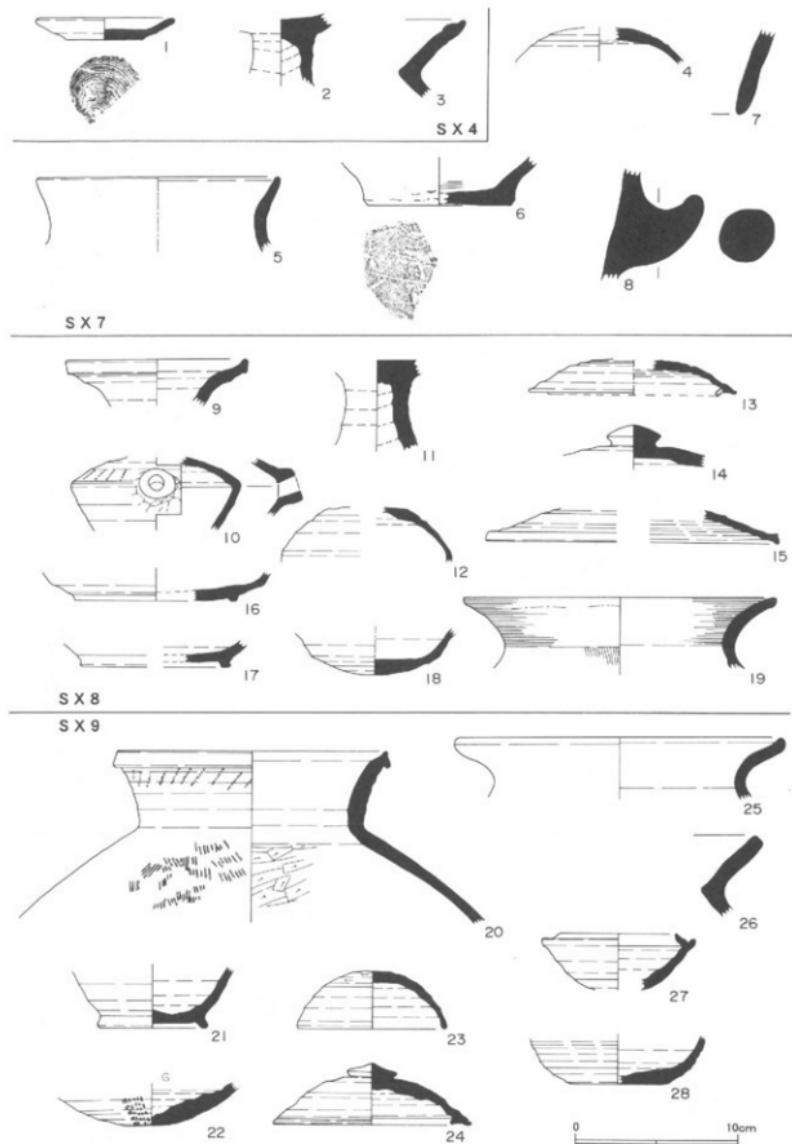
第82図 SX 8・9 平・断面図



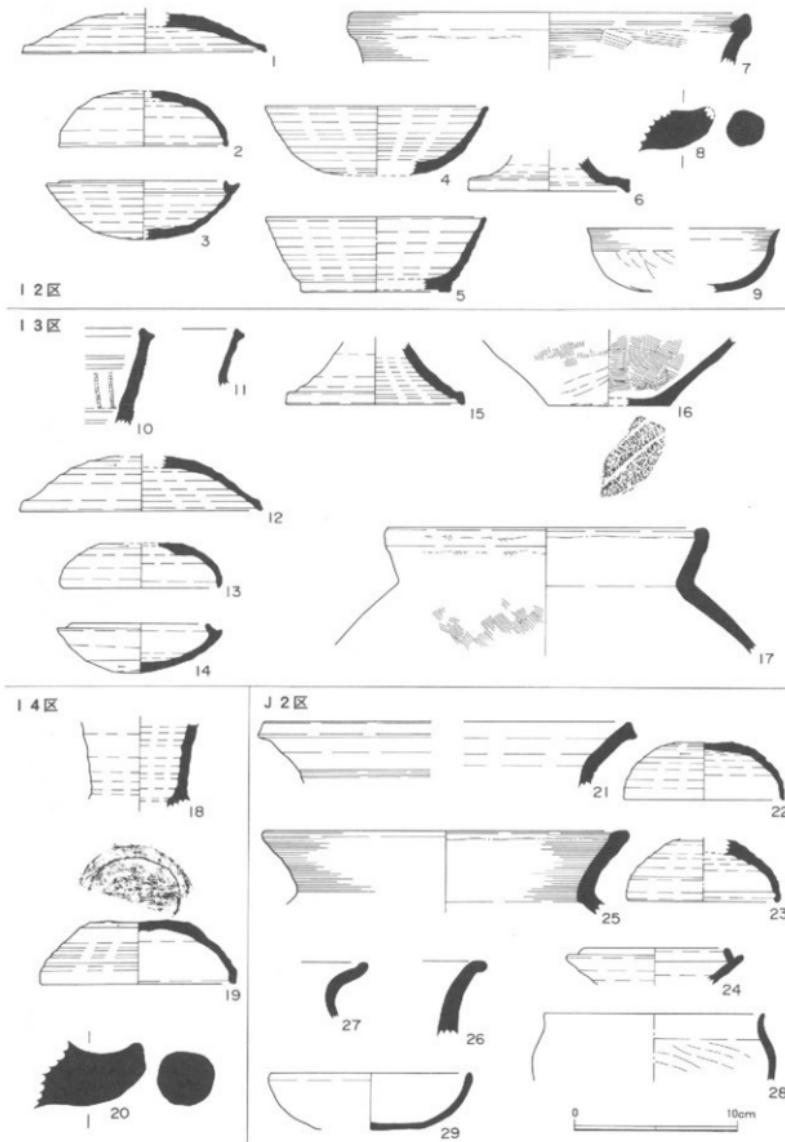
第83図 SR 4, SD 7・8・10・11 出土土器実測図



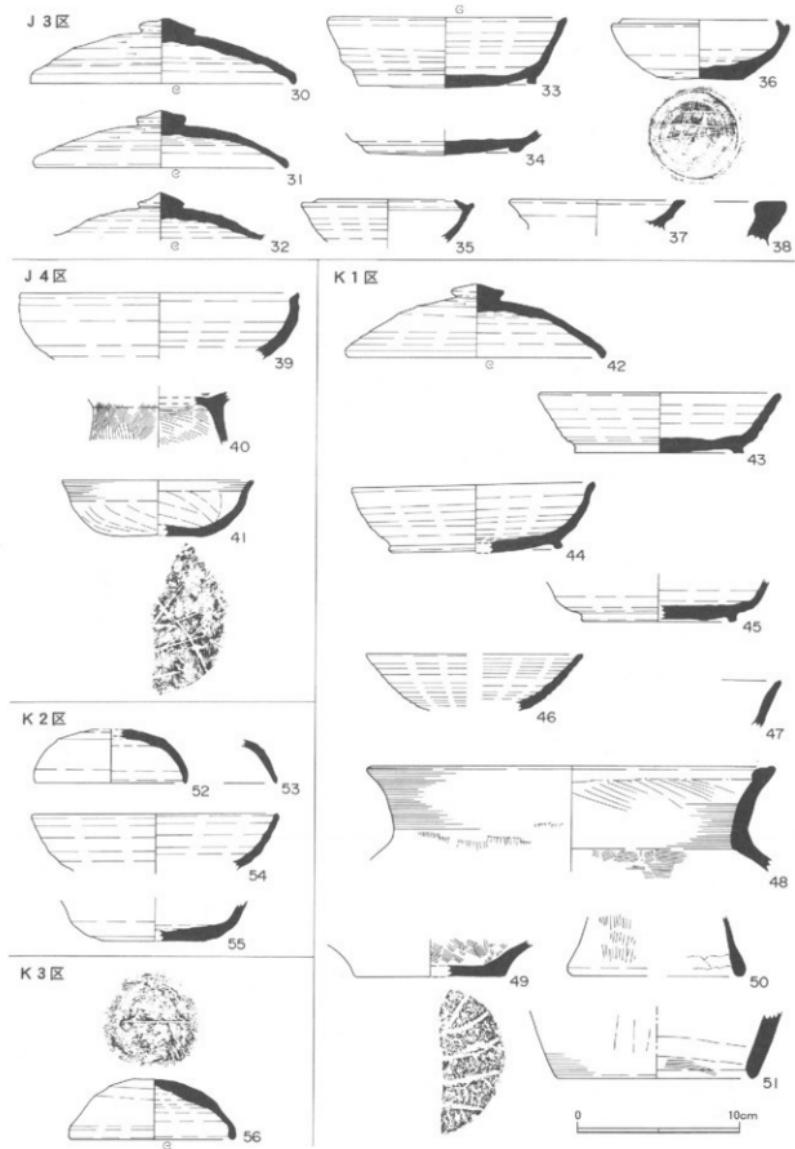
第84図 SD21, SE1・2, SF11・12・14・15, SX2 出土土器実測図



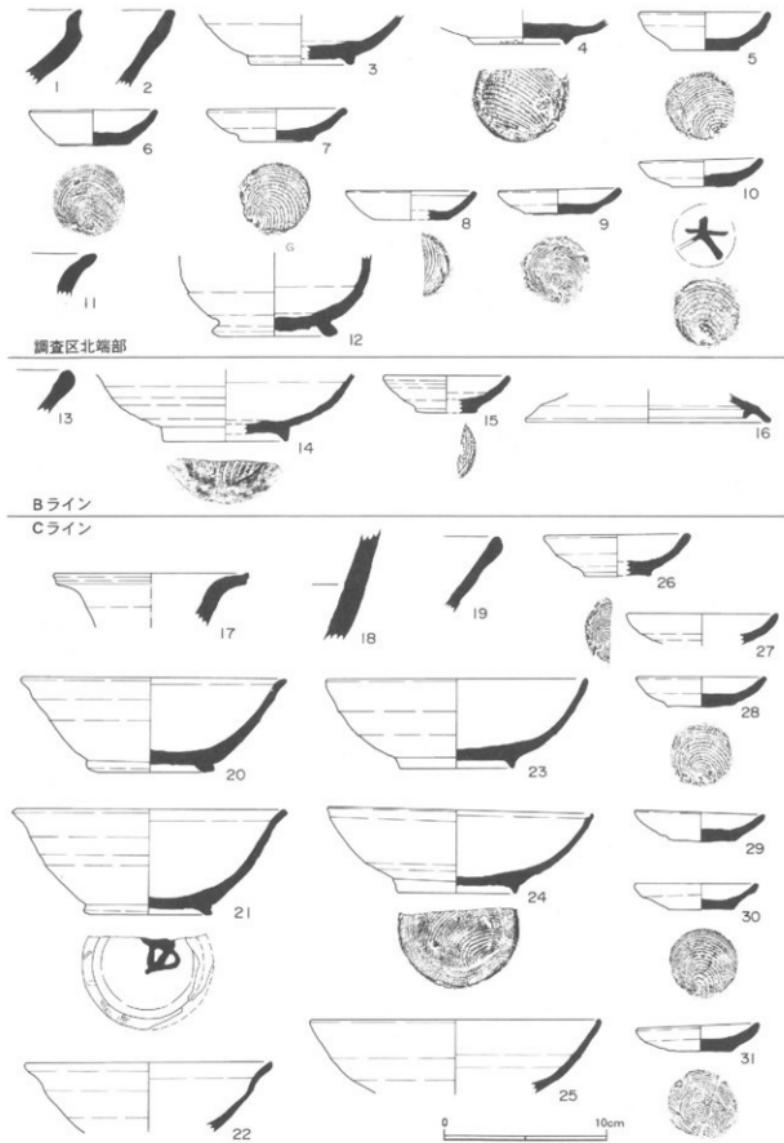
第85図 SX 4・7~9 出土土器実測図



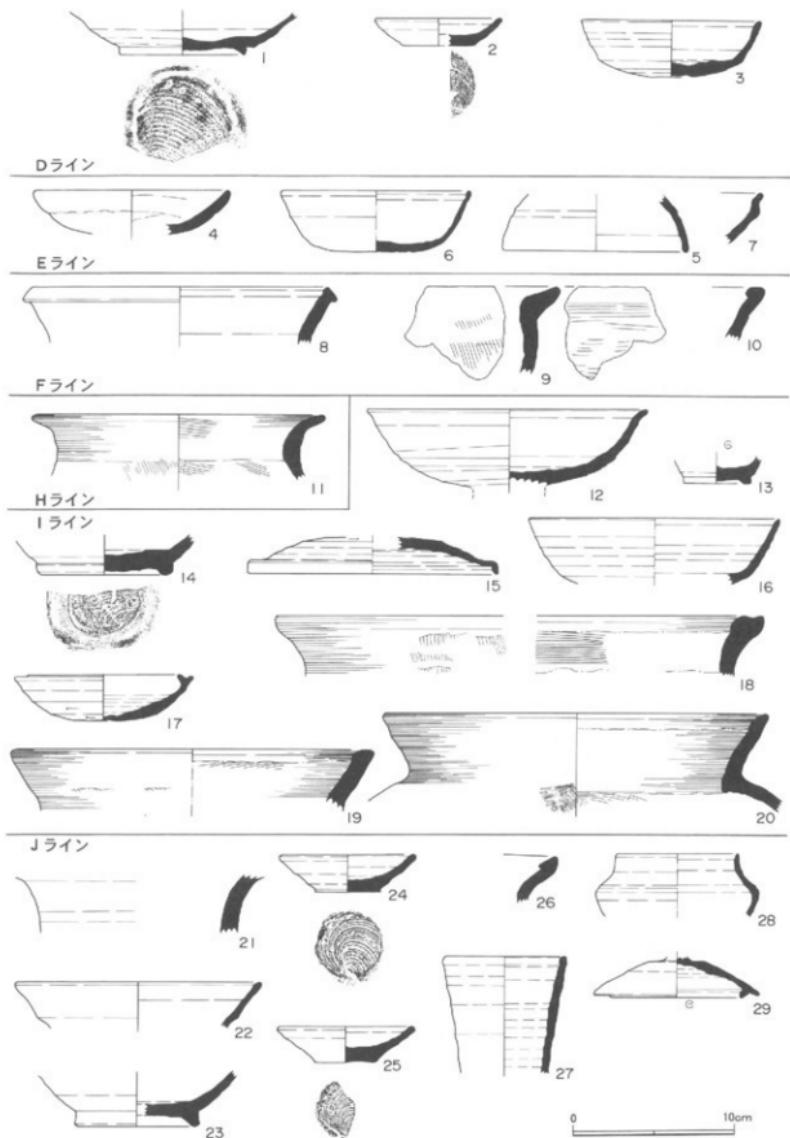
第86図 SR 7 出土土器実測図(1)



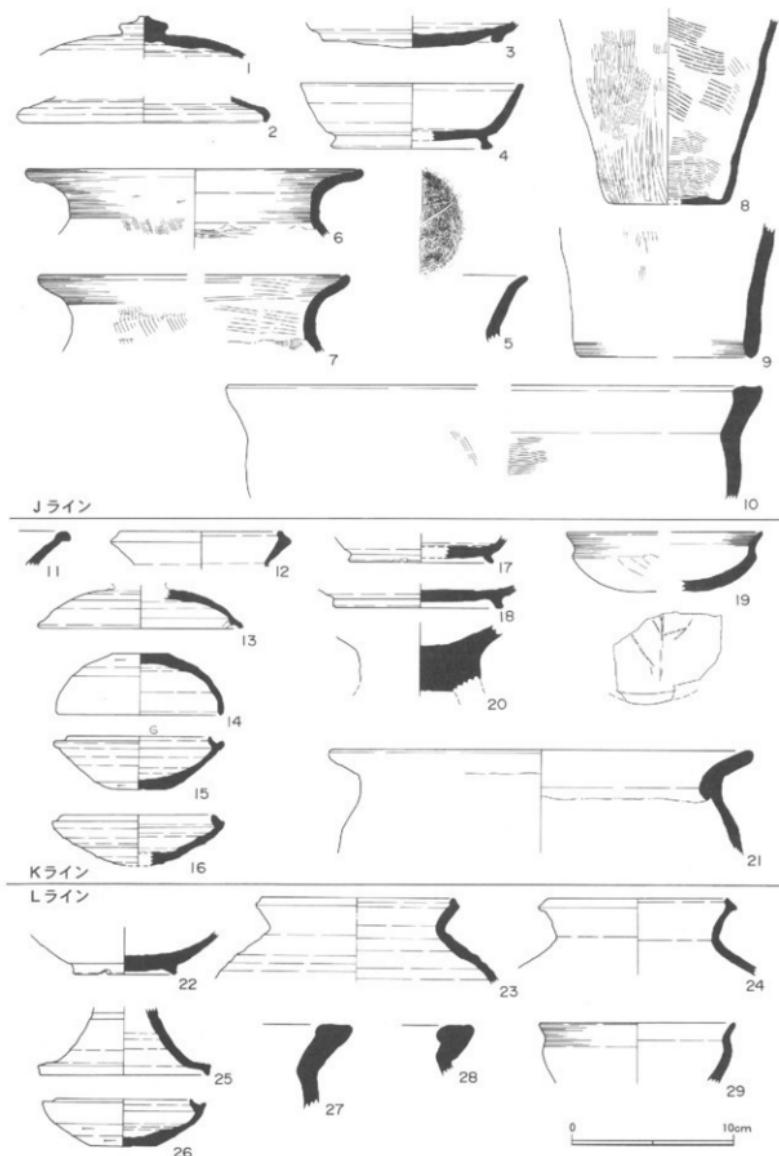
第87図 SR 7 出土土器実測図 (2)



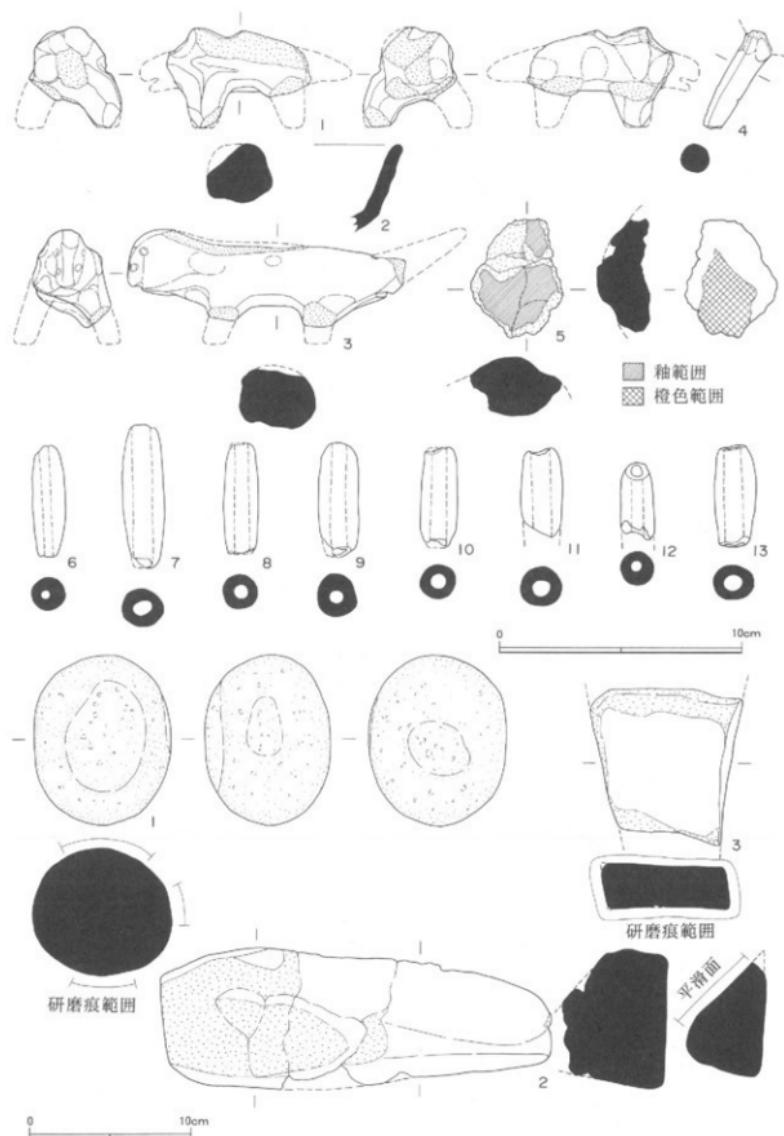
第88図 包含層 出土土器実測図（1）



第89図 包含層 出土土器実測図（2）



第90図 包含層 出土土器実測図（3）



第91図 土製・石製品 実測図

引用・参考文献

- 八木勝行・鈴木隆夫 1980『原古墳群白砂ヶ谷支群』 藤枝市教育委員会
- 上原真人 1985『木器集成図録－近畿古代篇－』 奈良国立文化財研究所
- 後藤建一 1987『渥美・湖西中世古窯跡群』『マージナル』No.7 愛知県考古学談話室
- 竹内晶子 1989『弥生の布を織る－機織りの考古学－』 東京大学出版会
- 金原正明・金原正子・粉川昭平 1990『和爾遺跡出土種実と花粉分析』『奈良県遺跡調査概報1989年度』 奈良県立橿原考古学研究所
- 上原真人 1993『木器集成図録－近畿原始篇－』 奈良国立文化財研究所
- 松井一明 1993『遠江における山茶碗生産について』『静岡県考古学研究』 No.25 静岡県考古学会
- 中野晴久 1994『知多（常滑）古窯址群の山茶碗について』『研究紀要』 第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1994『山茶碗研究の現状と課題』『研究紀要』 第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994『古代における農具の変遷－稻作技術史を農具から見る－』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念シンポジウム
- 佐藤達雄 1996『神明原・元宮川遺跡』『水辺の祭祀』 日本考古学協会三重県実行委員会
- 山本真央 1996『岳美遺跡II（遺物編）』 （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 丸杉俊一郎 1997『丸山古窯跡』 （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木良孝 1998『川合遺跡・忠保田地区』 （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 及川司・藤巻哲男 1996『曲企北遺跡（遺物編）』 （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木敏則 2000『磐田郡豊岡村神田古墳－中国鏡出土の後期古墳－』『浜松市博物館報』 第13号
浜松市博物館
- 河合修 2001『青灰色のうつわ』『研究紀要』 第8号 （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

表14 土器一覧

番号	文様	寸法 山手深	山手幅	山手深出	頂上 No.	底	縁	色	測	種別	器皿	残存部	口径	底径	縦横比	断面形状	受容径	底径 (cm)	高さ (cm)	備考
18-1	-	SH-5-7	P-63	-	-	01.01.22	山茶柄	褐	灰色 N60	底流片底	1/1	-	-	-	-	-	-	-	内曲輪、余切り、モミ痕	
18-2	29	SH-6-2	P-61	161	-	01.02.06	山茶柄	小皿	灰白色 N650 (B)	底流片底	1/1	-	-	-	-	-	6.9	-	内曲輪、余切り、モミ痕	
18-3	-	SH-6-4	P-78	-	-	01.01.19	上輪沿	黒	淡青色 23YR7/4	口縁破片	-	-	-	-	-	-	-	-	余切り	
18-4	-	SH-6-7	P-45	-	-	01.01.17	山茶柄	小皿	灰白色 N70 (B)	11輪破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
18-5	-	SH-7-4	P-65	-	-	01.01.19	須磨器	灰	内面：灰白色 N70 (B) 外面：灰白色 N65 (B)	天井14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
18-6	-	SH-8-2	P-112	160	1	01.02.27	須磨器	黒	灰白色 N70	脚15	-	(16.4)	-	-	-	-	-	-	外腹側、外輪タケヌキ (4)	
18-7	-	SH-8-4	P-59	168	1	01.02.06	山茶柄	褐	灰白色 N650 (B)	口格~华16	-	-	-	-	-	-	(6.8)	5.6	余切り、スノコ柄	
18-8	-	SH-9-6	P-47	-	-	01.01.17	山茶柄	小皿	灰白色 N71	口縁破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
18-9	-	SH10-1	P-75	-	-	01.02.05	十輪器	黒	青色 23YR6/8	口縁破片	-	-	-	-	-	-	-	-	断面写	
18-10	-	SH11-1	P-143	-	-	01.03.06	須磨器	黒	内面：灰白色 N70 外側：灰白色 N50 (B)	11輪破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
18-11	-	SH11-2	P-137	-	-	01.03.06	十輪器	灰	にぼい黒色 75YR6/63	口縁破片	-	-	-	-	-	-	-	-	内所面面影 (紫褐色 23YR4/8)	
18-12	-	SH11-3	P-141	141	-	01.03.07	須磨器	灰	灰白色 N70	底13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
18-13	-	SH11-4	P-138	-	-	01.03.06	須磨器	灰	灰白色 N65 (B) N50	口縁破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
18-14	-	SH11-5	P-142	164	-	01.03.07	須磨器	灰	灰白色 N60	底11	-	-	-	-	-	9.7	-	スノコ柄、引け窓		
18-15	-	P-70	P-88	-	-	01.02.05	土器	黒	内面：灰白色 23YR7/3 外側：白	底破片	-	-	-	-	-	-	-	-	木葉瓶、外彫刻、深東尾	
18-16	-	P-68	P-129	-	-	01.03.05	須磨器	灰	内面：灰白色 23YR6/6 外側：青灰色 51S16/1	11輪~底16 底13	-	-	(10.1)	-	-	-	-	-	瓶裏	
18-17	-	P-79	P-139	-	-	01.03.06	上輪器	黒	灰青色 10YR1/2	口縁破片	-	-	-	-	-	-	-	-	浅江蟹	
18-18	-	P-81	P-145	-	-	01.03.06	須磨器	灰	灰白色 N60	底~底破片	-	-	-	-	-	-	-	-	N80 (Y)	
18-19	-	P-82	P-153	-	-	01.03.19	上輪器	黒	内面：灰白色 51YR6/4 外側：青灰色 51S16/1	11輪破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
29-1	-	SB-1	SB-147	-	-	01.03.16	須磨器	灰	明青灰色 34Y7/1	底110	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
29-2	-	SB-1	SB-147	-	-	01.03.16	七輪器	黒	暗灰色 10YR6/1	11輪14	(13.6)	-	-	-	-	-	-	-	小要品、内圓化、ハケメ (内6)	
29-3	-	SB-1	SB-147	154	1	01.03.17	上輪器	黒	灰青色 10YR6/2	底148	-	-	-	-	-	-	-	-	内外面保付石、外6	
29-4	-	SB-1	SB-147	-	-	01.03.16	上輪器	灰	内面：灰白色 10YR6/2 外側：灰白色 23YR6/6	底910	-	-	-	-	-	10.2	-	-		

固體號	序號	固體類	固體標	尺寸(高 (cm))	尺寸上 W0	尺寸上 H0	性質	表面	顏色	測量	殘存部	門檻 (cm)	鋼鐵或木頭 (cm)	受盡過 (cm)	底座 (高台面) (cm)	器 (cm)	機合部(約4.7cm	備 考
30-9	-	SB 3	SB201	-	-	01.03.21	原忠器	高环	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	-	
30-10	30	SB 3	SB202	156	3	01.03.09	原忠器	高环	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	-	
			SB203	156	4	01.03.15	土師器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	腳型試D-外側八角× (8) 口部內面凹字	
30-11	-	SB 3	SB201	-	-	01.03.08	十輪器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	-	
30-12	-	SB 3	SB201	-	-	01.03.22	十輪器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	腳型試D-外側八角× (8) 口部內面凹字	
30-13	-	SB 3	SB201	-	-	01.03.08	十輪器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	腳型試D-外側八角× (8) 口部內面凹字	
30-14	-	SB 3	SB201	164	10	01.03.09	上鈎器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	外面深褐色	
30-15	-	SB 3	SB201	-	-	01.03.21	上鈎器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	外面深褐色	
30-16	29	SB 3	SB201	161	7	01.03.07	上鈎器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	外面深褐色	
			SB202	161	6	01.03.09	上鈎器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	外面深褐色	
30-17	29	SB 3	SB201	133	18	01.03.22	十輪器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	15.4	13.5	14.8	-	-	18.0	小型品, 外面深褐色 (手試試C 内外色也) (手試5.6)	
30-18	-	SB 3	SB201	161	14	01.03.09	上鈎器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	小型品	
30-19	-	SB 3	SB201	-	-	01.03.21	上鈎器	黑	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	小型品	
30-20	30	SB 3	SB201	163	11	01.03.09	十輪器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	小型品	
30-21	-	SB 3	SB201	-	-	01.03.21	十輪器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	小型品	
30-22	-	SB 3	SB201	159	15	01.03.09	上鈎器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	內面暗文	
31-1	-	SB6	SB202	-	-	01.03.15	原忠器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	-	
31-2	-	SB6	SB202	-	-	01.03.12	原忠器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	-	
31-3	-	SB6	SB202	-	-	01.03.14	原忠器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	-	
31-4	30	SB6	SB203	151	1	01.03.13	土師器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	4.0	外齒型強, 分外面へウナ子, 他用無し	
31-5	30	SB6	SB203	156	30	01.02.21	土師器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	5.4	4.2 不要依	
31-6	-	SB6	SB203	165	6	01.03.16	上鈎器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	5.1	外齒型強, 分外面へウナ子, 他用無し	
31-7	-	SB6	SB203	164	30	01.02.21	上鈎器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	10.0	(4.6) 小型品掌狀	
31-8	-	SB6	SB202	-	-	01.03.12	上鈎器	灰	灰白色 N70 (Y)	脚 1.11	-	-	-	-	-	-	内面暗文	

編 號									
國 籍		年 份		種 類		性 別		體 積	
國 籍	年 份	種 類	年 份	性 別	年 份	性 別	年 份	體 積	年 份
31-9	30	SB6	SB202	144	3	01/03/14	雄	口頭器 外側 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/14
31-10	-	SB6	SB203	142	5	01/03/16	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/15
31-11	-	SB6	SB202	-	-	01/03/12	雌	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/16
31-12	30	SB6	SB203	146	2	01/03/15	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/15
31-13	30	SB6	SB203	155	31	01/03/21	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/07
31-14	30	SB6	SB203	156	4	01/03/11	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/11
31-15	-	SB6	SB203	144	7	01/03/16	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/16
31-16	-	SB6	SB203	-	-	01/03/04	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/04
31-17	-	SB6	SB202	-	-	01/03/14	雌	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/14
32-1	31	SB7	SB207	162	1	01/03/14	雌	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/14
32-2	-	SB7	SB207	-	-	01/03/15	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/15
32-3	-	SB7	SB207	-	-	01/03/15	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/15
32-4	-	SB7	SB207	-	-	01/03/27	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/27
32-1	-	SB8	SB204	-	-	01/03/12	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/12
32-2	-	SB8	SB204	-	A	01/03/27	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/27
32-3	-	SB8	SB204	-	-	01/03/09	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/09
32-4	-	SB8	SB204	-	-	01/03/09	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/09
32-1	31	SB9	SB205	145	2	01/03/14	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/13
32-2	31	SB9	SB205	144	3	01/03/14	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/14
32-3	-	SB9	SB205	150	11	01/03/15	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/15
32-4	31	SB9	SB205	151	1	01/03/13	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/13
32-5	31	SB9	SB205	145	5	01/03/14	雄	口頭器 基部 上 部 口頭器 基部	01/03/14

問番号	写真 回数	通話 回数	出止端末 記述	取上口 No	種別	各種 色	調	残存部 品	門檻 (cm)	踏 (cm)	脚踏板(足踏 み)	受話器 (cm)	底板 (cm)	蓋 (cm)	備 考
32-6	31	S89	SB205	150	9	01.03.15	須	耳舟	門檻25 体~底13	(8.5)	—	(10.2)	—	—	2.8 スノコ板?
32-7	31	S89	SB205	143	4	01.02.19	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(3次強)	18.6	—	—	—	9.8 鏡孔形、17所内面黒板
32-8	31	S89	SB205	145	6	01.03.14	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(2次) 1.5~1.7	—	—	—	—	— 会の専用品
32-9	31	S89	SB205	144	12	01.03.17	十加器	耳舟	脚踏板 N60(青つぼ)	脚踏板(1次) 1.0~1.4	10.9	—	—	—	— 15所内面黒板、内面鋼板ヘラナダ
32-10	31	S89	SB205	146	6	01.03.14	脚踏板	耳舟	脚踏板 N60	脚踏板(2次) 1.5~1.7	(12.2)	—	—	—	5.3 使用痕跡し
32-11	31	S89	SB205	157	8	01.03.14	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(2次) 1.5~1.7	8.5	—	10.4	—	4.4 内面黒色、木素用、ナデ
32-12	—	S89	SB205	—	—	01.03.13	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(6.6)	—	(10.8)	—	—
32-13	—	S89	SB205	—	—	01.03.13	須	耳舟	脚踏板 N60	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(10.2)	—	(11.8)	—	3.3 脚外面黒板
33-1	31	—	—	172	1	00.12.27	脚踏板	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(1次) 1.5~1.7	—	—	13.6	—	—
33-2	—	—	—	164	28	00.12.28	須	耳舟	脚踏板 N60	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(5.7)	—	—	—	—
33-3	32	—	—	175	20	00.12.28	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(10.6)	—	(12.8)	—	3.4 つまみ付(2.9cm)
33-4	—	—	—	—	—	01.03.09	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(7.2)	—	(9.0)	—	—
33-5	32	—	—	172	9	00.12.27	須	耳舟	脚踏板 N60	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(10.2)	—	—	—	3.8 ヘラ足付
33-6	32	—	—	—	—	01.03.14	須	耳舟	脚踏板 N60	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(10.0)	—	—	—	3.4 スノコ板
33-7	32	—	—	174	7	01.03.15	須	耳舟	脚踏板 N70(Y)	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(9.6)	—	—	—	2.7
33-8	—	—	—	181	8	00.12.27	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(1次) 1.5~1.7	天井1/1	—	—	—	—
33-9	—	—	—	165	47	01.03.07	須	耳舟	脚踏板 N60	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(9.4)	—	(11.2)	—	3.0 ヘラ足付
33-10	32	—	—	168	27	00.12.28	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(8.3)	—	(10.0)	—	(3.1)
33-11	—	—	—	173	13	00.12.28	須	耳舟	脚踏板 N70(青つぼ)	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(8.4)	—	(10.2)	—	—
33-12	—	—	—	—	—	01.03.16	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(8.1)	—	(10.0)	—	2.7 スノコ板ノリタ板
33-13	—	—	—	—	—	01.03.15	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(9.6)	—	(11.2)	—	—
33-14	—	—	—	176	5	00.12.27	須	耳舟	脚踏板 N60(青つぼ)	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(7.2)	—	(9.4)	—	—
33-15	—	—	—	—	—	01.02.21	須	耳舟	脚踏板 N70	脚踏板(1次) 1.5~1.7	(16.9)	—	—	—	—

番号	名前	固版	三面鏡	小十面鏡	取上	取上日	鏡面	鏡棒	色	調	外筒部	口径	直径	脚	脚径	受部径	脚径	高さ	備考
33-16	-	-	-	161	17	00/12/28	原忠器	高环	内面：灰白色 N71 外面：灰白色 N60	口締16	(14.4)	-	-	-	-	-	-	-	
33-17	-	-	-	173	46	00/12/27	原忠器	高环	灰白色 N80	11脚16	-	-	-	-	-	-	-	外筒2本の注釈	
33-18	-	-	-	173	23	00/12/28	原忠器	高环	明カリーブ灰色 25GN71	口締3片	-	-	-	-	-	-	-	外面1本の注釈	
33-19	-	-	-	176	15	00/12/28	原忠器	高环	灰白色 N70	11脚16	-	-	-	-	-	-	-	-	
33-20	-	-	-	161	17	00/12/28	原忠器	高环	内面：灰白色 N70 外面：灰白色 N60	11脚16	-	-	-	-	-	-	-	-	
33-21	-	-	-	183	3	00/12/27	山本純	環	灰白色 N80	底14	-	-	-	-	(8.8)	-	-	深美・湖西産	
33-22	32	-	-	166	4	00/12/27	川田耕	小皿	灰白色 25Y81	11脚16×4脚	8.4	-	-	-	-	5.3	1.7	-	
33-23	-	-	-	164	47	01/03/07	原忠器	要	灰白色 N70	明鏡11	-	-	-	-	-	-	-	内筒油塗ハケメ (外7.19.6) 通195	
33-24	-	-	-	165	26	00/12/28	上野器	要	灰白色 25Y81	11脚14	(21.6)	(16.9)	-	-	-	-	-	内筒油塗ハケメ (外7.19.6) 通195	
33-25	-	-	-	174	14	00/12/28	上野器	要	内・外・真黄色 10YR7/2	口締3片	-	-	-	-	-	-	-	内筒油塗ハケメ (外7.19.6) 通195	
33-26	-	-	-	170	18	00/12/28	上野器	要	内・外・真黄色 10YR7/3	11脚16	-	-	-	-	-	-	-	内筒油塗ハケメ (外7.19.6) 通195	
33-27	-	-	-	131	19	00/12/28	上野器	要	碧色 3YR6/6	11脚16	-	-	-	-	-	-	-	内筒油塗東洋	
33-28	-	-	-	171	22	00/12/28	十輪器	要	内面：灰・青・黒 7.5YR5/4 外面：灰・青・黒 5YR5/2	口締15	(24.0)	-	-	-	-	-	-	外筒油塗系内筒油塗	
34-29	32	-	-	152	55	01/03/22	十輪器	要	内面：灰・青・黒 5YR5/4 外面：灰・青・黒 5YR5/2	口締・底16	(22.4)	(19.3)	-	-	-	-	-	内筒油塗板型 ハケメ (外9.内7)	
34-30	-	-	-	-	-	01/03/07	上野器	台14	内：灰白色 25Y81 外面：碧色 3YR6/6	11脚14	-	-	-	-	(10.8)	-	外筒油塗外油ハケメ (外9.内6)		
34-31	-	-	-	171	7	00/12/27	土師器	瓶	灰白色 25Y7/2	11脚16	-	-	-	-	-	-	-	ヘラゲダ"	
34-32	32	-	-	-	01/03/14	土師器	瓶	内・外・碧色 5YR7/4	11脚・底12脚	(10.4)	-	-	-	-	(7.0)	3.1	齊滅		
34-33	-	-	-	-	01/03/27	土師器	瓶	浅黄褐色 7.5YR8/3	口締・底14	(10.6)	-	-	-	-	-	-	-	ヘラナデ	
34-34	32	-	-	-	01/03/15	土師器	一	浅黄褐色 7.5YR8/4	脚下12.合23	-	-	-	-	(4.6)	-	-	-	千葉4	
34-35	SR2	-	-	-	00/12/28	原忠器	要	灰白色 N80	口締17	(10.8)	-	-	-	-	-	-	-	内筒油	
34-36	SR3	SR2	166	49	01/02/21	原忠器	要	灰白色 N70 (Y)	口締・底14	(10.4)	(10.0)	-	-	-	-	-	-	外筒油	
34-37	SR3	SR2	170	15	00/12/28	原忠器	要	灰白色 N70	底14	-	-	-	-	-	4.6	-	-	内筒油	

国番号	写真 内観	通称	計測場所 (cm)	取上(1) 取上(2)	種別	名稱	色 調	残存部 (cm)	11.径 (cm)	径 (cm)	側面突出部 (cm)	受部厚 (cm)	底 (cm)	底径 (cm)	底 (cm)	備 考
34-38	SKR 3	SR28	166	14	0.012.28	須忠器	灰白色 N 80	無1.5	—	—	—	—	—	—	内円面輪	
34-39	—	SKR 3	SR28	159	4	0.012.28	須忠器	墨	灰白色 N 80	門檻1.7 幅14	(17.4) (15.3)	—	—	—	内円面輪 外圓輪。タケナメ(5)	
34-40	33	SKR 3	SR28	162	0.013.07	須忠器	墨	灰白色 N 70	薄1.1 幅14	—	2.9	—	—	—	内円面輪 外圓輪；オリーブ灰色 10Y 4/2	
34-41	—	SKR 3	SR28	172	1	0.012.21	須忠器	灰	灰白色 N 90/91	人井34	—	—	—	—	—	
34-42	33	SKR 3	SR28	166	7	0.012.28	須忠器	灰	灰白色 N 60 (B)	「横一部 底」1.1	(8.1)	—	(10.1)	—	(3.3) ヘラ記号	
34-43	33	SKR 3	SR28	160	6	0.012.28	須忠器	灰	灰白色 N 60 (青(?)B)	「横一部 底」1.4	9.8	—	11.6	—	3.5	
34-44	—	SKR 3	SR28	173	2	0.012.28	須忠器	灰	灰白色 N 70	「横一部 底」1.2	—	—	—	—	スノコ板？	
34-45	—	SKR 3	SR28	165	44	0.013.07	須忠器	灰	灰白色 N 70	底下34 底1.1	—	—	—	—	—	
34-46	—	SKR 3	SR28	163	5	0.012.28	須忠器	灰	灰白色 N 70/R 70	「横断片	—	—	—	—	—	
34-47	—	SKR 3	SR28	173	3	0.012.28	須忠器	灰	灰白色 N 70	底1.4	—	—	—	(8.6)	—	
34-48	—	SKR 3	SR28	168	35	0.013.07	須忠器	灰	灰白色 N 80	底1.4	—	—	—	(11.2)	—	
34-49	—	SKR 3	SR28	166	16	0.012.28	須忠器	灰	烟色 SYR76	「横一部 底」1.2	(10.7)	—	—	(4.3)	不要紙？	
34-50	—	SKR 3	SR28	—	—	0.012.12	上端	灰	内面：灰白色 5YR8/2 外面：體色 2.5YR6/2	「横一部 底」1.6	—	—	—	—	木質柄、ナフ	
47.1	—	SKR 5	SR33	上層	—	0.01.01.12	山茶柄	灰	灰白色 N 70 (青(?)B)	底1.2	—	—	—	(7.7)	内圓輪、糸切り、重ね締き輪	
47.2	33	SKR 5	SR33A	—	—	0.012.06	須忠器	灰	灰白色 N 70 (Y)	「横一部 底」1.34	(15.7)	—	—	7.6	4.4 東洋折式内出上糸切口	
47.3	—	SKR 5	SR20A	148	62	0.01.30	須忠器	灰	灰白色 N 6.0	口檻1.5	(9.9)	—	—	—	内面輪	
47.4	—	SKR 6	SR33B	107	14	0.01.2.14	須忠器	灰	灰白色 5Y 7/1	薄1.1	—	(5.6)	—	—	内円面輪	
47.5	—	SKR 5	SR23	—	—	0.01.01.30	須忠器	灰	灰白色 N 70	「横」1.2	(5.8)	—	—	—	—	
47.6	—	SKR 6	SR23B	147	—	0.01.01.16	須忠器	灰	灰白色 5Y 6/2	「横」1.3	(6.3)	—	—	—	内円面輪	
47.7	33	SKR 6	SR33B	106	148	0.01.02.14	須忠器	灰	内面：灰白色 7.5YR8/1 外面：浅黄色 2.5Y7/3	浮1.5 口檻	8.8	—	17.0	—	13.6 内外面承、輪、スコット外面直輪	
47.8	33	SKR 5	SR33A	148	98	0.01.01.31	須忠器	灰	灰白色 N 70	口檻 脚14	(11.2)	(10.0)	—	—	—	内外面輪
47.9	—	SKR 5	SR23	—	—	0.01.01.18	須忠器	灰	灰白色 N 70 (青(?)B)	口檻1.6	(16.0)	—	—	—	中央トレーンチ出上内外面輪	
47.10	—	SKR 6	SR33B	140	216	0.01.02.20	須忠器	灰	灰白色 N 70	底1.2	—	—	—	(6.2)	—	

固着分	写真	固版	川上 川下 高さ (cm)	川上 Ko	川上 L11	種類	色	調	残存部	口 括	断 面	断 面 (cm)	断 面 (cm)	断 面 (cm)	断 面 (cm)	断 面 (cm)
47.11	33	SR 5	SR23A	136	73	01.01.25 114	01.01.36 01.01.31	吸虫器 吸	灰白色 N70	断 L12 底 L11	—	—	—	—	6.5	—
47.12	—	SR 5	SR23	133	173	01.02.02 01.02.16	吸虫器 吸	灰白色 N70	断 L18 底 L10	—	—	—	—	4.9	—	
47.13	—	SR 5	SR23A	132	92	01.01.31	吸虫器 吸	灰白色 N80 (B)	底 L11	—	—	—	—	—	—	
47.14	—	SR 5	SR23A	143	75	01.01.30	吸虫器 吸	灰白色 N80	底 L8	—	—	—	—	—	内面輪	
47.15	—	SR 6	SR23B	—	197	01.02.16	吸虫器 吸	灰白色 N40	断底片	—	—	—	—	—	—	
47.16	—	SR 6	SR23B	156	157	01.02.15 01.02.16	吸虫器 吸	灰白色 N60	断底片	—	—	—	—	—	外側沈端 2 本	
47.17	—	SR 6	SR23B	138	171	01.02.16	吸虫器 吸	灰白色 N70	口被膜片	—	—	—	—	—	—	
47.18	33	SR 5	SR23A	136	73	01.01.12	吸虫器 吸	灰白色 N70 (Y)	口被膜片 G 16.0	(13.4)	—	—	—	—	内外面輪付丸、内面へ多子テ	
47.19	—	SR 5	SR23A	—	—	01.01.29	吸虫器 吸	灰白色 N70	口被膜片	—	—	—	—	—	内面輪	
47.20	—	SR 5	SR23A	—	—	01.01.29	吸虫器 吸	灰白色 N6.50	口被膜片	—	—	—	—	—	内面輪	
47.21	33	SR 6	SR23B	121	146	01.02.14	吸虫器 吸	灰白色 N60 (G)	体下~断 L12	—	—	—	—	(9.1)	—	
48.22	—	SR 5	SR23	151	198	01.01.23	吸虫器 吸	灰白色 N60 ~ 灰色 N60 灰色 N60	口被膜片	—	—	—	—	—	内外面輪付丸、外側水輪 3 本 Vc23と同 轮体 2、外側輪付丸	
48.23	—	SR 5	SR23 A B	132	131	01.02.02	吸虫器 吸	灰白色 N60 ~ 灰色 N60 灰色 N60	断底片	—	—	—	—	—	—	
48.24	34	SR 6	SR23B	136	169	01.02.16	吸虫器 吸	灰白色 N60	天井 N60 口被膜片 (8.0)	—	—	—	—	2.6	—	
48.25	34	SR 5	SR23A	—	—	01.01.29	吸虫器 吸	灰白色 N6.50 (B)	1/3底片; 天井 体 26.5 (8.3)	—	—	—	—	3.6	横 (18.6cm)	
48.26	—	SR 5	SR23A	146	56	01.01.30	吸虫器 吸	灰白色 N70 (Y)	1/3底 L10	—	—	—	—	—	外側輪	
48.27	34	SR 5	SR23 A B	146	90	01.01.20	吸虫器 吸	灰白色 N70 (Y)	天井~口被膜片 (8.6)	—	—	(10.6)	—	3.9	外側輪つまみ径 1.2cm	
48.28	—	SR 5	SR23A	165	69	01.01.30	吸虫器 吸	灰白色 N80	口被膜片; 天井 (9.6)	—	—	—	—	—	外側輪	
48.29	34	SR 5	SR23A	144	35	01.01.29	吸虫器 吸	灰白色 N70 (PB)	口被膜片欠刻 天井~1/3底片 (9.9)	—	—	12.0	—	3.0	つまみ径 2.0cm	
48.30	—	SR 5	SR23 A B	125	180	01.02.02	吸虫器 吸	灰白色 N70	1/3底~1/3底片 (12.0)	—	—	(14.0)	—	—	—	
48.31	—	SR 5	SR23	—	—	01.01.05	吸虫器 吸	灰白色 N70	1/3底~口被膜片 (10.6)	—	—	(12.8)	—	—	外側輪	

固新号	写真 内蔵	測定 寸法	回遊機 用機種 [mm]	取下 No.	取上 H [cm]	检测 器種	器種	保存部 寸法 [cm]	門 徳 [cm]	精良品人道 寸法 [cm]	精良品 寸法 [cm]	底 高 [m]	備 考	
48-32	-	SR 5	SR33A	H4	18	01.02.02	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70 前面: 案色 N640 (Y) 后面: 案色 N751 (Y)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-33	34	SR 6	SR33B	129	147	01.02.14	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70 前面: 案色 N640 (Y) 后面: 案色 N751 (Y)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-34	34	SR 5	SR33A	H6	25	01.01.30	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-35	-	SR 6	SR33B	101	145	01.02.14	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-36	-	SR 5	SR33A	150	100	01.01.31	照光器	环置	天井 #; 案白色 N50	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-37	-	SR 5	SR33A	-	-	01.01.29	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-38	-	SR 5	SR33A	141	102	01.01.25	照光器	环置	天井 #; 案黄色 N84 前面: 案黄色 N84	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	14.5	14.5	3.3	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1
48-39	-	SR 5	SR33A	140	70	01.01.30	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70 (B)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-40	34	SR 5	SR33 AB	128	50	01.01.30	照光器	环置	天井 #; 案白色 N750	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-41	33	SR 5	SR33A	123	104	01.01.31	照光器	环置	天井 #; 案白色 N660	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-42	34	SR 5	SR33A	126	46	01.01.24	照光器	环置	天井 #; 案白色 N80 (Y)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-43	34	SR 6	SR33B	118	138	01.02.13	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70 (B) 前面: 案白色 N460 (B)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	14.5	14.5	-	-
48-44	-	SR 5	SR33A	156	71	01.01.30	照光器	环置	天井 #; 案白色 N750	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-45	-	SR 6	SR33H	137	170	01.02.16	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-46	-	SR 5	SR33A	159	31	01.01.24	照光器	环置?	天井 #; 案白色 N70 (B)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
48-47	-	SR 5	SR33A	140	70	01.01.30	照光器	环置?	天井 #; 案白色 N70 (Y)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
49-48	34	SR 5	SR33A	152	68	01.01.30	照光器	环置	天井 #; 案白色 N80 (Y)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	(13.9)	-	-	-
49-49	34	SR 5	SR33A	-	61	01.01.24	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	10.0	-	-	-
49-50	-	SR 5	SR33A	137	78	01.01.30	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70 (YR)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	11.8	11.8	-	-
49-51	-	SR 5	SR33A	-	-	01.01.29	照光器	环置	天井 #; 案白色 N80	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	(11.4)	-	-	-
49-52	34	SR 5	SR33A	160	63	01.01.30	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	(14.3)	-	-	-
49-53	-	SR 5	SR33A	131	101	01.01.31	照光器	环置	天井 #; 案白色 N80	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	-	-	-	-
49-54	-	SR 5	SR33A	163	59	01.01.30	照光器	环置	天井 #; 案白色 N70 (YR)	つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1 つまみV1	(10.8)	-	-	-

回収番号	写真 回数	直轄 回数	出土箇所 (段)	取上 名	取上H (cm)	幅W (cm)	厚D (cm)	色 調	複合部	口径 (cm)	角 (cm)	斜面高 (cm)	斜面低 (cm)	器高 (cm)	備 考
49-55	—	SR 5	SR33A	—	—	0.01.30	須恵器 灰白	N60	灰白	1.6	—	—	—	[11.5]	—
49-56	—	SR 6	SR33B	118	181	0.02.16	須恵器 灰白	N60	—	—	—	—	[9.2]	—	
49-57	—	SR 5	SR33A	—	—	0.02.06	須恵器 灰白	N70	灰白	—	—	—	[8.8]	—	
49-58	—	SR 5	SR33A	165	9	0.01.24	須恵器 灰白	N50 (青・火入)	灰白	1.3	—	—	—	貼付け高台	
49-59	—	SR 5	SR33A	157	64	0.01.30	須恵器 灰白	N50	灰白	1.3	—	—	—	内外凹凸化	
49-60	—	SR 5	SR33A	167	4	0.01.24	須恵器 灰白	N70	灰白	1.4	—	—	—	内外均削化	
49-61	—	SR 5	SR33A	154	66	0.01.30	須恵器 灰白	N50	灰白	1.4	—	—	—	—	
49-62	35	SR 6	SR33B	117	233	0.02.20	須恵器 灰白	N60 (G)	口縁一泡吹き 片蓋	1.3	—	—	—	4.2	長径[10.2cm]、外周張りあり
49-63	35	SR 6	SR33B	78	246	0.02.21	須恵器 灰白	N60 (Y)	泡吹き 片蓋	1.6	—	—	—	4.5	長径[9.9cm]、外周張りあり
49-64	35	SR 6	SR33B	97	266	0.02.21	須恵器 灰白	N6.50 (Y)	泡吹き 片蓋	1.3	[10.9]	—	—	—	—
49-65	—	SR 6	SR33B	—	—	0.02.16	須恵器 灰白	N70	口縁一泡吹き 片蓋	1.4	[11.9]	—	—	4.3	外周張りあり
49-66	—	SR 6	SR33B	127	158	0.02.15	須恵器 灰白	N70	天井～口縁1/4 片蓋	1.2	[9.0]	—	—	3.9	長径[8.9cm]、外周張りあり
49-67	—	SR 6	SR33B	88	150	0.02.14	須恵器 灰白	N70	天井～口縁1/6 片蓋	1.6	[12.3]	—	—	—	口唇内側端丸み
49-68	35	SR 6	SR33B	122	195	0.02.16	須恵器 灰白	N6.50 (YR)	天井1/1 片蓋	1.6	[11.0]	—	—	4.0	—
49-69	35	SR 6	SR33B	138	160	0.02.14	須恵器 灰白	N6.50	天井～口縁1/3 片蓋	1.6	[9.4]	—	—	3.8	へら足跡
49-70	—	SR 5	SR33A	—	—	0.02.02	須恵器 灰白	N75 Y71	天井～口縁1/4 片蓋	1.0	—	—	—	3.4	—
49-71	35	SR 5	SR33 A B	—	—	0.02.14	須恵器 灰白	N6.50	天井～口縁1/2 片蓋	1.6	[9.6]	—	—	3.5	No.111E 無刃出土
49-72	35	SR 6	SR33B	140	168	0.02.14	須恵器 灰白	N70 (B)	天井～口縁1/3 片蓋	1.6	[9.4]	—	—	(3.0)	No.111E 無刃出土
49-73	35	SR 6	SR33B	123	211	0.02.19	須恵器 灰白	N75 Y61	天井～口縁1/2 片蓋	1.0	[10.9]	—	—	3.8	—
49-74	35	SR 5	SR33A	154	128	0.02.02	須恵器 灰白	N79 (Y)	天井～口縁1/2 片蓋	1.0	—	—	—	3.8	ヘラ記号
49-75	SR 5	SR33	140	153	0.02.15	須恵器 灰白	N57.5 Y31	人井1/1 片蓋	1.0	[10.0]	—	—	[4.5]	—	
49-76	35	SR 5 A B	SR33	123	250	0.02.21	須恵器 灰白	N60	口縁1/2欠損 片蓋	1.3	—	—	—	3.9	外輪円凸部なし
49-77	36	SR 5	SR33A	—	0.01.31	須恵器 灰白	N6.50	天井1/1 片蓋	1.6	[9.6]	—	—	3.8	中央上唇面削り出	

国番号	学名	固有名	出産場所	出産日(年月日)	直上H (cm)	直上W (cm)	性別	器種	色	調	死部	口	径	径	死部 径合計 (cm)	受精 径合計 (cm)	死部 径合計 (cm)	備 考
49-78	SR 6	SR33B	—	—	01.02.14	須恵器	耳身	灰色	X6.50	—	丸井~口縫1.02	(9.2)	—	—	—	—	3.7	No.111黒引切出し、ヘラ記号
49-79	SR 6	SR33B	上四	—	01.02.14	須恵器	耳身	灰色	5Y60	—	丸井~口縫1.04	(9.4)	—	—	—	—	4.1	ヘラ記号
49-80	—	SR 5	SR33A	148	121	01.02.02	須恵器	耳身	灰色 X60 (Y)	—	人井1.02 口縫片	(10.2)	—	—	—	—	—	(3.5) ヘラ記号
49-81	36	SR 5	SR33A	—	—	01.01.31	須恵器	耳身	灰白色 N70	—	丸井~口縫1.04	(10.1)	—	—	—	—	—	(3.7) 中央上端管出土
49-82	—	SR 5	SR33A	163	123	01.02.02	須恵器	耳身	灰色 X60	—	1横~1.03	(9.8)	—	—	—	—	—	ヘラ記号?
49-83	36	SR 5	SR33A	—	—	01.01.31	須恵器	耳身	灰色 X60 (PB)	—	山根~1.05	(9.6)	—	—	—	—	—	(3.1) 中央上端管出土、外画他
50-84	—	SR 6	SR33B	—	—	01.02.13	須恵器	耳垂	灰白色 N70 (W~1.2)	—	人井1.02 口縫片	(9.7)	—	—	—	—	—	外画他
50-85	—	SR 5	SR33A	146	47	01.01.30	須恵器	耳身	灰白色 N60 (B)	—	人井1.04 口縫1.06	(9.6)	—	—	—	—	—	(3.3)
50-86	—	SR 5	SR33A	163	123	01.02.02	須恵器	耳身	灰黑色 5H60	—	丸井~口縫1.04	(9.5)	—	—	—	—	—	ヘラ記号
50-87	—	SR 5	SR33A	150	100	01.01.31	須恵器	耳垂	灰白色 X60	—	1横1.04	(9.7)	—	—	—	—	—	外画他
1-142	50-88	36	SR 6	SR33B	94	259	01.02.21	須恵器	耳身	灰白色 N50 (Y)	—	1横1.05欠損	9.3	—	—	11.5	—	4.5 内外他・添板、焼毛ぶくれ
—	50-89	—	SR 5	SR33	146	91	01.01.31	須恵器	耳身	にぶい茶褐色 2.5YR5/4	口縫1.04 人井1.052/3	(9.6)	—	—	(11.5)	3.8	4.1 西浦レンゲナガ[81]付.	
50-90	—	SR 6	SR33B	117	247	01.02.21	須恵器	耳身	にぶい茶褐色 2.5YR5/3	口縫~1.04	(9.3)	—	—	—	—	—	—	
50-91	—	SR 5	SR33A	—	—	01.01.30	須恵器	耳身	灰白色 N60	—	口縫~1.04	(8.7)	—	—	(10.6)	—	3.7	
50-92	36	SR 5	SR33A	136	52	01.01.30	須恵器	耳身	灰白色 N50 (B)	—	1横1.04 木部1.03	(8.4)	—	—	10.1	—	3.1	
50-93	—	SR 5	SR33A	—	—	01.01.30	須恵器	耳身	灰白色 N70	—	口縫~1.04	(8.1)	—	—	(9.8)	—	(3.4)	
50-94	—	SR 5	SR33A	148	62	01.01.30	須恵器	耳身	灰白色 N6.50 (B)	—	1横~1.03	(8.0)	—	—	(10.3)	—	—	
50-95	36	SR 5	SR33A	143	117	01.02.02	須恵器	耳身	灰白色 N60	—	1横~1.02	8.4	—	—	10.1	2.5	3.4	
50-96	—	SR 5	SR33A	111	125	01.02.02	須恵器	耳身	灰白色 N70	—	1横~1.04	(8.4)	—	—	(10.4)	—	3.1	
50-97	36	SR 5	SR33A	141	122	01.02.02	須恵器	耳身	灰白色 N60 (B)	—	会部~2.0欠損	8.6	—	—	10.3	2.2	3.0	
50-98	36	SR 5	SR33A	148	62	01.01.30	須恵器	耳身	灰白色 N6.50 (B)	—	口縫2.05 底1.01	(8.0)	—	—	(9.8)	3.5	2.9	
50-99	36	SR 6	SR33B	121	146	01.02.14	須恵器	耳身	灰白色 N60 (B)	—	1横1.05	(7.9)	—	—	(9.8)	(4.0)	2.8	

固着炒 方式	外観 名	車両番 号	車両高 度 (cm)	取付 部	取付 部	取付部 形状	取付部 寸法	取付部 寸法	取付部 寸法	取付部 寸法	取付部 寸法	取付部 寸法
50-100	-	SKR 5	SKR3A	145	122	01.01.18	18 気泡點 耳付	灰色 N50 (GY)	118×124 耳付	(8.2)	-	(10.1)
50-101	.36	SKR 6	SKR3B	96	265	01.02.21	氣泡點 耳付	灰色 N50 (B)	118×124 耳付	(9.2)	-	(11.0)
50-102	.37	SKR 5	SKR3A	137	78	01.03.20	氣泡點 耳付	灰色 N50	118×124 耳付	(8.6)	-	(10.2)
50-103	.37	SKR 5	SKR3A	127	42	01.03.03	氣泡點 耳付	灰色 N50	118×124 耳付	(9.5)	-	(11.3)
50-104	-	SKR 5	SKR3A	151	65	01.03.03	氣泡點 耳付	灰色 N60 (B)	118×124 耳付	(9.1)	-	(11.0)
50-105	-	SKR 5	SKR3A	-	-	01.03.24	氣泡點 耳付	灰色 N70	118×124 耳付	(8.9)	-	(10.8)
50-106	-	SKR 6	SKR3B	-	-	01.03.13	氣泡點 耳付	灰色 N60 (GY)	118×124 耳付	(8.6)	-	(10.8)
50-107	-	SKR 6	SKR3B	73	245	01.02.21	氣泡點 耳付	灰色 7.5YR7/4	118×124 耳付	(7.9)	-	-
50-108	-	SKR 5	SKR3A	152	92	01.01.31	氣泡點 耳付	灰色 N70	118×124 耳付	-	3.2	-
50-109	-	SKR 5	SKR3A	149	113	01.01.18	氣泡點 耳付	灰色 N80	118×124 耳付	-	2.6	-
50-110	.37	SKR 6	SKR3B	131	162	01.02.15	氣泡點 耳付	灰色 7.5YR6/3	118×124 耳付	-	9.8	-
50-111	.37	SKR 6	SKR3B	140	175	01.02.14	氣泡點 耳付	灰色 N80	118×124 耳付	-	11.0	-
50-112	-	SKR 5	SKR3A	-	-	01.01.31	上部器 耳付	灰色 2.5YR6/4	118×124 耳付	(12.0)	-	(5.7)
50-113	-	SKR 5	SKR3	-	-	00.12.28	上部器 耳付	白色 2.5YR6/2	118×124 耳付	-	-	-
50-114	.37	SKR 5	SKR3A	165	130	01.02.02	十脚器 耳付	灰色 2.5YR6/6	118×124 耳付	(18.4)	(17.6)	(20.0)
50-115	.37	SKR 6	SKR3B	93	156	01.02.15	上部器 耳付	白色 7.5YR4/2 内面：灰色 10YR1/0	118×124 耳付	(13.7)	(11.6)	(22.3)
50-116	-	SKR 6	SKR3B	77	-	01.02.14	十脚器 耳付	白色 7.5YR5/2 内面：灰色 10YR6/4	118×124 耳付	-	-	-
50-117	.37	SKR 5	SKR3A	161	15	01.01.24	土蔵留 耳付	灰色 10YR7/1	118×124 耳付	(18.4)	(17.6)	(20.0)
50-118	.37	SKR 5	SKR3A	142	97	01.01.31	上部器 耳付	灰色 10YR8/1	118×124 耳付	(17.9)	14.4	(19.6)
50-119	-	SKR 5	SKR3A	146	91	01.01.31	土蔵留 耳付	灰色 10YR7/26	118×124 耳付	-	-	-
50-120	-	SKR 6	SKR3B	127	139	01.02.13	十脚器 耳付	灰色 10YR8/1	118×124 耳付	-	-	-
50-121	-	SKR 6	SKR3D	-	-	01.01.18	上部器 耳付	灰色 10YR5/2	118×124 耳付	-	-	-
50-122	++	SKR 5	SKR3A	-	-	01.01.29	上部器 耳付	灰色 10YR8/2	118×124 耳付	-	-	-

外面部
ヘラミカ
ヘラミカ

國名	方言	通稱	俗語	取(口) No.	種別	器物	色	調	操作部	口	送	胸	腹	頭部人仔	受話部	姓名	35cm	備考
國名	方言	通稱	俗語	取(口) No.	種別	器物	色	調	操作部	口	送	胸	腹	頭部人仔	受話部	姓名	35cm	備考
51-123	37	SR 5	SR33A	128	41	01.01.30	上腳器	要	海灰色 10YR6.5/1	□或△	(17.4)	(15.4)	(18.2)	-	-	-	達江恩西外溫外壓	外溫外壓
51-124	38	SR 5	SR33A	149	79	01.01.30	土腳器	要	灰白色 10YR7/1	□或△	(17.1)	(13.3)	(16.2)	-	-	5.9	284	達江恩西外壓(外6.內5)
52-125	-	SR 5	SR33A	150	79	01.01.30	上腳器	要	灰褐色 2.5/6.5/1	1號△	-	-	-	-	-	-	達江恩西外壓(外6.內5)	
52-126	-	SR 6	SR33B	上層	-	01.02.13	上腳器	要	灰褐色 2.5/7.7/2	□或△	(18.6)	-	-	-	-	-	-	達江恩西外壓(外5.5)
52-127	-	SR 5	SR33A	-	01.02.15	十腳器	要	灰褐色 2.5/7.7/2	□或△	(19.1)	-	-	-	-	-	-	達江恩西外壓(外5.5)	
52-128	-	SR 5	SR33	270	96	01.01.30	十腳器	要	灰褐色 10YR6.5/2	△或△	-	-	-	-	-	-	達江恩西外壓(外5.5)	
52-129	-	SR 6	SR33B	上層	-	01.02.19	上腳器	要	暗黃褐色 2.5/15/2	底△/1	-	-	-	-	-	6.2	-	
52-130	-	SR 5	SR33A	142	60	01.01.30	上腳器	要	灰白色 7.5YR8/2	1號△/1	-	-	-	-	-	-	達江恩西外壓(外5.5)	
52-131	-	SR 6	SR33B	120	163	01.02.15	十腳器	要	灰+黃褐色 10YR6.5/4	口橫旋片	-	-	-	-	-	-	達江恩西外壓(外5.5)	
52-132	-	SR 6	SR33B	118	201	01.02.19	十腳器	要	灰+黃褐色 10YR7/5/3	口橫旋片	-	-	-	-	-	-	達江恩西外壓(外5.5)	
52-133	-	SR 6	SR33B	120	203	01.02.19	上腳器	要	灰+黃褐色 10YR5/3	口橫旋片	-	-	-	-	-	-	達江恩西外壓(外5.5)	
52-134	-	SR 5	SR33A	-	01.02.19	上腳器	要	淡黃褐色 7.5YR8/3	口橫旋片	-	-	-	-	-	-	-	達江恩西外壓(外5.5)	
52-135	-	SR 6	SR33B	122	188	01.01.18	十腳器	要	灰褐色 10YR6/2	□或△	(17.0)	(13.2)	-	-	-	-	中東泰南チ内出土外壓(外5.5)	
52-136	-	SR 5	SR33A	138	105	01.01.31	上腳器	要	灰+黃褐色 10YR7/2	□或△	(11.0)	(11.6)	-	-	-	-	小寶品外壓(外5.5)	
52-137	-	SR 5	SR33A	135	109	01.01.31	上腳器	要	灰+黃褐色 10YR7/2	□或△	(14.3)	(13.8)	-	-	-	-	小寶品外壓(外5.5)	
52-138	38	SR 6	SR33B	107	245	01.02.21	上腳器	要	灰+黃褐色 7.5YR8/3	□或△	等△	14.0	(13.5)	(24.1)	-	-	小寶品外壓(外5.5)	
52-139	-	SR 5	SR33A	-	01.01.30	上腳器	合符要	灰+黃褐色 10YR5/3	長介部△	-	-	-	-	-	-	-	中東泰南チ内出土外壓(外5.5)	
52-140	-	SR 5	SR33A	-	01.01.31	十腳器	合符要	灰+黃褐色 2.5YR8/1	接介部△	-	-	-	-	-	-	-	小寶品外壓(外5.5)	
52-141	-	SR 5	SR33	上層	-	01.01.16	上腳器	要	灰+黃褐色 7.5YR8/1	□或△	(16.4)	(15.7)	-	-	-	-	中東泰南チ内出土外壓(外5.5)	
52-142	-	SR 5	SR33A	152	72	01.01.30	十腳器	要	灰+黃褐色 3.75YR8/1	□或△	-	-	-	-	-	-	中東泰南チ内出土外壓(外5.5)	
52-143	-	SR 6	SR33B	140	197	01.02.16	十腳器	要	灰色 5YR6/6	□或△	(18.8)	(16.6)	-	-	-	-	中東泰南チ内出土外壓(外5.5)	
52-144	-	SR 5	SR33A	-	01.01.24	上腳器	要	中灰褐色 2.5YR5/6	□或△	等△	14.0	(19.4)	(16.7)	-	-	-	中東泰南チ内出土外壓(外5.5)	
52-145	-	SR 5	SR33A	-	01.01.31	十腳器	要	灰+黃褐色 7.5YR7/3	□或△	等△	14.0	(18.6)	(17.5)	-	-	-	中東泰南チ内出土外壓(外5.5)	
52-146	-	SR 6	SR33B	121	143	01.02.14	土腳器	要	灰色 7.5YR7/3	□或△	(18.6)	(18.5)	-	-	-	-	中東泰南チ内出土外壓(外5.5)	

試験番号	片歯 頭版	番号	片歯 頭版 (cm)	品種 別	頭 幅 (mm)	頭 高 (mm)	頭 長 (mm)	頭 幅 (mm)	頭 高 (mm)	頭 長 (mm)	頭 幅 (mm)	頭 高 (mm)	頭 長 (mm)	頭 幅 (mm)	頭 高 (mm)	頭 長 (mm)	
53-171	-	SR 6	SR33B	129	186	01.02.16	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR5/3	1.1種複片	-	-	-	-	1.1種複片	-
53-172	38	SR 6	SR33B	94	193	01.02.16	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR5/6	1.1種複片	解1/4	-	-	-	1.1種複片	解1/4
53-173	-	SR 5	SR33A	145	83	01.01.20	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	5YR4/5	1.1種複片	解3/4	-	-	-	1.1種複片	解3/4
53-174	-	SR 6	SR33B	138	166	01.02.15	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	5YR5/4	1.1種複片	解1/4	-	-	-	1.1種複片	解1/4
54-175	38	SR 6	SR33B	115	252	01.02.24	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	2.5Y6/4	1.1種複片	解1/3	-	-	-	1.1種複片	解1/3
54-176	-	SR 6	SR33B	116	254	01.02.21	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR5/2	1.1種複片	解1/4	-	-	-	1.1種複片	解1/4
54-177	-	SR 6	SR33B	126	217	01.02.20	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR7/3	1.1種複片	底8/10	-	-	-	1.1種複片	底8/10
54-178	-	SR 6	SR33B	96	270	01.02.22	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR4/2	1.1種複片	底1/3	-	-	-	1.1種複片	底1/3
54-179	-	SR 5	SR33A	161	18	01.01.21	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	7.5YR7/1	1.1種複片	底5/5	-	-	-	1.1種複片	底5/5
54-180	-	SR 5	SR33A	158	28	01.01.24	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR8/1	1.1種複片	底4/5	-	-	-	1.1種複片	底4/5
54-181	-	SR 6	SR33B	83	229	01.02.20	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	2.5Y6/4	1.1種複片	底1/2	-	-	-	1.1種複片	底1/2
54-182	-	SR 6	SR33B	142	218	01.02.20	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR7/3	1.1種複片	底5/10	-	-	-	1.1種複片	底5/10
54-183	38	SR 6	SR33B	128	140	01.02.13	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	5YR3/3	1.1種複片	底8-1/48	155.0	(52.6)	(52.8)	1.1種複片	底8-1/48
54-184	-	SR 5	SR33A	-	00.12.28	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	7.5YR5/4	1.1種複片	-	-	-	-	1.1種複片	-	
55-185	-	SR 5	SR33A	145	15	01.01.25	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR7/2	1.1種複片	底1/6	-	-	-	1.1種複片	底1/6
55-186	-	SR 5	SR33A	144	26	01.01.24	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR8/1	1.1種複片	解1/5	-	-	-	1.1種複片	解1/5
55-187	-	SR 5	SR33A	161	15	01.01.24	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR7/3	1.1種複片	-	-	-	1.1種複片	-	
55-188	-	SR 5	SR33A	-	-	01.02.02	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR5/2	1.1種複片	-	-	-	1.1種複片	-	
55-189	-	SR 6	SR33B	115	252	01.02.21	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	5YR4/3	1.1種複片	-	-	-	1.1種複片	-	
55-190	-	SR 5	SR33 A B	138	108	01.01.31	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	10YR8/1	1.1種複片	底1/4	-	-	-	1.1種複片	底1/4
56-191	-	SR 6	SR33B	137	-	01.02.14	土壠器	頭	12.5×1.5 赤茶褐色	2.5Y7/3	1.1種複片	-	-	-	1.1種複片	-	

固有号	学名	通称	出走解説	頭上 (cm)	頭上 日	種別	首絆	色	頭	残存部	L (cm)	W (cm)	頭長大径 (cm)	頭長 (cm)	頭 (cm)	高 (cm)	備 考
56-215	39	SR 5	山茶樹	SR33A	140	111	0.01.31	土蜂器	坏	赤褐色 10R45E	口輪・体14 底16	(13.0)	-	-	-	4.0	
56-216	-	SR 6	山茶樹	SR33B	-	-	0.02.16	土蜂器	坏	明赤褐色 2.5YR56E	1.頭～体16 底14	-	-	-	-	4.0	木葉柄
56-217	-	SR 5	山茶樹	SR33A	146	87	0.01.31	土蜂器	坏	赤色 10R56E	1.頭～体16 底13	-	-	-	-	4.0	木葉柄
56-218	-	SR 5	山茶樹	SR33A	152	120	0.02.02	十脚器	坏	(4E)系白色 D9R82E (DC)赤色 10.5R6	体～底14	-	-	-	-	-	木葉柄 表面化。内面へナナダ
56-219	-	SR 6	山茶樹	SR33H	-	-	0.02.22	土蜂器	坏	明赤褐色 5YR56E	1.頭～体14 底15	-	-	-	-	-	口輪外側黒斑
56-220	-	SR 6	山茶樹	SR33D	143	155	0.02.15	十脚器	坏	赤褐色 2.5YR56E	口輪～体14 底10	-	-	-	-	-	
56-221	39	SR 6	山茶樹	SR33B	78	262	0.02.19	土蜂器	坏	12.5E1 橙色 73YR64E	口輪14 底13	(13.3)	-	-	-	-	外側黒斑、外側ヘナナダ
56-222	39	SR 6	山茶樹	SR33B	133	178	0.02.14	土蜂器	坏	橙色 5YR76E	1.頭～体16 底13	(13.8)	-	-	-	-	No.111底黒切出十
56-223	-	SR 5	山茶樹	SR33	-	188	0.02.16	土蜂器	坏	12.5E1 橙色 73YR64E	口輪～體14 底14	(13.4)	-	-	-	4.4	木葉柄、SR 5 細引出十、外側黒斑
56-224	-	SR 5	山茶樹	SR33	-	-	0.02.02	須蟲器	宜	灰白色 N70	體12	-	-	-	-	1.4 区上端1.5cm外側一毫 足道1本	
56-225	-	SR 5	山茶樹	SR33	-	-	0.01.30	須蟲器	宜	灰白色 N70	底12	-	-	-	(7.0)	1.4 区上端出十	
56-226	-	SR 5	山茶樹	SR33	-	-	0.02.06	須蟲器	宜?	灰白色 N80	把手	-	-	-	-	1.4 区上端出十	
56-227	-	SR 5	山茶樹	SR33	-	-	0.01.30	須蟲器	坏	灰白色 N60	1.頭12 底16	(16.8)	-	-	-	3.6	1.4 区上端出十、2.5cm
56-228	-	SR 5	山茶樹	SR101	157	7	0.02.14	須蟲器	坏	灰白色 N70	天井14	-	-	-	-	1.4 区上端出十、2.5cm	
56-229	-	SR 5	山茶樹	SR33	-	-	0.02.02	須蟲器	坏	灰白色 5YR61E	底10	-	-	-	(11.0)	1.4 区上端出上點付青苔	
56-230	-	SR 5	山茶樹	SR33	-	-	0.01.30	須蟲器	坏	灰白色 N80	底12	-	-	-	(11.0)	-	
56-231	-	SR 5	山茶樹	SR101	156	6	0.02.14	須蟲器	坏	灰白色 N70 ~ 青褐色 5B61E	口輪・体16 底13	-	-	-	-	1.4 区上端出十	
58-1	-	SD 1	SD10	189	3	0.01.13	山茶樹	坏	灰白色 N70	底13	-	-	-	(14.1)	短多葉		
58-2	39	SD 1	SD10	172	1	0.01.12.12	山茶樹	壞	內面：灰赤色 2.5Y61E 外側：深赤色 5B61E	1.頭～体14 底15	(14.0)	-	-	(7.4)	1.4 区外側黒斑、三角底青苔		
58-3	-	SD 1	SD10	-	-	0.01.12.04	山茶樹	壞	灰白色 N60	底13	-	-	-	-	系切り、スノコ地外側黒斑		
58-4	-	SD 2	SD 7	186	28	0.01.13.0	山茶樹	壞	1.頭14	(15.8)	-	-	-	-	輪花脚美、過剰花		
58-2	39	SD 2	SD 7	171	1~3	0.01.12.01	山茶樹	壞	灰白色 N70	1.頭～体23 底11	15.3	-	-	-	6.5	5.7 内外側保付青苔台形	
58-3	40	SD 2	SD 7	188	27	0.01.12.13	山茶樹	壞	灰白色 30Y71E	1.頭～底14	(13.7)	-	-	(6.0)	4.4 系切り葉美、過剰花		

圖案號	寫真 回次	色彩	色彩編號	出子番号	取上 (cm)	取上 口	側別	面積	色 調	複合顏 色	門 檻	窗 檻	前部最大深 (cm)	後部 (cm)	高台邊 (cm)	等 高 米	備 考	
58-4	-	SD2	SD7	-	00.1124	山茶檻	楓	青灰色 5Y 5/1	L深綠片	-	-	-	-	-	-	-		
58-5	40	SD2	SD7	163	12	00.1213	山茶檻	楓	灰褐色 5Y 8/1	1檣 1.0 每14.3cm 1.0	(17.2)	-	-	-	7.4	5.6	系切り(側檻)重ね縫合直角 スノコ板	
58-6	40	SD2	SD7	172	32	00.1124	山茶檻	楓	灰褐色 5Y 7/1	1檣 2.63 体~底 1.1	17.2	-	-	-	7.1	5.7	スノコ板、系切り	
58-7	40	SD2	SD7	172	30	00.1213	山茶檻	楓	門面：灰白色 10YR 1/1 外側面：土灰色、褐色 7SYR 4/4	□68~底 1/1 底 1/2	(17.1)	-	-	-	7.5	5.8	外側壁、系切り、重ね縫合 二角低高台、スノコ板、系切り	
58-8	-	SD2	SD7	189	4	00.1213	山茶檻	楓	灰白色 N 6/0	底 1/2	-	-	-	-	(7.5)	-	-	
58-9	40	SD2	SD7	171	18	00.1213	山茶檻	楓	灰褐色 5Y 6/1	底 1/1 体約 1.6	-	-	-	-	6.8	-	系切り、内面直角、内面縫合	
58-10	-	SD2	SD7	171	23	00.1213	山茶檻	楓	灰褐色 5Y 7/1	底 1/2 体 1.6	-	-	-	-	(7.4)	-	系切り、スノコ板	
58-11	-	SD2	SD7	183	17	00.1213	山茶檻	楓	土灰色、褐色 7SYR 7/4	底 1/2	-	-	-	-	(7.4)	-	掌彌	
58-12	-	SD2	SD7	187	24	00.1213	山茶檻	小楓	青灰色 5SYG 1	□檣~底 1/2 (9.8)	-	-	-	-	(4.0)	2.3	内面袖、系切り	
58-13	40	SD2	SD7	175	6	00.1213	山茶檻	小楓	灰白色 5Y 7/1	完形品	8.6	-	-	-	4.0	2.3	系切り	
58-14	40	SD2	SD7	181	19	00.1213	山茶檻	小楓	灰褐色 N 7/0	完形品	7.3	-	-	-	4.1	1.8	内面直角、袖、系切り	
58-15	-	SD3	SD13	-	-	00.1130	楓豎檻	楓	門面：灰褐色 N 5/6 外側面：灰色 N 3/0	體 1/6	-	(9.3)	-	-	-	-	-	外側袖、泥入?
62-1	40	SD15	SD35	166	37	01.0126	外山檻	合子身	灰白色 10Y 8/1 一端特殊 5YR 7/6	□檣~底 1/2 (4.2)	-	-	-	(5.4)	(3.6)	2.3	袖の色：明快な色 7=GYW 1 腰帶省?	
62-2	41	SD15	SD35	163	14	01.0112	山茶檻	楓	灰褐色 N 5/0	體 1/4 底 3/4 (15.0)	-	-	-	-	6.7	5.6	内面直角、墨化、底面ナダ スノコ板	
62-3	41	SD15	SD35	167	5	01.0122	山茶檻	楓	青灰色 10BG 5/1	體 1/4 底 3/2 (16.6)	-	-	-	-	8.2	5.5	系切り、スノコ板	
62-4	41	SD15	SD35	161	11	01.0118	山茶檻	楓	灰褐色 N 6/0	□檣~底 1/2 每14.4cm 1.0	(17.3)	-	-	-	6.9	5.7	系切り	
62-5	-	SD15	SD35	167	17	01.0126	山茶檻	楓	灰褐色 5Y 6/1	体 1/6	(15.3)	-	-	-	-	-	-	
62-6	-	SD15	SD35	-	-	01.0118	山茶檻	楓	青灰色 5YH 5/1	体 1/4	(15.3)	-	-	-	-	-	-	
62-7	-	SD15	SD35	162	38	01.0126	山茶檻	楓	土灰色、褐色 5YR 7/4 (9.8) 青灰色 5YH 5/0	底 1/2	-	-	-	-	7.5	-	系切り	
62-8	-	SD15	SD35	189	19	01.0126	山茶檻	楓	灰白色 N 5/0 (B)	底 2/3	-	-	-	-	6.4	-	-	
62-9	41	SD15	SD35	165	25	01.0116	山茶檻	楓	灰褐色 N 7/0	体 1/4	(17.2)	-	-	-	-	-	-	泥墨? 山口山川沈緑
62-10	41	SD15	SD35	-	-	01.0126	山茶檻	楓	灰白色 N 7/0 (B)	體 1/8 底 1/1 (16.1)	-	-	-	-	7.9	5.6	葛葉? 黒雨落虎面付繩 ヘラ起立	

箇番号	写真 回数	通稱	出現場所 (cm)	現上 No	取上日	種別	鑑定	性別	年齢部 (cm)	胸 (cm)	腹 (cm)	頭 (cm)	尾 (cm)	高台長 (cm)	会頭長 (cm)	雄 雌	備 考
62-11	-	SD35	山茶輪	164	34	01.01.26	山茶輪	輪	灰白色 N70 (Y)	成員	-	-	-	76	--	海夷、瀬西産の内深水種 △: 雌性	
62-12	-	SD35	-	-	01.01.12	山茶輪	輪	灰白色 5Y7.5N1	成員	-	-	-	73	--	内面黒褐色、頭西面へ△紙?		
62-13	-	SD35	-	-	01.01.12	山茶輪	輪	門面:灰白色 YOK6.5N1 外側:灰白色 Y7.5N1	成員	-	-	-	6.7	--	底葉、頭内面西面黒化手:△深 △裏?		
62-14	-	SD35	160	39	01.01.26	山茶輪	輪	灰白色 N80 (Y)	虎D3	-	-	-	(7.2)	--	深葉、頭内面西面黒化手:△台形領		
62-15	41	SD35	161	13	01.01.23	山茶輪	小頭	灰白色 N70	体14欠指	8.9	-	-	-	3.9	2.4	糸切り	
62-16	42	SD35	176	23	01.01.26	山茶輪	小頭	灰白色 N70	体13欠指	(8.3)	-	-	-	4.7	2.3	糸切り	
62-17	41	SD35	161	28	01.01.26	山茶輪	小頭	灰白色 N6.5N (B)	完熟品	6.0	-	-	-	3.6	2.4	底外面黒化糸切り	
62-18	41	SD35	170	4	01.01.23	山茶輪	小頭	灰白色 N6.5N (B)	完熟品	8.5	-	-	-	3.9	2.5	糸切り	
62-19	42	SD35	160	33	01.01.26	山茶輪	小頭	灰白色 N6.5N (B)	1輪~虎12	(8.3)	-	-	-	(3.7)	2.5	糸切り	
62-20	42	SD35	175	27	01.01.26	山茶輪	小頭	灰白色 N6.5N	体13欠指	8.4	-	-	-	4.0	2.6	糸切り:△留め跡	
62-21	-	SD35	170	26	01.01.26	山茶輪	小頭	灰白色 N70	1輪~虎13	(8.4)	-	-	-	(4.0)	2.5	糸切り:△留め跡	
62-22	-	SD35	-	-	00.12.05	山茶輪	小頭	灰白色 N70 (B)	体23欠指	8.5	-	-	-	3.7	2.8	希望リ:△留め跡	
62-23	42	SD35	167	30	01.01.25	山茶輪	小頭	灰白色 N70	完熟品	9.2	-	-	-	4.0	2.3	糸切り	
62-24	-	SD35	-	-	01.01.17	上輪	輪	灰褐色 7.5YR4/2	口縁膜片	-	-	-	-	-	-	内外面黒:伊勢型	
63-25	-	SD35	-	-	01.01.22	銀色輪	片蓋	灰白色 N6.5N (B)	口縁14	(9.3)	-	-	-	-	-	-	
63-26	-	SD35	-	-	01.01.22	銀色輪	片蓋	灰白色 N60	1輪~一部 体14	(10.1)	-	-	-	-	-	-	
63-27	-	SD35	-	-	01.01.22	原生輪	片身	灰色 N5.5N	体16欠12	(8.4)	-	-	(10.2)	-	3.7	-	
63-28	-	SD35	-	9	01.01.23	七輪	輪	灰色 5YR4/6~ 灰白色 2.5Y7.0	把手	-	-	-	-	-	-	3.8×3.1m	
63-29	-	SD35	171	36	01.01.26	土蔵輪	輪	灰白色 2.5Y8/1	口縁膜片	-	-	-	-	-	-	-	
63-30	-	SD35	-	-	01.01.12	新輪	輪	灰白色 N70	底:15	-	-	-	(7.5)	-	-	内列圓點	
63-31	-	SD16	176	8	01.01.26	紅色輪	輪	灰白色 N70 (Y)	口縁膜片	-	-	-	-	-	-	内面:黑色外側:緑色輪 (薄底)	
63-32	-	SD16	164	8	01.01.26	銀色輪	母	灰白色 N5.5Y7.0	輪1/3	-	-	-	-	-	-	外輪	
63-33	-	SD16	162	-	01.01.19	十輪	輪	灰:5Y5R2/2	口縁1/6	(17.2)	-	-	-	-	-	内列面形	
63-34	42	SD36	162	24	01.01.26	山茶輪	輪	灰白色 N60	1輪~虎12	(16.2)	-	-	(6.4)	5.1	糸切り:△留め跡	△形:明示:灰色 2.5YR5/6	

品番号	分類	通称	斑点数 (ex)	斑点様式	取下 No.	取下 日付	部位	器種	色	調	残存部	1種 (cm)	2種 (cm)	3種 (cm)	脚輪人差 (cm)	受品性	底色 (高音部)	器種	高 (cm)	備考
64-56	-	SX6	SX31	179	45	01.01.30	須虫器	灰	灰色	N60	天井～口輪14	15.0	-	-	-	-	-	つまみ透 (2.9 cm)	-	-
64-57	43	SX6	SX31	181	4	01.01.19	須虫器	灰	灰色	N60	天井～口輪14	15.5	-	-	-	-	-	外面部(つまみ透 (2.6 cm))	-	-
64-58	-	SX6	SX31	169	67	01.01.31	須虫器	灰	灰色	N80	天井～口輪25	17.9	-	-	-	-	-	つまみ透 2.9 cm	-	-
64-59	-	SX6	SX31	1	1	01.01.19	須虫器	灰	灰色	N70 (Y)	天井～口輪16	15.9	-	-	-	-	-	-	-	-
64-60	-	SX6	SX31	181	30	01.01.12	須虫器	灰	灰色	N80 (Y)	天井～口輪14	12.8	-	-	-	-	-	つまみ透 2.6 cm	-	-
64-61	43	SX6	SX31	174	66	01.01.31	須虫器	灰	灰色	N650 (B)	1種～8.14	13.1	-	-	-	-	-	8.5	4.1	毛ね地毛ヌコ模
64-62	43	SX6	SX31	168	79	01.02.08	須虫器	灰	灰色	N70	1種～体13	14.0	-	-	-	-	-	9.2	4.6	-
64-63	-	SX6	SX31	-	-	00.12.06	須虫器	灰	灰色	N750 (Y)	1種～13	-	-	-	-	-	(10.5)	-	-	
64-64	-	SX6	SX31	-	-	01.01.19	須虫器	灰	灰色	N80 (Y)	1種～14	-	-	-	-	-	(11.1)	-	-	
64-65	-	SX6	SX31	-	-	01.02.02	須虫器	灰	灰色	N70	1種～14	15.5	-	-	-	-	-	-	-	-
64-66	-	SX6	SX31	-	-	00.12.06	須虫器	灰	灰色	N80 (Y)	1種～13	-	-	-	-	-	-	-	-	-
64-67	-	SD15	SD35	-	-	00.12.21	須虫器	灰	灰色	N70 (Y)	1種～15 角一部	(9.8)	(14.4)	-	-	-	-	内脚白色	-	-
64-68	-	SX6	SX31	-	-	01.01.16	須虫器	灰	灰色	N70 (Y)	1種～16 角一部	(9.2)	(15.2)	-	-	-	-	内脚白色	-	-
64-69	-	SX6	SX31	-	-	01.01.12	須虫器	灰	灰色	N50 (Y)	1種～18	(15.0)	(13.7)	-	-	-	-	内脚白色	-	-
64-70	-	SX6	SX31	74	68	01.01.30	土師器	灰	灰色	7.5YR7/1	1種～脚 下半1/4 底1/1	15.0	(13.8)	(16.2)	-	5.3	(17.1)	小型化、外脚ハゲメ (10)	-	-
64-71	-	SX6	SX31	81	81	01.02.08	土師器	灰	灰色	7.5YR6/2	口輪14	14.0	(12.5)	-	-	-	-	小型化、内外脚ハゲメ	-	-
65-72	43	SX6	SX31	164	55	01.01.30	土師器	灰	灰色	2.5YR4/6	1種～脚 下1/2 底1/1	(24.4)	(20.4)	-	-	-	-	底板型、外脚ハゲメ (9) 内脚ハナヅ	-	-
65-73	43	SX6	SX31	169	56	01.01.30	土師器	灰	灰色	SYR6/4	1種～脚 下1/3	(24.3)	(20.2)	-	-	-	-	底板型	-	-

写真番号	題名	説明	原寸(目)	原寸(日)	種類	記述	色調	保存部	口述	測定	特徴(目)	特徴(日)	寸法(cm)	寸法(cm)	底質	器高(cm)	備考
65-74	SX6 SX31	山根彌 山根彌	50	01.01.30	十脚器	黒	に点状の黒色 SXR64	底足	-	-	-	-	(6.0)	-	内外面ハラメ 外8. (内10)		
65-75	SX6 SX31	山根彌 山根彌	55	01.02.05	十脚器	黒	明赤褐色 SXR65	底足	-	-	-	-	(9.4)	-	内外面ハラメ 外8. (内10)		
65-76	SX6 SX31	山根彌 山根彌	56	01.01.26	十脚器	黒	墨黒色 SXR62	底足	-	-	-	-	-	-	内外面ハラメ 外9. (内9.5)		
65-77	SX6 SX31	山根彌 山根彌	56	01.01.31	土脚器	墨	に点状の黒色 SXR62	底足	-	-	-	-	-	-	内外面ハラメ (7), 内面ヘタード		
65-78	SX6 SX31	山根彌 山根彌	56	01.02.08	十脚器	黒	面赤褐色 SXR62	底足	11幅1.6	(22.0)	11幅1.6	(16.4)	-	-	内外面ハラメ		
65-79	SX6 SX31	山根彌 山根彌	56	01.01.17	十脚器	黒	點状の黒色 SXR65	底足	11幅~馬上	-	11幅~馬上	-	-	-	内外面ハラメ (外8. 6)		
65-80	SX6 SX31	山根彌 山根彌	57	01.01.31	土脚器	墨	に点状の黒色 SXR64	口持~全体	10幅2.6	(10.8)	11幅2.6	(10.8)	-	-	内外面ハラメ		
65-81	SX6 SX31	山根彌 山根彌	57	01.01.31	土脚器	墨	山根彌の貝	体	11幅2.0	(10.4)	11幅2.0	(10.4)	-	-	内外面ハラメ (外8. 6)		
65-82	SX6 SX31	山根彌 山根彌	57	01.01.19	土脚器	墨	山根彌の貝	口持	11幅2.0	-	11幅2.0	-	-	-	内外面ハラメ (外8. 6)		
65-83	SX6 SX31	山根彌 山根彌	57	01.01.05	土脚器	墨	山根彌の貝	口持~全体	11幅2.0	-	11幅2.0	-	-	-	内外面ハラメ (外8. 6)		
72-1	SF7 SX18	山根 山根	162	1	00.12.04	楕円器	墨	灰白色 N70	口持	5.6	44.2	32.5	76.3	-	-	内外面ハラメ (5)	
73-2	SF7 SX18	山根 山根	163	1	00.12.01	楕円器	墨	灰白色 N80	11幅~馬上	38.9	-	65.2	-	-	73.0	内外面ハラメ (4)	
73-3	SF7 SX19	山根 山根	163	2	00.12.08	楕円器	墨	灰白色 N80	口持	2.0	35.1	-	(46.1)	-	-	47.5	
74-3	SF7 SX18	山根 山根	163	2	00.12.25	楕円器	墨	灰白色 N80	口持	4.5cm	11	4.9	-	-	-	内外面ハラメ (3), 同底光鏡1本 人指穴(所持)7	
74-4	SF7 SX19	山根 山根	163	2	00.12.19	楕円器	墨	灰白色 N80	口持	1.6	11.1	4.9	-	-	-	内外面ハラメ (4)	
74-5	SF7 SX19	山根 山根	164	1	00.12.21	楕円器	墨	灰白色 N70	口持	1.6	(8.8)	(4.8)	-	-	-	内外面ハラメ (3), 同底光鏡1本 人指穴(所持)7	
74-6	SF7 SX19	山根 山根	164	1	00.12.19	楕円器	墨	灰白色 N70	口持	1.6	-	5.2	(16.3)	-	-	内外面ハラメ	
74-7	SF7 SX18	山根 山根	165	4	00.12.21	楕円器	墨	灰白色 N80	口持	1.6	-	-	-	-	-	内外面ハラメ	
74-8	SF7 SX18	山根 山根	168	8	00.12.04	楕円器	墨	灰白色 N80	口持	1.6	-	15.2	-	-	-	内外面ハラメ	
74-9	SF7 SX18	山根 山根	169	9	00.12.21	楕円器	墨	灰白色 N80	口持	1.6	(10.4)	(17.2)	-	-	-	内外面ハラメ	

試験番号	写真 図面	外観 型式	出力端子 (V)	電源 端子 No.	R上(1) R下(2) Y ₀	種別	属性	調 整	操作部	11	14	周 (cm)	周 (cm)	受話器 (cm)	送 話 (cm)	感 度 (dB)	感 度 (dB)	備 考
										原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-10 44	SF7	SX19	標準	2のF	0.012.26	原忠器	體	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	-	(19.2)	-
75-11 -	SF7	SX25	134	7	0.012.21	原忠器	體	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-12 -	SF7	SX19	171	3	0.012.21	原忠器	亞	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-13 44	SF7	SX18	165	6	0.012.19	原忠器	體	原忠器	原忠器	内面：灰褐色 N60	内面：灰褐色 N60	内面：灰褐色 N60	内面：灰褐色 N60	内面：灰褐色 N60	内面：灰褐色 N60	内面：灰褐色 N60	内面：灰褐色 N60	内面：灰褐色 N60
75-14 -	SF7	SX19	156	13	0.013.27	原忠器	體	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-15 44	SF7	SX19	177	2	0.012.08	原忠器	亞	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-16 -	SF7	SX19	-	207	F	0.012.26	原忠器	體	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-17 45	SF7	SX19	160	7	0.012.21	原忠器	體	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-18 45	SF7	SX18	172	2	0.012.08	原忠器	亞	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-19 -	SF7	SX19	174	-	0.012.21	原忠器	亞	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-20 -	SF7	SX19	-	207	F	0.012.25	原忠器	體	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-21 45	SF7	SX19	170	2	0.012.25	原忠器	亞	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-22 -	SF7	SX19	166	4	0.012.21	原忠器	亞	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-23 -	SF7	SX19	167	14	-	0.012.26	原忠器	亞	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-24 -	SF7	SX19	-	207	F	0.012.26	原忠器	體	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-25 -	SF7	SX19	-	207	F	0.012.23	原忠器	平身	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-26 -	SF7	SX19	-	207	F	0.012.25	原忠器	牙身	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-27 -	SF7	SX19	169	14	-	0.012.26	原忠器	牙身	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-28 -	SF7	SX19	174	-	0.013.27	原忠器	牙身	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-29 45	SF7	SX19	165	6	0.012.26	原忠器	牙身	原忠器	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-30 -	SF7	SX19	165	20	F	0.012.21	原忠器	牙身	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70
75-31 -	SF7	SX19	170	20	F	0.012.21	原忠器	牙身	原忠器	原白色 N80	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70	原白色 N70

標識号	写真	固有名	川千番萬 (m)	取上口	側面	底面	背面	頭 (cm)	身 (cm)	尾 (cm)	頭身比 (ca)	頭身比 (ca)	頭高 (ca)	備 考
76-32	45	SF7	SX19	154	B	0.1/0.27	十幅鰓 裏	内面：深灰色 外面：灰白色 SYR8/1	1幅1.66 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	(18.4)	—	6.8	27.5 内面個体羽化外因黒斑 差江熱帶用無し
76-33	—	SF7	SX25	—	1	0.0/1.19	十幅鰓 裏	1.5幅1.76 裏	1幅1.4強	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	—	鰓魚型(内面ハケメ)(9月12)
76-34	45	SF7	SX19	—	1	0.0/1.19	上鰓鰓 裏	1.5幅1.76 裏	1幅2.34	1幅2.34 幅0.57/1	—	—	—	鰓魚型(内面ハケメ)
76-35	—	SF7	SX18	—	0.0/1.21	土鰓鰓 裏	1.5幅1.76 裏	1幅2.34 幅0.57/1	—	—	—	—	—	鰓魚型
76-36	—	SF7	SX19	—	2.0	F	0.0/1.26	上鰓鰓 裏	—	—	—	—	—	頭魚型(内面ハケメ)
76-37	—	SF7	SX25	—	1	0.0/1.19	十幅鰓 裏	1.5幅1.76 裏	1幅1.66 幅0.57/1	1幅1.66 幅0.57/1	—	—	—	外因現(鮮葉弓)水素現
76-38	45	SX3	SX19	153	1	0.0/1.08	土鰓鰓 裏	1.5幅1.76 裏	1幅1.66 幅0.57/1	1幅1.66 幅0.57/1	—	—	—	—
76-39	45	SF7	SX19	153	A	0.0/0.27	土鰓鰓 裏	1.5幅1.76 裏	1幅1.66 幅0.57/1	1幅1.66 幅0.57/1	—	—	—	橢圓形(ニホンフサフサ)
—	76-1	SX3	SX17	153	—	0.0/2.01	側遮器 耳蓋	所白色 N80	1幅2.5久鉤	1幅2.5久鉤	—	—	—	かえり(12.0cm)、まみ合3.4cm
155	78-2	SX3	SX16	176	—	0.0/2.08	十幅鰓 裏	1.5幅1.76 裏	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	8.4	— 鰓外底盤(内面黒化)水素現 (内面ハケメ)
—	78-3	SX3	SX16	175	—	0.0/1.08	上鰓鰓 裏	1.5幅1.76 裏	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	9.1	— 鰓外底盤(内面黒化)水素現 (内面ハケメ)
—	78-4	固	SX25	—	0.0/1.19	山茶鰓 裏	所白色 N80	1幅2.5久鉤	1幅2.5久鉤	—	—	—	— 余切4	
78-5	—	SX3	SX25	179	6	0.0/1.21	須遮器 耳蓋	所白色 N80	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	—	—
80-1	46	SX1	SX2	167	3	0.0/1.28	十幅鰓 裏	1.5幅1.76 裏	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	—	余切4、スノコ現
80-2	46	SX1	SX2	173	1	0.0/1.22	山茶鰓 裏	所白色 N80	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	—	余切4、スノコ現
80-3	46	SX1	SX2	170	4	0.0/1.21	山茶鰓 裏	所白色 N70	金体約1.63 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	—	余切4、スノコ現
80-4	46	SX1	SX2	171	7	0.0/1.21	山茶鰓 裏	所白色 N60	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	—	余切4、スノコ現
80-5	46	SX1	SX2	168	14	0.0/1.12	山茶鰓 裏	所白色 5B6/1	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	—	余切4、スノコ現
80-6	—	SX1	SX2	160	12	0.0/1.12	山茶鰓 裏	(所)所白色 1.5幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	—	余切4、スノコ現
80-7	46	SX1	SX2	168	10	0.0/1.22	山茶鰓 裏	所白色 N60	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	6.4	4.0 余切4、スノコ現
80-8	46	SX1	SX2	162	17	0.0/1.21	山茶鰓 裏	所白色 N60	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	6.2	4.2 余切4、スノコ現
80-9	—	SX1	SX2	160	13	0.0/1.22	山茶鰓 裏	所白色 N60	1幅1.76 幅0.57/1	1幅1.76 幅0.57/1	—	—	—	余切4

頭骨号	学名	通称	頂上幅 (cm)	頭上H	短刺	石枕	色	調	保存部	1. 體 (cm)	2. 頭 (cm)	側面骨長 (cm)	側面骨高 (cm)	底径 (mm)	高 (mm)	備 考
80-10	-	SX 1	SX 2	174	8	0.012.12	山茶槭	褐	灰白色 N70	-	-	-	-	(6.6)	-	余切り、又ノミ痕
80-11	-	SX 1	SX 2	174	2	0.012.11	山茶槭	褐	灰色 N61	底1/1	-	-	-	(6.6)	-	余切り、又ノミ痕
80-12	46	SX 1	SX 2	175	18	0.012.12	山茶槭	小皿	灰白色 N70	耳輪～底1/2 (6.6)	-	-	-	5.8	-	余切り、又ノミ痕
80-13	47	SX 1	SX 2	173	6	0.012.11	山茶槭	小皿	灰白色 10Y6/1	17.8～底1/2 (7.0)	-	-	-	(4.6)	1.8	余切り
80-14	-	SX 1	SX 2	-	-	0.011.30	山茶槭	褐	1-5灰褐色 10YR7/2	口縁破片	-	-	-	-	-	内外面深口唇形、伊勢型
80-15	-	SX 1	SX 2	-	-	0.011.39	十輪器	褐	灰白色 10Y6/2	口縁破片	-	-	-	-	-	外縁広、厚身型
80-16	47	SX 1	SX 2	186	5	0.012.11	山茶槭	褐	灰褐色 10YR6/1	底24.4(体細) (15.8)	-	-	-	(6.0)	4.2	余切り、又ノミ痕合
80-17	47	SX 1	SD 1	180	4	0.012.13	山茶槭	小皿	灰白色 N60 (H)	全体 29.2/3 (7.8)	-	-	-	(3.9)	2.0	余切り
80-18	47	SX 1	SD 1	185	1	0.012.13	山茶槭	卷	灰白色 N70	端1/4	-	(13.9)	-	-	-	内部面附着物多め?
80-19	-	SX 1	SD 1	173	3	0.012.13	山茶槭	褐	1-5灰褐色 7.5YR7/3-1	口縁16 (23.6)	-	-	-	-	-	伊勢型的剖面
82-1	-	SX 4	SR 30	下唇	-	0.012.18	山茶槭	褐	黄灰色 2.5Y6/1	11.8～体1/4 (15.2)	-	-	-	-	-	虚無・近両端七之数頭
82-2	-	SX 4	SR 30	上唇	-	0.012.19	山茶槭	褐	灰白色 7.5Y7/1	底1/4	-	-	-	(6.7)	-	内外面深伊勢型
83-3	-	SX 4	SR 30	上唇	-	0.012.19	山茶槭	褐	灰白色 N80	底7/8	-	-	-	-	-	内面黒色 外面銀色
83-4	-	SX 4	SR 30	上唇	-	0.013.05	山茶槭	褐	灰白色 N80	底1/1	-	-	-	8.0	-	又ノミ痕
83-5	-	SX 4	SR 30	-	-	0.012.21	上唇器	褐	黄色 3YR6/6	11.6(缺片)	-	-	-	-	7.5	-
83-6	-	SX 4	SR 30	-	-	0.012.21	紙幣器	褐	灰白色 N70	口縁破片	-	-	-	-	-	外縁黒色
83-1	-	SD7	SD4	182	3	0.011.27	山茶槭	褐	灰褐色 N50	耳輪～頭上1/3	-	(17.0)	-	-	-	外縁黒色ナデ
83-2	-	SD7	SD4	-	-	0.012.04	山茶槭	褐	灰白色 N70	11.6(1/6)	-	-	-	-	-	内外面深
83-3	-	SD7	SD4	181	11	0.012.12	山茶槭	褐	灰色 N60 (青つぼ入)	口沿1/6	(17.6)	-	-	-	-	内外面深
83-4	-	SD7	SD4	-	-	0.011.22	山茶槭	褐	青灰色 5B4/1	上縁1/6	(13.8)	-	-	-	-	内外面深
83-5	-	SD7	SD4	180	7	0.011.27	山茶槭	褐	灰白色 N70	体～底1/2	-	-	-	8.0	-	内外面深、余切り後ヘラテヌ
83-6	-	SD7	SD4	176	10	0.012.12	山茶槭	褐	灰白色 N80	底1/4	-	-	-	(7.5)	-	内面深、余切り後ヘラテヌ
83-7	-	SD7	SD4	184	1	0.012.12	山茶槭	褐	内面：灰白色 N70 外側：灰白色 1.5Y7/1	底1/4	-	-	-	(7.4)	-	スコロ便

固番号	写真 回数	通称	計量値 (cm)	上口幅 No.	尾上口 No.	種別	骨格	毛色	頭	吻管出 (cm)	口 (cm)	頭 (cm)	頭高 (cm)	頭高 (cm)	頭 (cm)	備 考	
83-8	-	SD7	SD4	187	6	0.011.27	山茶楓	頭	灰白色 N70 (青つぼ)	体2.35	-	-	-	-	6.2	-	余切り
83-9	47	SD7	SD4	179	2	0.012.12	山茶楓	小頭	灰白色 N70	完熟品	8.0	-	-	-	3.7	2.3	余切り
83-10	-	SD7	SD4	183	12	0.012.12	山茶楓	小頭	灰白色 N80	山茶1.5大根	8.7	-	-	-	4.0	2.5	内面傷？余切り
83-11	-	SD7	SD4	177	9	0.012.12	山茶楓	小頭	灰白色 N70	山茶3.5大根	8.2	-	-	-	4.2	2.4	内面傷？余切り
83-1	-	S08	S011	-	-	0.011.27	山茶楓	頭	内面：灰白色 N60 (RG) 外面：灰白色 2.5YR5/4	体14	-	-	-	-	(6.6)	-	余切り
83-1	-	S010	S06	-	-	0.011.22	山茶楓	小頭	灰白色 N60 (B)	山茶14 36/2	-	-	-	-	(3.5)	1.9	余切り
83-1	-	S011	S08	-	-	0.011.24	山茶	頭	輪：オリーブ灰白色 34D7/61 輪：灰白色 N80	口輪10 約10.0	-	-	-	-	-	-	割れ文様並れ染黒名、板純？ 余切り。ミ縫版
83-2	-	S011	S08	-	-	0.011.24	山茶楓	輪	灰白色 N70 (GY)	天井～口根14	-	-	-	-	(6.6)	-	余切り。
84-1	-	S021	S0106	-	-	0.012.16	山茶楓	耳	灰白色 N60 (B)	底14	-	-	-	-	-	-	-
84-2	-	S021	S0108	-	-	0.012.16	山茶楓	耳	灰白色 N70 (Y)	底23	-	-	-	-	-	3.2	-
84-3	-	S021	S0108	-	-	0.012.19	山茶楓	耳	灰白色 N7.5/0 (Y)	体～葉14 1.8/2	(13.0)	-	-	-	(7.4)	3.6	スノコ巻？
84-4	-	S021	S0108	-	-	0.012.16	山茶楓	頭	灰白色 10YR8/21	山茶14	(22.9)	-	-	-	-	-	透汗溝、内外面ハゲタ (外7) 外輪小形 (内側褐色 2.5YR5/6)
84-5	-	S021	S0108	-	-	0.012.19	山茶楓	頭	淡黄褐色 10YR8/3	口輪14 1.8/2	-	-	-	-	-	-	張糸刺
84-6	-	S E 1	S020	-	-	0.012.05	山茶楓	小頭	灰白色 N6.5/0	底14	-	-	-	-	(3.8)	-	余切り
84-7	-	S E 2	SF5	-	-	0.011.22	山茶楓	輪	灰白色 N60	山茶1.8	-	-	-	-	-	-	-
84-8	47	SF11	SX101	-	-	0.012.05	山茶楓	小頭	灰白色 N70 (Y)	口輪14 体12	(15.7)	-	-	-	-	3.1	つまみ径：2.6cm、ナタノ彌若
84-9	47	SF11	SX104	-	-	0.010.06	山茶楓	耳	灰白色 N70 (B)	山茶1.3 体23	16.4	-	-	-	-	3.3	つまみ径：2.6cm、ナタノ彌若
84-10	-	SF11	SX104	-	-	0.010.05	山茶楓	耳	灰白色 N70 (Y)	山茶1.6 1.8/2	(10.4)	-	-	-	(3.8)	3.8	2.ノジ脚
84-11	47	SF11	SX104	-	-	0.010.05	山茶楓	耳	灰白色 N70 (YR)	山茶1.4	-	-	-	-	(8.0)	-	輪輪端外側斑、木葉根 内外面ハゲタ (外8)
84-12	-	SF11	SX104	-	-	0.010.15	山茶楓	頭	輪：灰白色 5YR5/6	山茶14	-	-	-	-	-	-	外腹柄
84-13	-	SF12	SX107	-	-	0.010.16	山茶楓	輪	灰白色 N70	山茶14	-	-	-	-	-	-	-
84-14	-	SF12	SX107	-	-	0.010.15	山茶楓	輪	青灰色 5B5/61	口輪14	-	-	-	-	-	-	-

品番	名前	寸法	上端高 (cm)	底端 No.	底上H	柱頭	各種 器具	色 調	口径 (cm)	底径 (cm)	底板 厚さ (mm)	受端径 (mm)	底板 厚さ (mm)	施
84-15	-	SX14	SF100	-	01.02.07	液槽器	平盤	灰白色 2.5 YR 8/1	1.68~1.6	1.49	-	-	-	(4.2)
84-16	-	SX14	SF100	-	01.02.07	液槽器	平盤	灰白色 N 70 (Y)	口径 1.68	-	-	-	-	-
84-17	-	SX15	SX16	-	01.03.17	上端高 差	液槽器	灰白色 7.5 YR 8/6	底 1.61	-	-	-	(8.6)	-
84-18	-	SX2	SX15	-	00.12.01	山茶碗	小皿	原色 N 60 (B)	1.68~1.74 体~底 1.72	1.78	-	-	4.1	余切り
84-19	-	SX2	SX15	-	00.12.07	山茶碗	中皿	原色 N 80 (Y)	底 1.4	-	-	-	(7.6)	深先・内底切削面?
84-20	-	SX2	SX15	-	00.12.14	液槽器	皿	原色 N 70	液槽片	-	-	-	-	外蓋軸
84-21	-	SX2	SX15	-	00.12.01	液槽器	环身	原色 N 80 (Y)	1.68~1.74 体~底 1.72	1.74	-	-	(6.6)	外面部化
84-22	-	SX2	SX15	-	00.12.14	液槽器	中皿	原色 N 70	1.68~1.6	1.82	-	-	(10.4)	-
84-23	-	SX2	SX15	-	00.11.20	上端高 差	液槽器	原色 5 YR 8/3 外側: 水箱色 3.5 YR 8/6	口縁 1.6 底 1.4	-	-	-	-	底面型
84-24	-	SX2	SX15	-	00.12.04	上端高 差	液槽器	15.5ml 小油樽色 5 YR 8/4 外側: にごり青紫色 10 YR 8/2	1.68~1.74 底 1.6	-	-	-	-	模倣形
84-25	-	SX2	SX15	-	00.11.30	上端高 差	液槽器	外側: 極色 2.5 YR 8/6	1.75	-	-	-	-	外付壓折り返し
85-1	-	SX4	SX27	-	00.12.11	山茶碗	小皿	灰白色 N 6.50	口径 1.6 底 1.4	1.86	-	-	(4.6)	余切り
85-2	-	SX4	SX27	-	00.12.14	液槽器	高环	原色 N 70	液槽器口	-	-	-	-	-
85-3	-	SX4	SX27	-	00.12.11	液槽器	皿	灰色 7.5 YR 8/6	口縁 1.6	-	-	-	-	底面型
85-4	-	SX7	SX87	-	01.01.22	液槽器	中皿	原色 N 60	大皿 1.3	-	-	-	-	-
85-5	-	SX7	SX87	-	01.01.22	液槽器	中皿	洋真桜色 10 YR 8/4	1.68~1.6	1.50	-	-	-	-
85-6	-	SX7	SX87	-	01.01.22	液槽器	外側	洋真桜色 2.5 YS 8/6 10 YR 8/4	底 1.4	-	-	(8.8)	-	底面型, 本蓋板, 外開口
85-7	-	SX7	SX87	-	01.02.27	上端高 差	液槽器	にごり青紫色 10 YR 7/3	底 1.6	-	-	-	-	-
85-8	-	SX7	SX87	-	01.02.27	上端高 差	液槽器	洋真桜色 2.5 Y 8/4	把手	-	-	-	-	3.3×3.2cm
85-9	-	SX8	SX87	-	01.01.11	液槽器	中皿	原色 N 70	口径 1.64	1.72	-	-	-	-
85-10	-	SX8	SX87	171	9~14	01.02.05	液槽器	原色 N 80 (Y)	口縁 1.62	-	-	-	-	留付 (10.4cm), 外面輪
85-11	-	SX8	SX87	176	3	01.02.05	液槽器	原色 N 70 (Y)	底 1.4	-	-	-	-	-
85-12	-	SX8	SX87	172	30	01.02.05	液槽器	灰白色 N 70 (B)	全体 1.4	-	-	-	-	-

固體外 子集	固體 固體物	固體高 (m)	固體上 R ₀	固體上H (m)	傾斜 傾斜	方向 方向	色 色	圓 圓	操作品 操作品	口徑 (cm)	固 (cm)	操作人H (cm)	操作 (cm)	操作 (cm)	操作 (cm)	固 (cm)	固 (cm)	固 (cm)
85-13	-	SX8	SX37	167	21	01/02/05	須忠器	耳鼻	須忠器 N70	体16	10(2)	-	-	(12.7)	-	-	-	外觀檢
85-14	-	SX8	SX37	-	-	01/01/23	須忠器	耳鼻	須忠器 N70 (B)	头部168	-	-	-	-	-	-	-	つまみ栓 (2.4cm)
85-15	-	SX8	SX37	173	23	01/02/05	須忠器	耳鼻	須忠器 N70 (B)	1.傾側17	-	-	-	-	-	-	-	-
85-16	-	SX8	SX37	-	-	01/02/05	須忠器	耳鼻	須忠器 N70 (Y)	底14	-	-	-	-	-	-	-	外觀點化
85-17	-	SX8	SX37	168	19	01/02/05	須忠器	耳鼻	須忠器 N70	底18	-	-	-	-	-	-	-	-
85-18	-	SX8	SX37	174	5	01/02/05	須忠器	耳鼻	須忠器 N80 (Y)	底12	-	-	-	-	-	-	-	-
85-19	-	SX8	SX37	174	1.2	01/02/05	須忠器	耳鼻	須忠器 N80 (Y)	1.傾側14	19(2)	11(9)	-	-	-	-	-	-
85-20	-	SX9	SX402	170	1	01/02/05	須忠器	耳鼻	須忠器 N70 (YR)	口8~体14	16(4)	15(8)	-	-	-	-	-	外觀檢，外觀タチキ (5)
85-21	-	SX9	SX402	166	8	01/02/09	須忠器	耳鼻	須忠器 N70	底12	-	-	-	-	-	-	-	底小標檢
85-22	-	SX9	SX402	159	9	01/02/09	須忠器	耳鼻	須忠器 N80	底14	-	-	-	-	-	-	-	外觀檢，外觀タチキ
85-23	-	SX9	SX402	170	4	01/02/09	須忠器	耳鼻	須忠器 N70	1.傾側14	9(2)	-	-	-	-	-	-	スノコ紙？
85-24	47	SX9	SX402	165	10	01/01/30	須忠器	耳鼻	須忠器 N70 (Y)	1.78~体14	9(6)	-	-	(12.1)	-	-	-	つまみ栓 (3.6cm)
85-25	-	SX9	SX402	165	13	01/02/09	土壤器	要	土壤器 N70 (Y)	1.傾側15	20(2)	15(3)	-	-	-	-	-	泥江帶
85-26	-	SX9	SX402	165	12	01/02/09	土壤器	要	土壤器 N70 (YR)72	口械紙片	-	-	-	-	-	-	-	-
85-27	-	SX9	SX402	165	14	01/02/09	須忠器	耳鼻	須忠器 N70 (Y)	口械~体16	7(2)	-	-	(9.4)	-	-	-	-
85-28	-	SX9	SX402	167	3	01/02/09	須忠器	9	須忠器 N70 (B)	底12	-	-	-	-	-	-	-	(6.3)
86-1	-	SR7	SR10	-	-	01/02/27	須忠器	耳鼻	須忠器 N70 (Y)	左井~1.傾側14	15(0)	-	-	-	-	-	-	-
86-2	-	SR7	SR10	-	-	01/03/02	須忠器	耳鼻	須忠器 N6.50 (B)	瓦井~1.傾側14	10(2)	-	-	-	-	-	-	瓦井外觀性
86-3	-	SR7	SR10	-	-	01/02/15	須忠器	耳鼻	須忠器 N60	1.38~底14	10(0)	-	-	(11.8)	-	-	-	內外觀點化
86-4	-	SR7	SR10	-	-	01/02/27	須忠器	耳鼻	須忠器 N80 (Y)	体12	13(4)	-	-	-	-	-	-	-
86-5	-	SR7	SR10	-	-	01/02/27	須忠器	耳鼻	須忠器 N70 (Y)	口械~体16	13(4)	-	-	(9.1)	4.6	-	-	外觀點化
86-6	-	SR7	SR10	-	-	01/02/27	須忠器	耳鼻	須忠器 N70 (B)	底14	-	-	-	-	-	-	脚長 (9.9cm)	
86-7	-	SR7	SR10	-	-	01/03/22	土壤器	要	土壤器 N70 (B)	口械16	14(2)	-	-	-	-	-	-	堅果型，內圓小孔 (8)
86-8	-	SR7	SR10	-	-	01/02/15	土壤器	要	土壤器 N70 (B)	把手	-	-	-	-	-	-	-	-

圖版分 類	圖版 編號	通稱	田壠形 (cm)	凸子標高 (m)	頂上H (m)	傾角	面積	面積 內容	面積 外容	殘存部 (cm)	上 述 (cm)	原生植 物	原生植 物人選 受保護 (m)	底各 (m)	高 (m)	備 考	
86-9	-	SR7	SR 01	-	-	0.05/22	上部器	坪	前面：灰紅色 7SYR04 后面：灰紅色 3YR5/4	11塊-1件1/10	-	-	-	-	(3.9)	未審核	
86-10	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/15	底部器	臺	前面：灰紅色 N6.50	17塊碎片	-	-	-	-	-	內部-外側	
86-11	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/15	底部器	臺	前面：灰紅色 N7.0 (B)	口緣碎片	-	-	-	-	-	內部-外側	
86-12	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/16	底部器	臺	前面：灰紅色 N7.0 (Y)	天井～口緣1/4	(14.8)	-	-	-	-	-	破碎 10.9cm
86-13	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/27	底部器	臺	前面：灰紅色 N6.0 (B)	11塊1/2	(9.6)	-	-	-	-	-	2.8
86-14	47	SR7	SR 01	-	-	0.02/27	底部器	臺	前面：灰紅色 N6.0 (PB)	17塊-底1/2	(8.3)	-	(10.1)	-	3.1	外側-船形	
86-15	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/27	底部器	臺	前面：灰紅色 N7.50	1件1/4	-	-	-	-	-	破碎 10.9cm	
86-16	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/27	底部器	臺	前面：灰紅色 7SYR6/4	底 利6	-	-	-	(7.4)	-	木製外底座與黑色漆油層 部分脫落 (內7)。	
86-17	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/15	底部器	臺	前面：灰紅色 3YR6/8	11塊-底1/6	(19.4)	(18.6)	-	-	-	點狀刮痕 (內7) / (8)	
86-18	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/16	底部器	臺	前面：灰紅色 N7.0	第11/2	(5.8)	-	-	-	-	內部這種	
86-19	48	SR7	SR 01	-	-	0.02/15	底部器	臺	前面：灰紅色 N7.0	天井-底1/4	(11.9)	-	-	-	3.8	又 / 17.7?	
86-20	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/15	底部器	臺	前面：灰紅色 2.5SY8/4	批手	-	-	-	-	-	-	
86-21	-	SR7	SR 01	164	28	0.03/02	底部器	臺	前面：灰紅色 N7.0 (Y)	口緣碎片	-	-	-	-	-	-	
86-22	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/15	底部器	臺	前面：灰紅色 N5.0 (PB)	11塊碎片	-	-	-	-	3.6	口緣外側	
86-23	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/02	底部器	臺	前面：灰紅色 N5.0	人井-底1/4	-	-	-	-	-	底座轉	
86-24	-	SR7	SR 01	170	35	0.03/02	底部器	臺	前面：灰紅色 N7.0	11塊-底1/6	(9.2)	-	-	-	-	-	
86-25	-	SR7	SR 01	165	33	0.03/02	底部器	臺	前面：灰紅色 2.5SY8/4	口緣1/4	(8.6)	-	(10.8)	-	-	-	
86-26	-	SR7	SR 01	-	-	0.03/02	底部器	臺	前面：灰紅色 7SYR6/6	口緣碎片	-	-	-	-	-	底座轉	
86-27	-	SR7	SR 01	170	32	0.03/02	底部器	臺	前面：灰紅色 7SYR6/4	11塊碎片	-	-	-	-	-	底座轉	
86-28	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/09	底部器	臺	前面：灰紅色 3YR7/1	口緣1/6	(13.4)	-	-	-	-	-	
86-29	48	SR7	SR 01	164	30	0.03/02	底部器	臺	前面：灰紅色 7SYR7/4	口緣-底1/4	(12.0)	-	-	(6.0)	3.5	內部全體赤形 (赤色 10R 5/8)	
87-30	48	SR7	SR 01	-	2	0.02/09	底部器	臺	前面：灰紅色 N7.0	人井1/2	(16.1)	-	-	-	4.0	つまみ程3.4cm	
87-31	48	SR7	SR 01	-	-	0.02/27	底部器	臺	前面：灰紅色 Y7/1	11塊-底3/4	15.4	-	-	-	3.5	つまみ程3.0cm	
87-32	-	SR7	SR 01	-	-	0.02/16	底部器	臺	前面：灰紅色 N7.0 (Y)	天井-底1/8	-	-	-	-	-	つまみ程2.8cm	

回収年 月日	回収地 名	川七橋高 (m)	沈上 位置 No.	取付日 期	識別 番号	形状 色	実等部 色	II 様 (cm)	頭頂 (cm)	頭頂大周 (cm)	頭頂 (cm)	頭頂 (cm)	備 考
87.33 48	SR7	SR101	-	1	01/02/09	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N70	1.08/1.2 合~最.34	14.2	-	-	10.6	4.3 島台スノコ板出現
87.34	SR7	SR101	-	-	01/02/16	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N60 (Y)	鹿1/1	-	-	-	9.5	- 出現
87.35	SR7	SR101	-	-	01/02/19	灰褐色 耳舟 环	青灰色 5W60	1.06/1.4 体等片	(8.4)	-	-	(10.4)	- 内面折断板、ヘラ記号
87.36 48	SR7	SR101	-	-	01/02/16	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N6.50	口輪~华1.6 尾1/1	(9.5)	-	-	(10.8)	3.3 内面折断板、ヘラ記号
87.37	SR7	SR101	-	-	01/03/20	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N70	口輪1/4	(10.6)	-	-	-	- 外型往
87.38	SR7	SR101	-	-	01/03/22	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N70	口輪1/4	-	-	-	-	- 蝶虫型
87.39	SR7	SR101	-	-	01/02/15	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N70	口輪~华1.4 尾1/1	(17.1)	-	-	-	-
87.40	SR7	SR101	-	-	01/03/02	十脚器 台輪	黄色 3.75YR7.6	台1/3	-	-	-	-	- 複合創作 (8.0cm) 内側斜ハゲメ (94.8~5)
87.41 48	SR7	SR101	-	-	01/03/02	上脚器 环	灰褐色 N7.50 外圈：灰白色 N7.50	口輪~华1.6 尾1/1	(11.7)	-	-	(5.5)	3.4 木製板、内外側へナナチ
87.42 48	SR7	SR101	-	-	01/02/21	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N6.50 (Y)	口輪~华1.6 尾1/1	(15.6)	-	-	-	4.5 つまみ紐3.2cm
87.43	SR7	SR101	-	-	01/02/21	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N70 (Y)	口輪1/4 尾1/2	(14.8)	-	-	(10.4)	3.7 内外面化
87.44 48	SR7	SR101	-	5	01/02/09	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N70	口輪1/4 尾1/4	(14.6)	-	-	(10.6)	4.1 内外面化 (1.6cm) 布袋色 2.5YR5.6
87.45	SR7	SR101	-	-	01/02/21	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N80 (Y)	灰1/华1.4 尾1/1	-	-	-	(9.5)	- 蝶虫型
87.46	SR7	SR101	-	-	01/02/21	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N80 (Y)	口輪~华1.8 尾1/2	-	-	-	-	- 内外面化
87.47	SR7	SR101	-	-	01/02/21	上脚器 环	浅灰色 10YR8/3	口輪等片	-	-	-	-	- 内外面化 (1.6cm) 布袋色 2.5YR5.6
87.48	SR7	SR101	-	-	01/02/21	上脚器 环	浅灰色 5W66	口輪~华1.6	(21.6)	-	-	-	- 蝶虫型
87.49	SR7	SR101	-	-	01/02/21	上脚器 环	灰~灰褐色 3.75YR8/4	尾1/2	-	-	-	(9.2)	- 内外面化 (1.6cm) 布袋色 2.5YR5.6
87.50	SR7	SR101	-	5	01/02/09	土脚器 台輪	門面：明褐色 5YR7.1 外圈：灰白色 N70 (Y)	台座1/1	-	-	-	-	- 内外面化 (1.6cm) 布袋色 2.5YR5.6
87.51	SR7	SR101	-	-	01/02/21	上脚器 环	灰白色 10YR8/1	尾1/5	-	-	-	(11.7)	- 内面黒化
87.52	SR7	SR101	-	-	01/02/21	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N70	天井~口輪1/4	(9.2)	-	-	-	3.3 内面黒化
87.53	SR7	SR101	-	-	01/03/06	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N50 (Y)	口輪片	-	-	-	-	-
87.54	SR7	SR101	-	-	01/02/21	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N70 (B)	口輪~华1/4	(15.0)	-	-	-	-
87.55	SR7	SR101	-	-	01/02/21	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N7.50 (Y)	鹿1/2	-	-	-	-	-
87.56 48	SR7	SR101	-	4	01/02/09	灰褐色 耳舟 环	灰白色 N6.50 (B)	入井~华1/1	(9.9)	-	-	-	3.7 ヘラ記号

序号	方言	语调	声调深浅	声调特征	声母	韵母	元音部	唇形	舌形	喉音带	受阻部位	舌位	舌高	偏旁	声母	
88-1	闽南区 闽台版	语调A 北高	上声深 尾升平	尾上日	特伟	都伟	色	圆	卷	门齿	舌后伸大送气	(后仰)	高	偏旁	声母	
88-2	闽南区 北高	语调A 高升区	一	00.11.21	山茶麻	津	特伟色\5\51	门齿伸片	—	—	—	—	—	偏旁	声母	
88-3	闽南区 北高	语调A 高升区	—	00.11.21	陶器	移	海外地色\5\51	门齿伸片	—	—	—	—	—	偏旁	声母	
88-4	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.21	山茶梅	微	灰白色\7\6	伸舌半低~低	—	—	—	(6.5)	—	系切口,又ノノ缺	声母	
88-5	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.22	山茶麻	微	灰白色\5\51	伸舌半低~低	—	—	—	—	—	系切口,又ノノ缺	声母	
88-6	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.22	山茶麻	小里	灰白色\6\60	1.8灰~体统片	(8.1)	—	—	—	5.7	系切口,门齿外屈伸	声母	
88-7	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.21	山茶麻	小里	灰白色\7\70	体统片	(7.9)	—	—	—	4.5	系切口	声母	
88-8	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.16	山茶麻	小组	灰白色\6\60	完形黑	8.6	—	—	—	4.3	1.1横弓深 部缺,舌切口	声母	
88-9	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.21	山茶麻	小组	灰灰白\5\51	体统片	(8.0)	—	—	—	(4.5)	1.8 穿切口	声母	
88-10	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.21	山茶麻	小组	灰白色\6\60	体统片	7.6	—	—	—	4.0	1.7 角切口,牙面缺,内曲黑化,偏分?	声母	
88-11	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.22	十脚鞋	属	灰白色\5\51	体统片	7.7	—	—	—	3.9	1.8 角切口,黑卷	声母	
88-12	闽南区 北高	语调A 北高	—	—	—	绿霞器	—	体统片	—	—	—	—	—	伊弱列	声母	
88-13	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.30	山茶麻	津	灰白色\7\70	1.1横伸片	—	—	—	—	—	—	声母	
88-14	闽南区 南西	语调A 南西	—	00.12.05	山茶麻	津	灰白色\5\51	体统片	—	—	—	(7.6)	—	系切口,又ノノ缺	声母	
88-15	闽南区 南西	语调A 南西	—	00.11.20	山茶麻	小组	灰白色\5\50(GY)	口领伸片	(7.8)	—	—	(3.8)	2.3	系切口	声母	
88-16	C5北高C5北高	语调A C5南西C5南西	—	00.11.27	价值器	呼基	灰白色\8\80(Y)	口领伸片	(11.8)	—	—	(15.0)	—	外张伸	声母	
88-17	C6区 中央带	语调A 中央带	—	00.11.24	山茶麻	津	灰白色\7\70	1.1横伸片	(12.0)	—	—	—	—	口张伸	声母	
88-18	C6区 C6区	语调A C6区	—	00.11.27	肉器	奏?	灰白色\5\51	刺吸片	—	—	—	—	—	窄音合,外圆闭色	声母	
88-19	C6区 C6区	语调A C6区	—	00.11.24	山茶麻	体	灰白色\7\70	1.1横伸片	—	—	—	—	—	—	声母	
88-20	C6区 中央带	语调A 中央带	—	00.12.13	山茶麻	津	灰白色\7\70	1.1横伸片	(16.3)	—	—	—	7.8	5.9 脱音,通音度,内外两个体壁	声母	
88-21	C6区 中央带	语调A C5区	—	00.12.13	山茶麻	津	灰白色\7\70	1.1横伸片	(16.8)	—	—	(7.8)	6.5 洪亮,通音度,舌切口,±;近腔生舌	声母		
88-22	C5区 中央带	语调A 中央带	—	00.11.24	山茶麻	津	灰白色\7\70	1.1横伸片	(15.0)	—	—	—	—	声亮,圆西照,内外圆滑	声母	
88-23	闽南区 北高	语调A 北高	—	00.11.21	山茶麻	津	灰白色\6\60	口领伸片	(16.0)	—	—	(7.1)	5.5 系切口,又ノノ缺	声母		
				00.12.13												

回収地	分類	固形物	付着菌 菌糞	出照時間 (cm)	取上日	種別	形態	色	調	保存瓶	口径 (cm)	原生葉大枝 (cm)	空茎高 (cm)	底径 (cm)	形高 (cm)	備	考
88-24	-	C 6 区 C 5 区	-	-	00.11.27	山茶樹	圓	灰白色 N70	11倍~体缺片 底12	-	-	-	7.3	5.3	共切り口複合組織		
88-25	-	C 5 区 中央葉 中央葉	-	-	00.11.24	山茶樹	楕	灰褐色 N70/52	11倍~体13 底12	-	-	-	-	-			
88-26	-	C 5 区 中央葉 中央葉	-	-	00.11.24	山茶樹	小圓	灰黑色 N60	11倍~底14 底12	(9.0)	-	-	(4.1)	2.6	系切1		
88-27	-	SD 7 SD 7	-	-	00.11.24	山茶樹	小圓	灰白色 7.5 Y 7/1	11倍~底13 底12	(9.3)	-	-	-	-	-		
88-28	49	C 6 区 C 6 区 中央葉 中央葉	-	-	00.11.27	山茶樹	小圓	灰白色 N80	11倍~底14 底12	(8.0)	-	-	-	4.2	1.9	系切1	
88-29	49	C 5 区 C 5 区	-	-	00.11.27	山茶樹	小圓	灰褐色 2.5 Y 7/2	11倍~底14 底12	7.9	-	-	-	4.0	2.0	系切1	
88-30	49	C 7 区 C 7 区	-	-	00.12.13	山茶樹	小圓	灰白色 N70 細胞：灰白色 N60	11倍~底12 底12	7.6	-	-	-	4.0	1.6	系切1	
88-31	-	C 6 区 中央葉 中央葉	-	-	-	山茶樹	小圓	灰褐色 5 B 6/1	11倍~底12 底12	7.6	-	-	-	3.9	1.6	系切1	
88-1	-	D 5 区 中央葉 中央葉	-	-	00.12.13	山茶樹	圓	灰白色 N70 (B)	11倍~底14 底14	-	-	-	-	7.7	-	系切1, X 2 例	
88-2	-	D 5 区 D 5 区 中央葉 中央葉	-	-	00.12.13	山茶樹	小圓	灰白色 N60 (B)	11倍~底12 底12	(7.8)	-	-	-	(4.5)	1.7	内面積,系切1	
88-3	-	D 4 区 D 4 区 中央葉 中央葉	-	A	00.12.27	泡花器	球	灰白色 N70	11倍~底13 底12	(11.1)	-	-	-	-	3.5		
88-4	-	E 3 区 E 3 区 中央葉 中央葉	-	-	00.12.18	泡花器	不	淡黃色 2.5 Y 8/2	11倍~底14 底14	(12.1)	-	-	-	-	-	柄上近端	
88-5	-	E 4 区 E 4 区 中央葉 中央葉	-	-	00.12.12	須蟲器	球	灰白色 N70	11倍~底13 底13	(11.4)	-	-	-	-	-		
88-6	-	E 3 区 E 3 区 E 4 区 E 4 区 中央葉 中央葉	-	-	00.12.18	須蟲器	球	灰白色 N70	11倍~底14 底14	(11.7)	-	-	-	(8.0)	3.8		
88-7	-	E 5 区 E 5 区 E 5 区 E 5 区	-	-	00.12.11	須蟲器	球?	灰色 N60	11倍~底14 底14	-	-	-	-	-	-	内凹末端	
88-8	-	F 3 区 F 3 区 F 3 区 F 3 区	-	-	01.03.06	須蟲器	球	灰白色 N70	11倍~底14 底14	(18.2)	-	-	-	-	-	内凹末端	
88-9	-	F 3 区 F 3 区 F 3 区 F 3 区	-	-	01.03.06	須蟲器	球	灰白色 N70/44 細胞：赤褐色 2.5 Y 8/44	11倍~底14 底14	-	-	-	-	-	-	壁本部外表面 壁外表面ハクメ (内 6)	
88-10	-	F 2 区 F 2 区 F 2 区 F 2 区	-	-	01.03.06	土壤器	球	灰白色 N70/3 細胞：赤褐色 2.5 Y 8/3	11倍~底14 底14	-	-	-	-	-	-	壁本部外表面 壁外表面ハクメ (内 6)	
88-11	-	H 2 区 H 2 区 H 2 区 H 2 区	-	-	01.03.26	土壤器	球	褐色 10 Y 8/61	11倍~底14 底14	(18.0)	-	-	-	-	-	内凹末端	
88-12	-	I 4 区 I 4 区 I 4 区 I 4 区	-	-	00.12.28	須蟲器	球?	灰白色 N70 (Y)	11倍~底14 底14	(17.1)	-	-	-	-	-	接觸部熱：4.6m	
88-13	-	I 4 区 I 4 区 I 4 区 I 4 区	-	-	00.12.28	須蟲器	球	灰白色 N70	11倍~底14 底14	-	-	-	-	(4.2)	-		
88-14	-	I 3 区 I 3 区 I 3 区 I 3 区	-	-	00.12.05	山茶樹	圓	灰白色 N80 (Y)	11倍~底14 底14	-	-	-	-	(8.2)	-	落葉、薄肉部、赤切1, 高7倍	

同番号	写真 図版	通路 構造	此の位置 No.	取扱 工具	目 次	種別	容積	色	調	保存部	11 (cm)	12 (cm)	13 (cm)	14 (cm)	15 (cm)	16 (cm)	17 (cm)	18 (cm)	19 (cm)	20 (cm)	21 (cm)	22 (cm)	23 (cm)	備 考
88-15	-	1.4区 南西	-	-	0.012.28	勿需器 手盆	灰	1色 N70 (Y)	11様~体 1.38	15.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-16	-	1.3区 南西	1.3区 南西	-	-	0.01.05	須需器 手盆	灰白色 N70 (Y)	11様~体 1.38	15.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-17	-	1.4区 南西	-	-	0.01.10	須需器 手盆	灰白色 N60 (Y)	11様~体 1.38	15.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-18	-	1.3区 東	1.3区 東	-	-	0.01.30	土炒器 鉢	明赤色 N60 5B 5G	11様~体 1.38	15.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-19	-	1.3区 北東	-	-	0.02.02	土炒器 鉢	11.6%水銀色 2.5TYR 4G	11様 1.6	22.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-20	-	1.3区 中央西	1.3区 中央西	-	-	0.01.02	土炒器 鉢	黑	11様~体 1.38	15.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-21	-	1.1区 南東	1.1区 南東	-	-	0.01.22	陶器 壺	新赤灰色 10 R 4 G	11様~質 1.4	23.6	(20.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-22	-	1.1区 南東	1.1区 南東	-	-	0.01.11	山茶碗	青灰色 H 6.5 G	□詰 1.4	15.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-23	-	1.2区 北西	-	-	0.01.26	山茶碗	灰	1色 N 5.0 Y 1	11様~体 1.38	15.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-24	-	1.2区 北東	1.2区 北東	-	-	0.01.24	山茶碗	灰白色 N70	11様~体 1.38	18.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-25	-	1.1区 北	1.1区 北	-	-	0.01.02	山茶碗	小皿 灰白色 N70	11様~体 1.38	18.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-26	-	1.1区 北	1.1区 北	-	-	0.01.12	土器	褐	11.6%水銀色 10 YR 5 G	□詰 1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-27	-	1.3区 東	1.3区 東	-	-	0.03.02	須需器 手盆	灰白色 N7.50 YR	11様 1.4	17.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-28	-	1.3区 南東	1.3区 南東	-	-	0.01.24	須需器 手盆	灰白色 7.5 Y 6 G	11様 1.4	17.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
88-29	-	1.1区 北	1.1区 北	-	-	0.01.11	須需器 手盆	灰 1色 N 6.50 (W)	人井~1機 2.0	18.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
90-1	-	1.3区 南東	1.3区 南東	-	-	0.01.21	須需器 手盆	灰白色 N70 (Y)	天井 1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
90-2	-	1.3区 北東	1.3区 北東	-	-	0.01.05	須需器 手盆	灰白色 N70	□詰 1.6	15.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
90-3	-	1.3区 南東	1.3区 南東	-	-	0.01.24	須需器 手盆	灰白色 N70	鑿 1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
90-4	-	1.2区 北東	1.2区 北東	-	-	0.01.11	須需器 手盆	灰白色 N70 (Y)	口詰~体 1.38	13.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
90-5	-	1.2区 北東	1.2区 北東	-	-	0.01.05	須需器 手盆	灰白色 N70 (Y) 96.6	口詰 1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
90-6	-	1.2区 北東	1.2区 北東	-	-	0.02.02	土器	灰黃褐色 10 YR 6 G	口詰 1.4	20.8	(15.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
90-7	-	1.2区 北東	1.2区 北東	-	-	0.01.22	土器	要	11.6%水銀色 7.5 YR 7 G	門限 1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

留番号	写真 内観	被検 田舎町	生半端高 (cm)	取上 No	取上口	種別	通角	色	調	残存部	口径 (cm)	口径 (cm)	測定部大きさ (cm)	壁厚さ (cm)	底面 (cm)	底面 (cm)	底面 形状	参考
90.8	-	J.1区 内側 所要	J.1区	-	-	0.01.22	十脚器	黒	淡黄色 2.5 V 72	脚下 斧 1/2	-	-	-	(7.2)	-	浅江原底角面直角 内外面ハタメ (94.7.内5)		
90.9	-	J.1区 内側 所要	J.1区	-	-	0.01.12	十脚器	銀	白色 2.5 V 81	底板片	-	-	-	-	-	-		
90.10	-	J.1区 内側 所要	J.1区 内側 所要	-	-	0.01.17	十脚器	銀	斜板 5YR68	口縁 0.8	-	-	-	-	-	蝶型		
90.11	-	K.1区 K.3区 内側 所要	K.1区 内側 所要	-	-	0.01.11	十脚器	銀	白色 N 80	口縁破片	-	-	-	-	-	内凹和		
90.12	-	K.2区 K.2区 内側 所要	K.2区 内側 所要	-	-	0.03.06	傾斜器	銀	白色 N 70	口縁 1.4	(10.0)	-	-	-	-	内外面積		
90.13	-	K.3区 K.3区 内側 所要	K.3区 内側 所要	-	-	0.01.09	傾斜器	銀	白色 N 70	人井 ~ 104.25	-	-	(12.6)	-	-	外張輪		
90.14	-	K.3区 内側 所要	K.3区 内側 所要	-	-	0.01.02.00	傾斜器	銀	白色 N 50	斧 1.34	(9.01)	-	-	-	3.8	大切手 (3.4cm)		
90.15	-	K.2区 K.2区 内側 所要	K.2区 内側 所要	-	-	0.01.12.16	傾斜器	銀	白色 N 60	口縁 1.6 底 4.5	(8.8)	-	(10.4)	3.6	3.3			
90.16	-	K.3区 K.3区 内側 所要	K.3区 内側 所要	-	-	0.01.03.07	傾斜器	銀	白色 N 50	上縁 ~ 1.14	(9.3)	-	(10.6)	-	(3.1)			
90.17	-	K.3区 K.3区 内側 所要	K.3区 内側 所要	-	-	0.01.01.11	傾斜器	銀	白色 N 70	底 1.3	-	-	(9.0)	-	7.7 口環			
90.18	-	K.1区 K.1区 内側 所要	K.1区 内側 所要	-	-	0.01.02.06	傾斜器	銀	白色 N 80 (Y)	口縁 1.2	-	-	-	.04	-			
90.19	-	K.1区 K.1区 内側 所要	K.1区 内側 所要	-	-	0.01.01.18	十脚器	銀	白色 3YR6.6 外側面: 銀色 2SYR6.6	口縁破片 底: 斧 1/3	-	-	-	3.7	木蓋痕			
90.20	-	K.3区 K.3区 内側 所要	K.3区 K.3区 内側 所要	-	-	0.01.02.10	十脚器	傾斜器	淡黄色 2.5 V 83	嵌合部破片	-	-	-	-	-	外弧黒墨		
90.21	-	K.3区 K.3区 内側 所要	K.3区 K.3区 内側 所要	-	-	0.02.02	十脚器	黒	淡黄色 2.5 V 83	口縁 1.6	(26.0)	-	-	-	-			
90.22	-	L.3区 L.3区 内側 所要	L.3区 L.3区 内側 所要	-	-	0.01.01.11	山系柄	銀	白色 N 70	底 1.4	-	-	-	(6.3)	-	糸縫り, 内面輪, 3.7 3段		
90.23	-	L.3区 L.3区 内側 所要	L.3区 L.3区 内側 所要	-	-	0.01.01.06	傾斜器	銀	白色 N 70	口縁破片 弓 1/3	(11.7)	(10.6)	-	-	-	内外面積		
90.24	-	L.3区 L.3区 内側 所要	L.3区 L.3区 内側 所要	-	-	0.01.01.05	傾斜器	銀	白色 N 80	口縁 1.6	-	-	-	-	-	内外面積		
90.25	-	L.2区 L.2区 内側 所要	L.2区 L.2区 内側 所要	-	-	0.01.02.20	傾斜器	銀	白色 N 60	底 1.6	-	-	-	-	-	解 (10.4cm)		
90.26	-	L.3区 L.3区 内側 所要	L.3区 L.3区 内側 所要	-	-	0.01.03.17	傾斜器	銀	白色 N 60 内面: 淡色 10YR6.6 外側: 銀色 B.50	口縁 1.6 底 2.3	(8.2)	-	(10.0)	(4.0)	2.9			
90.27	-	L.3区 L.3区 内側 所要	L.3区 L.3区 内側 所要	-	-	0.01.01.06	土脚器	銀	灰色 10YR6.6 内面: 銀色 10YR6.6 外側: 銀色 B.50	口縁破片	-	-	-	-	-	外端保護痕		
90.28	-	L.2区 L.2区 内側 所要	L.2区 L.2区 内側 所要	-	-	0.01.02.06	上脚器	銀	白色 5YR7.6	11枚破片	-	-	-	-	-	螺栓孔		
90.29	-	L.2区 L.2区 内側 所要	L.2区 L.2区 内側 所要	-	-	0.01.03.19	上脚器	銀	白色 5YR7.6	10枚, 料 1.6	(12.0)	-	-	-	-			

第Ⅳ章 まとめ

第1節 古墳時代末期から奈良時代の土器について

当遺跡からは非常に多くの土器が出土しているため、問題とすべき重要な点も多々あるが、ここでは、とくに重要な7世紀後半の土器編年に関する問題と、7世紀後半から8世紀前半の土師器の変についてまとめてみたい。この他、S B 9 出土鉄鉢形土器（第32図7）は、7世紀代の例としては県内では珍しく注目される。この土器は仮具の鉄鉢を模倣したもので、その用途は仮具とする見解と食器の一種とする見方がある。土器の器形は、希少価値が高くより需要のある金属器などを指向して変化する場合が多くあり、モデルとの形態的類似だけでは用途の推定はできない。今回の出土例は、他の器種の土器とまとめて置かれた状態で出土しており、資料的価値が高いものと考え、次節で当研究所の藤又直人氏に分析を依頼したので、そちらを参照していただきたい。ちなみに、S B 1 の竈内からも鉄鉢の形状に近い土師器（第29図6）が発見されている。

（1）S F 7 出土土器群について

大型の須恵器壺が出土したS F 7 からは、様々な器種・器形の土器が伴出している（第72～76図）。比較的一括りの高い3点の須恵器壺だけを見ても、同一時期のものとは思えないほど形態差がある。無論、特殊な器形だけに工入や生産地の個性が反映されているものと思われるが、その他の器種についても同様である。

S F 7 出土土器群は、超大型壺や平瓶のミニチュアの出土から、おそらく祭祀に関連するものであろうと予想される。土師器の壺の中には、顕著な使用痕の認められないもの（第76図32）なども存在する。

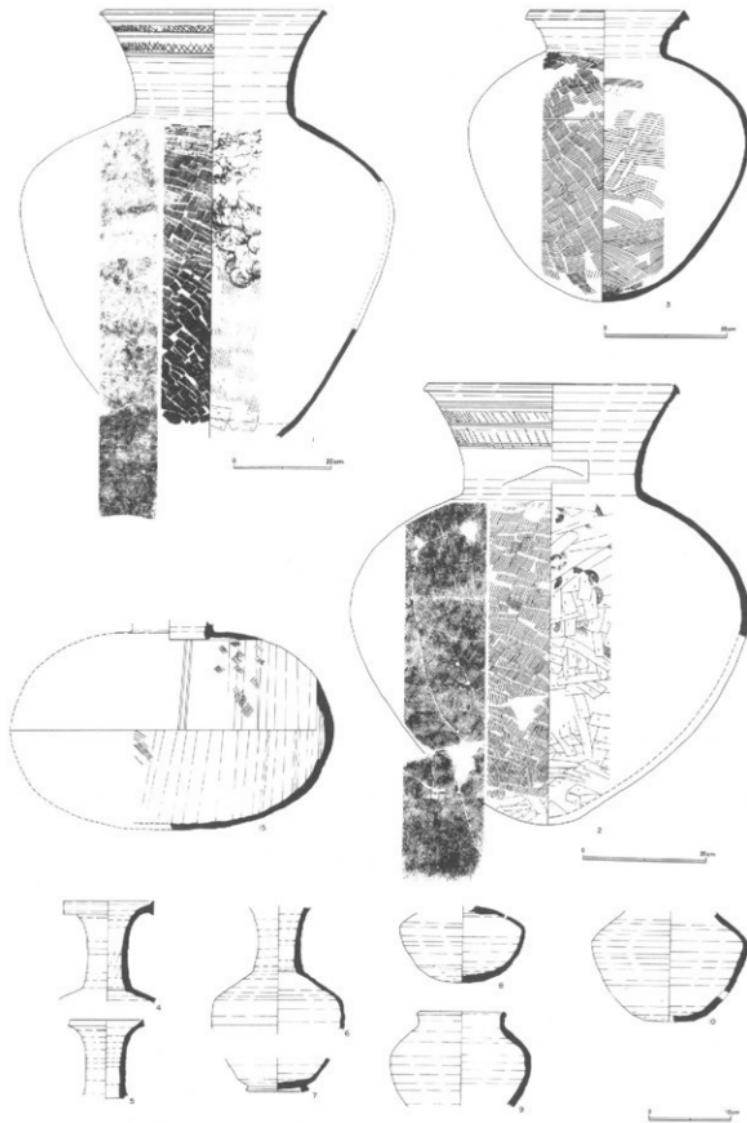
第Ⅲ章第8節でも述べているが、S F 7 出土資料の多くは破片であり、全てが同一層位からの出土ではない点も注意が必要であろう。ただし、よく問題とされる前段階以来の半球形状の須恵器壺（第75図21～24）と高台付碗状坏身（第75図29）は同じ下層から出土している。第75図19～29は全て下層出土で、おそらく大型のかえり付坏蓋も伴うであろう。また、静岡人類史研究所が実施した確認調査の折に出土した土器の中にも半球形状の壺が存在し、上層からも出土していることになる。

その他、無台の箱形壺になるとと思われる須恵器（第75図26・27）も存在する。8世紀以降に大量生産される端部を折り曲げた坏蓋や高台付箱形壺は共伴していない。

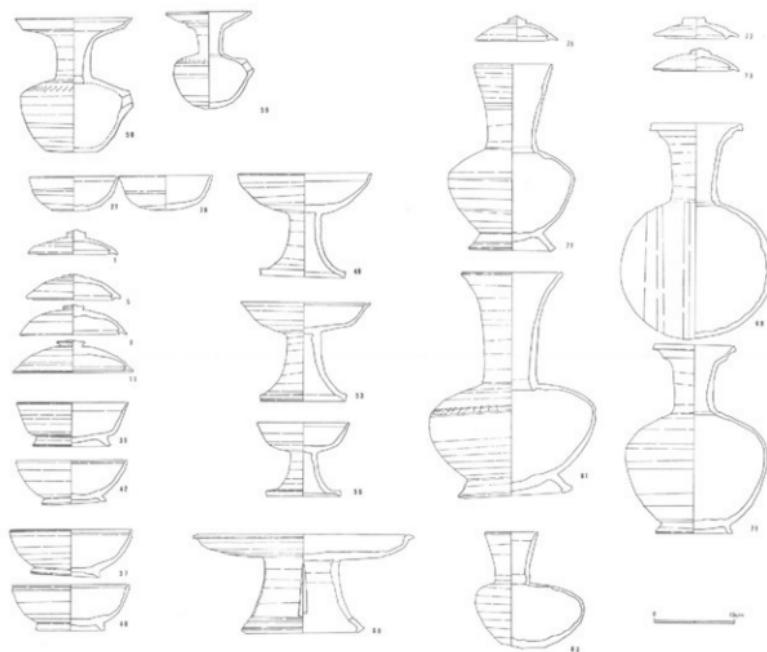
半球形状の壺は出土していないが、これらの土器群に近い内容を持つ例としては、藤枝市白砂ヶ谷C 2号墳（八木・鈴木1980）がよく引用されている。鈴木敏則氏によると、この白砂ヶ谷C 2号墳例が7世紀第4四半期を中心とした時期に相当する（鈴木2000）とされている。ただし、鈴木氏の編年は古墳出土土器を多用しており、集落出土土器との整合がとれない場合も想定される。

大型かえり付坏蓋と高台付碗状坏身は、大量に生産された時期が比較的短いと考えられており、時間軸上の位置付けと他地域との比較検討の際に有効とされる。畿内では飛鳥Ⅲ期以降に大型かえり付坏蓋と高台付坏身が認められ（小森1992・畠中1999など）、尾張でも7世紀後半の古相のI-101号窯などで出土している（尾野1997）とされている。ただし、一般的に普及するのはやや遅れるようである。

当遺跡でも、S R 6 の下層からの出土例が無く、8世紀代の土器との伴出が多いことと、S F 7 出土土器の中には7世紀の中頃まで遡る要素が認められないことから、これから土器群は7世紀末葉のものと考えておきたい。



第92図 SF 7 出土土器集成図 (1)



第93図 S F 7 出土土器集成図（2），藤枝市白砂ヶ谷C 2号墳出土土器実測図（下段，報告書より転載）

(2) 駿東型壺と遠江型壺

S F 7 出土土師器の壺には、平底長胴で、口縁部が断面「コ」字状に聞く薄手のもの（第76図32）と、平底（木葉痕が付く）球胴で、口縁部が断面「く」字状に聞く厚手のもの（第76図33～37）が存在する。これらは、前者が遠江型、後者が駿東型と呼称されている。当遺跡は遠江国と駿河国の境界に立地しており、別型式の土器が混在するのは一般的であるが、両者の胎土が全く異なっている点は注意が必要である。

遠江型の壺には大粒の黒雲母や微細な石英が多く認められ、小礫をあまり含まないのが特徴である。駿東型の壺には大粒の白色粒子（長石を含むが主体ではないらしい）が含まれており、細片でも簡単に分類できるほどである。

極めて感覚的であるが、遠江型の胎土は天竜川平野で一般的に出土する例とよく似ており、駿東型は富士川以東の土器の胎土に類似する。

胎土の違いについては、古環境研究所の堀口氏による蛍光X線分析の報告を付録2に掲載したので参照していただきたい。分析者は慎重な態度を示しているが、肉眼観察による分類とはほぼ同様の結論が得られている。また、第54図183（大型鉢）と第53図147からは、通常以上のリン酸が検出されており、なにが測定されていたのか検討する必要性も指摘されている。

駿東型と遠江型の壺は、S F 7だけではなく、S B 6（第31図）や8世紀前半のS X 6（第65図）でも共伴している。量的には、駿東型壺の方が厚手で残りやすいこともあってか比較的多く発見されているが、遠江型もかなりの量が認められる。

壺だけでなく、赤彩され、暗文を有するような上師器坏の胎土にも大粒の黒雲母が多く、器形からも遠江型として良いものが少数存在するが、在地の底面に木葉痕の付く坏は、胎土や色調が駿東型壺とは大きく異なる。このことから、駿東型壺が在地では製作されていないとの推定も可能であるが、県東部地方でも同様に駿東型壺のみに白色粒子が多量に混ぜられている例は多い。確実な根拠は無いが、長石などを混和材として利用した場合、焼成温度を上げることが出来るとされており、大型品の焼成時の技術的な問題から白色粒子が混入されている可能性もある。また、焼成後の器面に見える粒子の様子は、土器の持つ象徴的意味を付加しているかもしれない。

この時期の当地域では、瀬戸内海の須恵器が多く搬入されていることから、海運を利用した西方との物資の交易が盛んに行われていたことは容易に想像でき、交易網の整備と共に遠江型の土師器も交易品の対象となっていたと考えることも可能であろう。

土師器壺の系統差は、基本的には使用者の出自による差と考えているが、他遺跡の例も含めて、遠江型壺と駿東型壺の向者が堅穴住居跡などから共伴して出土する場合も多く、むしろ、貯蔵具と煮炊具の用途の差ではないかとも考えていた。しかし、出土した駿東型壺の多くの底外面部には煤が付着しており、竈にかけられて使用されている確率が高くなつた。

壺の上器の掛けの大きさが問題とされるであろうが、調理時の機能差（例えば蒸し料理用と煮込用）により使い分けられていた可能性もある。これらについては、今後の実証的検討が当然必要となってくるであろう。

（柴田）

第2節 藤守遺跡出土の須恵器製の鉢について

1 はじめに

古墳時代後期は日本各地で須恵器生産が活発に行われ、様々な種類の器が生産されている。供膳具としての壺・碗をはじめとして、貯蔵具である壺・甕等大小もさまざまである。これら須恵器のバラエティーあふれるうつわ達は、当時の人々の日常生活だけではなく、黄泉国における使用も念頭に置いて製作・使用されていたのは周知の事実である。今回、解説してみたい鉢という器種は、古墳時代後期でも生産量の少ない器種の一つである。しかし藤守遺跡で出土した須恵器製の鉢は、当時の仏具の一つである「鉢」の形態に似ている点が特異と言え、県内でも該期の資料は少ない。したがってこの鉢について特に焦点を当ててみたいと思う。

2 鉢の出土状況とその形態

鉢（第32図SB9・7）はSB9から出土している。SB9のプランは不明で竈を確認したのみである（第27図）。その竈の構築土の名残である7層の東側に須恵器の合子状坏身や蓋と共に出土しており、鉢内部には坏蓋（1～2）が天地を逆にした状態で出土している。付近と一緒に出土している須恵器の坏身（4・5）や土師器の壺（9）も合わせてセットで使用されていた事を窺わせる。共伴したこれらの須恵器坏身の時期はその形態から7世紀後葉と推定され、鉢も同時期のものと思われる。

鉢の底部はヘラケズリされ、丸底に近い形狀を呈する。体部はわずかに内湾気味に立ち上がるが、口縁部はさらに内湾させ、口唇部を丸く仕上げている。口縁部直下で最大径をはかる。これらの形態的特徴は、遺跡から出土する所謂「鉄鉢形土器」、法隆寺等の大寺院が今日まで伝えた仏具の「鉢」に酷似している。

3 仏具の「鉢」

本来、我々が使用している「鉢」という言葉は仏具由来する（石田1984・清水1999）。サンスクリット語の「patra」が「鉢多羅」と音訛され、「鉢」と省略・使用されるに至った。この「鉢」は僧達の食器として、または「乞食行（こつじきぎょう）」、すなわち托鉢の際、供物を受ける際に使用された。また仏堂内における仏・菩薩像等に対して食物を奉る際にも使用されている。すなはちこの「鉢」は僧達の実用具としての「僧具」、仏に対する「供養具」として使用されたのである。原始仏教教團内の規則である「律」には「鉢」に関する規定があり僧達は鉄製の鉢「鉄鉢」、陶器製の鉢「瓦鉢」の2種類の材質の鉢のみを使用することが許されていた。現在、法隆寺等に伝世した「鉢」には金銅製・木製・乾漆製等の材質の資料があり、必ずしも2種類の材質のみ使用されていたわけではない。全国の遺跡で出土している「瓦鉢」の材質としては土師器・須恵器・灰釉陶器等の施釉陶器等があげられる。これらは仏教関連遺物（水瓶・香炉等の仏具、墨書き土器等）と共に伴する例もあり、集落内に僧、もしくは仏教祭祀の存在を推定させる根拠となっている。しかし、単独出土の場合は積極的に仏具としての利用が判然としない例が多い。

4 分析

静岡県内（遠江國・駿河國・伊豆國）において7世紀代には木船廃寺・大宝院廃寺・寺谷廃寺・尾羽廃寺・日吉廃寺・市ヶ原廃寺等が造営（松井1993）されていることから、僧達の活発な活動とそれに伴う仏具の需要が想起される。しかし該期の出土「鉢」資料は管見の範囲内においても湖西市古美中村遺跡等で「鉢」の生産を確認している程度である（高橋1990）。県内の7世紀代の集落遺跡の中でも藤守

例が唯一の出土「鉢」資料と思われる。なお他に瓦等を除外した該期の仏教関連遺物としては藤枝市群遺跡で「寺」と墨書きされた須恵器蓋（八木他1982）や磐田市大宝院寺では「佛仏」等が知られる（佐口他1996）が、8世紀代の仏教関連遺物の出土量と比べるとかなり少ない感がある。県外で管見の触れる範囲において愛知県名古屋市東山44号窯（光真寺古窯）で7世紀前葉には「鉢」に酷似した器種の生産がすでに開始され（小島1979）、奈良県明日香村雷丘東方遺跡S D110例（宮沢他1980）や愛知県小牧市篠岡2号窯例（齊藤1990）からも、7世紀後葉には「鉢」が窯業生産物として量的に少ないと既に通有の生産器種となっていたと思われる。前述したように7世紀代の活発な造寺活動や生産遺跡の様子から勘案しても、仏具は我々の想像以上に使用する機会は存在していたと思われる。郷土の7世紀代の集落遺跡にも僧達の足跡を示す「鉢」資料が未だに埋蔵していることが期待される。

今回、藤守遺跡S B 9内で出土した鉢は他の食器とセットで使用されていた可能性は前述したが、遺跡内では僧侶が居住し、仏教的祭祀・仏堂等の存在を積極的に裏付ける資料は残念ながら見つかっていない。この鉢が「食器」として使用された痕跡のみである。しかしながら本資料の形状は仏具としての「鉢」の形状を明らかに指向したものであり、仏具としての「鉢」にはそもそも食器としての機能が存在しているため、S B 9出土の鉢が仏具の「鉢」ではないと否定することは出来ない。「鉢」資料の増加・分析を待って、このS B 9出土の鉢について、より精緻な分析を行えることを期待したい。

（勝又）

第3節 平安時代末期から鎌倉時代の土器について

東遠江地域や駿河の志太地域では、鎌倉時代を中心として、須恵質の山茶碗が多く生産されている。在地領主層による領地内での飲食器の供給を目的とした闇号が指摘されているが、南関東地方などの東国での多くの出土例もあり（松井1993）、交易品としても広く流通していたようである。

山茶碗の製作技術は、各地の工人集団間で共通性が認められ、工人の移動（河合2001）や婚姻によるものと考えられている。このことは、工人集団間の協力体制や情報の共有化を生み、職能集団へと発展させた可能性を含んでいる。この場合、工人集団と領主との微妙な関係が問題となるであろう。

県内の山茶碗の様相や研究史は、松井一明氏（松井前掲書）によってまとめられている。とくに、不明な点の多かった東遠江地域の窯跡から出土した山茶碗の実測図を掲載した意義は大きく、その後の研究が大きく進展しつつある。

ここでは、当遺跡出土山茶碗と最も関係すると考えられる金谷町横岡（金谷）古窯跡群出土例を中心に、一部、旗指古窯跡群のあざみ沢古窯跡を含めて、松井氏の編年案を略述する。松井氏は5小期区分しているが、大区分のI～III期の概要のみを示す。基本的には、松井氏の編年案を参考としているが、型式変化の方向性を重視したもので、器形分類や各期の設定は踏襲していない。

松井氏は、I期にあざみ沢古窯跡例を挙げ、碗は口径17cm前後で、口縁部は緩やかに聞くA類と直線的に聞くB類があり、比較的高い断面三角形の高台が付くとされる。小碗は口径9cm前後、器高3cm前後で体部は少し内弯するとされている。

II期の資料には、すやん沢古窯跡やきつね沢古窯跡の一部を当てている。碗A類は小型化（口径16cm前後）し、新出の碗C類は、体部の内弯が少なくなり、口縁部が内弯し、高台は低い断面三角形であるとされている。小碗は消滅し、口径9cm、器高は2.5cm以上の小皿が出現するとされる。

III期の資料は、すやん沢、きつね沢、ほろん沢A地点、同B地点の各古窯跡で確認されている。碗C類の口径は16cmから14cm以下へと縮小し、器高も3cm前後へと扁平化し、体部は直線的に聞き、低い高台は無高台のものへと変化するとされている。新しい段階では口縁部を外反させた碗D類も出現すると

される。小皿は口径が8・9cm、器高は1.5~2cm前後で扁平化が進むとされている。

当遺跡出土土器は、松井氏に実見していただいたところ、Ⅱ~Ⅲ-2期の幅のなかのものが多いとされている。実年代では12世紀後半から13世紀中頃にかけてのものとされている。

今回の調査地点は藤守集落の南端部に近いとされており、この地点の出土遺物が、当集落の内容を代表させているかは検討の余地はあるが、突然、ここに奈良時代以来の集落が形成された要因に注目している。環境の変化、在地領主層の成長や武家政権の誕生など、様々な要因が想定される。ここでは、それらのことを勘案して、大歴期を設定しておく、仮に「藤守期」と仮称しておきたい。

藤守期は他遺跡との比較検討を経ていないため、とりあえず、今回発見された遺構群の時間幅（出現段階の掘立柱建物跡であるSH1から消滅段階のSX1まで）を内包しているとしておきたい。そして、松井編年の型式変化の方向性を参考にして藤守期を3段階（古・中・新）に区分する。各段階は、統計的手法による分類ではなく、型式的前後関係であり、各段階間時間幅は均等ではない。

古段階は、一部混入品も存在するが、SD2出土土器をあてている。中段階はSD15~17出土土器、新段階はSX1出土土器で、SR1出土土器もこの段階に含めておきたい（第94図）。

次に、各段階の土器群の特徴と実年代について簡単にまとめておきたい。

古段階：SD2出土碗は口径約17cm、器高が約5.7cmで、腰部が張り体部は内湾している。断面三角形の高台は比較的高い。小碗は口径が8.6~9cmで、器高は2.3cmである。小皿は比較的新しい様相が認められるので、とりあえず除外して考える。松井編年のⅡ期前後に相当するものが多く、12世紀後半に属するものと思われる。

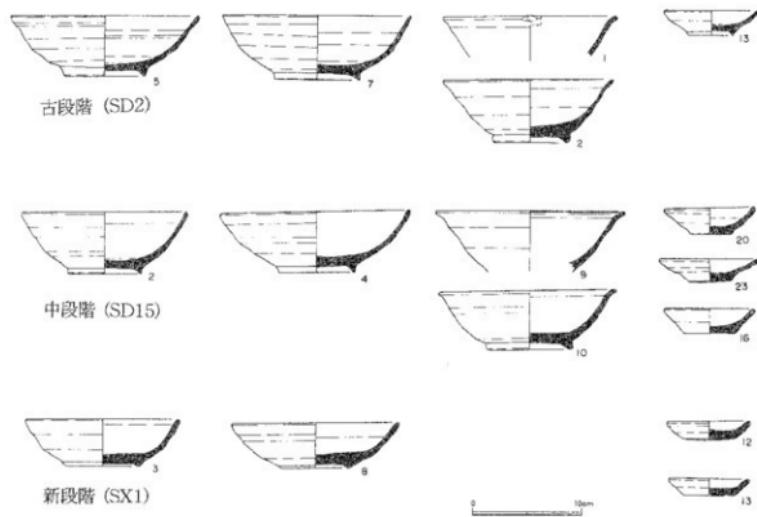
中段階：SD15~17出土碗は、口径が15~約17cmと幅があり、器高は5.5cm前後で腰部の張りは弱いが、体部は内湾気味に聞く。この他、渥美・湖西産の碗が多く出土している。小皿も多く、口径8.5cm前後、器高2.5cm前後で、新段階より深い。多くのものが松井編年のⅢ-1期に相当し、13世紀前半とされている。

新段階：見た目にまとまりのあるSX1出土碗は、体部が直線的に開き、断面二角形の高台は低い。口径は14cm前後、器高は4cm前後である。小皿はかなり扁平で、口径6.8cm前後、器高1.7cm前後である。松井編年のⅢ-2期併行で、13世紀中頃とされている。

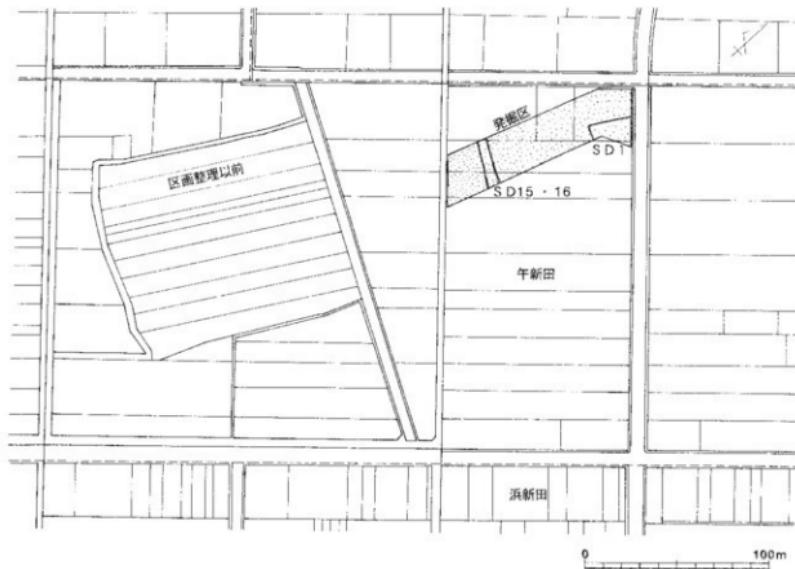
古・中段階では、渥美・湖西産などの山茶碗が一定量を占めているが、新段階ではあまり無い。SR1出土の壺などは遠方の製品の可能性もある。

各段階の基準資料が少數なため、実態を反映しているとは思えないが、そうした傾向はあるのである。掛川市領家遺跡（長谷川2001）では、古段階より古いものでは渥美・湖西産が46%で、古段階併行で85%、中段階併行で64%である。菊川町皿山古窯跡群からは約13kmと産地が近くにありながら、遠方の製品の多量使用は需要と供給のバランスだけでは説明しきれない部分が多い。掛川市林遺跡（井村1993）では尾張産の山茶碗が比較的多く出土しているとされ、時期的な問題もあるが使用者の出自や階層を示す可能性がある。当遺跡のSD15出土土器（中段階）のなかには青白磁の合子が含まれており、これは階層的に上位者の所有品であり、そうした意味で、渥美・湖西産の山茶碗が比較的多く伴出している可能性もある。

中段階以前の遠方の製品の搬入は、地元の生産量の不足とするよりは、消費者側の東遠系の山茶碗への指向が弱く、渥美・湖西製品の供給量の不足を東遠系の製品が補っていた可能性もある。



第94図 藤守遺跡出土山茶碗変遷図



第95図 地籍図に残る地割りと発掘区

第4節 平安時代末期から鎌倉時代の遺構について

第3節でまとめた各段階の建物跡群の変遷案と道路状遺構（SD15・16）に関する問題点について触れてみたい。

（1）掘立柱建物跡の変遷案

掘立柱建物跡については、第Ⅲ章第3節でその変遷案についてまとめた。そこでは、建物跡群を南北の2群に分割し、周辺遺構との機能的関係と時間的前後関係について以下のように推定している。

北群：SH1・2、SD2→SH3、SD1→SH1

南群：SD15・16、SH9→SH7・10→SH5・8→SH6

問題となる点は、北群と南群のどの建物跡が同時に存在したかであろう。初期の建物跡のSH1は、SD2が古段階なので、古段階で良いであろう。SH9はSD15・16掘削以前より存在していたものと仮定しており、SD15・16出土土器が中段階の基準資料であるので古段階に属する。

南北の建物跡群は、ほぼ同じ古段階に形成され、おそらく各群は複数単位で構成され、継続的に建て替えられたものと思われる。南群の最後のSH6がいつの段階に建てられたかは不明確であるが、北群よりも多い重複状態から推定して、新段階以降との予測はつくであろう。

北群のSD1は方形区画の溝であり、おそらく屢敷地を囲んだものと思われる。この溝内からは、新段階の山茶碗が発見されており、北群の建物跡群は新段階まで続いている可能性が非常に高い。

ここで、各建物跡群を第4節の段階毎にまとめ直してみたい。

ただし、問題点として、SH5・6・8出土土器（第18図）がある。これらは中段階に属するもので、SH6出土小皿は完形品である。SH6を中段階とすると、中段階に北群の建物跡は集中してしまう。よって、SH6の構築は中段階であるが、存在期間は新段階であったと考えておきたい。

古段階はSH1・2・9、中段階はSH3・5・7・8・10、新段階がSH6・SD1となる。

（2）道路状遺構について

特殊な遺構には、先に触れたSD15・16（第59図）がある。北西から南東方向の平行した溝状遺構で、おそらく調査区外へと長く伸びており、用途として導排水路を兼ねた道路側溝が最も理解しやすい。

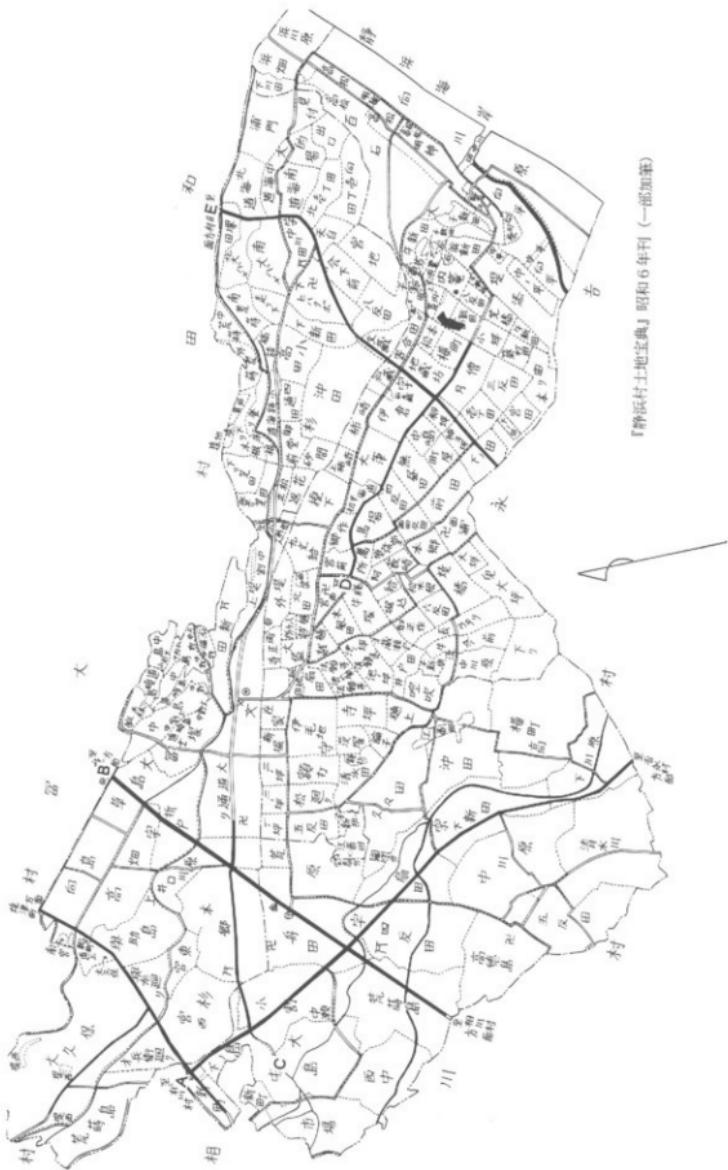
SD15・16の方向はN-約60°-Wで、南側に残る区画整理以前の畦畔にはほぼ並行、もしくは直交している（第95図）。

昭和6年の地籍図上に調査区を当てはめると、小字で小坪とされる区画が、最近まで残存していたことがわかる（第96図）。

第96図と第97図に示した黒塗りの道路部分は、ほぼ重複するものであり、図中のA-Eまでの主要道路が大きな改変を受けずに残っていることが理解される。この道路の重複から、地籍図上の畦畔の方向性をはかることができるのであるが、このN-60°-Wという方向についてはほとんど話題にされていない。今後の藤守遺跡の調査では、注意すべき方向性だろう。

時代は遡るが、藤守地区には古代の条里制遺構が、昭和初期の土地宝典に示された畦畔から推測することが可能であるとされ、その方向はN-4°-Eである（谷岡1973）とされる。また、周辺の確認調査を担当した栗野克己氏は、畦畔の方向性や区画を類形化し、谷岡説を補強している（栗野1980）。

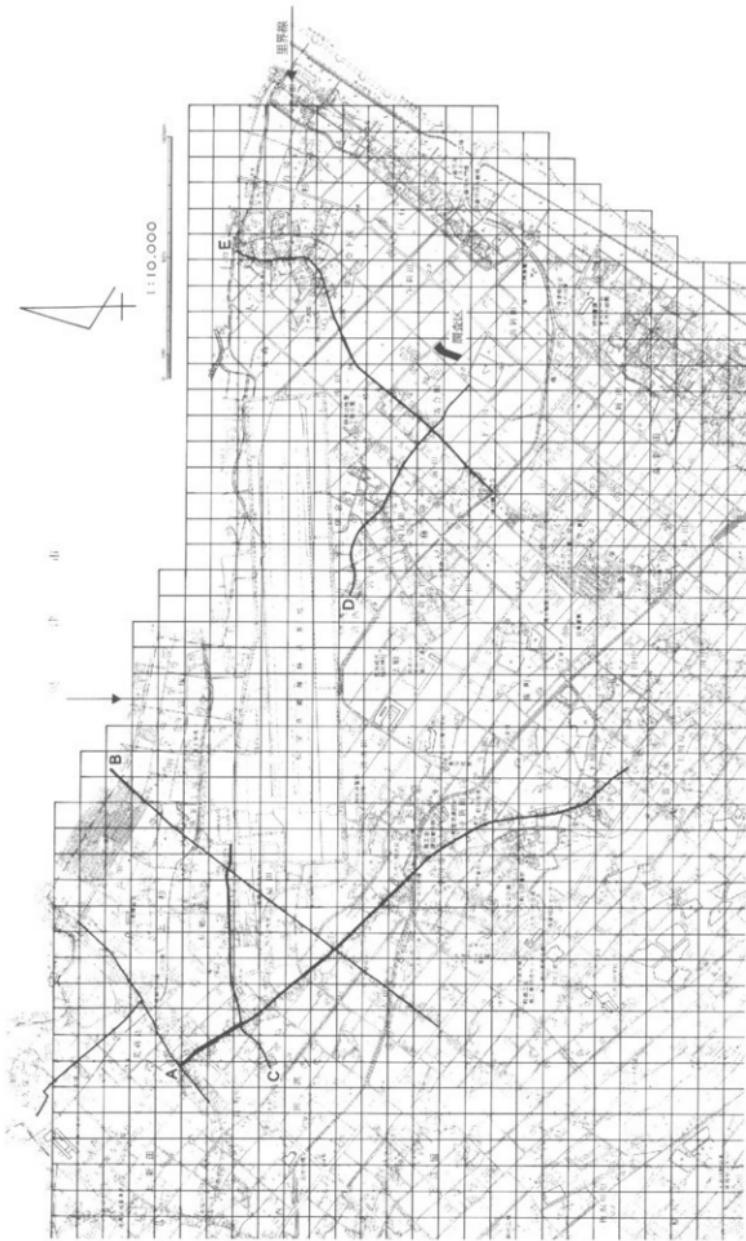
両氏の指摘する古代条里は、第97図の東側の矢印部分を東西の里界線と推定している。この里界線上には、「大道通り」「小路海道」「大中海道」といった小字名が残っており、容易に幹線道路の存在が予測される。ちなみに、筆者自身の計測では、この里界線は正方位系のものである。図中のグリットライ



『静岡村土地宝典』昭和6年刊（一部加筆）

第96図 藤守遺跡周辺小字集成図（静岡県教育委員会1981「静岡県の中世城館跡」より加筆転載）

第97図 藤守遺跡周辺の推定古代条里



ンは、静清平野で確認された古代条里の107m間隔（鈴木良1992）を試みに割り付けたものである。

この正方位系の条里とN-60°-Wの再施行された条里は大きく方向が異なるが、今回の調査区では奈良時代と鎌倉時代の大きな地形の改変は認められなかった。よって、この方向性の違いを自然地形による結論付けるのは早計であろう。領域の支配者の違いなども考慮すべきであろう。

引用参考文献

- 谷岡武雄 1973「大井川扇状地における散居集落」『史林』56巻3号 京都大学史学研究会
小島一夫 1979『光貞寺古窯跡発掘調査報告書』 名古屋市教育委員会
栗野克己 1980『藤守遺跡第3次発掘調査概要』 大井川町教育委員会
瀬川裕市郎 1980「藤井原の大鉢—律令時代埴形土器の変遷—」 沼津市歴史民俗資料館
宮沢智士・西 弘海・西口寿生
1980「第Ⅳ章 青丘東方遺跡の調査」「飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅲ」
奈良国立文化財研究所
八木勝行・鈴木隆夫
1980『原古墳群白砂ヶ谷支群』 藤枝市教育委員会
平林将信 1981「東平遺跡出土土器の編年的位置」「東平」 富士市教育委員会
八木勝行・鈴木隆夫・磯部武男
1982「静岡県藤枝市郡遺跡発掘調査概報—昭和56年度立花地区の調査—」
藤枝市教育委員会（なお同遺跡では淨瓶も出土している）
石田茂作他 1984『新版仏教考古学講座』5 雄山閣出版
羽鳥靖子 1984「駿東型窓の機能について」「伊豆通信病院敷地内遺跡」 関南町教育委員会
斎藤孝正 1990「尾張における飛鳥時代の須恵器生産の一様相—篠岡2号窯出土資料を中心として—」
『名古屋大学文学部研究論集』107 名古屋大学文学部
瀬川裕市郎・小池裕子
1990「煮塼魚と埴形土器・覚え書」「沼津市博物館紀要』14 沼津市歴史民俗資料館
高橋一敏 1990『吉美中村遺跡』 湖西市教育委員会（なお湖西古窯跡群では8世紀にはいり古見16号窯で鉢の生産が行われている）
小森俊寛 1992「概説」「古代の土器I—都城の土器集成」 古代の土器研究会
鈴木良孝 1992『池ヶ谷遺跡』 遺構編I 勾静岡県埋蔵文化財調査研究所
井村広巳 1993『林遺跡発掘調査報告書』 掛川市教育委員会
松井一明 1993「遠江・駿河・伊豆の寺院について」「古代佛教東へ—寺と窯—」
東海埋蔵文化財研究会
松井一明 1993「遠江における山茶碗生産について—遠江の山茶碗研究—」「静岡県考古学研究』
No25 静岡県考古学会
佐口節司・竹内直文
1996『大宝院廃寺跡・第7次発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
(なお同遺跡では第10・11次調査で鉢や瓦塔の破片が出土している)
尾野善裕 1997「東海」「古代の土器研究—7世紀の土器—」 古代の土器研究会
清水 乞 1999『新装版仏具辞典』 東京堂出版
畠中英次 1999「近畿地方の飛鳥・白鳳時代土器編年研究と問題点」「飛鳥・白鳳の瓦と土器」
古代の土器研究会

- 鈴木敏則 2000「磐田郡豊岡村神田古墳－中国鏡出土の後期古墳－」『浜松市博物館報』第13号
浜松市博物館
- 河合 修 2001「青灰色のうつわ」『研究紀要』第8号 （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 長谷川謙 2001『領家遺跡II・梅橋古墳』 （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

付 編

付編 1 藤守遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

付編 2 静岡県、藤守遺跡から出土した土器（胎土）の蛍光X線分析

株式会社 古環境研究所

付編 3 静岡県志太郡大井川町藤守遺跡出土木製品の樹種

鈴木三男（東北大・理・植物園）

付編 4 藤守遺跡の自然的立地条件

加藤芳朗（静岡大学名誉教授）

付編1 藤守遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

藤守遺跡は、静岡県志太郡大井川町藤守に所在し、大井川が形成した扇状地の扇端と海岸砂丘に挟まれた海岸砂丘後背低地の微高地上に立地している。これまでの発掘調査成果では、古墳時代の堅穴住居跡や鎌倉時代の掘立柱建物跡や井戸跡、条里制に関する遺構などが検出されており、このほかに旧大井川支流に由来すると思われる河道なども確認されている。この河道（SR6）からは、占墳・奈良時代に比定される土器や木製品が多量に出土しており、当該期の水辺祭祀や儀礼との関連性が想定されている。なお、この河道は鎌倉時代にはほぼ埋没しており、規模の異なる河道（SR4）が確認されている。

今回の報告は、河道内および周辺の古環境の復元を目的とし、上記した河道内から採取した土壤試料3点について、それぞれ花粉分析・珪藻分析を実施する。

1. 試料

試料は、古墳時代後期（7世紀後半）に形成された河道（SR6）から採取された土壤試料2点と、鎌倉時代（12世紀後半）に形成された河道（SR4）から採取された土壤試料1点の計3点である。

河道（SR6）は、6層に分層（14~19層）されており、下位から19層が暗灰色シルト、18層がオリーブ黒色粘土、17層が暗灰色粘土、16層がオリーブ黒色シルト質細砂、15層が暗灰色粗砂混じり粘土、14層が灰色粘土混じり粗砂からなる（図1）。また、19・18・16・15層にはラミナが認められ、多量の植物遺体が検出されている。また、14層からは炭化物が確認されている。試料は19層（試料番号1）および18層（試料番号3）から採取したものである。

河道（SR4）は、4層（1層~4層）に分層されており、4層が灰黑色粘土、3層が暗灰色粘土、2層は暗灰色シルト質粘土、1層が灰色シルト質粘土からなる（図1）。試料は、3層（試料番号3）から採取したものである。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレバラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるい

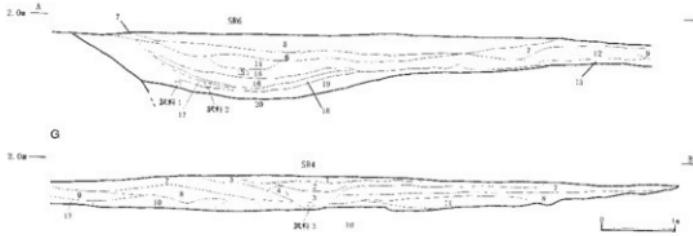


図1 試料採取地点の土層断面図

は1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に100個体以上同定・計数する。種の同定は、原口ほか(1998)、Krammer, K. (1992)、Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986, 1988, 1991a, 1991b)などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率1.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性か判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水～汽水生種については小杉(1988)、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)汚濁耐性についてはAsai, K. and Watanabe, T. (1995)の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、そして、セルロースの分解を目的とするアセトトリル(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理の順に、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全体を走査し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計数する。

分析結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図で示す。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基準とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフン(—)で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

3. 結果

(1) 硅藻分析

結果を表1、図2に示す。SR6・19層(試料番号1)からは、珪藻化石がほとんど産出しなかった。

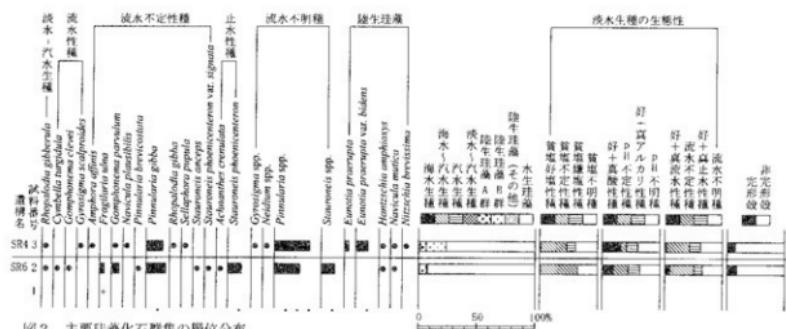


図2 主要珪藻化石群集の層位分布

汽水～淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基準、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基準として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

表1 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	SR4		
	属分	pH	流水		3	2	1
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		2	1	-
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	I-ph	T	-	2	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	-	-
Caloneis bacillum (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange - Bertalot	Ogh-ind	ind	I-ph	RB	1	1	-
Caloncisia silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-
Caloneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-
Craticula spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
Cymbella naviculiformis Auerwald	Ogh-ind	ind	ind	O	1	-	-
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	1	-
Cymbella turgida Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	3	-
Cymbella turgida var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
Diploncisia parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-
Diploncisia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
Eunotia arcuata var. bidens Grunow	Ogh-ind	ac-il	I-ph		1	-	-
Eunotia monodon Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	I-ph	O	1	-	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	I-ph	RB,O,T	4	-	-
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	I-ph	RB,O	11	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-
Fragilaria construens (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	I-ph	U	1	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange - Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	4	1
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	3
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	3	-
Gomphonema clevei var. javanica Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	1	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	I-ph	O,U	1	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	2	7	-
Gyrosigma scalpoides (Rabb.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		2	-	-
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	2	3	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	2	2	-
Navicula plusibialis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-
Nitzschia brevisissima Grunow	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-
Pinularia borealis Ehrenberg	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-
Pinularia brevirostrata Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RB,U	2	-	-
Pirularia divergensissima (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	-	1	-
Pirularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind		-	3	-
Pirularia microstaurata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		1	-	-
Pirularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-
Pirularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-
Pirularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		32	22	-
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-
Sellaphora laevissima (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind		1	-	-
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	2	-	-
Stauroneis acceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	2	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	I-ph	O	-	12	-
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	2	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	12	-
Suriella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1	-	-
海水生種群					0	0	0
海水+汽水生種合計					0	0	0
汽水生種合計					0	0	0
淡水+汽水生種合計					2	1	0
淡水4種合計					103	100	2
珪藻化石統計					105	101	2

凡例

H.R. : 塚分濃度に対する適応性

pli : 水素イオン濃度に対する適応性 C.R. : 流水に対する適応性

Ogh-Meh : 淡水-汽水生種

al-bi : 真アルカリ性種

I-ph : 好止水性種

Ogh-hil : 貧塩好塩性種

al-il : 好アルカリ性種

ind : 流水不定性種

Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種

ind : pH 不定性種

r-ph : 好流水性種

Ogh-unk : 貧塩不明種

ac-il : 好酸性種

r-bi : 真流水性種

unk : pH 不明種

unk : 流水不明種

環境指標種群

K: 中~下流性河川指標種, O: 沼沢湿地付着生種(以上は安藤, 1990)

S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種(以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986)

R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, RI:群、伊藤・堀内, 1991)

SR 6・18層（試料番号2）・SR 4・3層（試料番号3）からは、わずかであるが珪藻化石が産出した。完形殻の出現率は、15%前後と化石の保存状態が極めて悪い。産出分類群数は、合計19属39種類である。SR 6・18層（試料番号2）から採取した試料では、好酸性（pH7.0以下の酸性水域に最もよく生育する種）・流水不定性（流水域にも止水域にも普通に生育する種）の*Pinnularia gibba* と保存状態が悪いために種まで同定に至らなかった*Pinnularia* spp. が多産する。これに加えて止水性（池沼のような止水域に最もよく生育する種）の*Stauroneis phoenicenteron*、流水不定性の*Gomphonema parvulum*、化石の保存が悪く種まで同定できなかった*Stauroneis* spp. などが多く産する。

また、SR 6・19層（試料番号1）では、水生珪藻の*Fragilaria ulna* が産出した程度である。この内、*Stauroneis phoenicenteron* や*Pinnularia gibba* は、沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や、水深の浅い湿地で優勢な出現傾向が見られることから、その環境を指標することができる沼澤湿地付着生種群とされている（安藤、1990）。

SR 4・3層（試料番号3）から採取された試料では、*Pinnularia gibba*、陸生珪藻B群（伊藤・堀内、1991；乾いた陸上にも水域にも生育する種）の*Eunotia praerupta* var.*bidens* が10~15%産出し、*Pinnularia* spp. が約30%産出する。

（2）花粉分析

結果を表2、図3に示す。SR 6・19・18層（試料番号1・2）では、ツガ属、モミ属、アカガシ亞属を中心として、マキ属、マツ属、ニレ属-ケヤキ属、クマシデ属-アサダ属などが検出される。このうち、マツ属は覆土下位から上位に向かい増加する傾向を示している。草本花粉では、イネ科が多産する。また、SR 6・18層（試料番号2）では、栽培植物を含む分類群であるトウガン属、ユウガオ属、キュウリ属、ソバ属などが検出される。

SR4・3層（試料番号3）では、ツガ属、モミ属、マツ属、アカガシ亞属などが検出される。草本花粉はイネ科を中心に、水生植物であるガマ属、オモダカ属、ミズワラビ属などがみられる。

表2 花粉分析結果

種	類	試料番号	SR4 3	SR6 2	1
本木花粉					
マキ属			11	10	18
モミ属			21	25	28
ツガ属			46	67	55
トウヒ属			1	1	1
マツ属半緑管東亞属			5	1	-
マツ属複緑管東亞属			29	17	8
マツ属（不明）			41	20	7
コウヤマキ属			2	4	1
スギ属			11	6	11
イチイ科・イヌガヤ科-ヒノキ科			2	1	2
ヤナギ属			4	-	1
ヤマモモ属			6	-	1
サワグルミ属			1	-	9
クマシデ属-アサダ属			4	4	7
ハシバミ属			1	-	1
カバノキ属			2	3	7
ハンノキ属			1	5	3
ブナ属			4	4	6
コナラ属コナラ原属			6	1	10
コナラ属アカガシ亞属			31	21	27
クリ属-シイノキ属			10	-	2
ニレ属-ケヤキ属			7	9	15
エノキ属-ムクノキ属			-	-	1
シタキ属			-	-	1
チノキ属			-	1	2
シナノキ属			-	3	-
グミ属			1	1	-
ウコギ科			-	1	-
ツツジ科			-	1	-
ガマズミ属			-	-	1
草本花粉					
ガマ属			17	6	4
オモダカ属			1	-	-
イネ科			232	800	295
カヤツリグサ科			39	6	9
ミズアオイ属			2	-	-
イブキトラノオ節			4	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節			39	22	14
ゾバ属			-	1	1
アカザ科			1	1	10
ナアシコ科			4	-	-
アブラナ科			1	-	2
キカシグサ属			2	-	-
セリ科			3	-	2
ヒルガオ属			-	3	-
オオバコ属			3	3	-
トウガン属			-	56	-
ユウガオ属			-	19	-
キュウリ属			-	82	-
ヨモギ属			33	341	23
キク亜科			2	1	1
不明花粉			14	11	9
シダ類胞子			-	-	-
ヒカゲノカズラ属			-	11	4
ミズワラビ属			34	-	-
サンショウウモ			1	-	-
イノモトソウ属			1	-	1
他のシダ類胞子			50	46	35
合計					
本木花粉			247	206	225
草本花粉			383	1341	361
不明花粉			14	11	9
シダ類胞子			86	57	40
総計（不明を除く）			716	1604	626

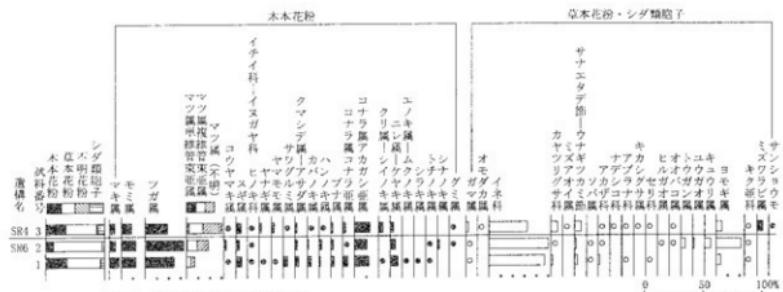


図3 花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満について検出した種類を示す。

4. 考察

(1) 古植生復元

SR 6・SR 4 から採取した土壤試料の花粉分析の結果からは、主にツガ属、モミ属、マツ属、アカガシ亞属、さらに低率ではあるが、マキ属、ニレ属ーケヤキ属、クマシテ属ーアサ属などが検出されている。両河道の花粉化石産出状況が概ね似ることから、試料を採取した遺構の年代観である7世紀末から12世紀後半には、ツガ属、モミ属、マツ属、アカガシ亞属を中心とし、マキ属、ニレ属ーケヤキ属、クマシテ属ーアサ属などが混在する種生が存在していたと考えられる。これらの種類のうち、ツガ属・モミ属は温帯性針葉樹林、アカガシ亞属は暖帯常緑広葉樹林の主要構成要素である。したがって、周辺地域には、温帯性針葉樹に暖温帶常緑広葉樹が交えた植生が存在したと考えられる。

なお、マツ属の花粉は、SR 6 層上下位 (19層・試料番号 1) から上位 (18層・試料番号 2)、さらに SR 4 と時代が新しくなるにつれて出現率が増加している。マツ属花粉が増加する現象は、繩文海進最盛期以降に日本各地で確認されている (例えば、塚田, 1981) が、陽樹で二次林の代表的な構成要素であるマツ属複雑管束亞属の増加は、一般的に伐採などによる二次林の増加や植林などといった人間の植生干渉の結果として知られている (例えば波田, 1987)。

これまでに静岡県内で実施した分析のうち静岡・清水平野の花粉分析結果 (金井, 1993; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1990a, 1990b, 1991, 1994, 1995a, 1995b, 1996; 安田, 1983, 1990など) によれば、古墳時代前期にツガ属・モミ属などの温帯性の針葉樹が若干増加する傾向も認められるものの、基本的にスギ属・アカガシ亞属が多産している。また、本遺跡より西方に位置する磐田市の御殿・二之宮遺跡 (吉野, 1991)、浜名湖畔および浜名湖底 (Matsushita and Sanukida, 1988) で行われた調査結果では、このころ、アカガシ亞属を中心とする暖温帶林が成立するとされている。今回の結果をみると、スギ属・アカガシ亞属の花粉化石の産出はさほど多くないため、静岡・清水平野や浜名湖周辺とは異なる植生が成立していた可能性が考えられる。

ところで、全試料を通してイネ科が多く検出され、総花粉・胞子数に対して木本花粉が占める割合は低率であったことから、河道周辺などはイネ科の草本を中心として開けた草地のような状態であったと推測される。なお、静岡県内における花粉分析結果および遺跡の時代観を考慮した場合、稲作の可能性が十分に考えられることから、多産するイネ科花粉の産状を確認するために改めてイネ属同定を実施した。その結果、分析試料すべてにイネ属花粉が確認され、遺跡周辺での稲作の可能性について示唆することができ、SR 4・3 層 (試料番号 3) で、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、ミズワラビ属、

サンショウウモなどの水田雑草がみられ、また、条單制に関すると思われる遺構が検出される12世紀後半（鎌倉時代）には、少なくとも遺跡周辺で稲作が行われていた可能性が高いと推測される。

7世紀後半と想定されているSR 6・18層（試料番号2）では、トウガン属、ユウガオ属、キュウリ属、ソバ属などの栽培植物の花粉化石が比較的多く検出されている。これら栽培植物は虫媒花で花粉生産量が少なく、堆積物中から花粉化石が検出されることは稀である。これらの栽培植物を含む分類群である花粉化石が検出されたことは、局地性を強く反映していると考えられ、遺跡周辺にこれら栽培植物が存在していたことを示唆していると考えられる。

（2）河道（低地）内の環境

SR 6・18層（試料番号2）およびSR 4・3層（試料番号3）から産出した珪藻化石の検出数は少ない。検出された珪藻化石も保存状態が極めて悪く、また、破損しているものが多いため、殻の丈夫な大型種に限られる傾向がある。したがって、珪藻化石が溶解した可能性があり、当時の河道内の環境を正確に反映しているとは言い難い。しかし、残存する珪藻化石が沼沢湿地付着生種群とされる種がやや多いことを考慮すると、周囲に沼沢～湿地のような水域が存在した可能性もある。

なお、藤守遺跡は、大井川が形成した扇状地の扇端部、および、海岸砂丘の後背低地に立地している。海岸砂丘の発達については純文時代中期以降活発化することから（松原,2000）、集落が確認されている古墳時代後期には海岸砂丘とともに後背低地も形成されていたと考えられる。したがって、河道から沼沢湿地付着生種群の珪藻化石が検出された状況は、河道の流れが非常に緩やかであったか、砂丘後背低地に伴う沼沢～湿地のような水域が存在したことを示唆していると考えられる。なお、SR 4・3層（試料番号3）の花粉分析結果においても、イネ科・カヤツリグサ科など水生植物の花粉化石が検出されており、同層の珪藻化石の産状と調和的な結果を示していると言える。

5. むすび

SR 6・SR 4から採取した試料について花粉分析および珪藻分析を実施した結果に、発掘調査の所見で得られている河道覆土の年代観を参考にすると以下のようにまとめられる。

7世紀末から12世紀後半には、遺跡周辺にツガ属、モミ属、マツ属、アカガシ亜属を中心とし、マキ属、ニレ属・ケヤキ属、クマシデ属・アサダ属などが混在する植生が存在している。河道周辺という局所的な植生を想定した場合には、イネ科草本を中心とする開けた草地が存在した可能性が示唆される。さらに、SR6・18層（試料番号2）堆積時には、トウガン属、ユウガオ属、キュウリ属、ソバ属などの栽培植物が存在し、SR4・3層（試料番号3）堆積時にはイネ科・カヤツリグサ科など湿地の環境で生育する水生植物が存在することが示唆された。珪藻化石については産出状況が悪く検討の余地が残るもの、残存する珪藻化石には沼沢～湿地などに生息する沼沢湿地付着生種群が多いことから、SR 4・3層の花粉分析結果を追認する結果であることが確認された。

なお、イネ科花粉について稲作の可能性を考慮しイネ属同定の概査を実施した結果、いずれの試料からもイネ属が確認された。特に、条單制との関連性が考えられる遺構や水田雑草の存在が確認された12世紀後半（鎌倉時代）には、稲作が行われていた可能性が高いと推測された。

今回の分析は、河道内堆積物だけの分析であり、遺跡の標準層序などは分析を実施していない。また、扇状地扇端であり海岸砂丘の後背低地という地形の形成過程など古環境変遷の課題も残る。今後は、遺跡周辺の地形や分析例などの情報を蓄積し、これら課題について検討していく必要がある。

藤守遺跡では井戸跡、住居跡などをはじめ条里跡と考えられる遺構も検出されている。遺跡内の局地的植生や植物利用状況については、井戸跡内埋積土や住居跡内竈に残存すると思われる植物遺体や灰な

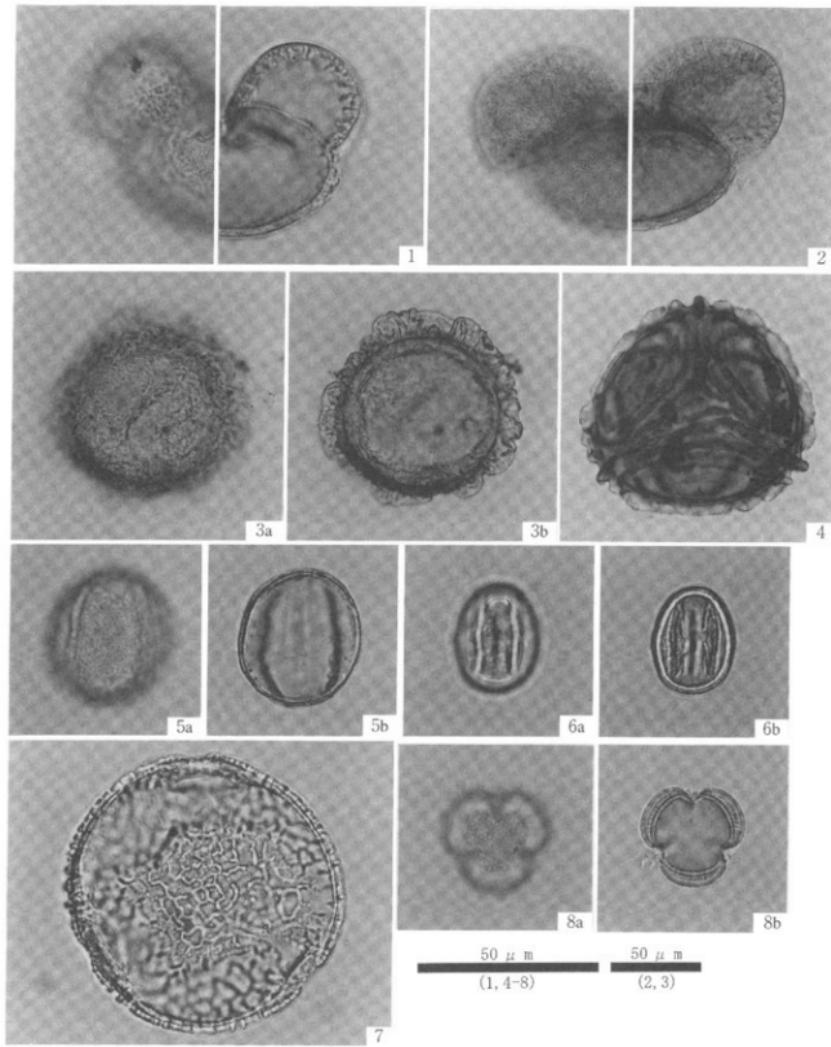
どの分析、さらに条里跡と想定される遺構の土壤について植物珪酸体分析を実施することで有用な情報を得られると思われる。これらについても分析調査を実施し、今回の分析結果と合わせて評価したいと考えている。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p.73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 金井慎司（1993）花粉化石からみた静岡県・池ヶ谷遺跡の古植生。静岡県埋蔵文化財調査研究所 調査報告書第46集、「池ヶ谷遺跡」(自然科学編) 昭和63年度～平成2年度静清バイパス(池ヶ谷地区) 埋蔵文化財発掘調査報告書, p.49-64, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究, 27, p.1-20.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN · STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 塙田松雄（1981）過去一万二千年間－日本の植生変遷史 II 新しい花粉帯。日本生態学会誌, 31, p.201-215.
- 波田善夫（1987）花粉分析からみたマツ林の歴史。「松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究－松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の擾乱とその動態について－ 資料集」, 財団法人日本自然保護協会。
- 原口和夫・三友 清・小林 弘（1998）埼玉の藻類 珪藻類。埼玉県植物誌, 埼玉県教育委員会, p.527-600.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1990a）花粉分析報告。静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第25集「川合遺跡（遺構編） 平成元年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書本文編」, p.229-235, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1990b）蛭田遺跡のテフラ・珪藻・花粉分析。静岡市埋蔵文化財調査報告書23「蛭田遺跡（自然科学分析編） 平成元年度静岡市大谷変電所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報

- 告書」, p. II-1~8, 中部電力株式会社・静岡市教育委員会.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1991) 自然科学的分析. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第28集「川合遺跡17区 平成元年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.24-28, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1994). 長崎遺跡における古環境. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第49集「長崎遺跡（遺構編）平成4年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.70-91, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1995a) 縄文時代後・晩期以降の古環境変遷. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第63集「川合遺跡八反田地区Ⅱ 平成3・4年度原営住宅南沼上団地建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（本文編）」, p.195-284, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1995b) 潤名遺跡の縄文時代後・晩期以降の古環境変遷. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第61集「潤名遺跡IV（自然科学編） 静清バイパス（潤名地区）埋蔵文化財調査報告書4」, p.69-210, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1996) 岳美遺跡における自然科学分析. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第75集「岳美遺跡II（遺物編） 平成4・5年度静清バイパス（岳美地区）埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.68-167, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所.
- 松原彰子 (2000) 「日本における完新世の砂州地形発達」 地理学評論73,p.409-434.
- Mariko Matsuishi and Satoshi Sanukida (1988) Holocene Vegetation History around Lake Hamana on the Pacific Coast of Central Japan. The Quaternary Research, 26, p.393-399.
- 安田喜憲 (1983) 有東遺跡の泥土の花粉分析. 静岡県文化財調査報告書第28集「有東遺跡 静岡警察署建設用地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」, p.63-67, 静岡県教育委員会.
- 安田喜憲 (1990) 静岡県川合遺跡の泥土の花粉分析. 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書第25集「川合遺跡（遺構編） 平成元年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書（本文編）」, p.201-227, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所.
- 吉野道彦 (1991) 静岡県御殿・二之宮遺跡における花粉分析. 「御殿・二之宮遺跡 市立二之宮保育園建設に伴う発掘調査報告書」, p.68-75, 磐田市教育委員会.

図版1 花粉化石(1)



1. マツ属(SR6;1)

3. ツガ属(SR6;1)

5. コナラ属コナラ亜属(SR6;2)

7. トウガン属(SR6;2)

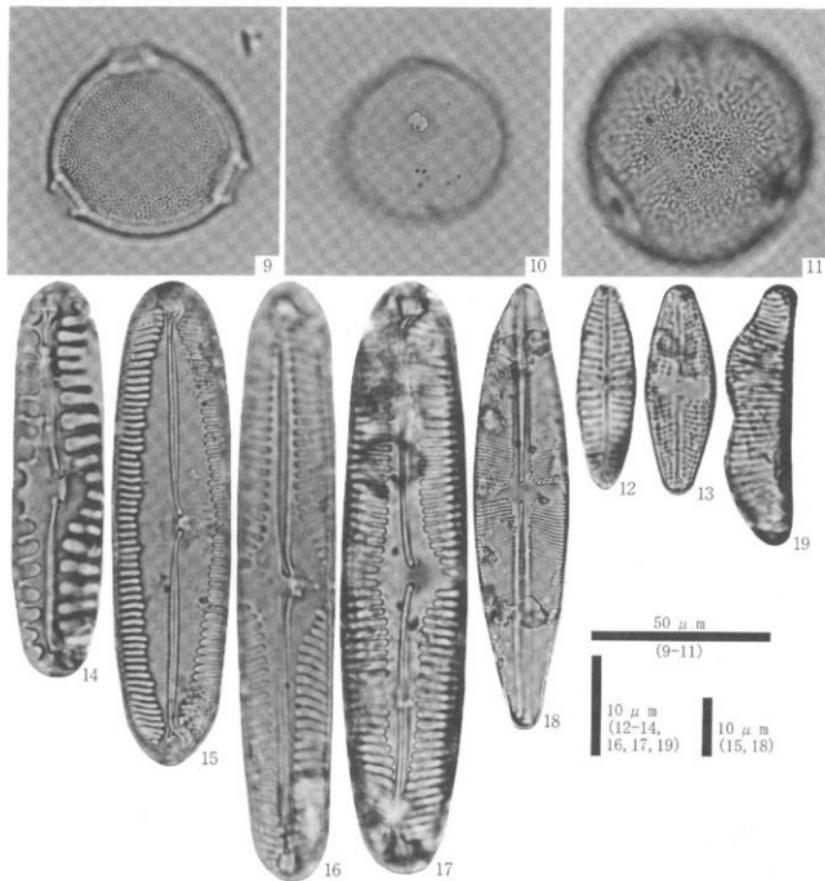
2. モミ属(SR6;1)

4. ミズワラビ属(SR4;3)

6. コナラ属アカガシ亜属(SR6;2)

8. ヨモギ属(SR6;2)

図版2 花粉化石(2)・珪藻化石



9. キュウリ属(SR6;2)
 10. イネ科(SR6;2)
 11. ユウガオ属(SR6;2)
 12. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(SR6;2)
 13. *Navicula mutica* Kuetzing(SR6;2)
 14. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(SR6;2)
 15. *Pinnularia brevicostata* Cleve(SR6;2)
 16. *Pinnularia gibba* Ehrenberg(SR6;2)
 17. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg(SR6;2)
 18. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg(SR6;2)
 19. *Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow(SR4;3)

付編 2 静岡県、藤守遺跡から出土した土器(胎土)の蛍光X線分析

株式会社 古環境研究所

1. 試 料

分析試料は、7世紀末期から8世紀とされる駿河系土器5点および遠江系土器5点の計10点である。試料の詳細を次表に示す。

試料名	遺構名	挿図番号	系 統	胎土の特徴
A	S F 7	76-34	駿河	ø 1 mm長石多量
B	S F 7	76-32	遠江	微細石英多量
C	S B 3 挖方	30-17	遠江	ø 1 mm黒雲母多量
D	S B 3	30-10	駿河	ø 1 mm長石多量
E	S B 6	31-13	遠江	ø 1 mm黒雲母多量
F	S B 6	31-9	駿河	ø 1 mm長石多量
G	S R 6	51-118	遠江	微細石英多量
H	S R 6	54-183	駿河	ø 1 mm長石多量
I	S R 6	53-147	駿河	ø 1 mm長石多量
J	S R 6	51-124	遠江	ø 1 mm黒雲母多量

2. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子製造、JSX3201）を用いて、元素の同定およびフランジメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

- 1) 土器片を流水で研磨洗浄
- 2) 絶乾後、分析装置の固定試料ステージに固定
- 3) 測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

3. 分析結果

各元素の定量分析結果(wt%)を表1に示し、CaO-K₂O分布図およびRb₂O-SrO分布図を図1に示す。

4. 考 察

(1) CaO-K₂O分布図およびSrO-Rb₂O分布図

土器胎土に含まれるカリウム(K)、カルシウム(Ca)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)の4元素は、土器胎土の地域性を示す有効な因子とされている(三辻, 1999)。

土器の産地同定を行う際の指標の一つとされているCaO-K₂O分布図(図1)によると、遠江系土器はK₂O含量が約2.0%以上でCaO含量が約1.0%以下、駿河系土器はK₂O含量が約2.0%以下でCaO含量が約1.0%以上であり、両者の分布域は明瞭に異なっている。また、SrO-Rb₂O分布図(図1)でも、遠江系土器はRb₂O含量が約0.01%以上でSrO含量が約0.02%程度、駿河系土器はRb₂O含量が約0.01%以下でSrO含量が約0.02%以上あり、両者の分布域は明瞭に異なっている。

以上の結果から、駿河系土器と遠江系土器の同定・識別ができる可能性が考えられるが、分析データが少ないとから確定的なことは言えない。今回は、複数の元素の組み合わせによる統計的な検討を行わなかつたが、今後このような基礎的なデータを蓄積することで、土器の産地を推定するための手がかりが得られるものと期待される。

(2) リン酸含量について

土壤中には、土壤の母材、動物遺体、植物遺体などを起源とするリン(P)が含まれている。リンは土壤中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため、土壤中における保存性が高い。一般に、未耕地の土壤におけるリン酸(P_2O_5)含量は0.1~0.5%程度、耕地上壤でリン酸肥料が投入された場合でも1.0%程度である。

今回の分析では、すべての土器試料でリン酸含量が2.0%以上とかなり高い値を示しており、試料Hと試料Iでは6.0%以上にも達している(表1)。このように土器(胎土)からリンが多量に検出される原因として、土器内にリンを多く含む動植物が入れられていたことや、これらの土器でリンを多く含む動植物が調理(煮炊き)されていたことなどが考えられる。土器の用途については、考古学的所見とも合わせて慎重に検討していく必要があろう。

引用参考文献

- 竹迫紘(1993) リン分析法. 日本第四紀学会編. 四紀試料分析法2, 研究対象別分析法. 東京大学出版会, p.38-45.
- 西勝英雄(2000) X線分析の特徴と使い分けーなぜX線分析を使うのかー. X線分析最前線. アグネ技術センター, p.9-56.
- 三辻利一(1998) 元素分析による古代土器の胎土研究. 人類史研究(10). 人類史研究会, p.11-39.
- 三辻利一(1999) 元素分析による須恵器の産地推定. 考古学と自然科学(4). 同成社, p.294-313.

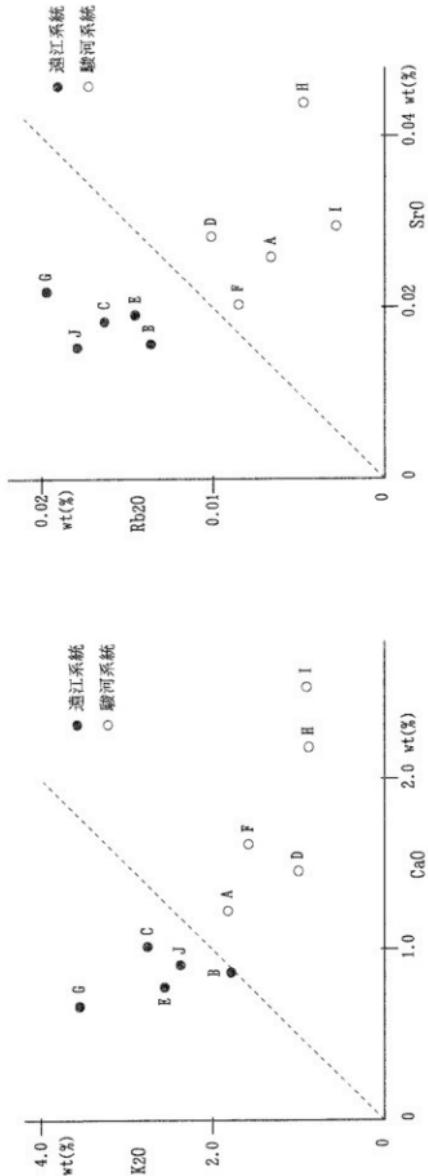
表1 静岡県、藤守遺跡出土土器(胎土)の蛍光X線分析結果

地點・試料 番号	化学式	土壤 (粘・土)						D(白色粒) 集中部分			
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
12	MgO	1.554			0.138	0.198	0.778		0.351	0.297	0.475
13	Al ₂ O ₃	19.913	20.931	23.995	23.517	22.969	19.819	21.911	24.133	26.502	22.111
14	SiO ₂	63.113	68.928	62.242	56.667	63.030	61.516	67.306	50.746	47.728	62.840
15	P ₂ O ₅	2.211	2.854	3.093	2.821	2.875	2.870	2.728	6.370	6.394	3.951
16	SO ₃		0.179		0.681	0.084		0.273	0.251	0.098	0.004
19	K ₂ O		1.821	1.786	2.751	0.998	2.552	1.580	3.545	0.871	0.899
20	CaO	1.228	0.866	1.019	1.458	0.782	1.615	0.672	2.184	2.534	0.909
22	TiO ₂	0.661	1.115	1.511	1.456	1.552	0.982	1.182	1.548	1.423	1.252
25	MnO	0.185	0.039	0.076	0.172	0.082	0.183	0.026	0.207	0.234	0.085
26	Fe ₂ O ₃	9.215	3.392	5.026	12.579	5.817	10.575	2.261	13.234	13.814	5.905
30	ZnO	0.041	0.011	0.020	0.040	0.030	0.025	0.012	0.028	0.017	0.021
37	Rb ₂ O	0.007	0.014	0.016	0.010	0.015	0.009	0.020	0.005	0.003	0.018
38	ScO	0.026	0.016	0.018	0.028	0.019	0.020	0.022	0.044	0.030	0.015
40	ZrO ₂	0.028	0.050	0.053	0.037	0.057	0.029	0.042	0.027	0.028	0.047

Sr0-Rb20分布図

Ca0-K20分布図

図1 藤守遺跡から出土した土器(粘土)のCa0-K20分布図およびSr0-Rb20分布図



付編3 静岡県志太郡大井川町藤守遺跡出土木製品の樹種

鈴木三男（東北大・理・植物園）

静岡県志太郡大井川町の藤守遺跡から出土した木製品の樹種を調べた。藤守遺跡は大井川の扇状地の末端付近にあり、現標高は約2mで掘り下げるとき砂礫層から湧水がある。調査したのは古墳時代後期の溝S R 6 の最下層付近から出土した木製品26点、加工材片40点、自然木21点、合計87点である。これらと同じ場所の同じ層準から出土した土器からこれらの木材の時期は7世紀後半と見なすことが出来る。また、これらとは別にSR30の南方部にあった立株の根の材が得られたのでこの樹種も同定した。その結果は以下に記すとおりハンノキ節の根材であった。

全87点の同定結果を表1に示すとともに、以下に同定された24樹種および単子葉草本1種の識別点となる木材構造について記し、顕微鏡写真を写真1~25に載せた。なお、同定に用いられたこれらの組織プレパラートは静岡県埋蔵文化財研究所に保管されている。

1. カヤ *Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. イチイ科 写真 1a - 1c. (No7586)

大変保存性がよい出土材で、晩材部は幅狭く、早材から晩材への移行は緩やかで年輪は目立たない。樹脂細胞ではなく、仮道管と放射組織だけからなる。早材部には方形の仮道管が整然と並び、晩材部の仮道管はやや細く厚壁である。仮道管内壁には顯著ならせん肥厚があり、2~3本づつまとまって走る。放射組織は柔細胞からなり、背が低く、分野壁孔は小さいスギ型で1分野あたり1から2個ある。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。イチイとはらせん肥厚が2~3本づつまとまって走る事により、イスガヤとは樹脂細胞を欠くことにより区別される。

カヤは東北地方南部以南の暖温帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径1m、樹高25mの大高木となる。木理通直で、堅く緻密で弹性があり、切削加工が容易、木肌美しく、香りがあって保存性も高くて、極めて優秀な針葉樹材である。建築材、各種器具材など多様な用途があるが、彫刻もの、碁盤、将棋盤などの特用がある。本遺跡出土材は加工材片1点である。

2. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.Koch. イヌガヤ科 写真 2a - 2c. (No7522)

年輪が全く目立たない針葉樹材で、早、晩材とも仮道管は細く、早晚材の区別がほとんどない。年輪内に樹脂細胞が多数散在し、その水平壁は数珠状に肥厚する。樹脂細胞に黒褐色の物質が溜まることはない。仮道管の内壁にはほぼ水平の明瞭ならせん肥厚がある。これらの形質からイスガヤの材と同定した。

イスガヤは東北地方中部以南の温暖地に生育する常緑小高木で、高さ10m、幹径30cmくらいになる。材は堅く粘りがあり、緻密だが加工性に難がある。カヤ同様の用途があるが、材質が劣り、また、材が小さいのでそれほど利用はない。むしろ、枝が通直で曲げに強く粘りがあることから、手綱の枠、牛の鼻輪等の用途があり、縄文時代以降、全国的に丸木弓の出土例が多い。本遺跡出土材は丸木弓1点、棒状木製品1点、それに加工材片が2点である。

3. イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科 写真 3a - 3c. (No7532)

カヤ、イスガヤ同様、年輪が全く目立たない針葉樹材で、早材から晩材への移行は極めて緩やかである。樹脂細胞は横断面では仮道管より放射径が小さく扁平な長方形をしており、接線方向にややまとま

る傾向を見せながら年輪内に均一に分布している。イヌガヤからは顯著ならせん肥厚を持たないことで容易に区別される。また、イヌガヤの樹脂細胞の水平壁はほぼ水平に位置して、厚く数珠状に肥厚するのに対しイヌマキ属ではしばしば斜目に位置して大変薄く平滑であること、さらに分野壁孔がイヌガヤでは開孔部の狭いトウヒ型であるのに対し、イヌマキでは広いスギヘヒノキ型であること、などで区別出来る。

イヌマキ属には房総半島南部以南西の暖地に生えるイヌマキとさらに南方の紀伊半島以南に生えるナギがあるが、材構造での両者の区別は難しい。しかしナギは現在では静岡県内でもしばしば植栽されはするものの、その天然分布がはるか南方に限られることから当遺跡出土材はイヌマキであると考えられる。静岡県の弥生時代～古代の遺跡からはイヌマキ属の材がしばしば出土し、多くは丸木弓や棒、柄物などに利用されている。本遺跡出土材は組み合わせ式の馬鍔がイヌマキであり、他に棒、杭、容器（？）、それに加工材片が4点である。弥生時代から古墳時代の一木作りの馬鍔は西日本ではアカガシ類属、関東以東北ではクスギが使われている。組み合わせ式ではスギが使われた例などがある。イヌマキ製の馬鍔とは東海地方だけに特有なものであろう。

4. モミ属 *Abies* マツ科 写真 4a-4c. (No7514)

スギ材に良く似た年輪の明瞭な針葉樹材で、早材、晩材とも幅広く、早材から晩材への移行は緩やかである。仮道管にらせん肥厚ではなく、樹脂細胞は全くないか、年輪界にごくまれにある。放射組織は柔細胞のみからなり、その垂直、水平壁は厚く、多数の単壁孔があるモミ型壁孔となる。特に垂直壁は單孔子状となる。分野壁孔は小型のスギ型で2-4個ある。これらの形質からモミ属の材と同定した。

モミ属には暖温帯に広く分布するモミのほか、太平洋側地域では冷温帯に多いウラジロモミ、亜高山帯に多いシラベ等があり、その材構造での区別は困難である。

モミは東北地方中部以南の本州、四国、九州の暖温帯から冷温帯下部にかけて普通に生える針葉樹で、幹径1.5m、樹高30mになる。材は木理通直で割裂性がよく、加工は容易だが、肌目が粗く、軽軟で、狂いやすい等の欠点がある。保存性も低い。各種建築材、箱ものなどの器具材、小細工もの、楕柄、卒塔婆などの用途がある。当遺跡出土材は楕掛けと穴あきの板、それに加工材片2点である。

5. カラマツ *Larix kaempferi* (Lamb.) Sarg. マツ科 写真 5a-5c. (No7544)

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材は薄壁四角形の径の太い仮道管が、晩材部では厚壁で放射径が小さく扁平な長方形の仮道管が密に整然と並び、早材から晩材への移行は極めて急激である。晩材部に垂直樹脂道が散在する。早材部仮道管の放射壁には有縁壁孔が2列に並ぶ。単列放射組織と水平樹脂道を持つ紡錘形放射組織がある。放射組織の上下の縁には放射仮道管がないし2層にあり、放射仮道管同士の有縁壁孔は大きめで、壁孔の断面はなめらかである。放射柔細胞の垂直、水平壁は厚く、多数の単壁孔があるモミ型壁孔である。分野壁孔は小型で開孔部がわずかに幅広いトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に2～4個ある。これらの形質からカラマツの材と同定した。

カラマツは本州中部の標高1300～2600mくらいの亜高山帯に分布する落葉針葉樹で、浅間、八ヶ岳、富士山、北アルプス、南アルプスなどに見られる。火山などの荒れた土地に生育し、幹径80cm、樹高25mくらいになる。材は木理通直で重硬、耐朽性はよいが肌目が粗く仕上りは良くない。建築材、器具材、土木用材、バルブ材などに用いられる。亜高山帯に生育することから遺跡からの出土例は極めてまれで、しかも近世など、後世で商業経済が発達してからのものである。当遺跡出土材は加工材片2点で馬鍔の近くから出ている。

6. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 写真 6a-6c. (No7546)

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材、晩材とも幅広く、早材から晩材への移行は緩やかである。年輪内に垂直樹脂道が散在する。放射組織は単列と紡錘状の2形があり、後者は水平樹脂道を持つ。垂直・水平の両樹脂道の分泌細胞（エビセリウム細胞）は薄壁であるため、出土材ではほとんど壊れている。放射組織の上下の縁には1～3層の放射仮道管があり、放射仮道管の内壁は顕著に肥厚し、その先端は鋭い歯牙状となる。分野壁孔は大型の窓状で通常1分野に1個ある。これらの形質からアカマツの材と同定した。

アカマツは本州、四国、九州の冷温帯から暖温帯にかけてもっとも普通に生える針葉樹で、特に亜熱地や二次林に多い。幹径1m、樹高30mになり、材は木理通直で重硬、樹脂分が多く加工が難しいが水湿に良く耐え、保存性がよい。材は建築材、各種器具材、土木用材、製鉄用の炭材、薄く剥いで経木や繩にするなど、広い用途がある。当遺跡出土材は加工材片1点である。

7. トウヒ属 *Picea* マツ科 写真 7a-7c. (No7567)

年輪が比較的明瞭な針葉樹材で、カラマツ同様、晩材部にしばしば1ないし数個集まった小さめの垂直樹脂道を持つ。早材部仮道管は細く断面多角形で、放射壁の有縁壁孔は通常1列である。早材部から晩材部への移行は緩やかで晩材部は狭い。放射組織は水平樹脂道を持つ紡錘状と単列状とがあり、柔細胞放射仮道管、エビセリウム細胞からなる。柔細胞の垂直・水平壁は厚く、多数の單壁孔があるモミ型壁孔である。放射仮道管の内壁に時として鋸歯状の突起があり、有縁壁孔は小さく、断面で有縁部が角張ることが多い。分野壁孔は小さいトウヒ型で2～4個ある。以上の形質からトウヒ属の材と同定した。

トウヒ属にはいくつかの種があるが、ヒメバラモミは仮道管内壁に明瞭ならせん肥厚を持つことにより他のすべての種と区別されるので、当遺跡出土材はヒメバラモミを除くトウヒ属である。いずれも亜高山帯から冷温帯に分布し、本州ではエゾマツの変種のトウヒが広く分布し、他にハリモミ、イラモミ、ヤツガタケトウヒなどがある。トウヒは東北南部および中部地方の山岳地帯に分布し、直径60cm、樹高20m以上になる。材は軽軟で肌目美しく、弾力があって割裂性はよい。建築材、各種器具材、土木用材、バルブなど多用に用いられる。他の樹種もトウヒに似るが資源量が少なく木材はあまり利用されない。本遺跡出土材は加工材片2点である。

8. ツガ属 *Tsuga* マツ科 写真 8a-8c. (No7582)

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。垂直・水平の樹脂道を欠き、放射組織は放射仮道管と柔細胞からなる。樹脂細胞はほとんどないが、希に年輪界に散在することがある。柔細胞の垂直・水平壁はモミ同様、厚く肥厚し、多数の單壁孔があるモミ型壁孔である。これらの形質からツガ属の材と同定した。

ツガ属には関東以西の本州、四国、九州の暖温帯上部から冷温帯下部にかけて広く分布するツガと、本州中部の亜高山帯に分布するコメツガがあるが、互いに似ていて材構造での区別は困難である。

ツガは幹径80cm、樹高30mくらいになる高木で、材は木理通直で、重硬で、保存性は中位である。建築材、箱ものなどの各種器具材等に用いる。当遺跡出土材は加工材片が6点である。

9. スギ *Cryptomeria japonica* (Linn.f.) D.Don スギ科 写真 9a-9c. (No7580)

年輪が明瞭な針葉樹材で、年輪幅は通常広く、広い早材部と比較的広い晩材部からなり、早材から晩材への移行は遅るやかからかなり急なものまで変異がある。樹脂細胞は晩材部に多く、やや接線方向に連なって散在する。樹脂細胞中には黒褐色の物質が充填しており、細胞の水平壁は平滑で薄いか、やや

厚く、多少数珠状に肥厚する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、垂直、水平壁は平滑、分野壁孔は大型の梢円形で開孔部は厚いレンズ状となり長軸がほぼ水平方向で、スギ型、1分野に1～2個ある。以上の形質からスギの材と同定した。

スギは本州北部から九州屋久島までの冷温帯から暖温帯に広く分布する針葉樹で、日本海側と東海地方に特に多い。幹径2m、樹高35mを超える大木となり、材は木理通直で割裂性がよく、軽軟で強靭、加工性がよく仕上げは中位であるが大材が多量に得られるので、大型から個人住宅まで建築物のありとあらゆるところ、ありとあらゆる器具材、その他、国産材ではもっとも広い用途がある。静岡県地方の弥生時代から古代にかけての遺跡から最も大量に出土する木材である。当遺跡出土材は原木？、曲物、綱台の木製品が11点、加工材片などが8点である。

10. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 写真 10a-10c. (No7570)

年輪がやや狭いかあるいはかなり狭い針葉樹材で、晩材部は幅狭く早材から晩材への移行は急である。樹脂細胞は晩材部付近に散在する。樹脂細胞はスギ同様黒褐色部質で充填されるが、水平壁は通常厚く肥厚し、結節状となる。放射組織は柔細胞からなり、垂直、水平壁は平滑で、分野壁孔は中くらいの円形で開孔部は幅の狭いレンズ状で長軸が斜めに位置し、トウヒ型～ヒノキ型で1分野あたり通常2個ある。以上の形質からヒノキの材と同定した。

ヒノキは関東地方以西の冷温帯から暖温帯上部に分布する針葉樹で、幹径1m、樹高35m以上になる。材は木理通直で割裂性が大変よく、軽軟で、加工性が大変良い。材は緻密、強靭で、耐朽性に特に優れ、光沢美しく、芳香がある。日本産の針葉樹ではコウヤマキに次いで優秀な木材で、大型建築物から個人住宅までのあらゆる建築材、様々な器具材、仏像、彫刻物、曲物など実に広い用途がある。当遺跡出土材は原木が1点、それに加工材片が8点である。

11. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 写真 11a-11c. (No7568)

中～小型の梢円形の道管が均一に年輪内に分布する散孔材で、年輪界付近では道管はやや細くなる。道管は単独あるいは2～4個放射方向に複合した梢円形で、密に分布する。道管の穿孔は單一、道管相互の壁孔はやや大きめの小孔紋で交互状に密に分布する。道管内壁にはらせん肥厚は無い。放射組織は単列異性で、道管-放射組織間壁孔は大振りの多角形ないし梢円形で密に集まり、蜂の巣状を呈する。以上の形質からヤナギ属の材と同定した。

ヤナギ属は広く全国の山野や水湿地に普通に生える落葉高木～低木で、特に湿地に多い。多数の種があり、材構造で区別するのは困難である。材は一般に軽軟で脆く、箱物やマッチの軸、薪炭材などの用途がある。また、低木性のコリヤナギなどは枝条が柔軟で、柳行李などの編物に用いられる。本遺跡出土材は自然木が6点であり、遺跡が扇状地末端付近の低湿地にあることと付合する。

12. ハンノキ属ヤシャブシ節 *Alnus sect. Alnobetula* カバノキ科 写真 12a-12c. (No7566)

薄壁で多角形～梢円形の小道管が均一に分布する散孔材で、年輪は不明瞭である。道管は多くは放射方向に2～多数が複合し、まれに単独である。道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状、側壁の壁孔は微少な小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。本部柔組織は散在する。放射組織は単列同性である。以上の形質からブナ科ハンノキ属のヤシャブシ節の材と同定した。

東海地方ではヤシャブシ節の樹木は、ヤシャブシが広く分布し、標高の高い冷温帯には変種のミヤマヤシャブシがある。また伊豆半島にはオオバヤシャブシが、高山帯にはミヤマハンノキがある。本遺跡出土材は自然木が1点である。

13. ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus sect. Gymnothrysus* カバノキ科 写真 13a-13c. (No7589)

ヤシャブシ節同様、薄壁で多角形の小道管が均一に分布する散孔材で、道管は2~多数が放射方向につながるか単独である。しかし、道管、纖維細胞の壁は薄く、纖維細胞の直径は大きい。道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状、側壁の壁孔はやや大振りの小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は散在する。放射組織は単列同性と集合放射組織がある。以上の形質からブナ科ハンノキ属のハンノキ節の根の材と同定した。

東海地方ではハンノキ節の樹木は、低湿地に多いハンノキと山地、丘陵地の斜面や沢沿いに多いヤマハンノキなどがある。当遺跡出土材は古代あるいはそれ以後と考えられる自然木1点で、溝の肩に生えていたと看做される根株であることと同定結果が一致する。

14. カバノキ属 *Betula* カバノキ科 写真 14a-14c. (No7575)

中~小型で梢円形の道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、均一に、しかも密度低く散在する散孔材で、道管の穿孔は10~20数本の横棒からなる階段状で、道管内にはしばしば淡褐色の物質が詰まっている。道管相互の壁孔はごく小さい孔紋で交互状に極めて密に配列する。放射組織は同性で2~3細胞幅、道管との壁孔はごく小さく密である。これらの形質からカバノキ属の材と同定した。

カバノキ属には亜高山帯のダケカンバから冷温帯のウダイカンバ、シラカンバなど多数の種があり、材構造はたいがいによく似ていて種の識別は難しい。材質はウダイカンバのように堅硬で木理緻密で優秀な木材からシラカンバのようにさほど材質の良くないものまであるが、建築材、家具、各種器具、柄物、合板など広い用途がある。本遺跡出土材は棒状の加工材と自然木1点ずつである。

15. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Carpinus* カバノキ科 写真 15a-15c. (No7550)

薄壁で丸みを帯びた小道管が主に放射方向に2~数個複合したものが放射方向にルーズに集まって散在する散孔材で、集合度の低い集合放射組織と1-3細胞幅の同性に近い異性放射組織がある。道管の穿孔は單一で、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は1細胞幅の接線状の帯に配列し、晚材部でよく目立つ。これらの形質から、イヌシデ属のうち、イヌシデ、アカシデなどのイヌシデ節の材と同定した。

イヌシデ、アカシデとも本州から九州までの冷温帯から暖温帯に普通に分布する落葉広葉樹で、アカシデの方が尾根筋に多く、イヌシデの方が低いところに多い。樹高15m、幹径40cmくらいになり、二次林の主要素である。いずれも材質は木理直直、やや堅硬で木理緻密であるが、加工性にやや難がある。農具や傘の柄、小細工もの、漆器木地、下駄などの各種器具材に用いられ、また薪炭材とされる。当遺跡出土材は自然木が1点である。

16. ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 写真 16a-16c. (No7531)

年輪の始めに丸い中~大型の道管が間隔を置いて1~3層並び、晚材部では薄壁多角形の小道管が集まって火炎状となる環孔材で、道管の穿孔は單一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、木部柔組織は散在状及び単接線状で晚材部で目立つ。放射組織は単列同性と集合放射組織の2型がある。道管-放射組織間壁孔は梢円形でしばしば縦に櫛状に並ぶ。これらの形質からシイ属のツブラジイの材と同定した。

ツブラジイ（別名コジイ）は関東地方南部以西の暖地に分布する常緑高木で、照葉樹林の主要な要素である。スダジイが海岸部に多いのに対し、これは内陸部に多い。材はやや堅硬で緻密、割裂容易であるが肌目は粗く保存性は低い。建築材、器具材（柄物など）、下駄、薪炭材などに用いる。木遺跡出土材は杭と自然木1点ずつである。

17. ブナ属 *Fagus* ブナ科 写真 17a - 17c. (No7539)

薄壁で多角形の道管が密に均一に分布する散孔材で、道管の大きさは年輪界に向かって順次小さくなる。道管は数個が様々な方向に複合し、極めて密にあり、年輪界付近で小さくなる。穿孔は單一及び横棒が10本くらいと数の少ない階段状で、道管内壁にらせん肥厚はない。木部柔組織は散在状及び短接線状で晚材部でやや目立つ。放射組織は1~数細胞幅の狭くて背の低いものから10細胞以上となり肉眼で見えるほど幅広く背の高い大きなものまであり、ほぼ同性である。これらの形質からブナ属の材と同定した。

ブナ属には北海道南部から九州鹿児島県までの冷温帯に広く分布するブナと本州、四国、九州の冷温帶下部から暖温帶上部の太平洋側に分布するイヌブナがあるが、材構造は互いによく似ていて識別は困難である。いずれも幹直径1m、樹高30mに達する落葉大高木である。ブナの材は堅硬緻密で割裂が容易で保存性は低いが加工性はよく、建築材、家具材、器具材など広く用いられるが、漆器穂の本地などの特用がある。イヌブナの材はブナに比べると脆く、材質は劣るが、ブナ同様の用途がある。本遺跡出土材は柱と思われるもの1点である。

18. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真 18a - 18c. (No7500)

中~大型の丸い道管が単独で、放射方向に向隔を置いて配列する放射孔材で、道管の穿孔は單一である。木部柔組織は1-3細胞幅の独立帶状で接線方向に波打ちながら配列し、しばしば結晶を持つ。放射組織には単列同性と大きな複合状の2種があり、道管-放射組織間壁孔は縦長の梢円形で橢状に配列する。これらの形質からブナ科コナラ属のうち、常緑性のカシ類、すなわちアカガシ亜属の材と同定した。

カシ類は照葉樹林を特徴づける種群で、東北地方南部以南に沢山の種類があり、多くは高木となる。静岡県付近ではアカガシ、シラカシ、アラカシ、イチイガシなどがある。いずれも材は堅硬で木理通直、緻密で割裂性よく、弾性があって強靭であり、建築材を始め各種農具類、柄物、木刀など多くの用途がある。弥生時代~古墳時代にかけての木製の龜鈎類、石斧や鉄斧の柄類などに最もよく用いられていた樹種で、本遺跡出土材は鋸先と鍼の柄1点ずつと自然木3点である。

19. ムクノキ *Aphananthe aspera* Thunb. ニレ科 写真 19a - 19c. (No7525)

中~小型の厚壁でやや放射方向にのびた梢円形の道管が、年輪内に単独あるいは2~3個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。道管の壁はやや厚く、穿孔は單一、道管相互の壁孔は微細な小孔紋で密に交互状にあり、道管内部にはチローシスが見られる。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では数細胞幅の帯状で著しい。放射組織は異性で1~3細胞幅くらい、1~4細胞離の単列部には小堅の結晶がしばしば見られる。これらの形質からムクノキの材と同定した。

ムクノキは関東地方以西の暖温帯に生える落葉高木で直径60cm、高さ20mくらいになる。集落周辺および二次林に特に多い。材はやや堅く緻密で強靭であり、割裂は困難である。それでさまざまな農工具の柄、天秤棒等の用途がある。本遺跡出土材は柄と思われるもの1点である。

20. ケヤキ *Zelkova serrata* Thunb. ニレ科 写真 20a - 20c. (No7529)

年輪始めに大道管が通常1個並ぶ環孔材で、晩材部では小道管が多数接線方向に集まって波状の紋をなす。道管の穿孔は單一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状に密に配列し、小道管内壁には顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状だが目立たない。放射組織は背があまり高くない紡錘形で、鞘細胞ではなく、上下端に大きな結晶細胞を持つ。これらの形質からケヤキの材と同定した。

ケヤキは青森県から鹿児島県までの暖温帯から冷温帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、幹径1.5m、

樹高30mを超える大木となる。材は堅硬強韌で弾力があり、材質に優れ、大材が得られることもあって、大きな建造物の建築材に、木目が美しく加工が容易であることもあって、各種家具内装や大型彫刻物、臼、杵、太鼓、剣物容器、漆器木地など、実に多様に用いられる。当遺跡出土材は棒状の加工木1点である。

21. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 写真 21a-21c. (No7588)

薄壁で多角形の微細な道管が均一に分布する散孔材で、年輪は全く目立たない。道管はほぼ単独で、穿孔は横棒の多い階段状である。木部柔組織は散在状で目立たない。放射組織はほぼ單列の異性で背は高く、平伏細胞及び背の大変高い直立細胞からなる。これらの形質からツバキ科のサカキの材と同定した。

サカキは照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、関東南部以西に分布し、西南日本では普遍的な樹種であり、幹径30cm、樹高8mくらいになる。材は堅く粘りがあり、割裂困難で、萌芽枝がまっすぐよく伸びることから柄物に重用される。当遺跡出土材は自然木3点である。

22. ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科 写真 22a-22c. (No7552)

サカキに良く似た散孔材で、単独あるいは2個が様々な方向に複合した微細な道管が均一に分布し、サカキより道管はやや太く、穿孔は横棒の多い階段状である。放射組織は單列異部の長い紡錘形の1-3細胞幅の異性である。これらの形質からヒサカキと同定した。

ヒサカキも照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、幹径20cm、樹高7mくらいになり、サカキやヤブツバキよりも涼しいところまで分布していて、人々の生活にもっとも身近な木の一つである。材は堅く緻密で粘りがあり、加工は容易でなく、小綱工ものなどの用途しかない。当遺跡出土材は有頭状の木製品1点と自然木2点である。

23. シナノキ属 *Tilia* シナノキ科 写真 23a-23c. (No7545)

小型で薄壁の丸い道管が単独あるいは主に放射方向に数個かたまってまばらに配列する散孔材だが、出土材ではつぶれており、道管配列はよく観察できない。道管の穿孔は單一で、道管相互の隙孔は小孔紋で交互状に密にあり、道管内壁に纖細な螺旋肥厚をもつ。木部柔組織は短接線状で均一に分布する。放射組織は1~4細胞幅程度の同性である。これらの形質からシナノキ属の材と同定した。

シナノキ属には北海道から九州までの冷温帯に分布するシナノキ、北海道から本州中部までの冷温帯に分布するオオバボダイジュ、西日本の暖温帯に分布するヘラノキなどがある。いずれも落葉高木で、シナノキの材は軽軟だが緻密で加工性がよいが耐朽性、保存性に劣る。箱ものなどの器具類、下駄、マチ袖木などの用途がある。当遺跡出土材は自然木1点である。

24. タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クスノキ科 写真 24a-24c. (No7540)

丸く壁がやや厚い小道管が単独あるいは放射方向に2、3個複合してまばらに均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は横棒の少ない階段状あるいは單一である。柔組織は周囲状でときどきやや大型になって精油を含んだ油細胞が混じる。放射組織は2-3細胞幅の幅の狭い異性で、上下端にある直立細胞にわずかに膨らんだ油細胞が混じる。以上の形質からクスノキ科のタブノキの材と同定した。

タブノキは照葉樹林を特徴づける常緑高木で、幹径1m、樹高15mくらいになり、海岸部に多い。しばしば枝を大きく横に張り、こんもりとした樹形となり、なんじゃもんじゃの木と呼ばれたりする。材はやや堅く、きめは粗く、美しい木目が出るが、割裂困難で加工性はあまり良くない。精油成分を持つので芳香があり、保存性はよいがクスノキほどではない。建築材、家具、器具材、細工物などに使われる。

当遺跡出土材は自然木1点である。

25. 単子葉類 Monocotyledon 写真 25a-25c. (No7541)

中空の髓を持つおそらく断面円形の茎である。表皮は厚壁の細胞からなり長細胞と短細胞がある。表皮の下には1ないし2細胞層の厚壁の下表皮がありその内側には柔組織からなる皮層がある。維管束は皮層中層に同心円状に配列しているが個々の維管束の構造はつぶれているため観察できない。維管束のゾーンより内側には厚壁組織の層があり、さらに内側には薄壁の髓組織があるがつぶれているためよく観察できない。

これらの形質から、まず単子葉であることは見える。おそらくは中空の茎と思われるが、イネ科、すなわち竹苞類やヨシ、ススキなどの茎とは異なり、単子葉類の何であるかは観察で得られた情報が十分でなく分からず。

表1 藤守遺跡出土木材の樹種

番号	樹種	種別	種別	出土位置	出土位置	標高(cm)	表8・9 (回)番号
7549	アカガシ亜属	自然木	SR 6	H2区 馬頭周辺	SR33B西端下層	46	
7556	アカガシ亜属	自然木	SR 6	馬頭周辺	SR33B	53	
7578	アカガシ亜属	自然木	SR 6	H3区西 建築材周辺	SR33B下層	75	
7521	アカガシ亜属	木製品	麻糸 又 繩?	SR 6		85	2
7526	アカガシ亜属	木製品	繩	SR 6		105	3
7546	アカマツ	加工材	加工木片	SR 6	H2区 馬頭周辺	SR33B西端下層	43
7559	イヌガヤ	加工材	加工木片	SR 6	H3区西	SR33B最上層	56
7564	イヌガヤ	加工材	加工木片	SR 6	H3区中央西	SR33B最下層	61
7536	イヌガヤ	加工材	棒状	骨頭,21と類似	SR 6	95	34
7522	イヌガヤ	木製品	弓	SR 6		103	16
7550	イヌガヤ節	自然木	SR 6	H2区 馬頭周辺	SR33B西端下層	47	
7584	イヌマキ属	加工材	加工木片	SR 6	H2区	SR33B最下層	81
7548	イヌマキ属	加工材	加工木片	SR 6	H2区 馬頭周辺	SR33B西端下層	45
7577	イヌマキ属	加工材	加工木片	SR 6	H3区西 建築材周辺	SR33B下層	74
7562	イヌマキ属	加工材	加工木片	SR 6	H3区中央西	SR33B最下層	59
7533	イヌマキ属	加工材	棒状 極化,先端七角形	SR 6		122	30
7502, 7503	イヌマキ属	木製品	馬糞 把手孔無し	SR 6		99	1
7502, 7503	イヌマキ属	木製品	馬糞 短ぬ	SR 6		99	1a
7502, 7503	イヌマキ属	木製品	馬糞 短ぬ,結合不明	SR 6		99	1b
7520	イヌマキ属	木製品	杭 丸杖	SR 6		117	32
7527	イヌマキ属	木製品	斧器?	SR 6		111	9
7509	カバノキ属	加工材	棒状	SR 6		118	19
7575	カバノキ属	自然木	SR 6	H3区西 建築材周辺	SR33B下層	52	
7586	カヤ	加工材	加工木片	SR 6	H2区	SR33B最上層	83
7542	カラマツ属	加工材	加工木片	SR 6	H2区 馬頭周辺	SR33B西端下層	39
7544	カラマツ属	加工材	加工木片	SR 6	H2区 馬頭周辺	SR33B西端下層	41
7529	ケヤキ	加工材	棒状	34と類似	SR 6	92	21
7588	サカキ	自然木	SR 6	H2区	SR33B最下層	85	
7561	サカキ	自然木	SR 6	H2区 馬頭周辺	SR33B西端下層	48	
7574	サカキ	自然木	SR 6	H3区西 建築材周辺	SR33B下層	71	
7545	シナノキ属	自然木	SR 6	H2区 馬頭周辺	SR33B西端下層	42	
7518	スギ	加工材	板状	SR 6		86	23
7523	スギ	加工材	板状	SR 6		114	24
7515	スギ	加工材	板状	SR 6		92	25
7510	スギ	加工材	板状	SR 6		-	29
7580	スギ	加工材	加工木片	SR 6	H2区	SR33B最下層	77
7571	スギ	加工材	加工木片	SR 6	H3区西 建築材周辺	SR33B下層	68
7508	スギ	加工材	棒状	SR 6		86	18
7516	スギ	加工材	棒状	SR 6		95	20
7530	スギ	木製品	籠台 上下に抉り	SR 6		84	4
7538	スギ	木製品	建築材 円孔あり	SR 6		87	35
7506	スギ	木製品	舟串?	SR 6		96	10
7507	スギ	木製品	舟串?	SR 6		105	11
7505	スギ	木製品	舟串?	SR 6		97	13
7501	スギ	木製品	板状	SR 6		-	14
7537	スギ	木製品	檜	SR 6		125	5
7524	スギ	木製品	曲物蓋底 指形,カバ絆	SR 6		105	6
7519	スギ	木製品	曲物蓋底 方八絆	SR 6		105	7

7512	スギ	木製品	齒物蓋底	段結合	SR 6	94	8
7513	スギ	木製品	抉入棒状	SR 6	92	27	
7540	タブノキ	自然木	-	SR 6	H3区南西	SR33B	37
7582	ツガ属	加工材	加工木片	SR 6	H2区	SR33B最下層	79
7543	ツガ属	加工材	加工木片	SR 6	H2区 馬歛周辺	SR33B西端下層	40
7554	ツガ属	加工材	加工木片	SR 6	馬歛周辺	SR33B	51
7569	ツガ属	加工材	加工木片	SR 6	H3区西 建築材周辺	SR33B最下層	66
7572	ツガ属	加工材	加工木片	SR 6	H3区西 建築材周辺	SR33B下層	69
7565	ツガ属	加工材	加工木片	SR 6	H3区中央西	SR33B最下層	62
7555	ツブラジイ	自然木	-	SR 6	馬歛周辺	SR33B	52
7531	ツブラジイ	木製品	統	SR 6	-	107	31
7581	トウヒ属	加工材	加工木片	SR 6	H2区	SR33B最下層	78
7567	トウヒ属	加工材	加工木片	SR 6	H3区中央西	SR33B最上層	64
7589	ハシノキ属	自然木	根	SR 4	G2区	SR30市肩部	86
7585	ヒサカキ	自然木	-	SR 6	H2区	SR33B最下層	82
7552	ヒサカキ	自然木	-	SR 6	H2区 馬歛周辺	SR33B西端下層	49
7511	ヒサカキ	木製品	有頭狀	SR 6	-	105	17
7583	ヒメキ	加工材	加工木片	SR 6	H2区	SR33B最下層	80
7547	ヒメキ	加工材	加工木片	SR 6	H2区 馬歛周辺	SR33B西端下層	44
7558	ヒメキ	加工材	加工木片	SR 6	H3区西	SR33B最下層	55
7570	ヒメキ	加工材	加工木片	SR 6	H3区西 建築材周辺	SR33B下層	67
7573	ヒメキ	加工材	加工木片	SR 6	H3区西 短梁材周辺	SR33B下層	70
7561	ヒメキ	加工材	加工木片	SR 6	H3区中央西	SR33B最下層	58
7563	ヒメキ	加工材	加工木片	SR 6	H3区中央西	SR33B最下層	60
7579	ヒメキ	加工材	加工木片	SR 6	H2区	SR33B最下層	76
7533	ヒメキ	木製品	塗?	SR 6	-	最下層	12
7539	ブナ属	木製品	柱?	SR 6	-	88	36
7525	ムクノキ	木製品	筋?	浅い抉りあり	SR 6	109	33
7517	モミ属	加工材	板状	SR 6	-	106	22
7534	モミ属	加工材	兩片	SR 6	-	最下層	28
7535	モミ属	木製品	カセカケ	上字擬合せ	SR 6	70	15
7514	モミ属	木製品	有孔板状	2孔	SR 6	93	26
7566	ヤシャブシ節	自然木	-	SR 6	H3区中央西	SR33B最下層	63
7560	ヤナギ属	自然木	-	SR 6	H3区西	SR33B最下層	57
7587	ヤナギ属	自然木	-	SR 6	H2区	SR33B最下層	84
7553	ヤナギ属	自然木	-	SR 6	H2区 馬歛周辺	SR33B西端下層	50
7557	ヤナギ属	自然木	-	SR 6	馬歛周辺	SR33B	54
7576	ヤナギ属	自然木	-	SR 6	H3区西 建築材周辺	SR33B下層	73
7568	ヤナギ属	自然木	-	SR 6	H3区中央西	SR33B最下層	65
7541	単子葉草本茎	自然木	-	SR 6	H2区 馬歛の下	SR33B	38

出土材の樹種組成が示すもの

時期の異なるハンノキ節の根株材を除いた、古墳時代の7世紀後半と時期がほぼ限定される87点の木材遺体等には23の樹種と単子葉草本の茎1種が認められた。それらの組成を木製品、加工材、自然木に大別して組成を見ると表2となる。木製品26点からはスギ（11点）、イヌマキ属（5点）、モミ属およびアカガシ亞属（2点）、それにヒノキ、イヌガヤ、ヒサカキ、ツブラジイ、ブナ属、ムクノキ（以上各1点）の10樹種である。スギが加工材の大部分を占めるのは弥生時代から古代にかけての東海地方の遺跡の特徴であり、本遺跡もその傾向にある。イヌマキ材の丸木弓や棒状木製品への利用もやはり東海地方の特徴であるが、組み合わせ式の馬歛がこの樹種であったことは馬歛の用材としては大変珍しいことである。他の樹種もブナ属の柱と思われるもの1点を除いてはこの時代のこの地域の用材としてはうなづけるものである。

単子葉草本を除いた自然木20点の組成はヤナギ属（6点）、アカガシ亞属およびサカキ（3点）、ヒサカキ（2点）、それにツブラジイ、イヌシデ節、シナノキ属、ヤシャブシ節、タブノキ（以上1点）である。遺跡が低湿地であることはヤナギ属が多いことよく付合する。照葉樹林の常緑樹であるアカガシ亞属、サカキ、ヒサカキ、タブノキの存在は遺跡が照葉樹林帯にあることと付合する。シナノキ属（1点）だけが遺跡の立地とかけ離れた存在である。

木材片や削りかすなどの加工材40点の組成は興味深い。スギ、ヒノキ（8点）が多く、イヌマキ属（5点）、イヌガヤ（3点）、アカマツ、カヤ、ケヤキ（1点）なども時代、地域との関連で見て妥当な

存在といえる。ところがカラマツ、トウヒ属（2点）、カバノキ属（1点）の存在はにわかには納得がゆくものではない。カラマツ、トウヒ属は亜高山帯に生育する樹木であり、カバノキ属は冷温帯から亜高山帯にある。ブナ属、シナノキ属も冷温帯であり、遺跡近傍に生育していたとは全く考えられない。このような亜高山～冷温帯生の樹種が共伴していなければこの時代、この地域から出土するモミ属の材（本製品と加工材それぞれ2点）、ツガ属の材（加工材片6点）はそれぞれモミ、ツガであると推定することが出来るのが一般的である。しかし、他に無視できない数の亜高山～冷温帯生の樹種の材があることからこれらも亜高山～冷温帯生の樹種であるシラベやウラジロモミ、コメツガなどである可能性も考えなければならない。

中世以降になると本地師集団の全国的な活動や商業経済の発達により木材の流通が広い地域で行われるようになり、亜高山生、冷温帯生の樹種で出来た製品が都市部や平野部でも出土するようになる。ブナの橿がその典型といえよう。古墳時代では埼玉県行田市の占墳時代の小敷田遺跡の例がある。ここは荒川が関東平野に出たところにあり、花粉分析や大型植物遺体、出土木材の調査から、大量のモミ材が出土するにも関わらず、そこにはモミ林は存在していないことが示され、他地域からの持ち込みが想定された（鈴木1991）。そして、これに付合するように関東平野の丘陵部にあるお伊勢山遺跡ではこの時期に大量のモミが伐りだされて、中世の頃にはモミがほとんどなくなってしまったことが示された（能城・鈴木1990）。この他、群馬県新保遺跡の弥生～古墳時代の墓葬のカシ材がカシ類が生育する南の地域からの持ち込みではないかとの指摘もある（鈴木・能城1986）。しかし、当遺跡で出土した亜高山～冷温帯生の樹種の木材が生育地で製品あるいは半製品とされて当遺跡に持ち込まれたと考える正当性はどこにも見当らない。

東京都の松が丘遺跡では縄文時代の地層から大量の亜寒帯生の針葉樹の木材が出土し、これらは最終氷期の堆積層からの洗い出しによるものとの判断が為された（能城・鈴木1989）。ここに限らず関東平野の縄文時代の遺跡ではトウヒ属等の木材がわずかではあるが混じることはよくあり、それらも氷期の堆積物からの再堆積であると考えられている。それでは当遺跡のそれらは下位の層準から洗い出された再堆積であろうか。しかし、下位に木材化石を含んだ氷期の堆積物があるとの報告はないし、再堆積物であるならば人為による加工痕は認められないのが普通であることからこの考えも棄却されよう。

当遺跡は大井川の扇状地の末端にある。大井川の源流は南アルプスであり、ここで問題となっている樹種は全て生育している。源流坡から水流によって運ばれてきた可能性も考えることが出来る。洪水などによって平野部まで運ばれてきたものがそのまま堆積したものかどうかは分からぬ。あるいは流れ着いた木材を利用するため加工したものかも知れない。いずれにしても上流域から供給されたものが遺跡に入り込んだと考えるのが一番可能性があるといえる。しかし、その様な例はほとんど聞かない。堆

表2 藤守遺跡出土木材の樹種組成種別

樹種	木製品	加工材	自然木	総計
スギ	11	8		19
イスマキ属	5	5		10
モミ属	2	2		4
アカガシ属	2		3	5
ヒノキ	1	8		9
イヌガヤ	1	3		4
ヒサカキ	1		2	3
ツブライ	1		1	2
ブナ属	1			1
ムクノキ	1			1
ツガ属		6		6
カラマツ		2		2
トウヒ属		2		2
カバノキ属		1	1	2
アカマツ		1		1
カヤ		1		1
ケヤキ		1		1
ヤナギ属			6	6
サカキ			3	3
イヌシテ属			1	1
シナノキ属			1	1
ヤシャブン属			1	1
タブノキ			1	1
早子葉草本茎			1	1
総計	26	40	21	87

植物の花粉分析や大型植物遺体の分析を併せて行うことによりより明確になる可能性がある。

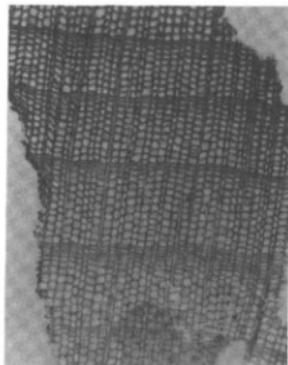
引用文献

能城修一・鈴木三男、木材化石群集、中野区松が丘遺跡調査会「松が丘遺跡発掘調査報告書」：207-217;1989.

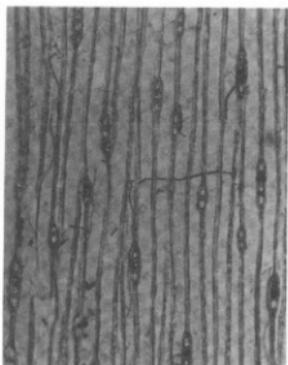
能城修一・鈴木三男、木材化石群集、早稲田大学所沢校地文化財調査室「お伊勢山遺跡の調査、第4部、弥生時代から平安時代」：39-50;1990.

鈴木三男、小敷山遺跡の植物的自然、埼玉県埋蔵文化財調査事業団「埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告第95集-小敷山遺跡」河川跡遺物編：348-350；1991.

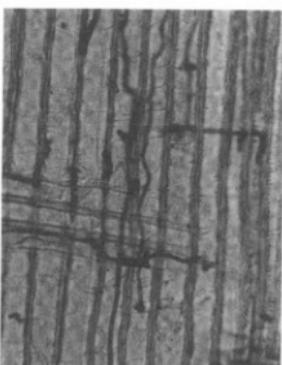
鈴木三男・能城修一、新保遺跡加工木の樹種、群馬県教育委員会「新保遺跡Ⅰ、弥生・古墳時代大溝編」：71-94;1986.



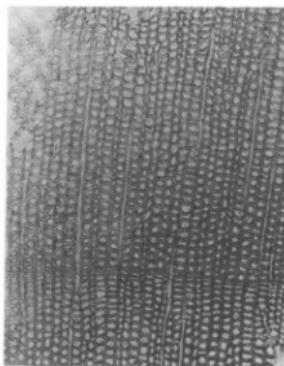
1 a. カヤ No.7586 C \times 50.



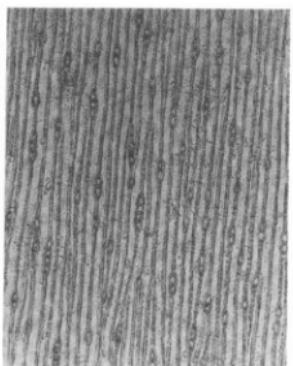
1 b. 同 T \times 100.



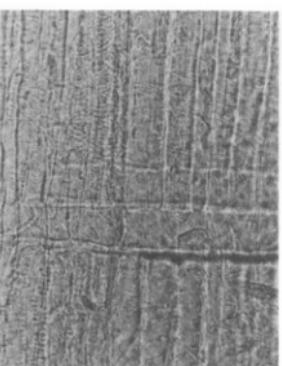
1 c. 同 R \times 200.



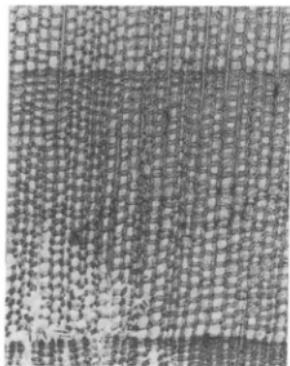
2 a. イヌガヤ No.7522 C \times 100.



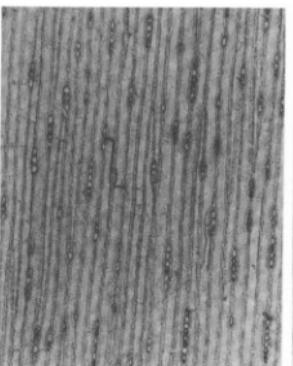
2 b. 同 T \times 100.



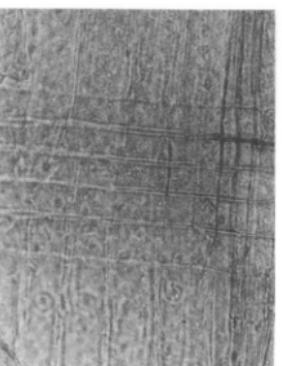
2 c. 同 R \times 400.



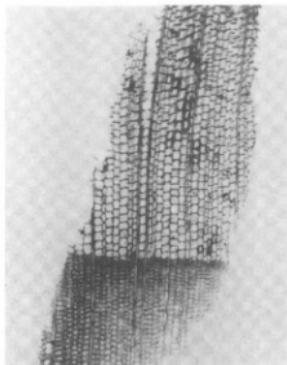
3 a. イヌマキ属 No.7532 C \times 100.



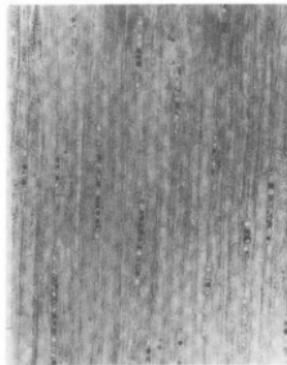
3 b. 同 T \times 100.



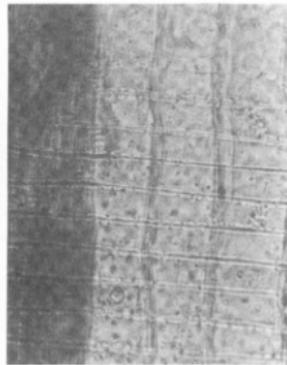
3 c. 同 R \times 400.



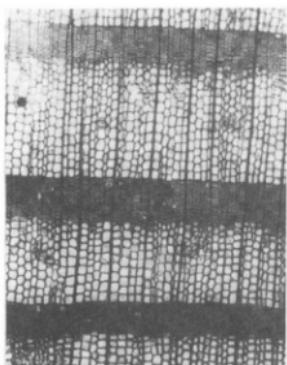
4 a. モミ属 No.7514 C X34.



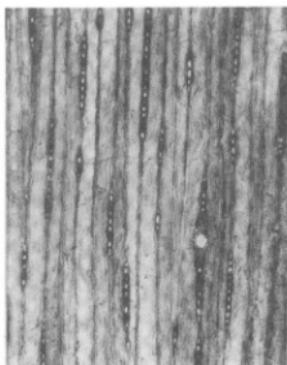
4 b. 同 T X85.



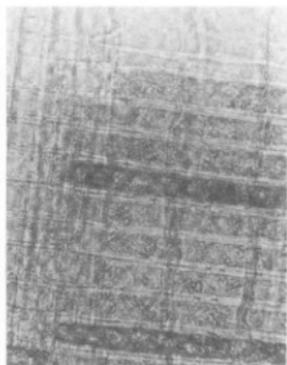
4 c. 同 R X340.



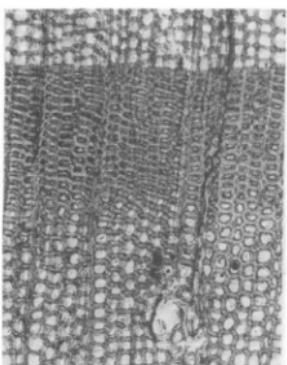
5 a. カラマツ属 No.7544 C X34.



5 b. 同 T X85.



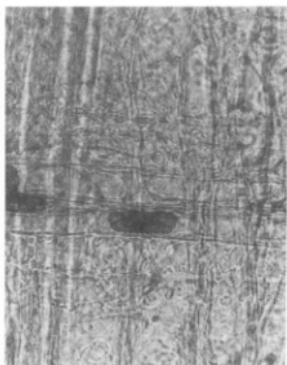
5 c. 同 R X340.



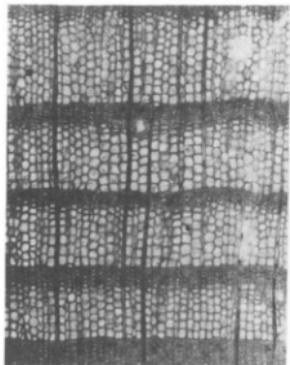
6 a. アカマツ No.7546 C X100.



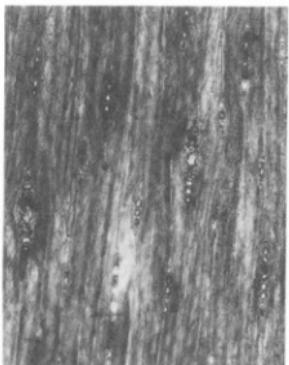
6 b. 同 T X100.



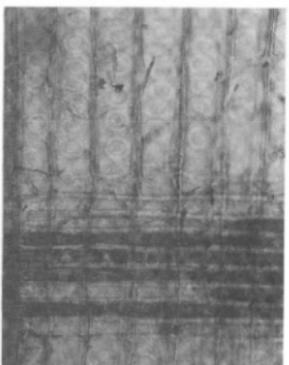
6 c. 同 R X400.



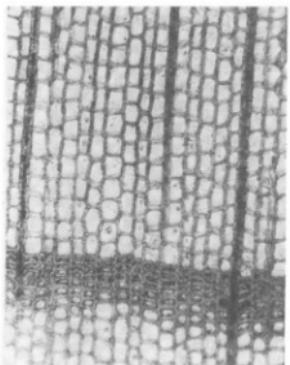
7 a. トウヒ属 No.7567 C X50.



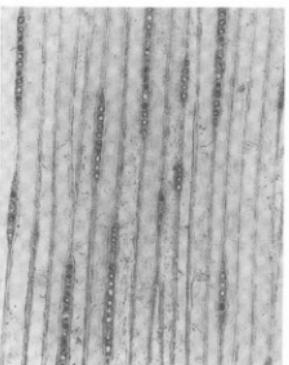
7 b. 同 T X100.



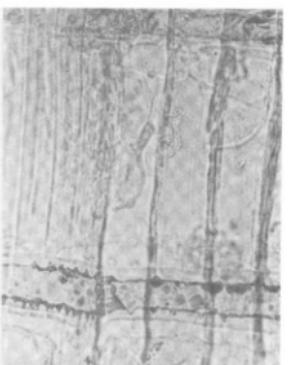
7 c. 同 R X200.



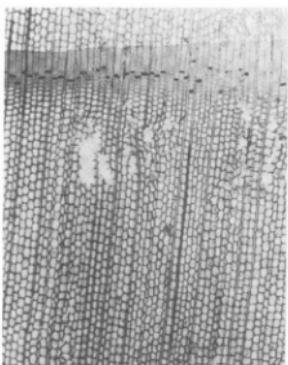
8 a. ツガ属 No.7582 C X100.



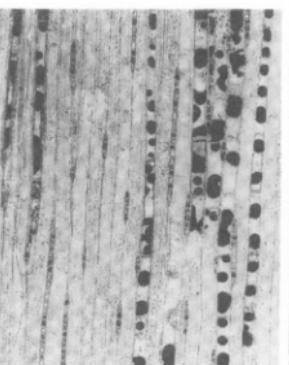
8 b. 同 T X100.



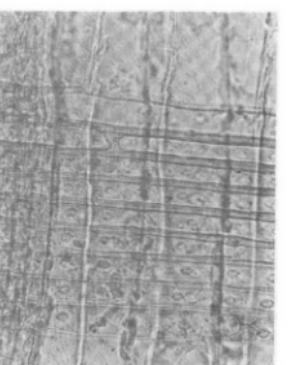
8 c. 同 R X400.



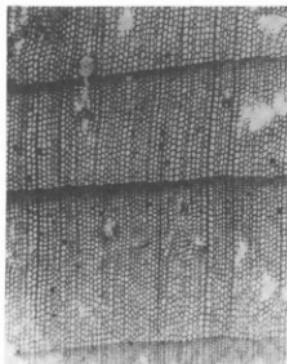
9 a. スギ No.7580 C X34.



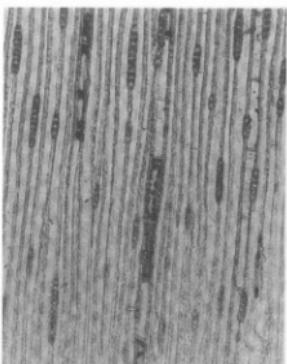
9 b. 同 T X85.



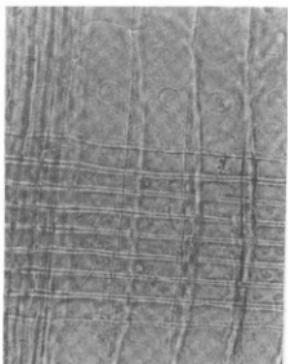
9 c. 同 R X340.



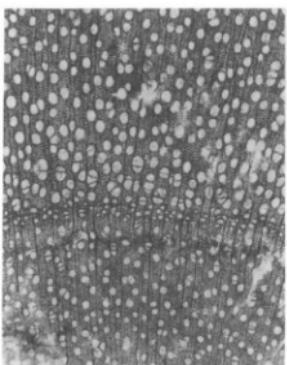
10 a. ヒノキ No.7570 C X34.



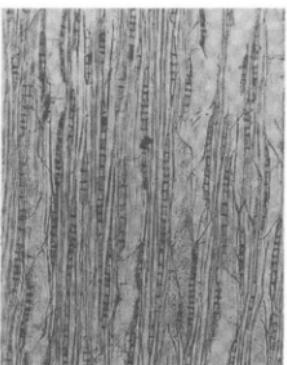
10 b. 同 T X85.



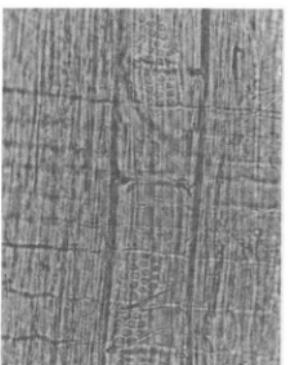
10 c. 同 R X340.



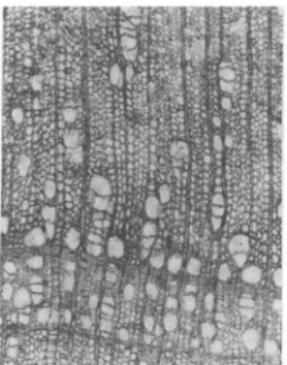
11 a. ヤナギ属 No.7568 C X34.



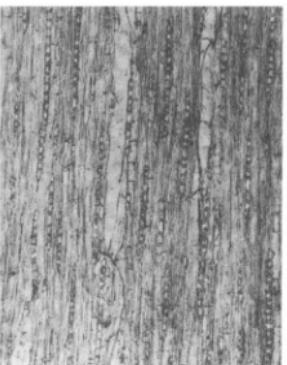
11 b. 同 T X100.



11 c. 同 R X400.



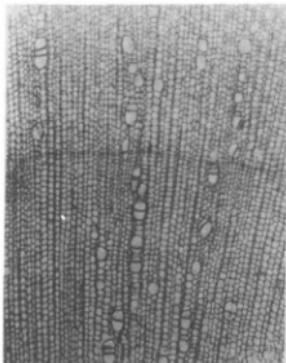
12 a. ヤシャブシ節 No.7566 C X85.



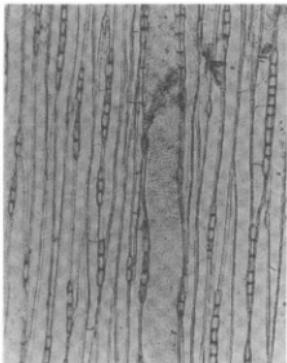
12 b. 同 T X100.



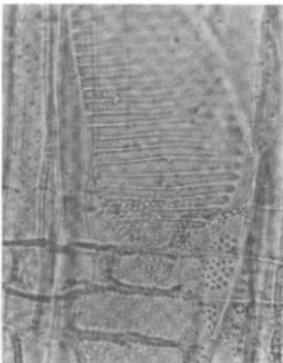
12 c. 同 R X400.



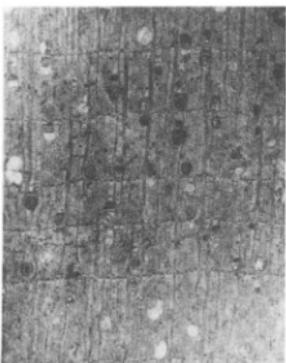
13 a. ハンノキ節 No.7589 C X34.



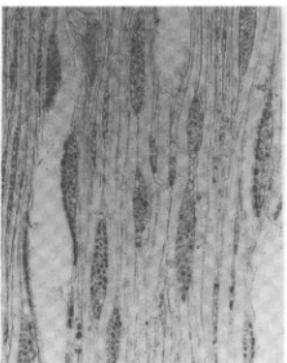
13 b. 同 T X100.



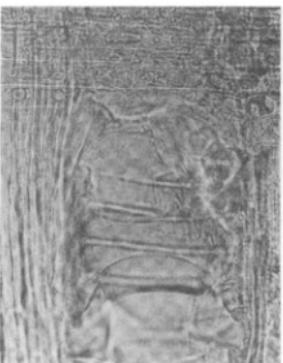
13 c. 同 R X400.



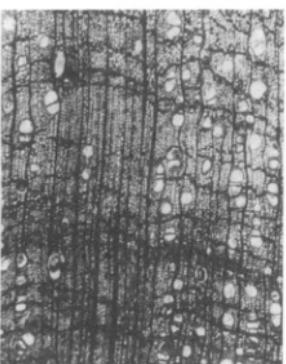
14 a. カバノキ属 No.7575 C X34.



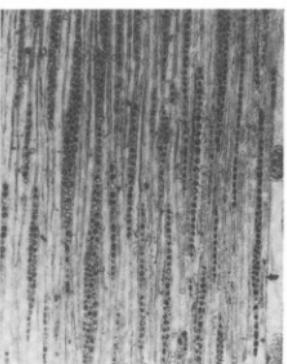
14 b. 同 T X100.



14 c. 同 R X400.



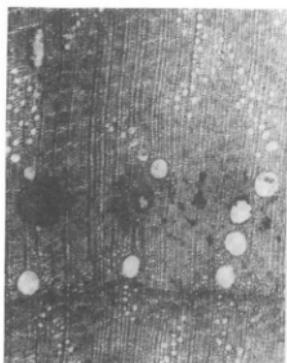
15 a. イヌシデ節 No.7580 C X40.



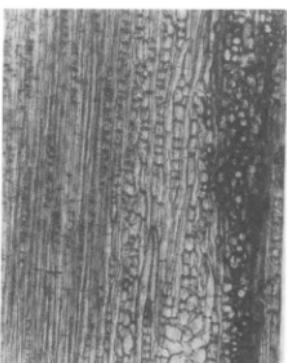
15 b. 同 T X100.



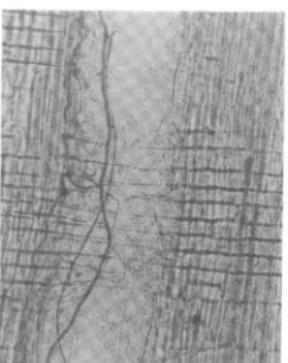
15 c. 同 R X400.



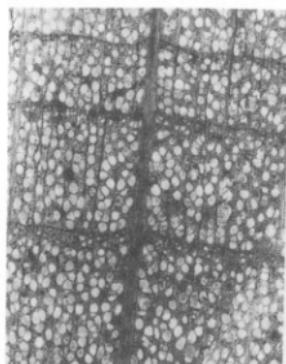
16 a. ツブラジイ No.7531 C X34.



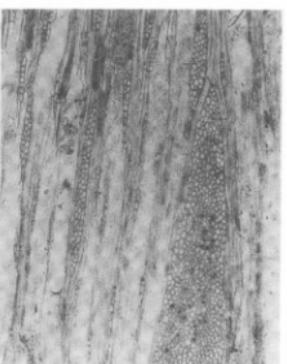
16 b. 同 T X85.



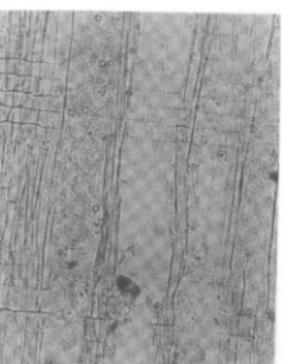
16 c. 同 R X170.



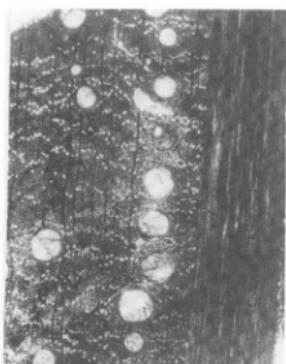
17 a. ブナ属 No.7539 C X34.



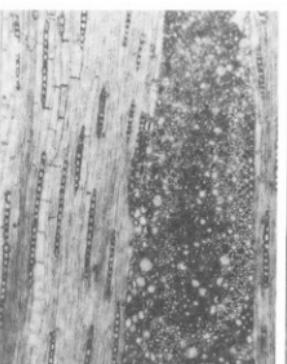
17 b. 同 T X85.



17 c. 同 R X170.



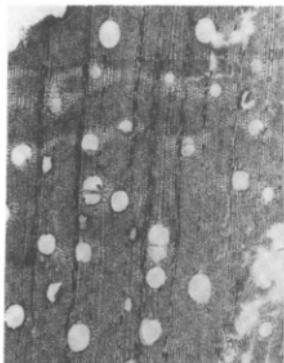
18 a. アカガシ亜属 No.7500 C X34.



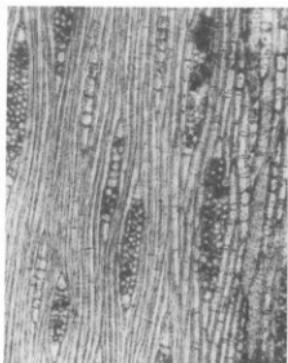
18 b. 同 T X85.



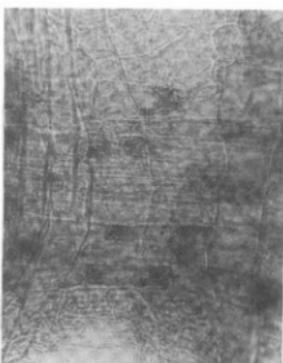
18 c. 同 R X170.



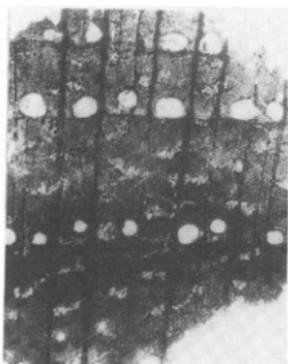
19 a. ムクノキ No.7525 C X34.



19 b. 同 T X100.



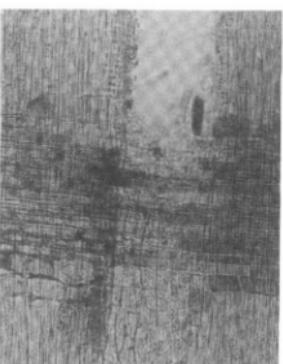
19 c. 同 R X400.



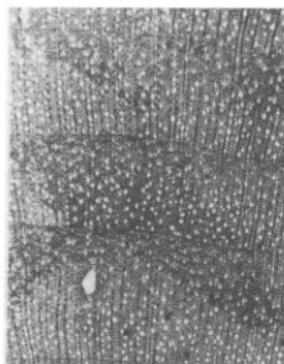
20 a. ケヤキ No.7529 C X34.



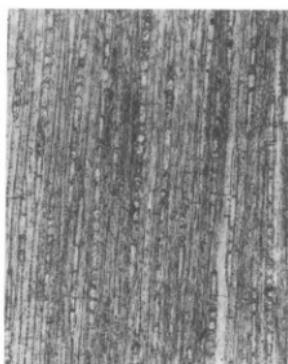
20 b. 同 T X85.



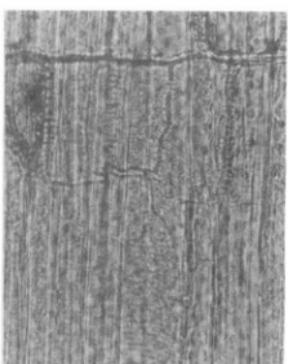
20 c. 同 R X170.



21 a. サカキ No.7588 C X34.



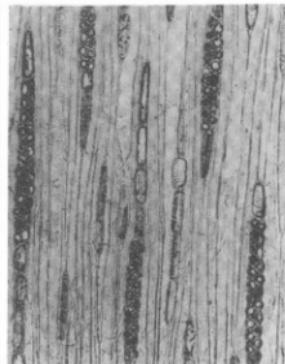
21 b. 同 T X85.



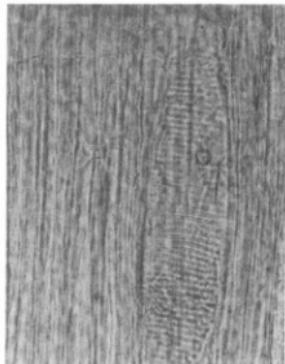
21 c. 同 R X170.



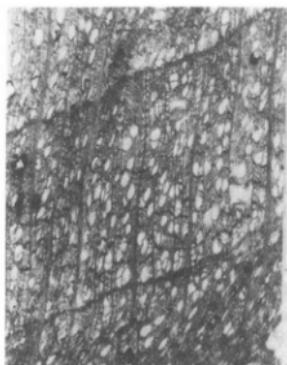
22 a. ヒサカキ No.7552 C X34.



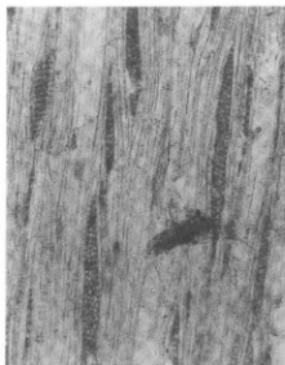
22 b. 同 T X100.



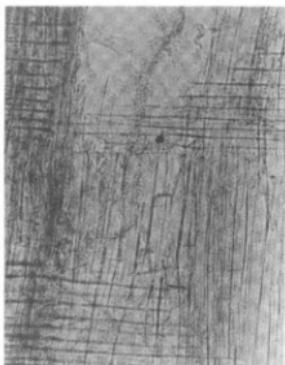
22 c. 同 R X400.



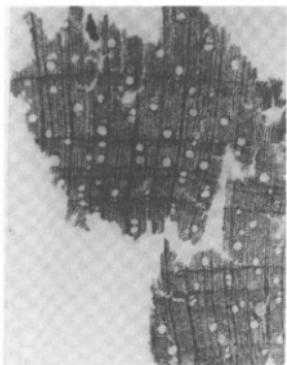
23 a. シナノキ属 No.7545 C X34.



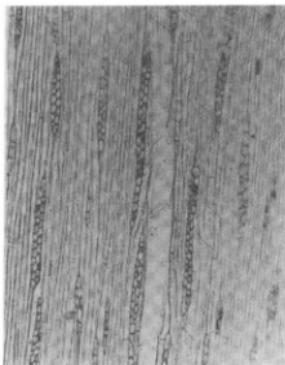
23 b. 同 T X85.



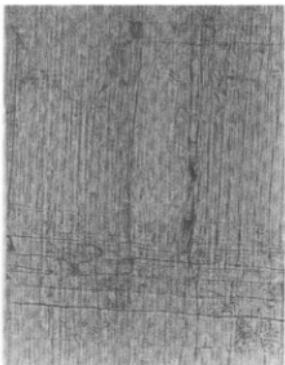
23 c. 同 R X170.



24 a. タブノキ No.7540 C X34.



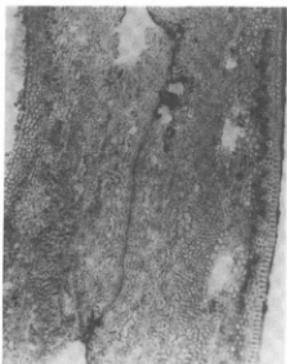
24 b. 同 T X85.



24 c. 同 R X170.



25 a. 単子葉類 No.7541 C X34.



25 b. 同 T X85.



25 c. 同 R X85.

付編4 藤守遺跡の自然的立地条件

加藤芳朗（静岡大学名誉教授）

本遺跡は大井川左岸の河口近くに位置する。一帯は大井川扇状地と海岸部の低地の境界部に当たる。図は日下（1974）の図を簡略化、拡大したものである。

1. 平野の地形区分

これを整理すると上流側から、つぎの3つに大分することができる。

- ① 扇状地面とその中を網目状に走る旧河道網からなる部分。ただし、扇状地面の末端は自然堤防微高地に移化する。
- ② 海岸に平行する砂州（砂堤列）
- ③ 上記2つの中间の低地。原著では、三角州とされるが、後述の発掘所見から、大井川の氾濫の影響が見られるので、扇状地の末端低地と仮称することとする。

2. 大井川左岸平野の地形的特質

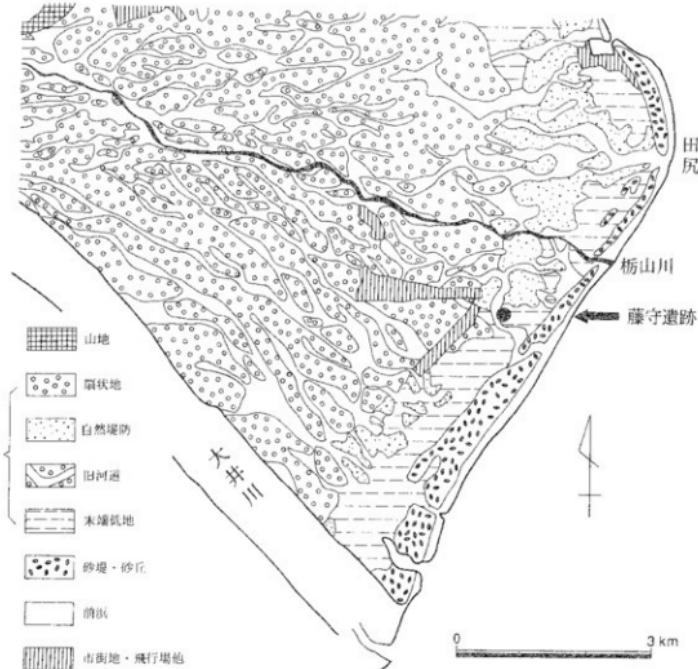
- (1) 旧河道パターン 図の左端、藤枝市忠兵衛あたりを頂点として、旧河道が放射状に走るのが、注目される。これは古大井川の主流が東進して焼津市田尻方面に注いだことを暗示する（次項参照）。しかし、扇状地面の先端と海岸との距離は、田尻の方が藤守遺跡のそれより大きい。主流がその後南に移動し、現流路方向へ扇状地が推進したためであろう。
- (2) 海岸部の地形 海岸線は現大井川河口部から、ほぼ直線上に、北東方向に伸びる。しかし、田尻付近で海にむかって円弧状にふくらむ。これは扇状地河川の河口部海岸線に特有な形で、その付近の土砂堆積が盛んなためと解される。現安部川、富士川の河口部もその例である。

3. 大井川河口の変遷

上記のことから、大井川の主流は、かつて、藤枝市忠兵衛あたりから東進して焼津市田尻方面にむかった時期があったことがうかがわれるが、その時代は不詳である。

4. 平成12年度発掘現場での地学的所見

- (1) 土層の起伏 検出面は第1面（12C後半、鎌倉）、第2面（7C後半～8C）である。両面とも、発掘区全面にわたり、ほとんど起伏（高低差）がない。延長100mの発掘区内における海拔高が第1面で1.7～1.8m、第2面で1.6～1.7mである。また、より上位の土層もほとんど水平である（発掘担当者による）。これらの事実から、第2面以降の上層が安定した静水域で堆積したことを暗示する。
- (2) 土層の粒度 発掘された土層のはほとんどが細粒質（粘土、シルトなど）で、安定水域で堆積したという前項の解釈と整合する。砂、礫層が出現するのは旧河道や発掘基盤だけである。
- (3) 旧河道 上記2項に対する例外は旧河道（SR）である。勢いのある河川流が静穏水域に流入して、それまでの上層を削り、そこに粗粒物（砂、礫）を堆積させたことによる。発掘資料によって時代の特定されたものが、第1面SR4（平安期末）と第2面のSR6（古墳期末）である。これらの規模と充填粗粒物は、SR4は深さ0.5m、幅3mの規模、充填粗粒物は細砂、粗砂、SR6は深さ0.9m幅8mとやや大規模で充填粗粒物は砂・礫である。



付図 大井川東岸平野の地形分類図（日下, 1974より作成, 一部簡略化）

両河道は西北西から東南東に向い、図の本遺跡付近の旧河道パターンとはほぼ一致する。また、SR 6 の疊層の縦のインプリケイションの方向（筆者計測）から推定される水流もほぼ同方向である。以上のことから、本遺跡のSR 4、SR 6はともに大井川からの旧河道パターンの一部を示すものと思われる。

(4) まとめ 両河道は短期間に形成された後、ゆるやかに埋没し、地形が平坦化したとの発掘担当者の指摘（藤守遺跡発掘調査概要中間報告、2001年1月）に対し筆者も同感である。SR 4は平安期末形成、それ以降平坦化、SR 6は古墳期末形成、平安期に平坦化という変遷を2度くりかえした。その後にある侵食基準面の低下、上昇。またそれと対をなす大井川の進出と停滞。これらを明らかにするのが今後の筆者の課題であろう。

引用文献

日下雅義（1974）「歴史時代における大井川扇状地」『平野の地形環境』P.160-186 古今書院

カラーワ真図版



1. 調査区周辺の景観（南より、奥は富士山）



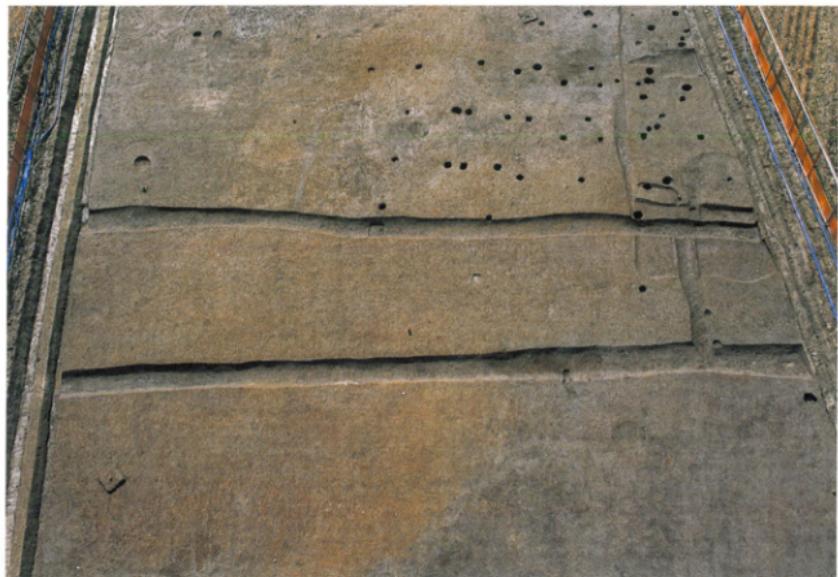
2. 第1調査面全景（東より）



1. 第1調査面北端部（南西より）



2. SD 2出土土器



1. SD15・16（北東より）



2. SD15出土土器

カラー図版4



1. 第2調査面と周辺の景観（南西より、奥が駿河湾）



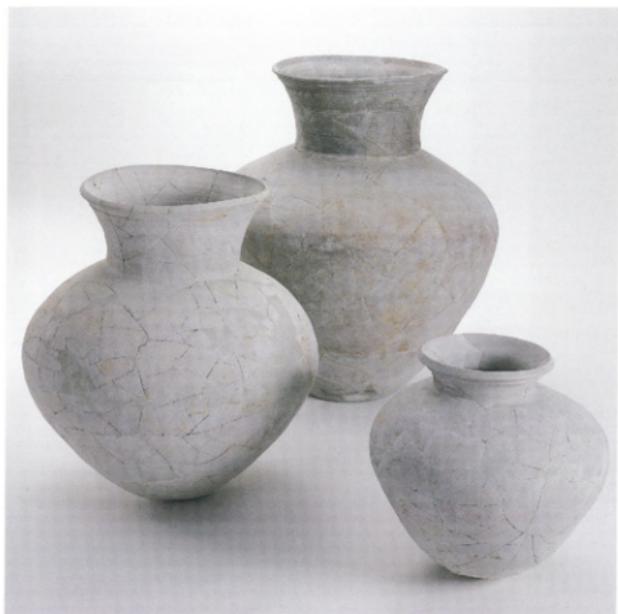
2. 第2調査面全景（北東より）



1. 竪穴住居跡群と旧河道（北より）



2. S F 7 遺物出土状況（北西より）



1. SF 7 出土須恵器壺



2. SF 7・SX 3 出土土器



S R 5・6 出土土器



1. S B 9出土土器



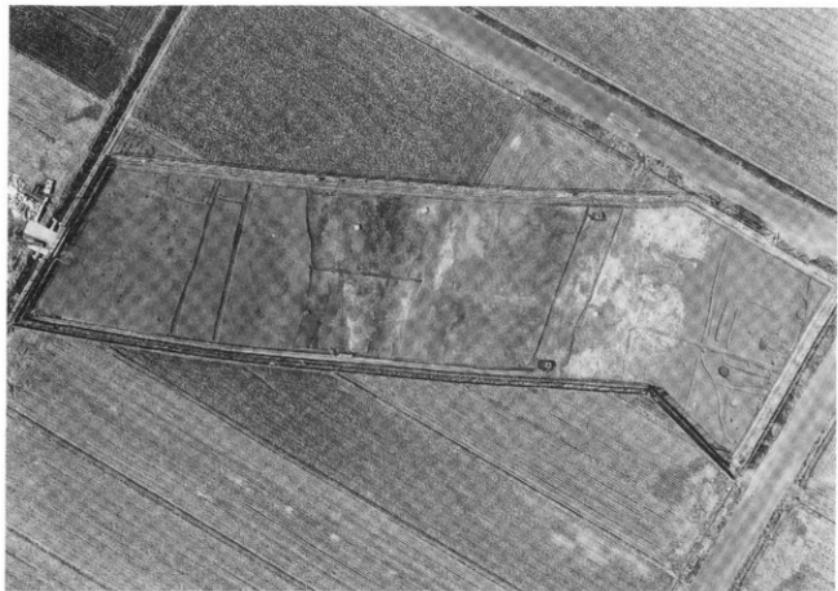
2. 調査区北壁 C ライン土層



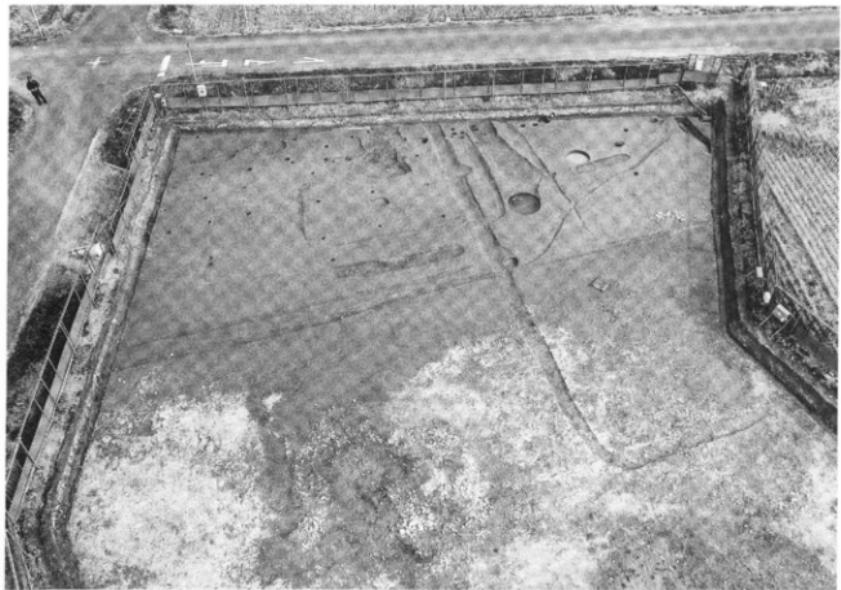
3. 調査区東壁 F ライン南土層



4. 調査区東壁 L ライン土層

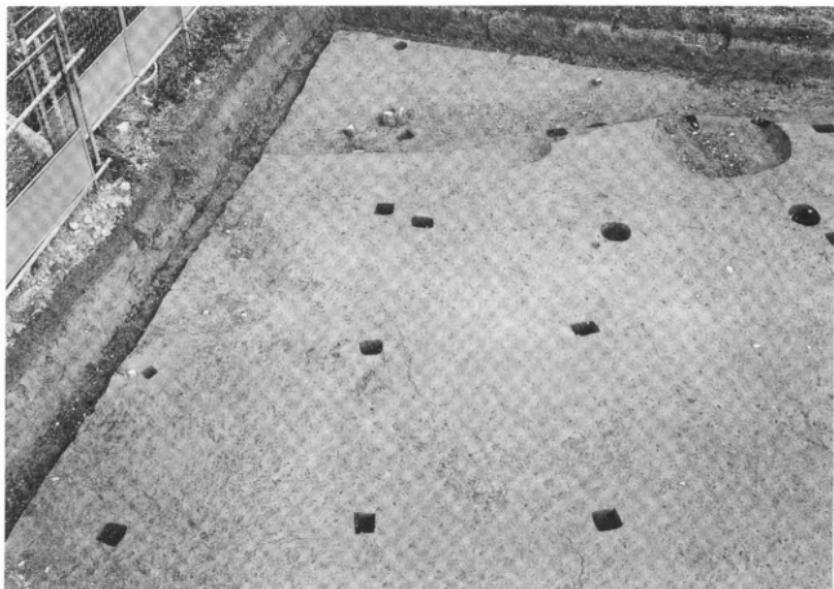


1. 第1調査面全景（垂直）

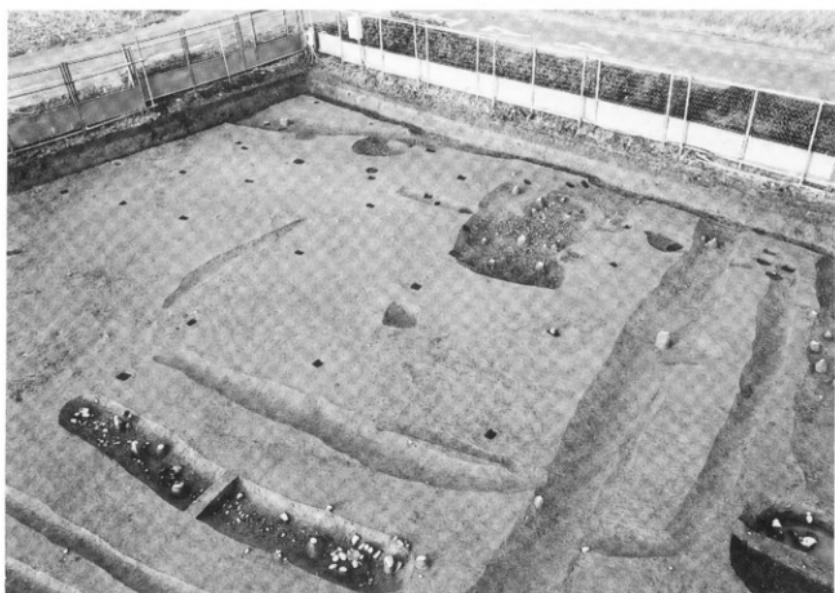


2. 第1調査面北端部（南西より）

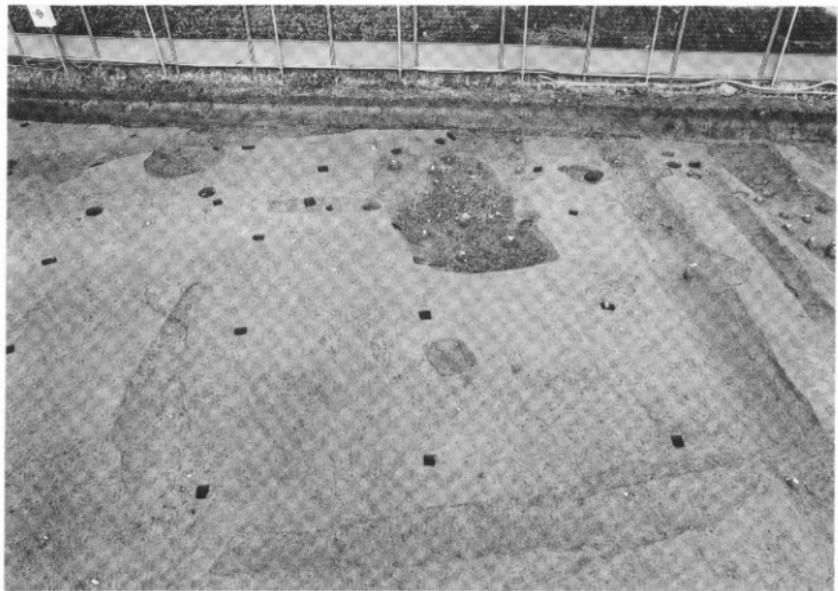
図版 2



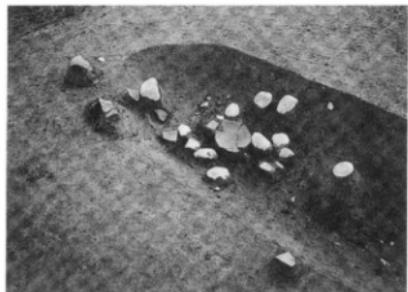
1. SH2・3 (南西より)



2. SH1, SD2~6 (南より)



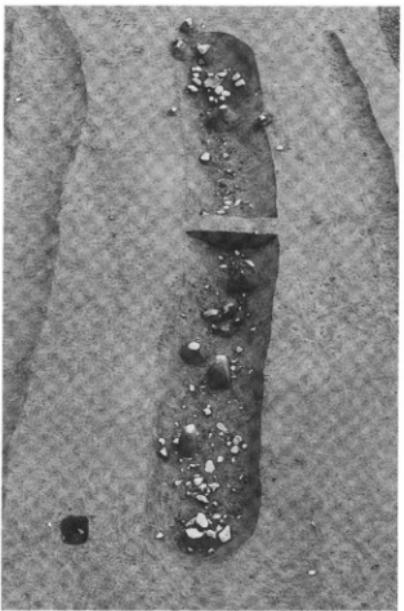
1. SH1 (南西より)



2. SD2 東側遺物出土状況 (北より)



3. SD2 中央遺物出土状況 (北より)



4. SD2 遺物出土状況 (北西より)

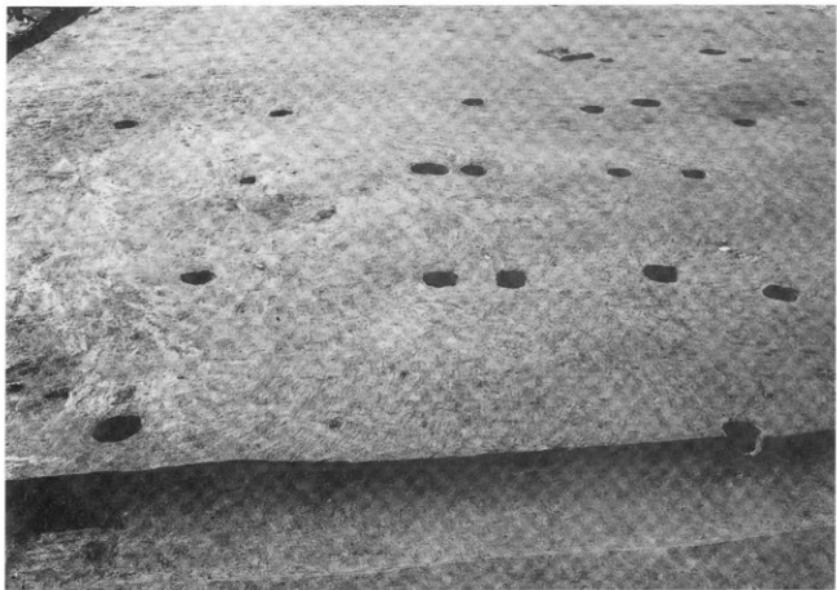
図版4



1. 第1調査面南半部（北東より）



2. S H 5~8 (南東より)

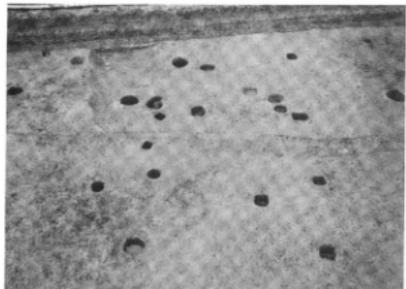


1. SH 5 (北東より)



2. SH 6・7 (北東より)

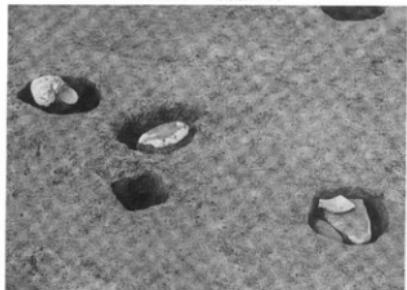
図版 6



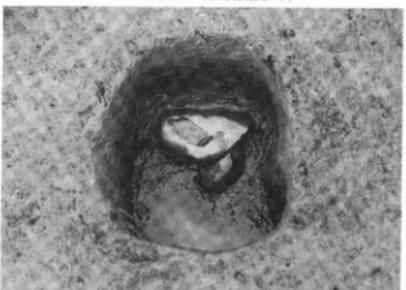
1. SH7 (南東より)



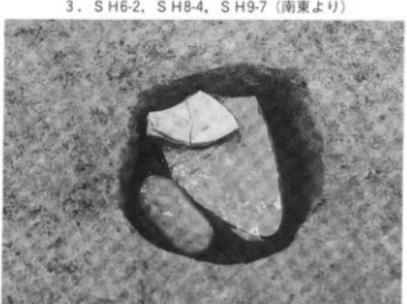
2. SH8~10 (北東より)



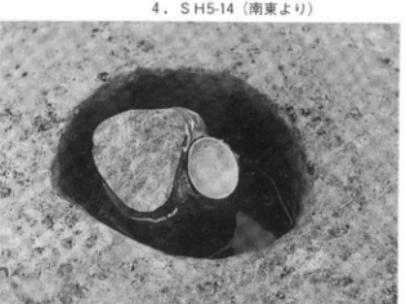
3. SH6-2, SH8-4, SH9-7 (南東より)



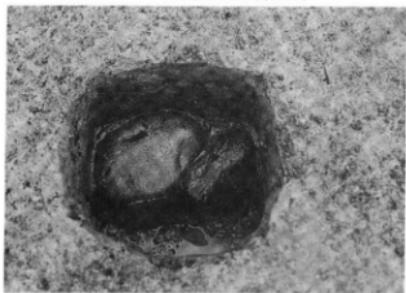
4. SH5-14 (南東より)



5. SH8-4 (東より)



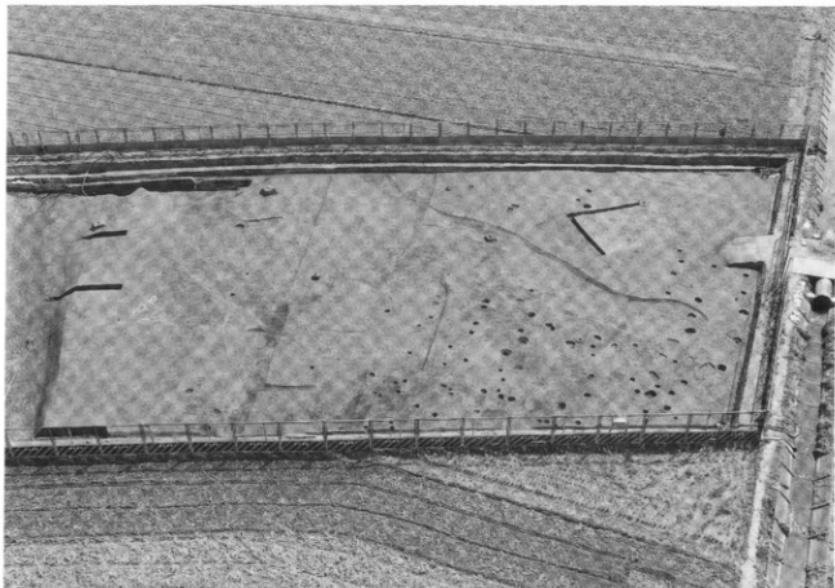
6. SH6-2 (東より)



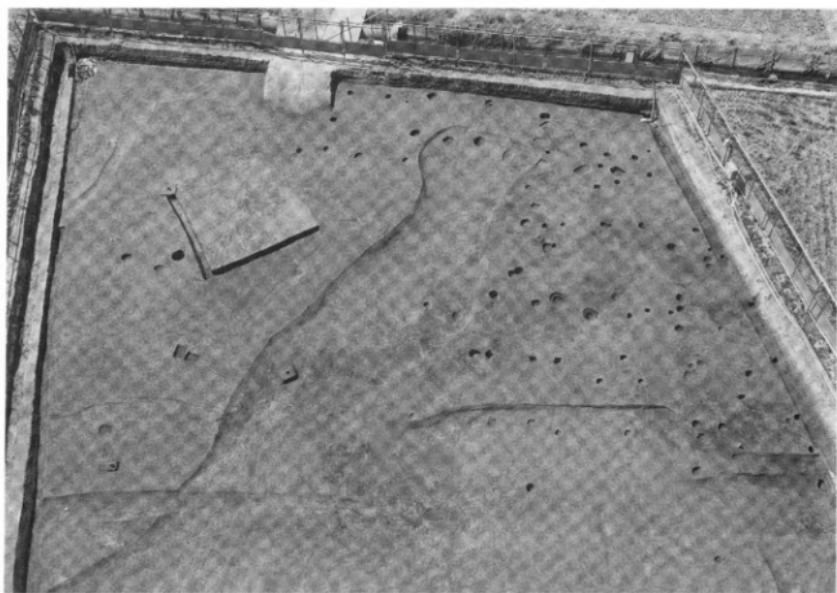
7. SH5-13 (南西より)



8. SH8-2 (東より)



1. 第2調査面南半部 (S R 7、北西より)

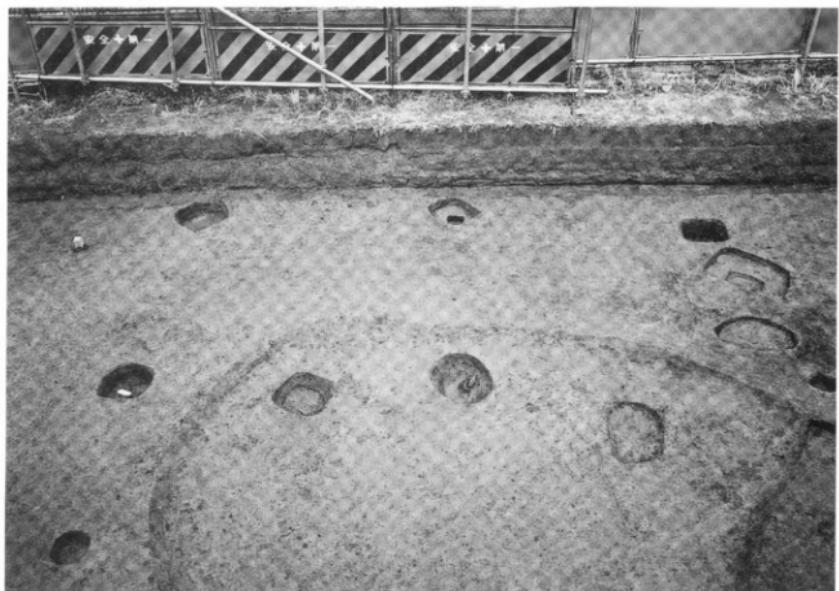


2. 第2調査面南端部 (北東より)

図版 8



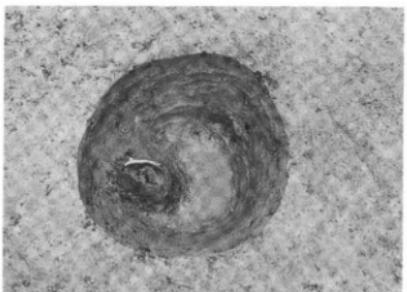
1. 第2調査面南西部小穴群（北東より）



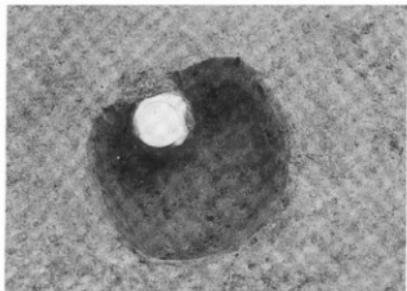
2. SH11（北東より）



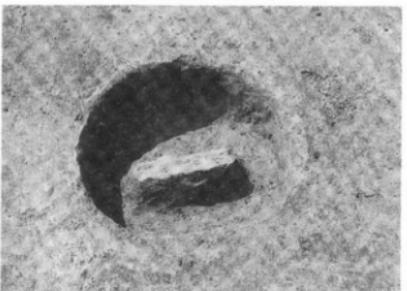
1. P 79~84周辺（北東より）



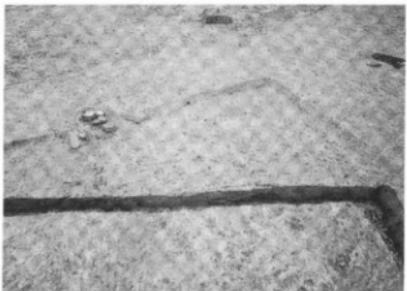
2. SH11-3（南より）



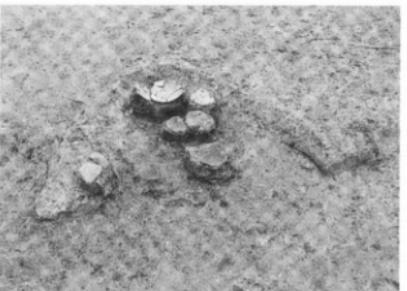
3. SH11-5（南西より）



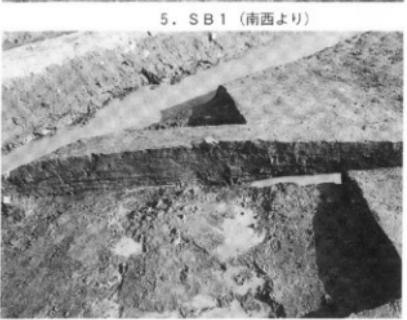
4. P 75（北東より）



5. SB 1（南西より）



6. SB 1竪跡（南より）

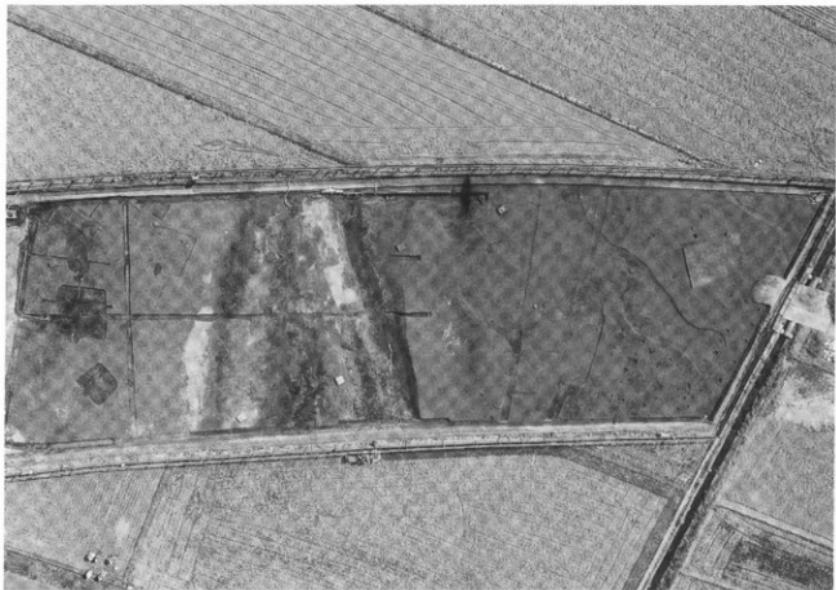


7. SB 2土層断面（北西より）

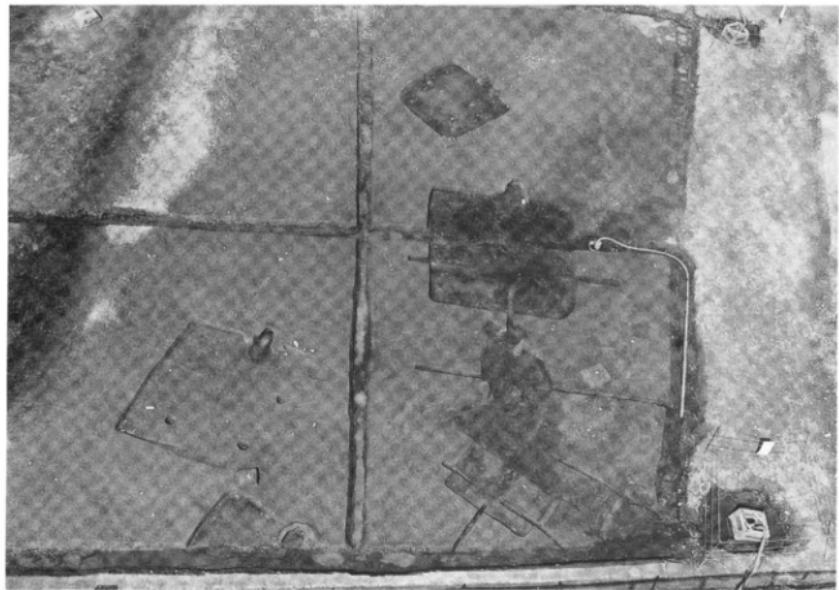


8. SB 2竪跡土層断面（南東より）

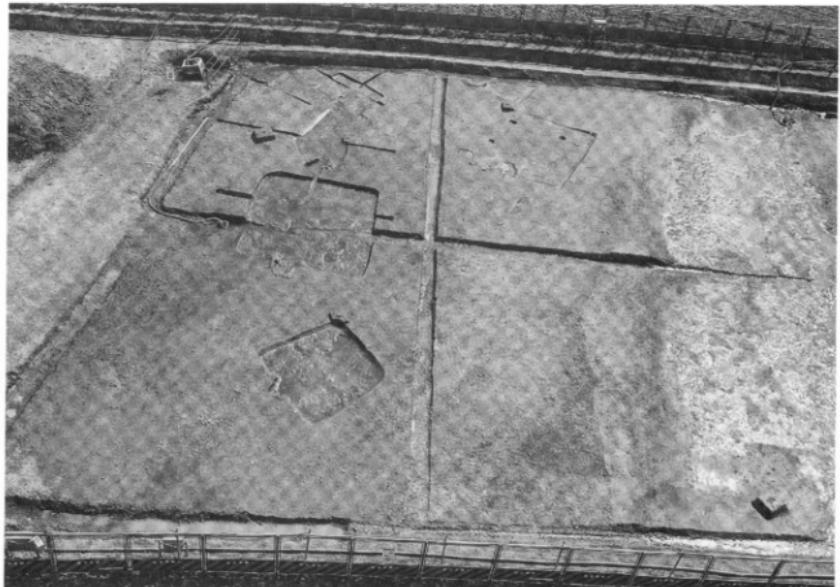
図版10



1. 第2調査面全景（垂直）



2. SB 2~9 (東より)



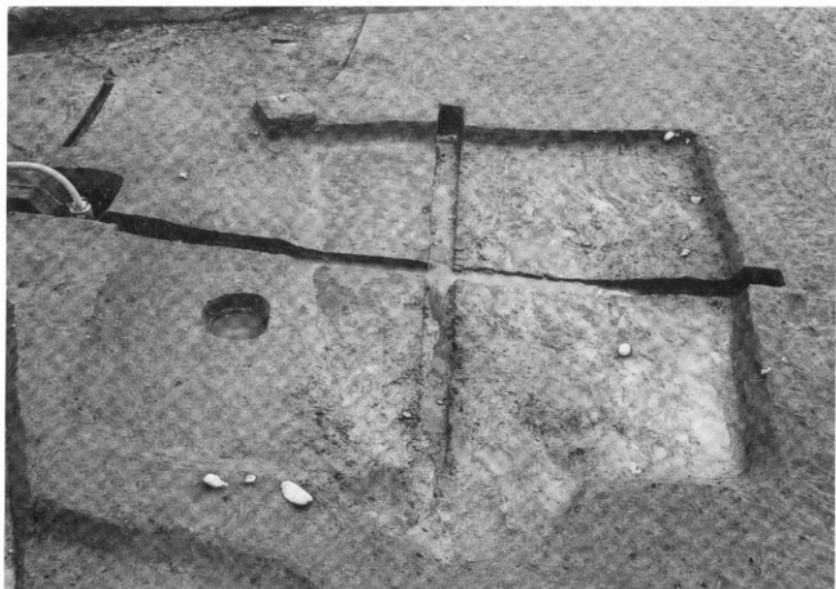
1. SB 2~9 (西より)



2. SB 2 (南東より)



1. SB 3 (北西より)



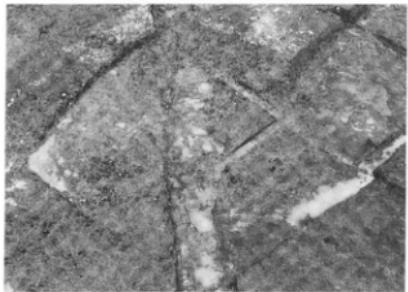
2. SB 3 掘り方 (北西より)



1. SB 2 痕跡（南東より）



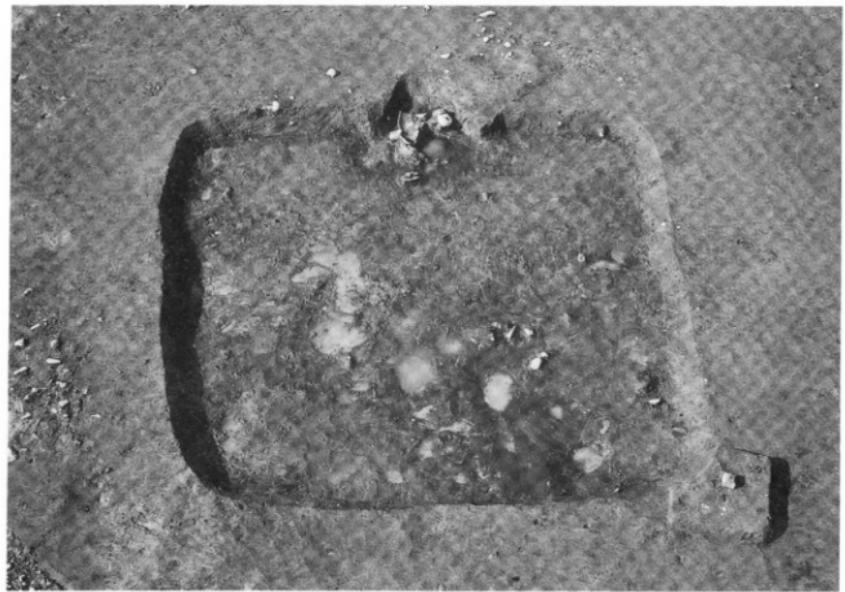
2. SB 3 痕跡（北西より）



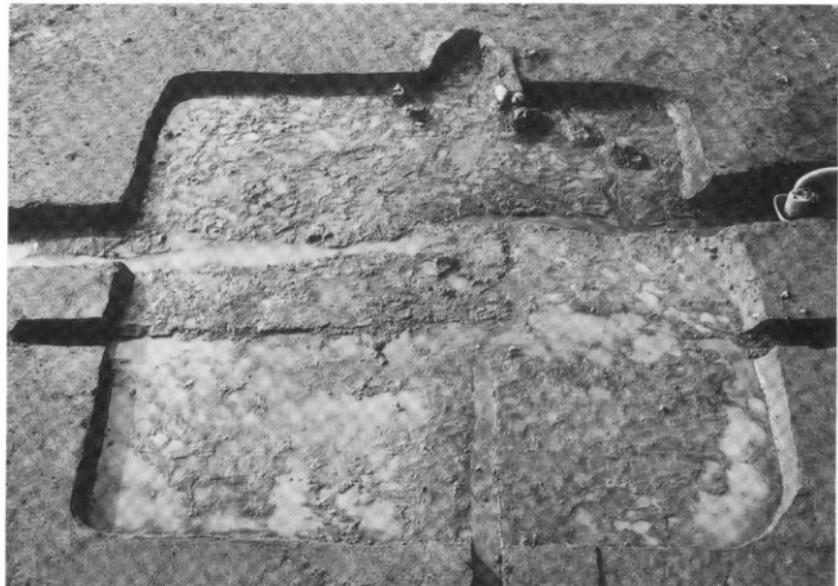
3. SB 4 (東より)



4. SB 5 痕跡（北より）



5. SB 5 (南より)



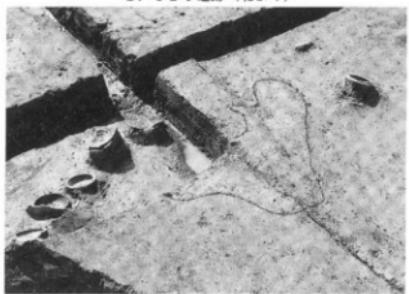
1. SB 6 (南東より)



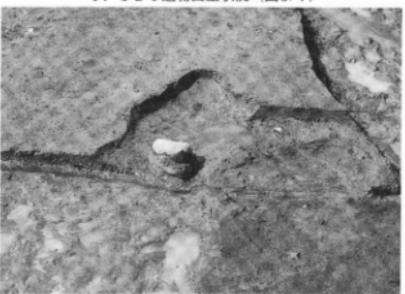
2. SB 6 窓跡 (北より)



3. SB 6 遺物出土状況 (西より)



4. SB 9 窓跡 (北東より)



5. SB 9 窓跡掘り方 (南東より)

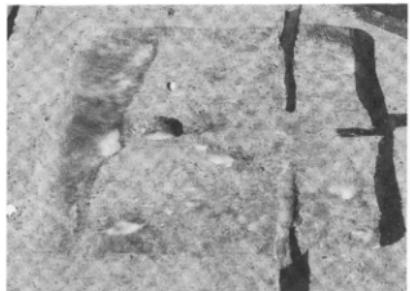


1. SB 7 (南東より)



2. SB 9 遺物出土状況 (南東より)

図版16



1. SB 8 (南西より)



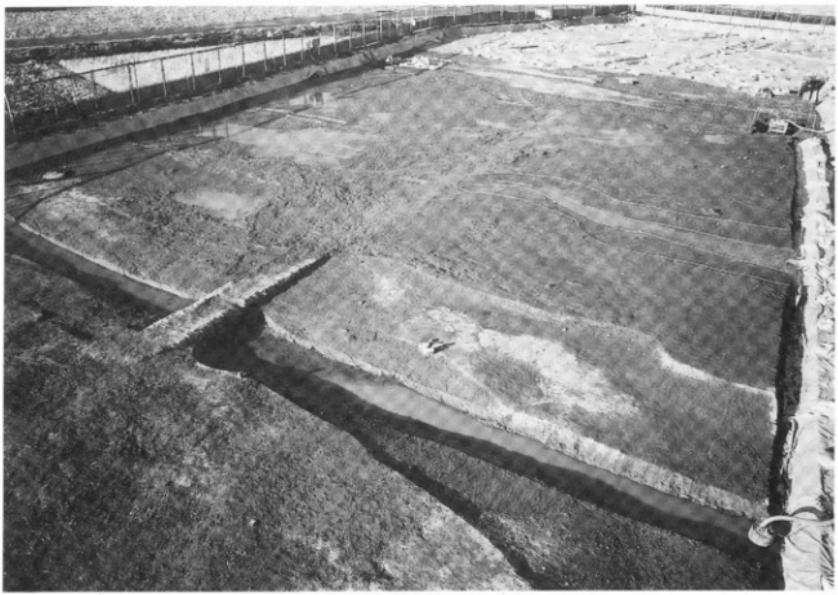
2. SR 1 (南西より)



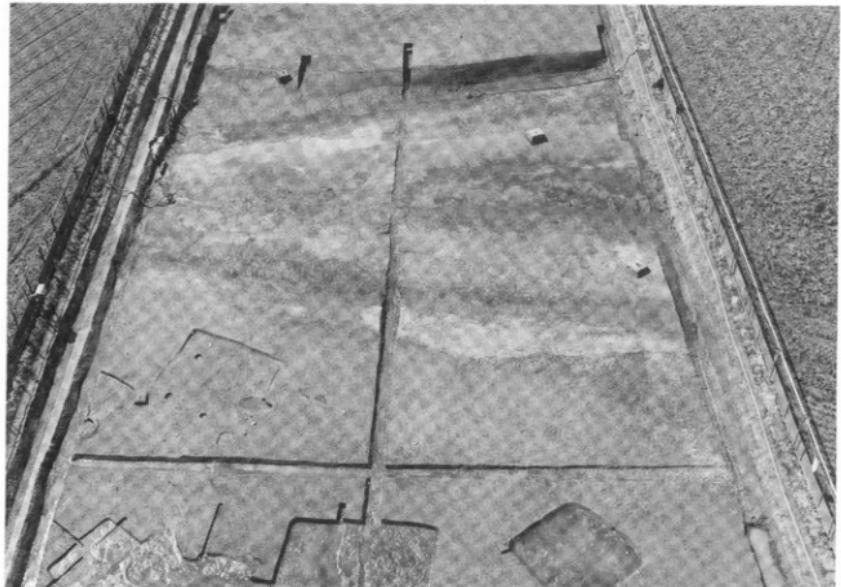
3. SR 5 (南西より)



4. SR 6 (北東より)



5. SR 4 (南より)



1. SR5・6 (北東より)



2. SR6 斎串? 出土状況 (北西より)

図版18



1. S R 6 Na110出土状況（南より）



2. S R 6 Na7出土状況（東より）



3. S R 5 土馬出土状況（西より）



4. S R 6 Na111など出土状況（南より）



5. S R 6 Na143出土状況（南より）



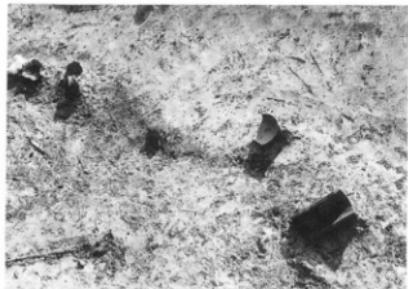
6. S R 6 Na10など出土状況（南西より）



7. S R 6 W6出土状況（南より）



8. S R 6 W35出土状況（北より）



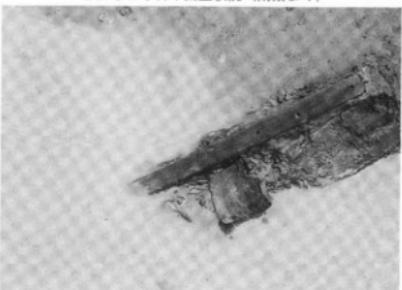
1. SR 6 W 9出土状況（北西より）



2. SR 6 W 1出土状況（南東より）



3. SR 6 W 5出土状況（西より）



4. SR 6 W 15出土状況（北西より）



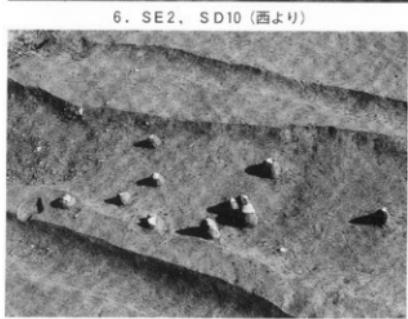
5. 調査区北東部（南西より）



6. SE 2, SD 10（西より）



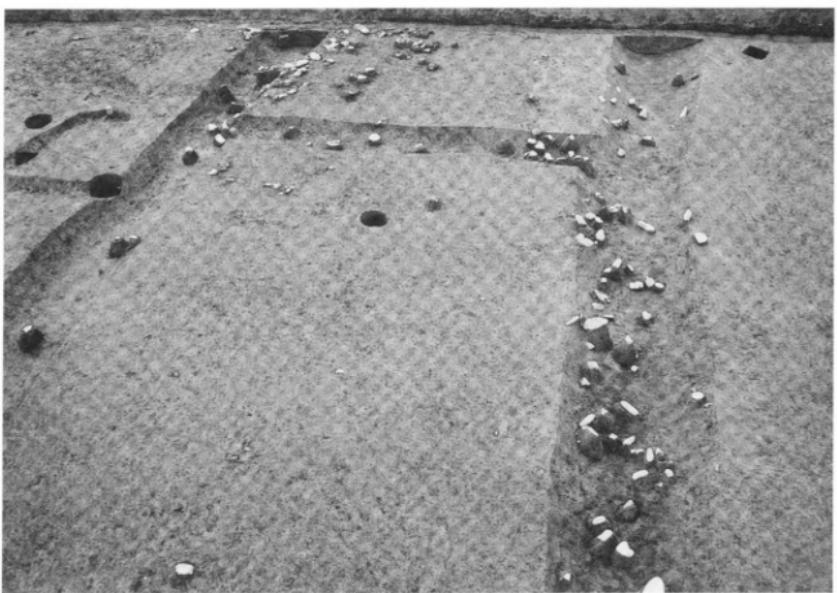
7. SE 1（南西より）



8. SD 7遺物出土状況（西より）



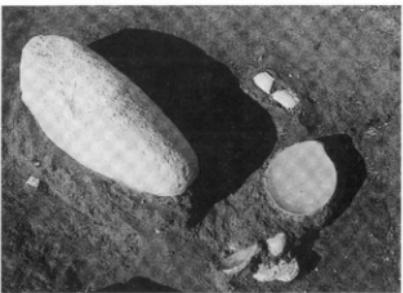
1. SD 15・16 (北西より)



2. SD 15・16, SX6遺物出土状況 (東より)



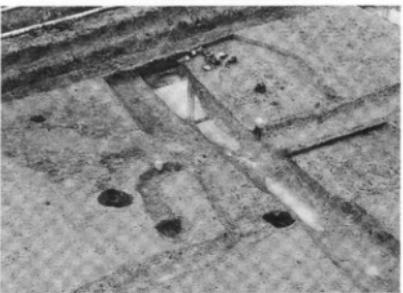
1. SD 15 + 17遺物出土状況（南東より）



2. SD 15青白磁合子出土状況（南より）



3. SX 6 遺物出土状況（東より）



4. SX 6（南東より）



5. SX 6下層遺物出土状況（東より）



6. SR 7 J 2 区北西遺物出土状況（北東より）

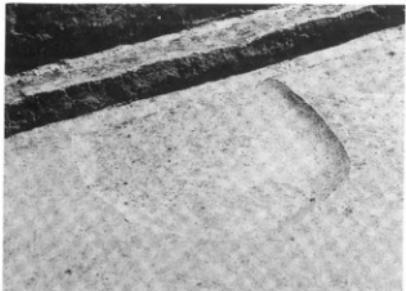


7. SD 21 + 22（北東より）

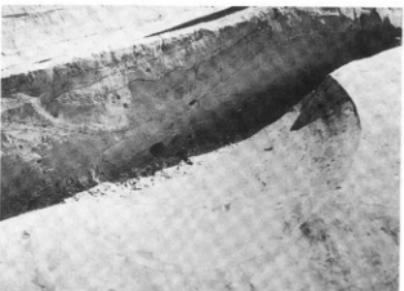


8. SD 23（南西より）

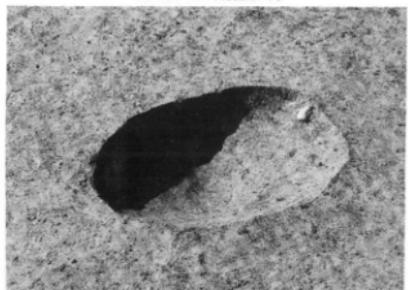
図版22



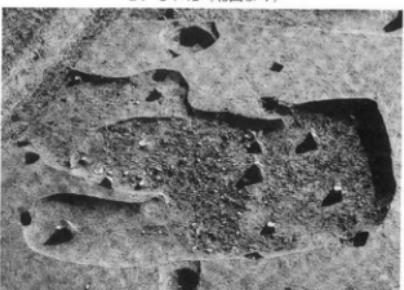
1. SF11 (北西より)



2. SF12 (北西より)



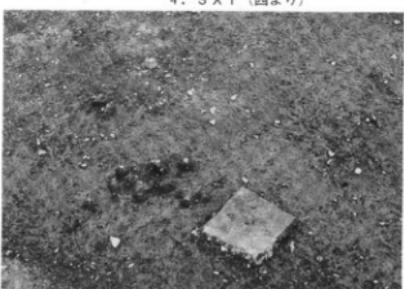
3. SF14 (東より)



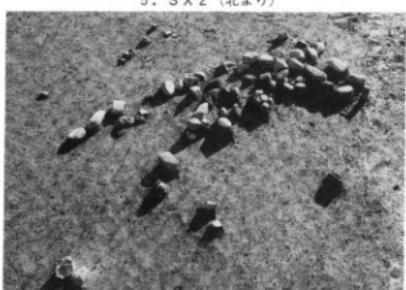
4. SX1 (西より)



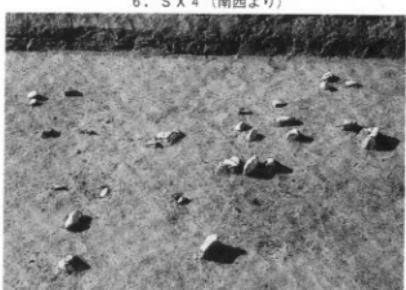
5. SX2 (北より)



6. SX4 (南西より)



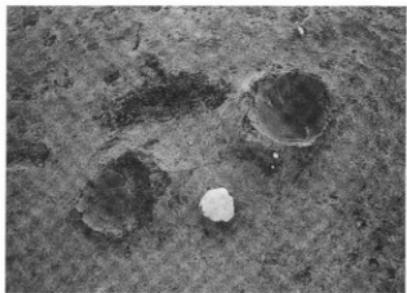
7. SX8 (北より)



8. SX9 (北東より)



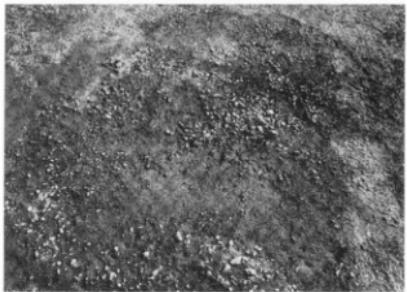
1. S X 3 (北東より)



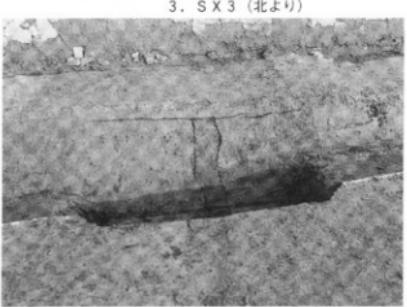
2. S X 3 焼と炭化物 (北東より)



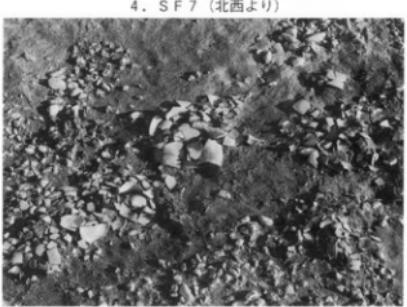
3. S X 3 (北より)



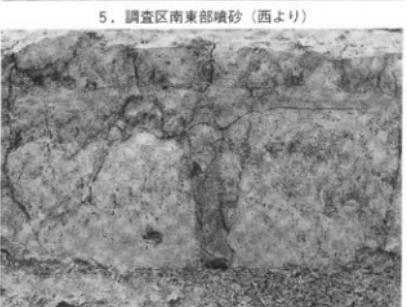
4. S F 7 (北西より)



5. 調査区南東部礫砂 (西より)



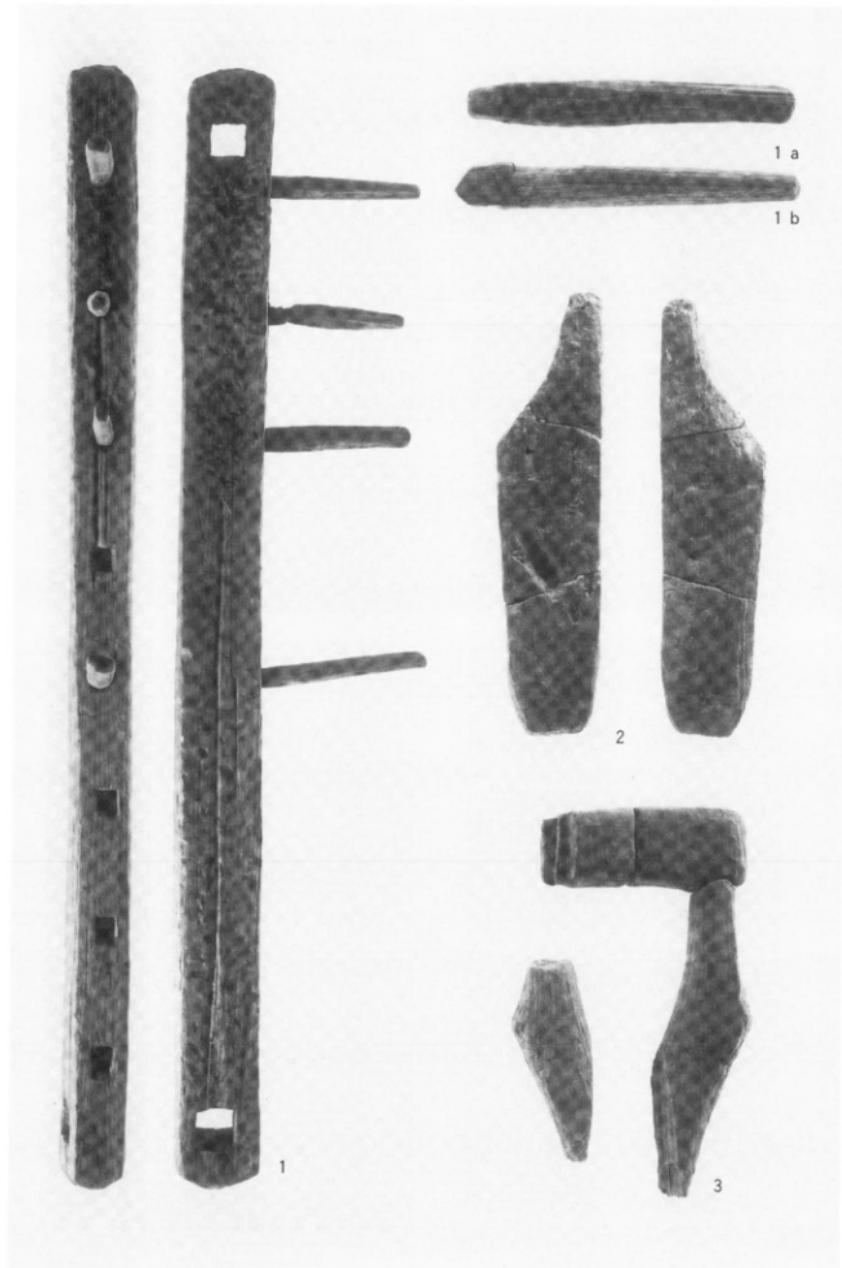
6. S F 7 遺物出土状況 (北西より)



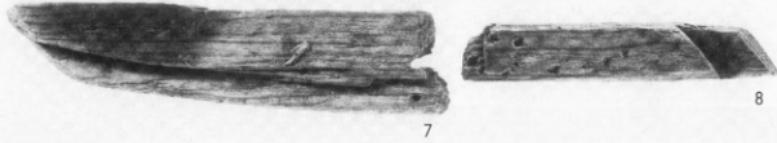
7. S R 4 西壁礫砂土層断面 (東より)



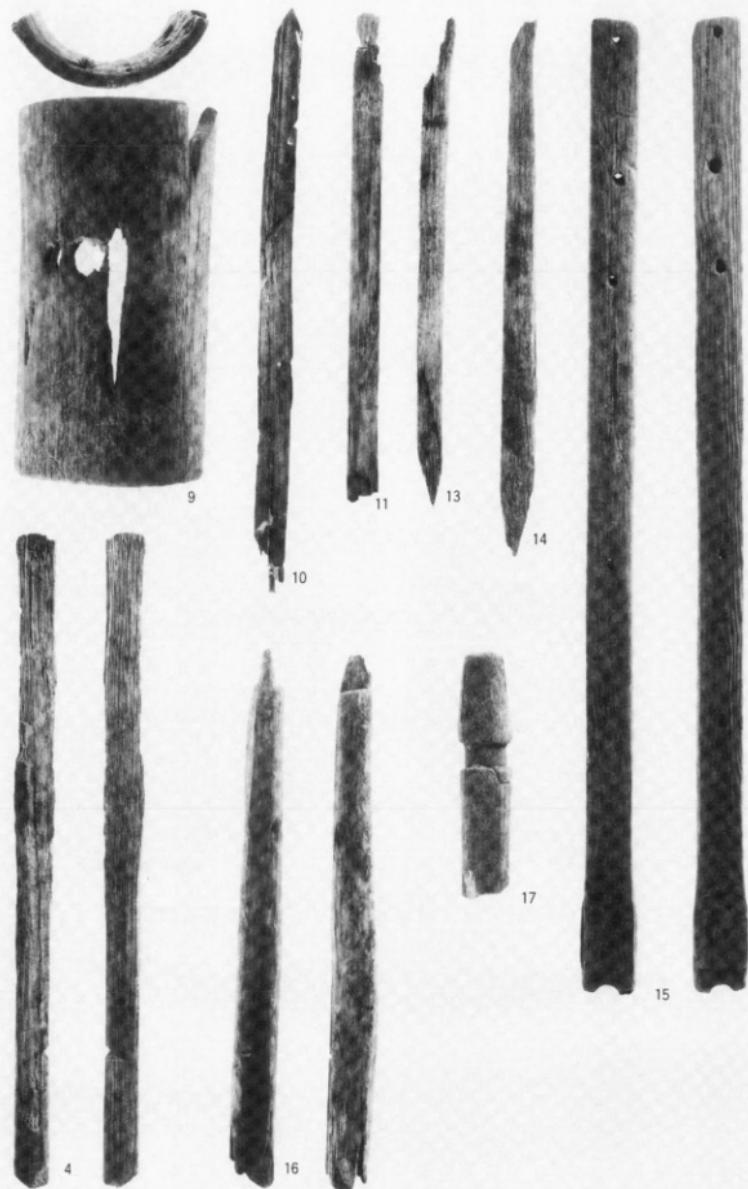
8. J 1 区西壁土層断面 砖瓦? (南東より)



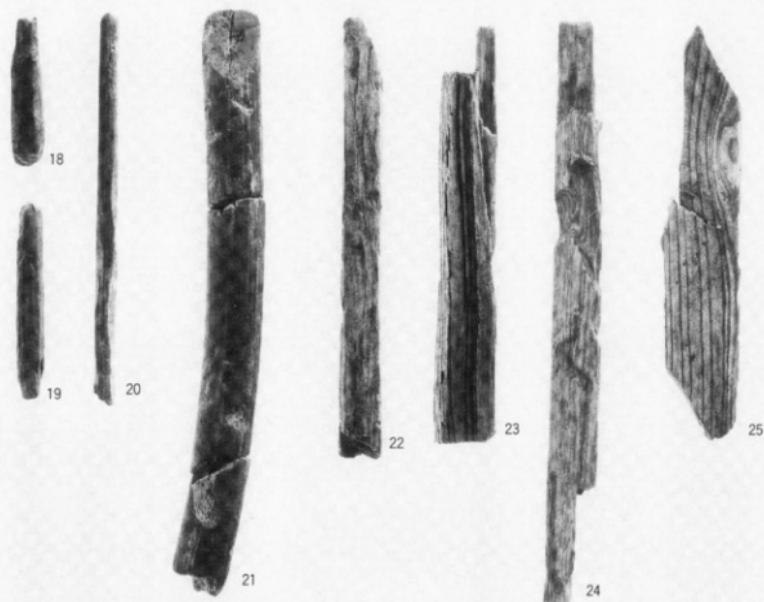
S R 6 出土木製品



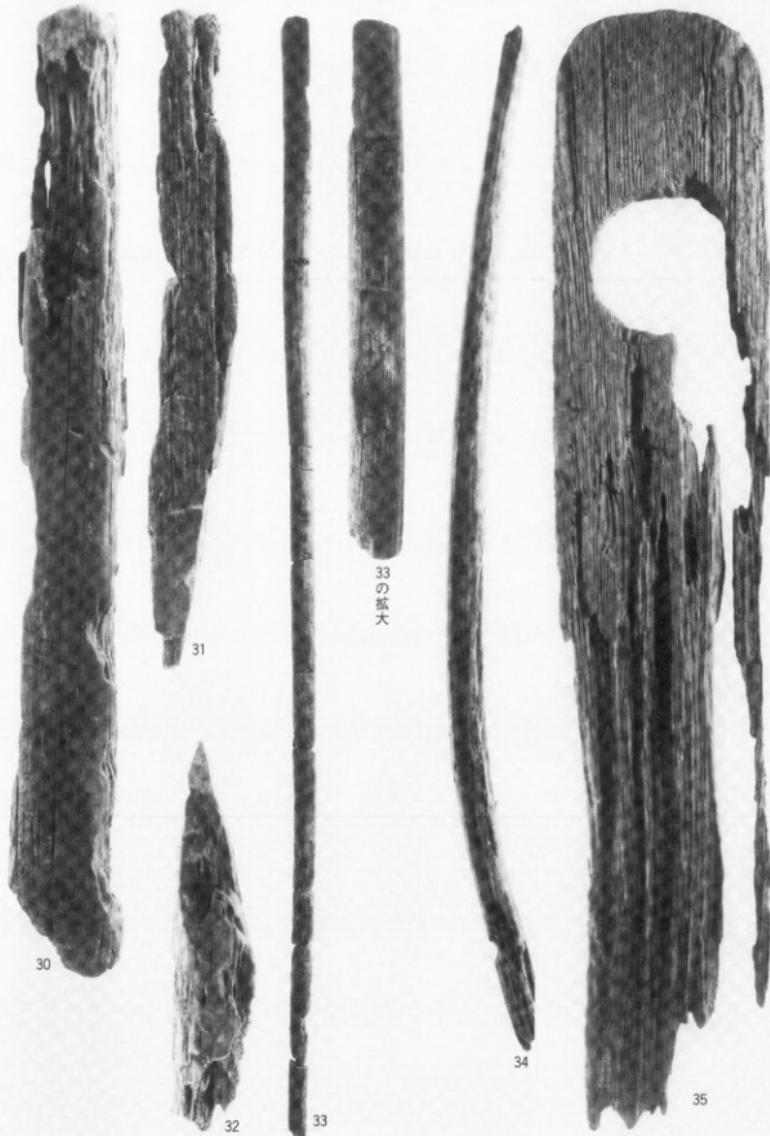
S R 6 出土木製品



S R 6 出土木製品

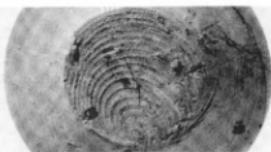


S R 6 出土木製品





18-2



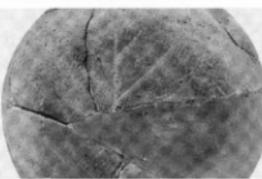
18-2



29-6



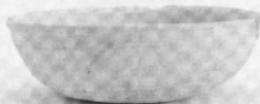
SB 2
29-4



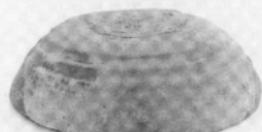
SB 2
29-4



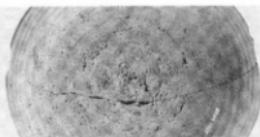
29-8



29-1



30-1



29-1



30-16

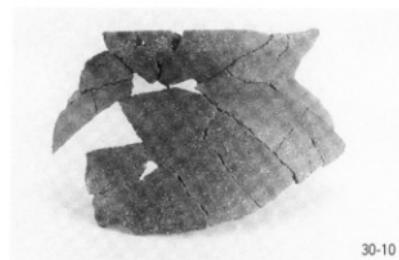


SB 5
29-4



30-17

図版30



30-10



30-20



30-20



31- 4



31- 5



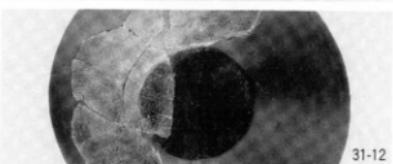
31-14



31- 9



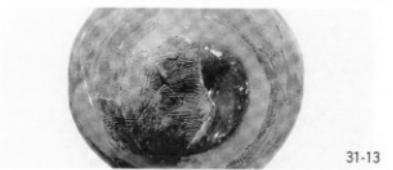
31-12



31-12



31-13



31-13



SB 7
32- 1



32- 7



SB 9
32- 1



32- 8



32- 2



32- 9



32- 4



32- 10



32- 5



32- 11



32- 6



32- 6

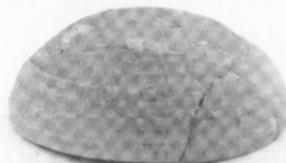


33- 1

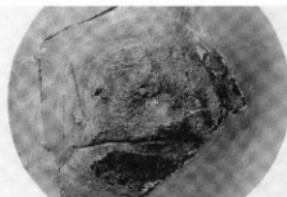
图版32



33- 3



33- 5



33- 6



33- 6



33- 7



33- 10



33-22



33-22



34-29



34-32



34-34



34-36



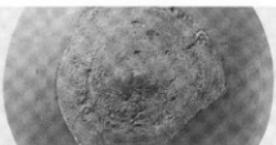
34-40



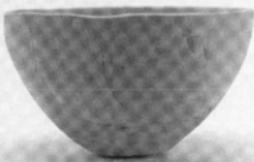
47- 7



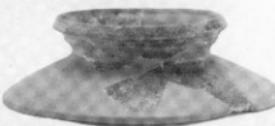
34-42



34-42



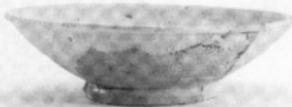
47-11



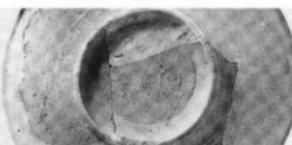
47-18



34-43



47- 2



47- 2



47-21

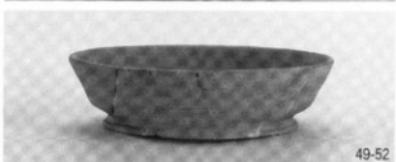
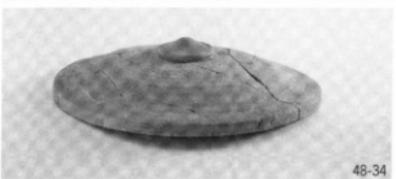
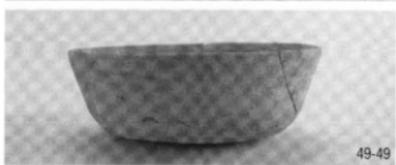
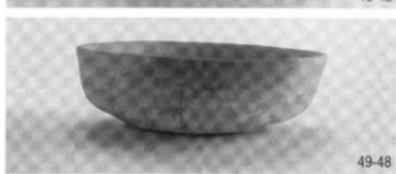


47- 8



48-41

图版34





49-62



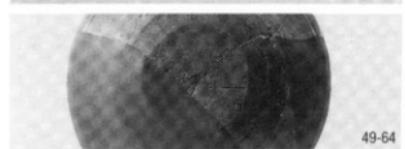
49-72



49-63



49-73



49-64



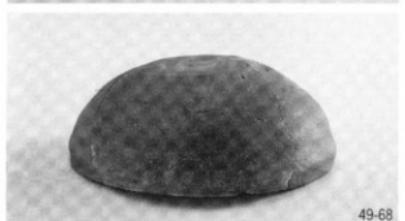
49-69



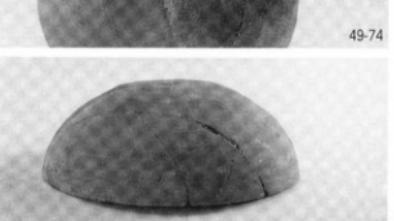
49-64



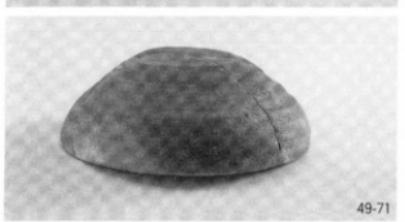
49-69



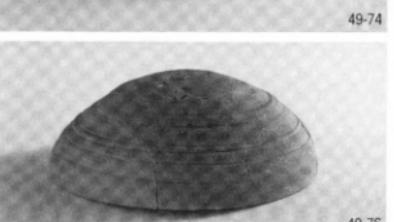
49-68



49-74

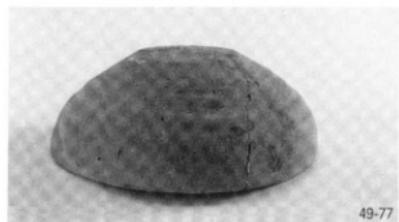


49-71



49-76

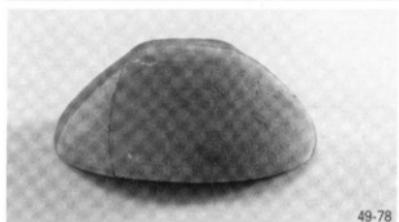
図版36



49-77



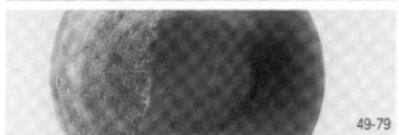
50-88



49-78



50-92



49-79



50-95



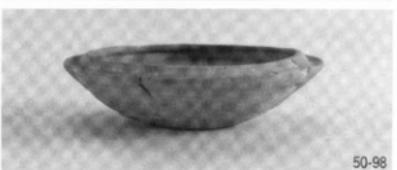
49-79



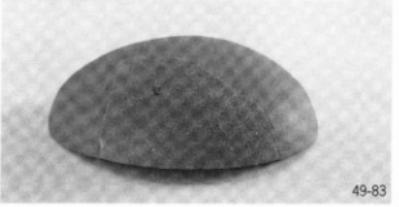
50-97



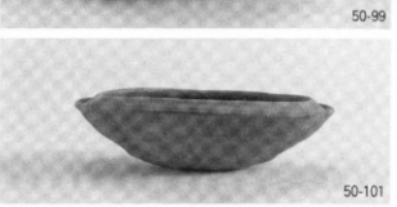
49-81



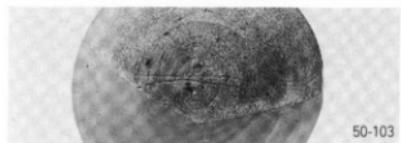
50-98



49-83



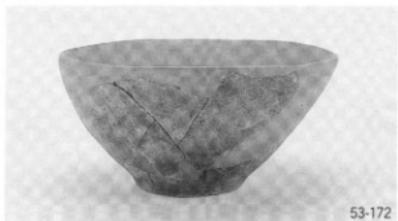
50-101



図版38



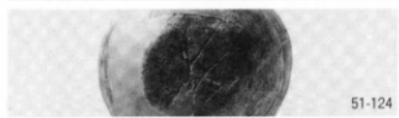
51-124



53-172



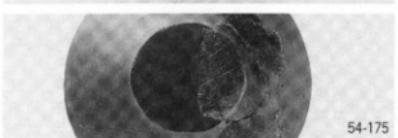
53-172



51-124



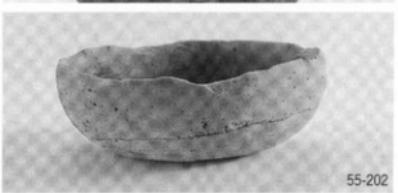
54-175



54-175



53-147



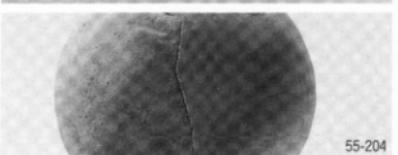
55-202



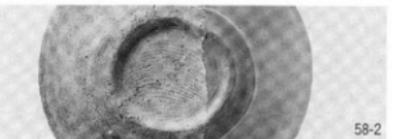
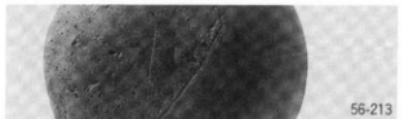
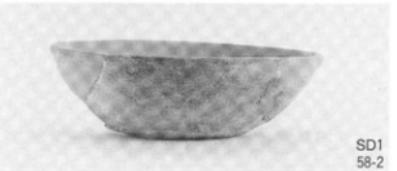
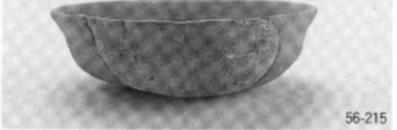
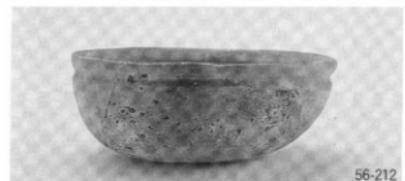
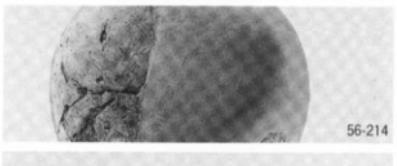
55-204



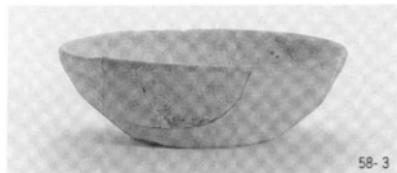
54-183



55-204



図版40



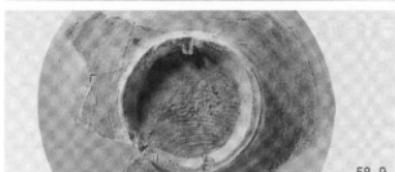
58- 3



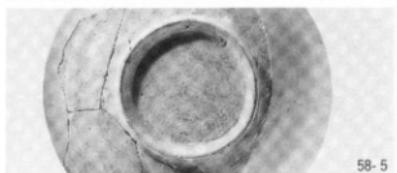
58-9



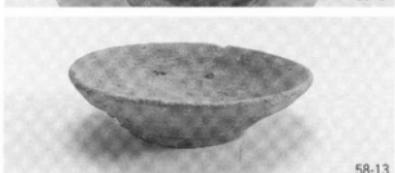
58- 5



500



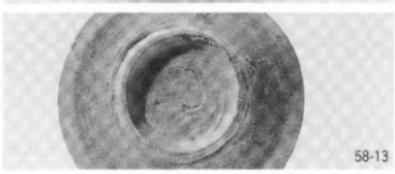
58-5



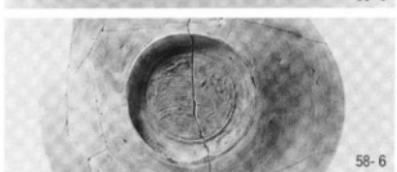
59-13



四〇〇



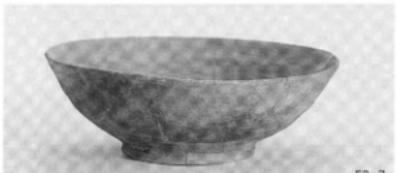
59-13



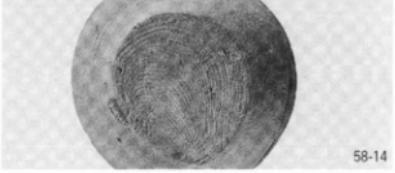
58- 6



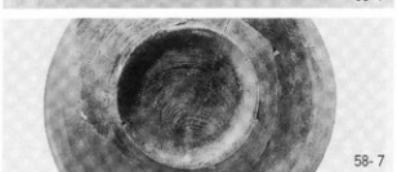
58-14



58-7



58-14



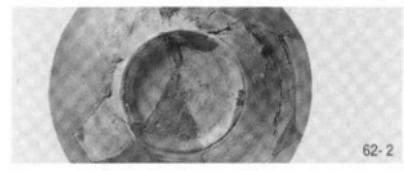
58-7



62-1



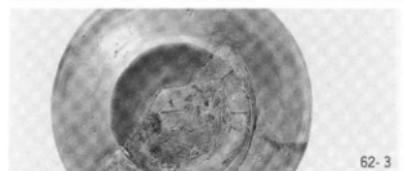
62-2



62-2



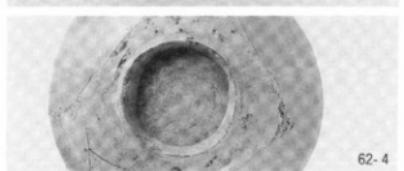
62-3



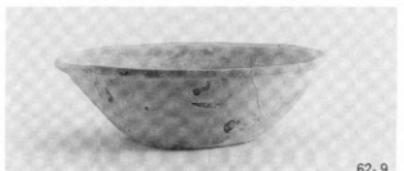
62-3



62-4



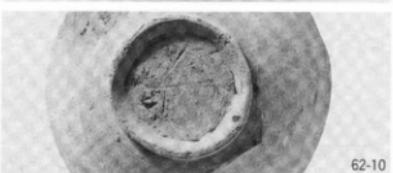
62-4



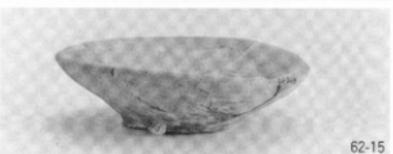
62-9



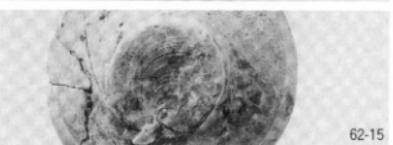
62-10



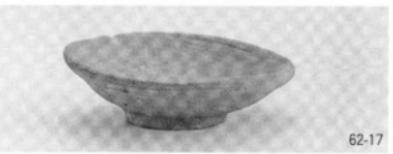
62-10



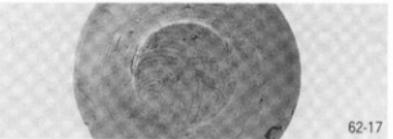
62-15



62-15



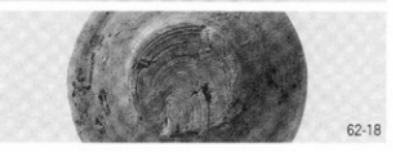
62-17



62-17



62-18



62-18

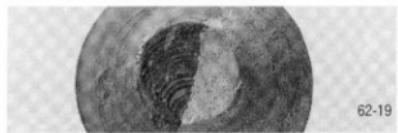
図版42



62-16



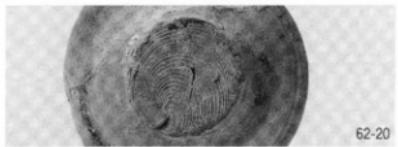
62-19



62-19



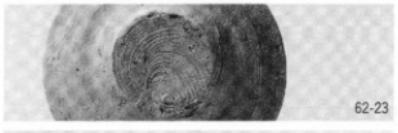
62-20



62-20



62-23



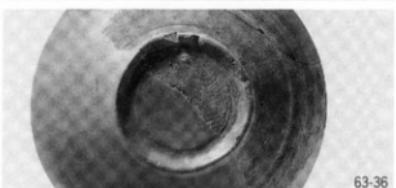
62-23



63-34



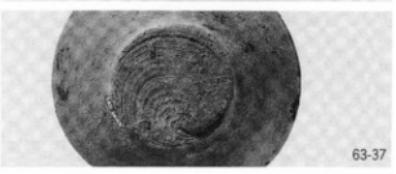
63-36



63-37



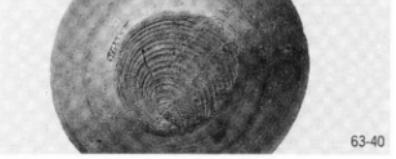
63-37



63-38



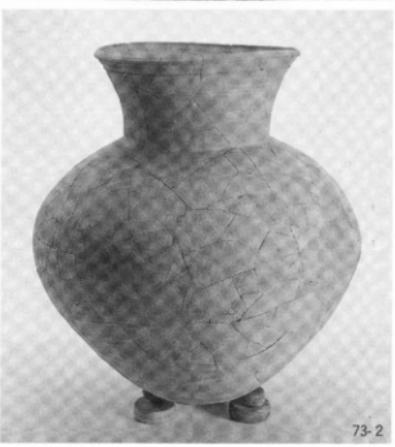
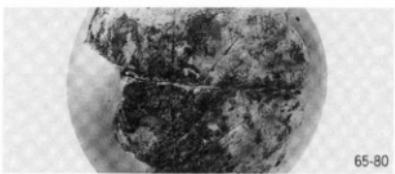
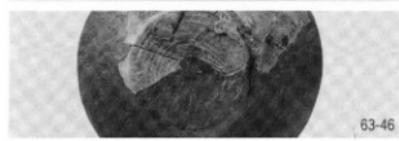
63-40



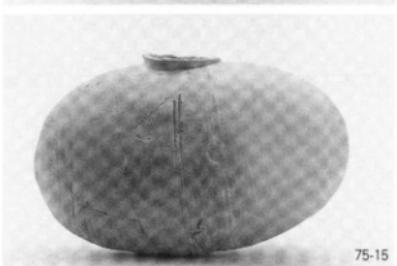
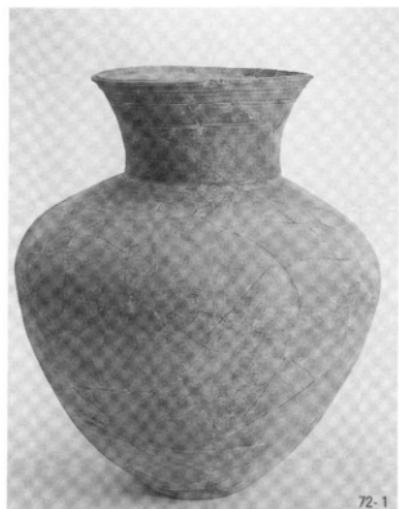
63-40



63-42



図版44





75-17



76-34



75-18



76-38



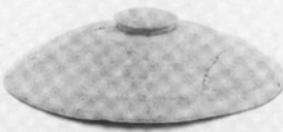
75-21



76-39



75-29



76-1



76-32

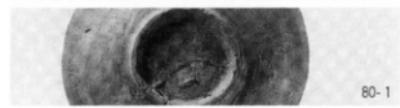


78-3

図版46



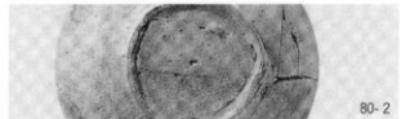
80- 1



80- 1



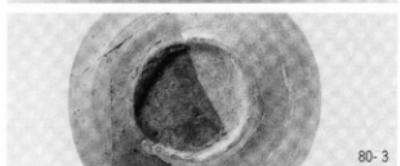
80- 2



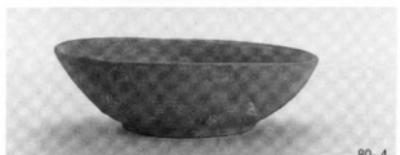
80- 2



80- 3



80- 3



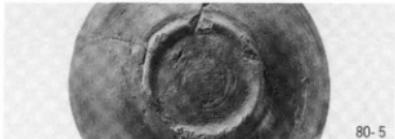
80- 4



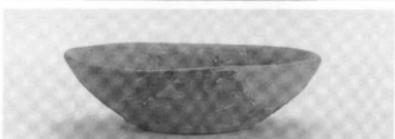
80- 4



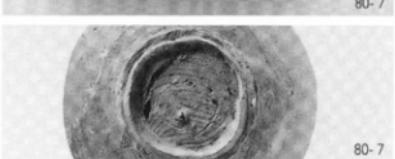
80- 5



80- 5



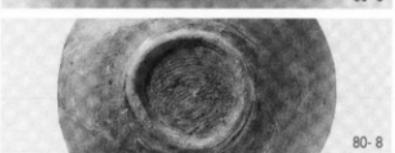
80- 7



80- 7



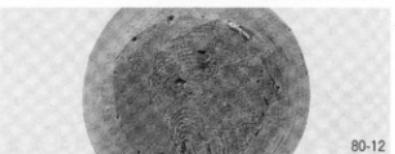
80- 8



80- 8



80-12



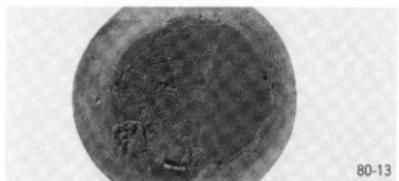
80-12



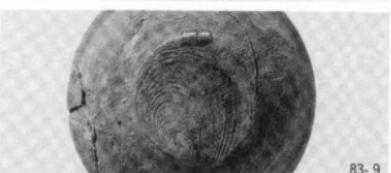
80-13



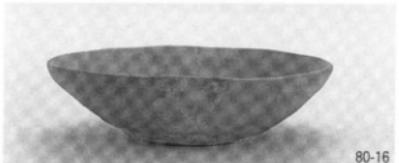
83- 9



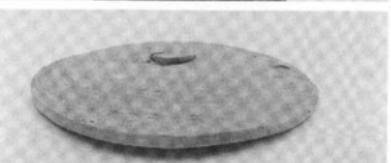
80-13



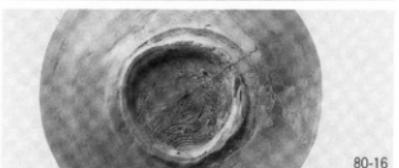
83- 9



80-16



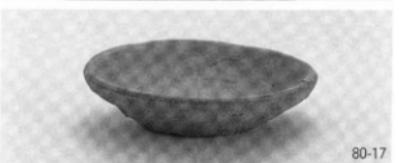
84- 8



80-16



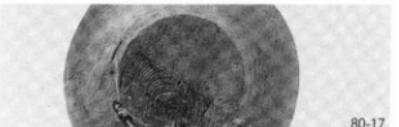
84- 9



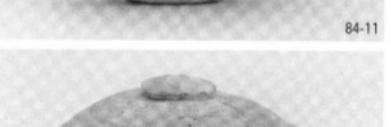
80-17



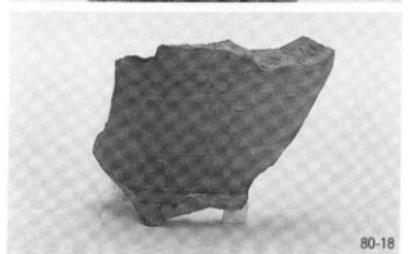
84-11



80-17



85-24

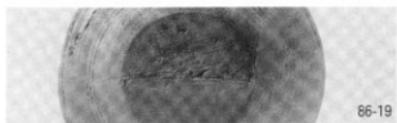


80-18



86-14

図版48



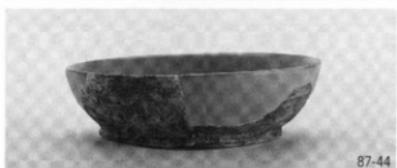
86-19



87-33



86-19



87-44



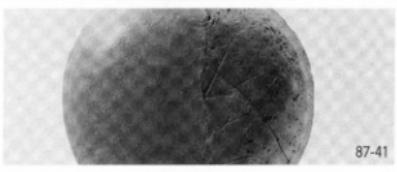
86-29



87-41



87-30



87-41



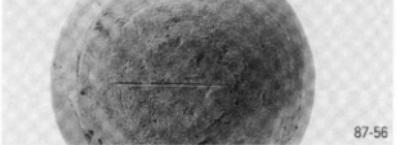
87-31



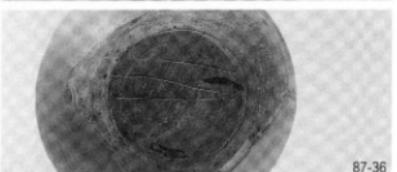
87-42



87-36



87-56



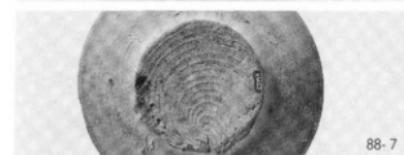
87-36



87-56



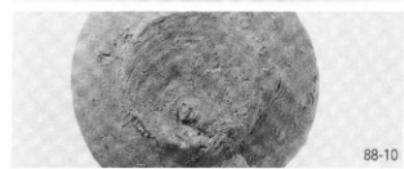
88-7



88-7



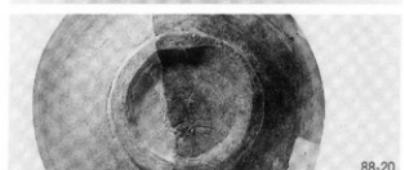
88-10



88-10



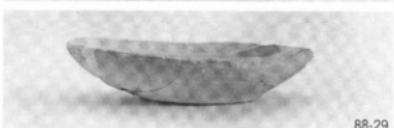
88-20



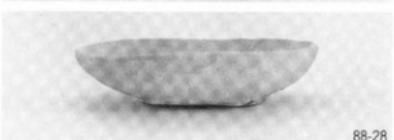
88-20



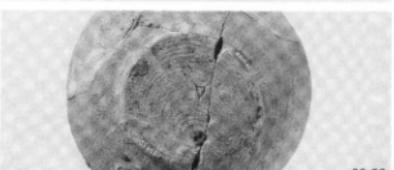
88-23



88-29



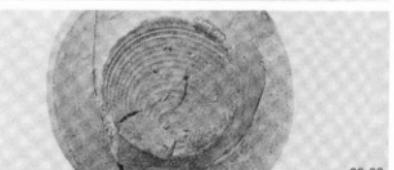
88-28



88-28



88-30



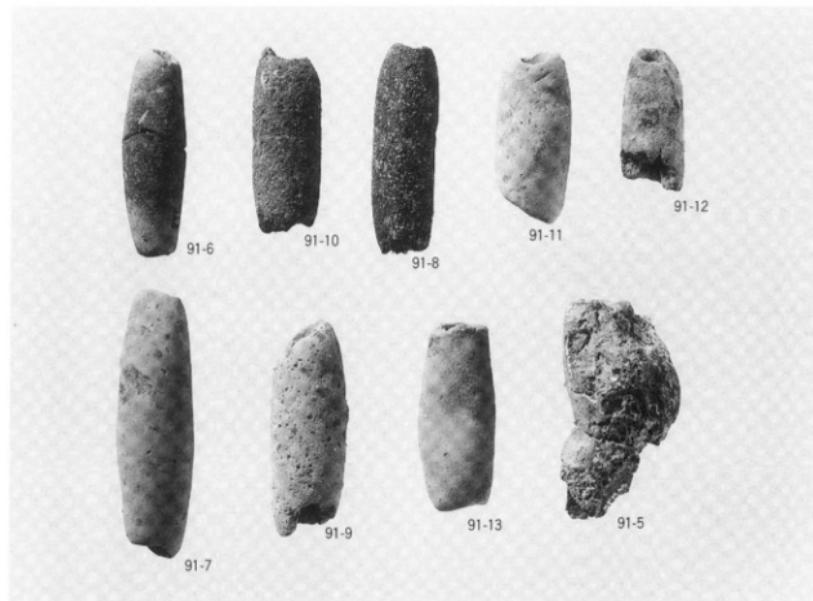
88-30



91-1



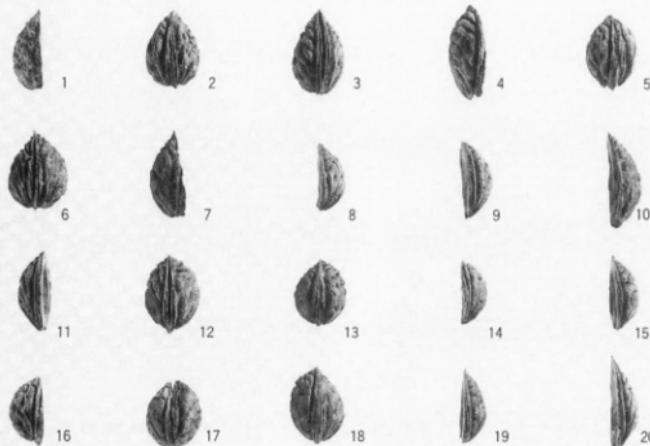
91-3



出土土製品



出土馬齒



S R 6 出土核

本遺跡の調査を実施するにあたって、大井川町教育委員会から御協力を賜り、その他、多くの方々にお世話になった。ここに記して感謝申し上げたい。(順不同 敬称略)

伊藤寿夫 山本宏司 長谷川秀厚 岡村 渉 菊田 宗 中野 宥 渡井英誓 濵谷昌彦 坂巻隆一
鶴野雄康 鈴木隆夫 八木勝行 松本一男 戸塚和美 永井義博 松井一明 白澤 崇 木佐森道弘
山本義孝 川江秀孝 佐野一夫 佐野由起男 鈴木敏則 太田好治 反巳 均 鈴木一有 後藤建一
栗原雅也 清水尚 安藤寛 山崎克巳 竹内直文 篠ヶ谷路人 卷田克彦 山口和大 中川律子
坂本和弘 池谷信之 池谷初恵 池谷稔久 山本恵一 木之内義昭 久野雅博 黄元洋 栗木崇
瀬川裕市郎 伊藤通玄 早田勉 石垣英夫 佐藤正知 速藤喜和 高橋和 森原明廣 岡田章一
柏木善治 佐藤洋一郎 高崎直成 柴田稔 小野正敏

<発掘作業参加者>

浅原一正 池田卓市 伊藤房治 後藤恭一 佐野孝子 佐野安夫 杉本知子 杉本直之 源訪賀勇
田中茂樹 水田育久 水田美津子 廣田良房 松田英之 松原立次 三輪幸子 持塙真 柳川忠氏
依田昌一 渡辺美代子 石上勝樹 光岡喜久恵 鈴木とも子 平岩健次 富永定男 富永光代
松下節子 光岡仙治 山下幸夫 久保田和彦

<整理作業参加者>

海野ひとみ 笠井昌枝 河西瀬乃 加藤百合子 佐野矢代伊 薩 桂子 西川真由美 早瀬容子
望月節子 鈴木由美子 村田浩子 八木恵子

川渕由美子 森田直美 杉山久美子(保存処理室)

杉山すず代(写真室)

写真図版と遺構図の作成は望月が、土器の実測は海野と佐野が中心となってあたり、木製品に関しての図面は川渕が担当した。木製品の樹種同定に関する基礎資料は森田が、遺構・遺物一覧表は西川が作成した。トレースの一部は望月と佐野が担当した。遺物写真は杉山すず代が撮影した。

報告書抄録

ふりがな	ふじもりいせき						
書名	藤守遺跡						
副書名	平成12年度（主）焼津棟原線緊急地方道道路改築（B）工事に伴う文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告						
シリーズ番号	第131集						
編著者名	柴田 眠						
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261						
発行年月日	2002年3月14日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 通称番号	北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
藤守	静岡県 志太郡 大井川町		34度 48分 14秒	138度 18分 49秒 (E4杭)	20001020 ~ 20010331	3,016 延4,516	(主)焼津棟原線緊急地方道道路改築(B)工事
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
藤守	集落	古墳時代末期～ 奈良時代	堅穴住居跡9 土坑6 掘立柱建物跡1 溝4 旧流路5	須恵器 土師器 土馬3 上鍤8 木製品(馬鍔1, 鍔先1, 鍔柄1, 繩1, 槽1, 曲物3, 斎串?4, カセカケ1, 司1, 建築材, 土木材) 磨石?1	祭祀関連遺構		
		平安時代末期～ 鎌倉時代中期	土坑9 掘立柱建物跡10 溝(区画溝含む)19 井戸跡2 旧流路2	山茶碗 土師器 陶磁器(青白磁2点含む) 輪羽口1 馬の顎骨2 砥石1	条里制関連遺構 屋敷地を囲む区画溝		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第131集

藤守遺跡

平成12年度（+）焼津市原郷緊急地方道道路改良
(B)「事に付う埋蔵文化財発掘調査報告書」

平成14年3月14日発行

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県谷田23番20号
TEL (054) 262-4261(代)
FAX (054) 262-4266

印 刷 所 株式会社 三 則
静岡市中村町166番地の1
TEL (054) 282-4031(代)